

昭和三十一年三月二十八日印刷
昭和三十一年四月一日発行
(第十一卷 四月号)
(第四号通刊第九十四号)
(毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

1957年 4月号

4
月号



木馬責に関するノート
続・切腹曼陀羅図絵

甲斐仁参
法谷四郎

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

奇譚クラブ最近号主要目次

昭和三十年

○十月号(復刊第一号)

【定価二百円】(〒16円)

口絵

美しいドアー 四馬 孝画

緊縛フォト・オンパレード 川辺砂登子

黒のシユミーズ 伊吹真佐子

どういふポーズを 萩 千恵子

ボリウム

朝日を浴びて 須川 令子

うつつ

旅の縛られ女優 藤田 節子

悪

ボクの下着について 宝塚 三子

鼻の下の写真

奈落の欲望 北谷 英二

洗腸器と共に

お膳の型と種類 久利 須賀

二個のイチシク洗腸

女性緊縛寸考 花村 恵子

完全なる隷属

サデイズム雑感 坂田 三子

再度の鞭を期待しつゝ

女工哀史以前 沼田 正三

乗馬スボンの女腹切

女性通信 藤田 洋一

少年刑務所体験記

男性自虐の方法 岡村 耕二

玉稿落穂集

アブ追求三〇年の回顧 山田 正実

幽囚十ヶ月

女性切腹面に憑かれた男 伊藤 和彦

素足礼讃

新しいコルセット 高柳 真砂子

あるマゾヒストの手帖から 沼田 正三

私の洗腸論 数 久画

映画に見た淡いマゾ 春木 俊野

アクロバット通信 九 州

明治年間の新聞覚え書 吾妻 柳

残虐なる女性達 森本 愛造

一七化け小僧出現 緑 猛比古

復刊に当りて 編 集 部

○十一月号(復刊第二号)

定価二百円(〒16円)

口絵

みもの運動会 四馬 孝

漂う女二題 都馬 孝

賭場の獲物 滝原 純子

小人島の捕われ人 北原 純子

女調教師 杉原 純子

上げてくる潮 依田 幸子

掃除日の出来事 宮崎 昭平

告白 古川 裕子

変態小説論 佐東 増夫

幽囚十ヶ月 春田 一郎

ボクの下着と洗腸 宝塚 三子

レスボスと洗腸 羽村 三子

稲古着姿の女腹切 藤田 三子

命がけの遊び 二 侯志

あるマゾヒストの手帖から 沼田 正三

拷問に笑う女 辻村 隆

敵前上陸 賣め 三 根

賭けられた娘 永 崎

お灸と腰巻 宮崎 昭平

錯乱 山 真一

私にも貴女の下穿きを 芳野 眉

淫美礼賛 加 勢

接客婦 伊 治

大和撫子の散華 森 本

残虐なる女性達 沖野 恵子

被虐より嗜虐へ 沖野 恵子

明治年間の新聞覚え書(四) 吾妻 柳

完全なる隷属 坂田 三子

洗腸器と共に 久利 須賀

或るソドミアの告白 朝路 昭平

洗腸のお仕置 宮崎 昭平

サデイズムへの憧れ 京町 柳

王稿落穂集(二) 編 集 部

女優の素足 高 原

百合子の記録 渡 辺

長瀬昭子さんへ 畑 邊

映画雑誌芝居の緊縛場面 波 羅

アクロバットと曲馬団 鍛 冶

統一・映画に観た淡いマゾ 岩 瀬

統一・映画に観た淡いマゾ 岩 瀬

セーラー服姿の切腹写真 編 集 部

女子プロレスリング雑感 青 山

密 鬼 山

同愛の士に告ぐ 天 泥

蜂の胸四十五センチ 川 上

先祖の女腹切 吉 住

昭和三十一年

○四月号(復刊第三号)

定価二百円(〒16円)

口絵

苦痛の夢 四馬 孝

第二次会の披露宴 宮崎 昭平

戦国夜盗 時 亨

ナイロスのレインコート 萩 千恵子

「こんなポーズで？」 佐賀 美智子

「お首が痛いから早」 加賀 利江子

く解いてエ！ 吾妻 柳

明治年間の新聞覚え書 吾妻 柳

おしめ放浪記 黒 岩

黒人少女の飼育 立 原

或る切腹マニヤの恋文 嵯 峨

正月映画の縛られ女優達 嵯 峨

幽囚十ヶ月 春 田

山口式ボデビルの御紹介 山 口

キヤルマタの美 村 幸彦

魔の味い 高木 伸三

ドストエフスキイの嗜虐性 野 中

女性乗馬考 馬 場

サシスチンの独白 原 美智子

ボクの下着について 宝塚 三子

女剣士の切腹について 青 山

春日ルミ様へ 守 口

少年矯正院体験記(みせしめ) 獄 收

仇討ブレイ 高 杉

私は訴えるアブ・放譚 水 上

完全なる隷属 坂 田

鼻のアレリコード 北 谷

映画の緊縛断片 緑 猛比古

マニア誕生 坂 野

体験告白記 お膳の研究 須 藤

残虐なる女性達 森 本

切腹願望と洗腸 沢 本

縛られた女優達 小 村

あそこが悦び境 升 岡

シソール賣め 沢 本

洗腸雑記 沢 本

洋画に於ける緊縛場面 沢 本

接客婦 沢 本

蜂の胸にこたえて 沢 本

倒錯の英雄織田信長 沢 本

「女のお腹談義」 沢 本

「話の落穂」 沢 本

玉穂落穂集 沢 本

赤い花は泣いている 松 井

○五月号(復刊第四号)

定価二百円(〒8円)

口絵

素晴らしいショー 四馬 孝

モデル嬢の表情(緊縛写真集) 孝 画

佐賀美智子 須 川

加賀利江子 萩 千恵子

淑やかな令嬢、メイドの拘束服 松 井

スチユアードの晒し 宮崎 昭平

赤い花は泣いている 宮崎 昭平

幽囚十ヶ月 高 木

魔の味い 伸 三

(皆さまの共同広場建設のために)

【研究発表】 アブノーマルに関する研究や発案、小論文等、平易にして本誌の読者に興味を持たすようなもの、十枚迄、採用篇には本誌三月分を贈呈いたします。

【創作】 異色ある題材を現げて立つ野心ある新人の出現を期待します。枚数は三十枚迄、未発表品の作に限る。採用篇には本誌三月分以上贈呈致します。

【体験告白手記】 皆さまの偽らざる
 真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度
 掲載篇には一篇につき千円乃至三千円の賞
 金を呈します。誰でも人には一篇位は直ぐ
 書けるものです。生々しい体験や告白を是
 非お寄せ下さい。

【ホケツト告白】 文体や用紙などは一切問いません。十枚以内の短い告白物を気軽に書き下さい。採用篇には本誌三分を贈呈いたします。

【映画、雑誌】通信
映画や雑誌

の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二月分乃至三月分贈呈いたします。

口絵並に挿絵 画材はサド、マゾ、浣腸、切腹等御自由です。優秀なる作者には継続的に御依頼いたします。

【編集者或は執筆者への公開状】
編集者執筆者或はモデル嬢等に対しての読者の皆様からの公開状を募ります。適当なものは本誌上に掲載の上、回答を求めることします。本誌三月分贈呈、

(開放した誌面を御利用下さい)

【私のイメージ】 熱烈奔放なイメージをどしどしぶっ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です採用分には本誌三月分以上贈呈します。

【実写写真】 御自身写されたものに限りません。裏面又は別紙に説明とデータを添えて採用分には相当謝礼。

【アイデア】 将来本誌にて企画すべきものの全般につき出来るだけ詳細に、掲載の如何に拘らず優秀なものには千円迄の謝礼を呈上いたします。

【私は訴える】 皆さまの胸に持つておられる誰にも云えない諸々の悩みや御意見主張等を發表して下さい。本誌ならでは取り上げないような内容のもの。採用のものには本誌二月分以上贈呈。

【レポート】新聞記事の切り抜き或は見聞等、皆様の興味をお持ちになつた事件等につきお知らせ下さい、掲載篇には本誌二月分贈呈。

【読者通信】 編集者、執筆者、投稿者等への便り、前号の批評、希望、或は編集や雑誌のあり方等に関して忌憚なきお便りをお寄せ下さい。ハガキにても結構です。つとめて誌上に紹介します。

【読者交歓室】読者相互関の文通呼び掛け応答等の頁を新設いたしますから御遠慮なく御活用下さい。文章はなるべく簡単明瞭にお願いします。

○締切は別に定めません。到着順に最近号に掲載します。原稿の第一頁には応募の種目を明記しておいて下さい。

奇譚クラブ編集部

◎本誌月極購読料◎

一月分一冊(送料八円)二百円
三月分三冊(送料共)六百円
半年分六冊(送料共)千二百円
一年分十二冊(送料共)二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。一月分一冊、お申込みの方は必ず送料八円の御加算を願います。半年分御申込の方には景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方には景品としてキャビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

第十一卷 第四号
毎月一回 一日発行
定価 二百円

四
月
号

(送料八円)

昭和三十三年三月二十八日印刷
昭和三十三年四月一日發行

編集人箕田京二

大阪市阿倍野区晴明通一丁目八五番地

發行所 天星社

振替口座大阪五〇〇四二番

本社に対する御送金は、挟込みの振替用紙を御利用の上、受領証をお送り下されば、確實で早く大変便利です。振替用紙御入用の方は、お申込次第お送りいたします。（但し御注文品と同送しない時は、八円切手の封入を願います）

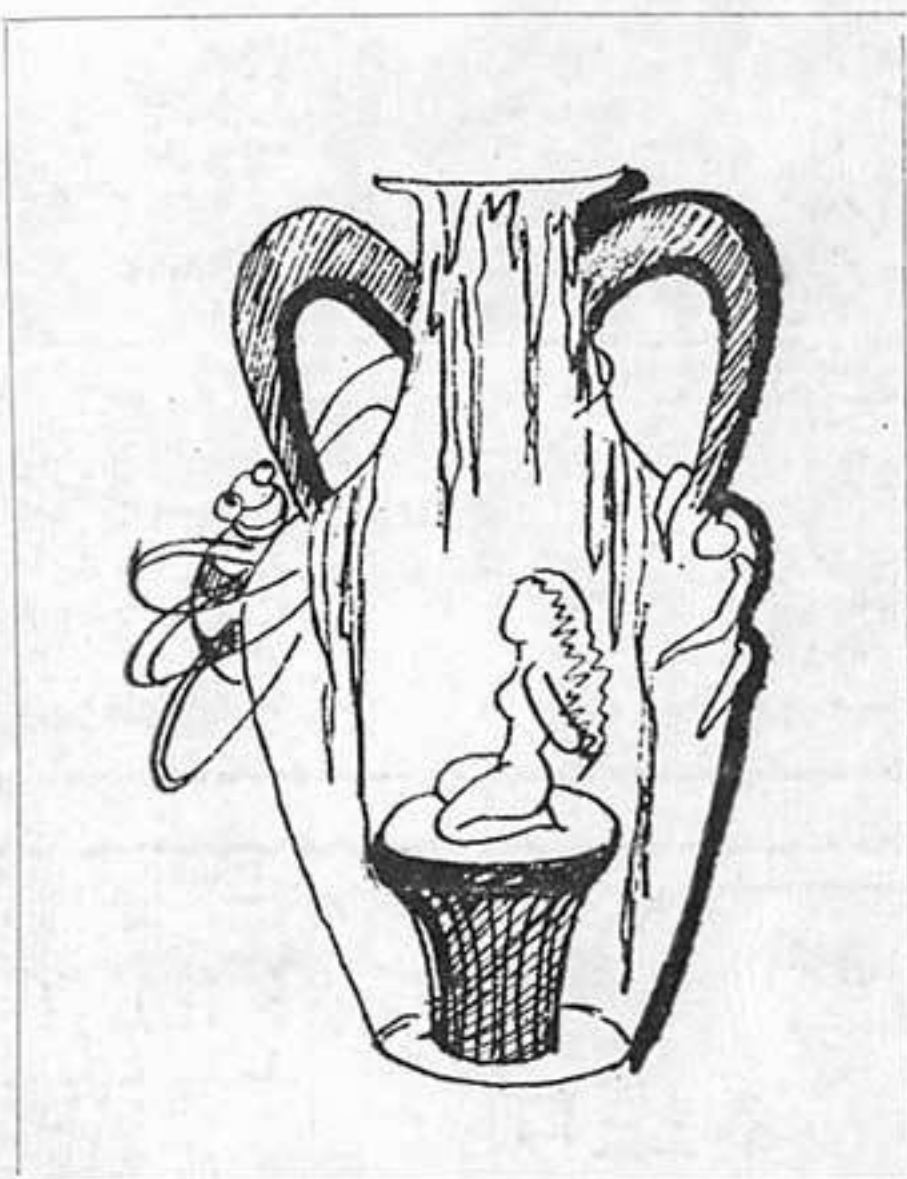
奇譚クラブ

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan

昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可
昭和三十一年四月二十八日印刷
四月号(第十一卷第四号)
(毎月一回一日発行)



定価二百円

(送料八円)

IBM. 2805

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

完全なる隷屬	坂田信治
戦慄怪談屋敷	岸本柳
体臭日記	青柳
架土やしき(異常体験記)	相沢松
おそい目覚め	足立夫
灰色のノート	矢崎皓
箱のノット	多崎一
奴隷に与える手紙	森山美
撫子の花散りぬ	北川操
奇妙な種	森野太
責めとフェチズム	加野一
魔の白鳥	須藤敏
お隣の研究(二)	長岡律
生埋め願望	佐次郎
紅魔殿	青山浩
陰花への憧憬	瀬川伸
悲風磨上原	瀬川伸
玉稿落穂集	瀬川伸
アブノーマル・モノローグ	竹谷隆
拷問に笑う女	辻村三

○六月号(復刊第五号) 定価二百円(〒8円)

口絵	美貌の屈辱	四馬孝・画
孤島の捕われ人	アメリカ雑誌より	
佐賀美智子ボーズ集	曼陀羅華の萌芽	
深夜のホール	須川孝子・画	
修道院の神室	宮崎昭平・画	
大衆文学に現れた真の描写	藤見郁	
赤い花は泣いている(第三回)	松井一	
幽囚十ヶ月	春田奈子	
奈子の自己愛について	門田三郎	
洗腸問答	青山三枝	
鞍馬の孕み女	緑川比古	
悲風磨上原	瀬川美子	
奴隷に与える手紙	森山古	
私のアイディアと回想	菅原美歌	
サデイズム小説の魔力	泉義明	
コルセツトの魔力	林義彦	

変った切腹の掟	山中同人
マゾ・スクラツツ帳より	春木俊野
甘美なる被虐の幻想	沢清
脱腸に対する私見	伊藤三
小説「虐妻日記」	竹谷正
現代マゾヒズム芸術時評	原忠
お仕置遊戯	桜井美智子
フェチシストの文学ノート	S・T生
緊縛女体鑑考	青葉鷹三
「縛」先生	青葉鷹三
最近の縛り時代劇映画から	須藤美也子
お隣の研究	須藤美也子
玉稿落穂集	編集
映画に現れたムツキ	赤井集
虐げられる娘	嵯峨井
ナチスの暴虐	藤木仙
娘の島探険	東坊丸
或る告白 春と女の素足	由木仙
サデイズムツクな漫画	藤木仙

○七月号(復刊第六号) 定価二百円(〒8円)

口絵	拘束服の装着	四馬孝・画
道化者の集まり(アメリカ雑誌より)	二丁拳銃の姐御	
オノソンの提督	木製の兵士	
女士官	花坂道子・画	
新人モデル嬢紹介	北原純子・画	
パイプの馬	北原純子・画	
馬を御す令嬢	佐賀美智子・画	
大衆文学に現れた責めの描写	北原純子・画	
若衆歌舞伎復興	小竹郁	
奈子の自己愛について(二)	門田奈子	
幽囚十ヶ月	春田奈子	
お灸を据えた女の魅力	岩井一	
赤い花は泣いている(第四回)	松井一	
少年姿体美増進法	熊谷一	
私のコレクシヨンより	角田一	
「責め」の芝居鑑考	山口幸一	
少年権記	山口幸一	

奇妙な倒錯の恋	(新聞雑誌通信)
女掏摸	雪俊一
活火山	青葉鷹
玉稿落穂集	編集
被縛の切腹幻想	高村成
女性の下着マニアの告白	鳴竹成
或る下着マニアの告白	古井真
或る軍婦人の死	土路草
マゾヒズム断想	佐藤盛
H氏の奇妙な告白	北谷英
サデイズム小説 いで湯	多磨義
私はおしめマニア	鳴竹成
乙女の腹切抄	鳴竹成

○八月号(復刊第七号) 定価二百円(〒8円)

口絵	美しい床の間	四馬孝・画
米誌にみた緊縛面欧米式新スタイル	北原純子・画	
華々しき私刑	藤見郁	
大衆文学に現れた責めの描写	藤見郁	
無惨なマニア	京昭	
二等兵時代の思い出	高村昭	
縛り絵マニアの回想	渡辺規	
縛りある中を	近中規	
光りある中を	川中規	
一読者としての公開状	川中規	
元禄女腹切りを斬る	川中規	
「太陽の季節」を斬る	鬼山純	
歴史に現れた三人の美少年	西村純	
「鼻」と「変型しほり」	真鍋四	
幽囚十ヶ月	春田奈子	
目決する従軍看護婦たち	東田一	
奈子の自己愛について	門田奈子	
賭けられた洗腸	矢崎皓	
最近の縛り映画から	嵯峨美	
赤い花は泣いている	松井一	
奇譚クラブに寄せて	真木不	
私のコレクシヨンより	角田一	
続「少年権記」	山口幸一	

K誌編集方針に就いて	佐藤草
K誌の前夜	土路一
緊縛映画速報欄	千葉栄
最近の映画から	白石三
春田ルミ様まいる	綴中友
私の蒐集帖「緋草紙より」	緒台あ
玉稿落穂集	編集
新聞紙上に出た切腹実話	藤森集
探偵小説新考	東森一
倒錯の英雄、織田信長	笠間洋
とりこの白人娘	藤木仙

○九月号(復刊第八号) 定価二百円(〒8円)

口絵	美しい飼育物の調教	四馬孝・画
吊りを加味したアイディア	北原純子・画	
緊縛フォト二題	須川花	
ナイフ投げの的	BIZARより	
女学生	北原純子・画	
欧米式新スタイル二態	(2)	
寄生虫	壬生すみ	
洗腸とおむつ	月岡映	
忍の脱殻	松井良	
へんしゅう余滴	二本雄	
飯場往來なぐりこみ	沼正三	
家畜化小説の登場を喜ぶ	沼正三	
紅蓮(ぐれん)	青葉規	
光りある中を	近東規	
文学に現れた同性愛	藤見郁	
私の「ふんどし」	松原三	
「被虐哀歌」其の後	真金十	
「マニア」の女生徒の手記	池田ふ	
奈子の自己愛について	門田奈子	
沼正三の手帖	沼正三	
お灸を据える女性雑誌	松原一	
映画に現れた拷問場面	左巻策	
現代マゾヒズム芸術時評	東原忠	
探偵小説新考	本由郎	
芝居の責め、紅血欠皿	本由郎	



奇譚クラブ

復刊第十四号
四月号

目次

女体運動機能測定器

(続・潰滅の前夜) より

四馬 孝・画

縛られた女優たち

楓月 太郎

緊縛映画名場面集(一)(二)

楓月 太郎

スクリーンで縛られた女優たち

千葉 栄市

縛られ拷問を受けるジナ・ロロブリジダ

藤木仙治

我が異常性の記

南 時夫 18

輝とブリーフ(二)

池田ふみ子 30

マゾヒズム見たり聞いたりためしたり(3)

春木俊野 32

帝国憲兵要務綱領

稲田安夫提供 34

探検服姿の女腹切

藤山秀緒 36

ズロースETC

並原新一 40

女優緊縛監督列伝

女優を縛る監督達

升岡金吉 42

灰色のノート

矢崎龍一 48

口絵写真解説

藤木仙治 51

木馬責に関するノート

甲斐仁参 52

現代マゾヒズム芸術時評

原忠正 60

通信 最近の二つの話題から

近藤一 63

女装愛好者の方へ

滋賀雄二 67

ある夢想家の手帖から

沼正三 68



或る女性から編集長への手紙	編集部	74
鞭打のアイデア(1)	甲斐仁参	77
緊縛の軽演劇	本多由郎	78
九雅節夫氏へ	麻生保	83
ジャーナリズムに現われたク第三の性ク	矢桐重八	84
「続・潰滅の前夜」に寄せて	甲斐仁参	88
インナーベルト責め	武田源之助	89
メデカル礼讃	南川和子	90
続・切腹曼陀羅図絵	法谷四郎	92
雑誌通信	麻生保提供	96
花と朔風	北原純子	98
緊縛映画雑感	楓月太郎	111
口絵写真解説	土路草一	114
続・潰滅の前夜	岸本青柳	131
縛り責めを好む男と女	千葉栄市	135
緊縛映画速報欄	伊藤晴雨作	136
牡丹花秘談	甲斐仁参稿	136
未来幻想 家畜人ヤプー (第五回)	沼正三	142
マゾ小説	笛地佐渡	158
大衆文芸に現れた責の描写資料	佐々木ツトム	161
キクに捧ぐ私のアイデア集大成	甲斐仁参	166
鞭打のアイデア(2)		166
読者通信		168
編集後記		176

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

最近の映画から	白石 稔
悦庵に関する一考察	菅原 春夫
「切腹の歴史」	松原 荘吉
私のコレクシヨンより	角間 生
五種の責	失念
なめくじ	大谷 絢子
玉稿落穂集	編集部
最近の縛り映画から	嵯峨美也子
○十月号(復刊第九号)	
北原純子十月集、壊れ易き獲物	
刺青師の部屋、和蘭陀屋敷の謎	
現代マゾヒズム芸術時評参考資料	
米誌に見た緊縛写真欧米式新スタイル	
サディズム・シオン詳察	藤木 仙治
お灸の女王コンクール	岩瀬 洋一
天は知つてゐる	宝塚三三夫
光りある中を	近東規矩也
大衆雑誌と責	青山三枝吉
捨犬	青葉 模一
私の泥鰌ブレイ	ラフマン
受刑生活の思い出	福村 忠治
現代マゾヒズム芸術時評	原 光正
寄生虫	壬生すみ子
「家畜化小説を喜ぶ」に共鳴	麻生 和夫
「ますらお派出所」の犯罪	青山三枝吉
泥棒に縛られた話二件	池田 正一
エスキモー娘の切腹	本間 正宏
ある夢想家の手帖から	沼田 完三
「泥鰌」に関するレポート	古留 節人
締めつけられた女優達	古賀 晴雨
泥棒に入られた南田洋子	古賀 晴雨
責め絵の今昔	伊藤 信司
「一男色者の手記」	矢桐 重八
なめくじ	大谷 絢子
私のアイディア「晒し台」	千村 京助
緊縛映画速報欄	東 栄市郎
探偵小説新考	鷹野めぐみ
サジスチンの半生記	

「同好和服マニア会」	逸名 居士
黒女皇	沼正三・訳
読・乗馬ズボンの女腹切	藤山 秀緒
最近の映画から	白石 稔
○十二月号(復刊第十号)	
新着フォト紹介(一)	北原純子・画
「いでゆ」より	
拘束服とマスク、欧米式新スタイル	
現代マゾヒズム芸術時評	(雲井久子)
文学に現れた責めの描写	滝れい子・画
新橋で米兵同性心中	矢桐 重八
私のふんどし(二)	松原 三三
異性より同性に興味	畑村 一三
コルセット・マンボ	東 栄市郎
「少年期(母と子の手紙)」	山口 幸一
牢獄の花嫁	鳴山 能平
黄色オラミ誕生	真木 不二夫
和装女の縛り責め展覧会	岸本 青柳
美女決闘場面のアイディア	小西 鉄二
光りある中を(完結篇)	近東規矩也
腋毛礼賛	南 秀俊
女武者自刃	藤山 秀緒
黒女皇	沼正三・訳
ある夢想家の手帖から	沼田 完三
醜態への幻想	淡美 一郎
玉稿落穂集	編集部
魂を病む人	北原 純子
「F4」の独り言	近藤 純一
私の告白二題	青葉 模一
家畜人ヤプー	沼田 完三
女性化願望と女性ホルモン	古留 節人
糸姫の体験	高橋よし哉
最近の映画から	久留木 栄
美とワイセツの限界	白石 稔
緊縛映画速報欄	柳沢 吉保

防声具使用による窒息死	近藤 正男
マゾ・クラブの結成を望む	山田 郎記
バスガールに硫酸	東 栄一
告白「責めとワイセツの自画像」	越野 忠正
現代マゾヒズム芸術時評	原 忠正
昭和三十三年	
○一月号(復刊第十一号)	
新着フォト紹介(アメリカ)(2)	北原純子・画
花嫁受難二題	
「ボウニー分岐点」の一場面	
鳴門の妖鬼(水戸黄門漫遊記第十話)	須川 令子
ADESUGATA	北原純子・画
お灸の女王	
欧米式新スタイル(5)	
文学に現れた責めの描写	藤見 純子
花と踊風	北原 純子
フエチに関する切抜きから	阿川 純子
天は知つてゐる	宝塚三三夫
黄色オラミ誕生(第二部)	木真不二夫
大奥裸女決闘	京 洛
電気責めに関するノート	甲斐 仁三
ある夢想家の手帖から	沼田 完三
女性切腹の体験(上)	田谷 敬三
ある女給の体験	日下 絹子
麻酔切腹	青葉 模一
遊女八重路の責め	本間 正宏
女性切腹の体験(下)	長門 秀緒
特異な角度から(折檻と拷問)	九雅 秀緒
続々・乗馬ズボンの女腹切	藤山 秀緒
女性切腹の体験	高橋 正三
家畜人ヤプー(第二回)	沼田 完三
舞踊家師匠の責めの実験	岸本 青柳
最近の映画から	嵯峨美也子
少年期(母と子の手紙)(2)	山口 幸一
戦地での同性愛	東 栄一
赤いネオンのさえる頃	高井 与志夫
読者提供のアイディア	鷹野めぐみ
サジスチンの半生記	弓 崇
「魔海の業火」	

児童雑誌にみた惨虐性	東 一郎
玉稿落穂集	編集部
映画速報欄	藤木 仙治
ヴェールを脱いだ肢体美	畑村 一三
「ムチ打ち」と「緊縛」	間島 晃一
緊縛映画と雑誌の挿絵	千葉 真一
○二月号(復刊第十二号)	
新着フォト紹介(アメリカ)(3)	北原純子・画
洋面スチール名場面集(四場面)	
北原純子責め集「捕われの令嬢」	
先づのお仕置	
猿轡を噛まれた女優たち	
欧米式新スタイル(6)	
我が異常性の記	南 秀緒
オーストリア・スタイルの女腹切	須藤 秀緒
赤い魔城	青葉 模一
ある夢想家の手帖から	沼田 完三
姫君に手を出すな	本間 正宏
花と踊風(二)	北原 純子
マゾヒズム見たたり聞いたり	春木 俊野
私は街の道化者	丘 与志夫
サジスチンの半生記(三)	鷹野めぐみ
秀緒の告白	藤山 秀緒
家畜人ヤプー(第三回)	沼田 完三
サディズムの芽	甲斐 仁三
女教員の責め折檻	岸本 青柳
異人屋敷の裸女	本間 正宏
お灸の女王	白田 紅次郎
現代マゾヒズム芸術時評	原 忠正
証の腐籠	辻村 隆
フエチに関する切抜きから(2)	阿川 純子
白衣の傍観者	高井 与志夫
読者提供のアイディア	並木 好晴
「スロース・クラブ会則」	並木 好晴
私の「縛り美五原則」に就て	月岡 新子
秋のふんどし	松原 三千代

女体運動機能則定器

(続・潰滅の前夜より)

捕えられた美しい犠牲者は、先ず女体機能器の一つに架けられて、今まさにモーターのスイッチが入れられようとしている。

美貌の乙女の運命や如何に？

四馬孝・画



女優たち (楓月太郎提供・解説)



「流賊黒馬隊」 (西条鮎子) 裸馬で刑場へひかれる白装束姿が美しい。



「若君罷り通る」 (高千穂ひづる) 長く垂れた黒髪が魅力的である。

縛られた



「吃七一番手柄」 (岸 恵子) 入社してすぐの作、人質となって縛られるシーン。



「夕立勘五郎」 (花柳小菊) 花嫁姿で無理矢理猿轡をかまされようとする。



松竹映画 (酔いどれ牡丹)

浅茅しのぶ

お賀津(浅茅しのぶ扮す)が播磨屋弘蔵に珍しいキセル責めにあうシーン。ハ詳細解説は本誌三月号四三頁御参照下さい。V

緊縛映画名場面集 (一)



新東宝映画

(妖艶六死美人)

三重明子

番小屋の天井から吊されて殺されている女絵師宮川采女(三重明子扮す)
 △詳細解説は本誌三月号四三頁御参照下さい。▽

緊縛映画名場面集 (二)





1. 女優名 (新珠美千代) 映画の題名 (鞍馬天狗斬り込む)



2. 女優名 (西条鮎子) 映画の題名 (魚河岸の石松)


~~~~~スクリーンで縛られた女優たち

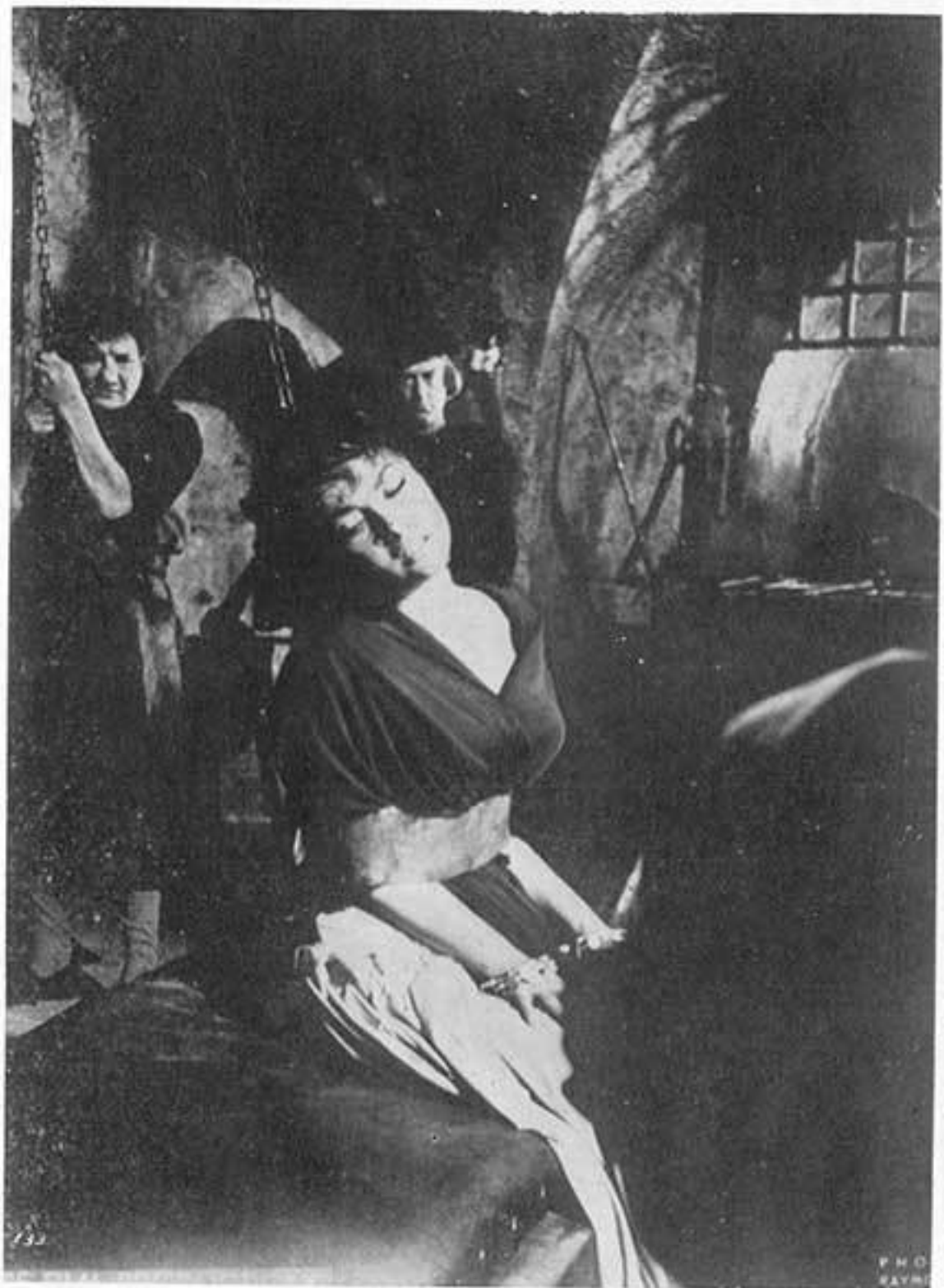


3. 女 優 名 (高峰三枝子) 映画の題名 (弁天夜叉)



4. 女 優 名 (千原しのぶ) 映画の題名 (まぼろし頭巾)





縛られ拷問を受けるジナ・ロロブリジタ 〔藤木仙治提供〕  
——フランス映画 *Noire-Dame Paris* から—— (本文解説参照)



新しい文献研究誌

奇譚クラブ

1957年 4月号

(第十一卷 第四号 通刊第九十四号)







# 我が異常性の記

— 女性緊縛 — (その一)

南 時 夫

## 一、女体緊縛の心理過程

私はこの手記の序の所でお話しましたように、私の性癖の最たるものは矢張り女性緊縛のサディズムなのです。サディズムの芽生えが何時頃から生じたのか、その過程はどうかということは手記告白にはつきものの様ですが私は敢えてそれ等に関しては省こうと思っています。というのは、その様な心理が何かの刺激で外部に表れたとしても、その心理自体は、本能的に潜在していると思われるからです。陰性の因子として内在しているものを、その起源を尋ねたとて

何んの意味がありましょう。第一項、第二項に述べた告白手記も女性緊縛への欲求に関連していることは、読者の皆様方にはお解りのことと思います。

女装愛好者は自分が異性の世界に入って見たいという女性そのものに対する憧れを持つと同時に、それと並行して女の衣類を着、顔にお白粉をぬり、ルージュを画いて自分を女に仕立て、自分自身によって縛しめられた女としての自分の姿を鏡に写し、そこに日頃夢に画いていた「縛られた女」の現実の姿に接して狂喜するのです。そして又、緊縛愛好者は女を縛りたいと思う裏に「一体女の人が縛



られたら、どんな気持ちでいるのだろう」と色々想像することによって興奮もするのです。(すべてのサディストがそうだと申しませんが少くとも私は)他の女性を縛ってのプレイの後で「どんな気持ちだった?」なんて聞くのもこの心理の現れでしょうか。加虐者と被虐者の両者の気持ちを知りたい……この要求を不十分ながら満足させて呉れるのが女装マニアの自縛行為に他なりません。従ってサディストは一面マゾヒストだと云っても言過ぎではないけれど「女装した自分」を縛ると云う処に純然たる男性マゾとはその本質を異にする様に思われることは前述した通りです。

私の身体の中には南時夫という男性と、南時子という女性とが共棲し、時夫は時子を高手小手に縛り上げ、猿轡を噛せ、その跪く様子を冷然と見下しているのです。時子はひし／＼と身にまとひ付く縄目に手足の自由を奪れたまま呻き声をあげ、転げ廻っているのです。嗚呼!この光景こそ緊縛マニアの、女装マニアの怪奇な姿であるのです。それはあたかも、人形使いが右手に男の人形を、左手に女の人形を操って巧みに演ずる舞台の一駒であると云えましょう。

自縛のことは別に又改めて書きたいと思いますが、私はそう深く研究してみたというのではなくとも現在では自分の手足を殆んど完全に緊縛することが出来ます。両手は勿論背後に廻し、後手首縄、高手小手と云った完全な縛りも自分自身の身体にほどこす事は可能なのです。私も数年以前までは自分で自分の手足を縛るなんていうことが果して出来るものかと疑っておりました。両手首を前に揃え、口を使って結ぶという事は容易でしよう。しかし初めに己が口に猿轡をはめて両手を後ろに廻して縛るということは不可能だと思っていました。ところがマニアの意欲とは怖いもので、今ではさして至難でなくなりました。もとより自縛後、それが解けなくなつた時の焦燥感や言語に絶するものがありますので意識的に必ず一カ所、解き得る箇所を作つて置きますが、そうでなければ、どんなに腕いたとて解けない様に縛り上げることは今の私には易しいので

す。但しエビ責めとか、その逆に両足を背後に折曲げて後手と一緒に括る(両足と両手との間に三十程の間隔をもたせての連結ならば出来ますが)という様なことはアクロバットダンサーでもなければ一寸出来ません。

以上の様に女装した自分を縛ることに異常な興奮を感じるのです。然しだからと云ってそれのみで満足し得ないことは純然たるマゾでない私には当然です。ただ女装マニアの告白記にあった様に、緊縛の対象が他に得られたとしても私は女装自縛行為を全く止めてしまふかどうかは疑問です。自分の女装を自分で嫌悪する様にならない限り多分やめようとしません。というのは前に述べた様に、この奇怪なプレイの中に於て両性の心理を知り得る為には女装自縛行為に依る他はないからです。然しもとより私は「女の人」を縛りたいのであつて外面は女装していても「男の人」が縛りたいのではありません。この微妙な差異は奇ク読者ならお解りでしょう。女装した自分、又は他の女装者を縛るのもその人間を「女」として縛っていることは何度もお話しました。女性と男性の外面的差異の最も顕著なのはその肌であることは衆知の事実です。いかに巧みに女装した男でも一度肌を見られたらその途端に判ることです。女性特有のあの弾力的な肌は、そして肉体は本質的なものであつて如何なる女装マニアでも、科学的に女性の因子を取入れればともかく、それを我物にすることは不可能なことなのです。サディストの、女性緊縛マニアの着眼もそこにあるのです。肌に喰ひ込んだ縄、縄と縄との間のふくらみ、着衣の上からの縛りであつてもその指先、首筋……その身のこなし、それ等には矢張り女性を対象にするのでなければ得られぬ興奮があるのです。

私は女の腕と足とのフェティシズム傾向も別項にして書く積りでした。でもよく考えるとそれ等を好ましく思う心理も私の場合にはサディズムの分野の中に入ってくることに気がついたのです。私は



第二項でブラジャー狂想をお話しました。真夏にこの欲望を求めて街をさまよう恥しい姿も告白致しました。でも最近はその充足もそう簡単に行かなくなったことも既述の如くです。この望みが達せられない場合には、私は女の人の腕に眼を注ぐ他はないのです。真夏の、あの肩の付け根から全く露出した腕。男の様にごつ／＼した感じのないなめらかな線。つまめば強い反能を示すであろうあの肉体の一部。私は女の人の腕を見る時、何故か眩しいものを感じます。とは申せ、瘠せ細った女の人の腕程、哀れさを感じさせるものはありません。適当な肉付きをもった若々しい皮膚の色合がその魅力の対象となるのです。しかし、腕そのものに対してこの様な興奮を感じる他に、いやもっと強く私の心を支配するのは、あの腕を後ろにねじ上げ、あの肌に縄を喰い込ませたら……と云うサディストチックな空想に陥ることなのです。ブラジャーに引締められた胸、それによって盛上った肌から受ける興奮も、女性緊縛マニアとしての私の興奮でもあることも又前述した如くです。

夏の、あの服装で満員電車にゆられ、乗客に押され、あの露わな腕を座席の木の角に喰い込ませて、「痛い痛い！」と叫んでいる女の人の見る時、私は「あゝ気の毒だ」と思い、出来るだけその人の周囲の人達を押し除け、幾分でも楽にしてあげたいと思ひ、そうしながらも、私のいま一人の悪魔の眼はその虐げられた腕の喰い込みを凝視しているのです。そしてこれは美貌の、服装の華美な女の人から程その受ける興奮が大きいのも当然(?)でしようか。猿轡でも同じこと。魅力ある女性の顔を見れば、そして今にもこぼれそうな口許を見れば、「あの女のあの口を絹の布でぐっと締上げたら……」という悪魔の囁き。いま一人の私はその様なことを一切嫌悪し、美を美としてのみ眼に映じさせようと努力していても、もう一人の私は、腕を見ては縄を思い、鼻口をみては猿轡を思う。この常人には決して打明けられない二重人格性が私のみならずサディストの共通の心理

であると思うのです。女の人の足に対するフェチは腕程ではありません。もっとも私は足そのものへの興味の他に、それよりも増して女の人の靴に関心があつたのです。それもサディズムの面からの関心でもあります。今では大部分がパンプスという、ただ足を入れるだけの型が大流行で路行く人の多くはそれですが終戦後の四、五年まではサンダル風の靴が流行っていました。現在でも夏にはみられます。私はこのサンダルのあのバンドの部分が好きだったので。奇巧にもどなたか書いておられた様に、サンダル風のハイヒールにあのバンドの部分の足首に二重、三重(これは珍しいですが)と巻いて、両足を揃えて居る女の人を見ると、まさに足首を革紐か何かで縛られている様な錯覚を起し興奮したものでした。冬のマスクも同じこと。又寒さの為にシヨール又はマフラーで顔半分を覆っている女性の姿を見ても同じことです。アクセサリーとしての首環、腕環にも同じことが云えましょう。それ等の総ての点にサディズム―女性緊縛の心理が大きな要素となっているのを知る時、私は何か怖いことこの様に感じます。しかし私自身まだ自己嫌悪に陥り、その重荷に押しつぶされていないのは、私の心の中にいる正常な理性をもった一人の私がいま一人の異常な私を監視し、叱責し、その異常行為の実行を阻止しているからです。両者は絶えず私の心の中で葛藤しているのです。

以上緊縛に関して序文的なことを書きました。この様な論文調子は読者の方々には余り好かれますまい。従って多少調子を変えて(出来ますかどうか)女性緊縛に関する私の体験の報告に移りましょう。私が実際に縛ったことのある女の方は二人しかいません。(この中一人は少女にあたるのですが)宝塚二三夫氏の「私の責め方」の社長さんの様に美女を五人も六人も縛り上げてみた様な方々にとつては「何んだ、たった二人を縛ってみたこと位で体験談なんっておこがましい」とお考えでしょう。でも序でも述べた様に、空想



の世界でのみ女性を縛っている読者の方も可成りいると思ひ、そう思うことを自分に対する唯一の慰めとして、これからの体験談をつづつてゆく積りです。又前に書いた様に私は実際にあった事以外には絶対に筆を進めない所存です。従つてこの体験の中からは何等参考になるものが得られなかったとしても、それは仕方のないことです。私は貧しい体験そのものより、それを取巻く様々な心理過程に關して一部の読者の方々にでも何等かの御参考になるものをお届け致したく、その様努力する積りです。

最後に、この種の告白者の常として、自分の趣味、傾向を述べねばなりません。一概に「女を縛る趣味を持つてゐる」と云つてもどんな女性を？どんな縛り方で？その服装は？……ということが質問されるからです。しかし私はこれ等に関しては余り固定した理想というものが無いのです。その範囲が極めて広いということが云えましょう。「女であれば……」と書けば幼い子供でもいいのか、老いた婦人でもいいのか、と云われるでしょうが、もとより私とて五六才の女子、六十過ぎた老婦人を縛つたと何等興奮は致しますまい。その様な姿を現実に見たら、そんな氣持より急いで解いてあげてでしょう。読者の方の中には「女学生を」とか「二十才から三十才位までの」とか「髪は日本髪で」とか「着飾つた女性を」「全裸でなければ」とか種々多様です。私はこの様な難しいことは云いません。要するにその女の型並にその姿態如何にかかつています。年令について云えば若くても年を取つていても構いません。その人から「女」としての体臭(?)が感ぜられる限り。二十才台と制限する必要はないのです。三十過ぎてても二十才代の娘には見られない魅力ある女性が居ります。余り「女」という感じを起させない女学生と四十近い濃艶なマダムの方でも縛つて宜しいと云うのなら私はそのマダムの方を縛るかも知れません。もっとも男の様に勝気な女学生を縛つてみたい……と云うのはこれと違つた興味からです。

私の隣家にもう五十過ぎた奥さんがおられますが、年なので別に化粧をしてゐるわけでもなくとも、京都出身の人とかで不思議な品と魅力を持合せていますが、その奥さんを縛つてみたいと考えているのも私のこの傾向に巾のある証拠です。瘠せ細つた貧相な娘よりも大家の、肉付きの良い奥様を縛つた方がより趣味に合う様な気がします。少女の場合でも十才位で年よりもませている子が居つたとすれば、その様な子なら私の対象となりましょう。空想の世界に於ける女性緊縛の対象はあくまで恋愛の対象とは異つた非常に広い範囲をもつてゐるのです。従つて映画の中で緊縛される女優には殆んど注文がありません。又、貧しい家に育ち真面目に家の為をに仿いてゐる若い女性はその人が絶世の美人であつたとしても縛りの対象にするのは何か深い罪惡感に責められる様な氣がするのです。多少容貌が劣つても、金持の令嬢で、華美な服装をし、日々享樂に時を過ごしてゐる娘を見ると、その服装の美のためばかりでなく、何かしら反撥を感じ、縛りの対象にすることが容易なのはプロレタリアートとしての私のほかにレジスタンスの現れでしょうか。家庭の為にあくせく働いてゐる若い主婦を縛りたいとは思わない。それよりも小太りに肥えた金持の奥さんをぎりぎり縛つてやりたい。その他の条件についても私には難しい注文はありません。髪は型はなんでも宜しい。全裸でも着衣のまゝでも構わない。しかし前述した様に手足まで全部衣類で覆つてゐる人より少くとも直接肌に繩が喰ひ入つてゐる姿の方がよりベターであるし、又全裸よりもブラジャーを着けていた方がより好ましいと云うのも既述した私の特有の趣味からです。女性緊縛に関する限り洋装、和装を問いません。女装に関しては洋装を好みますが本物の(?)女性を縛る分にはその衣類がなんだろうと同じです。同じ服装なら華美なもの、同じ華美ならより美人を、同じ程度の身分、容貌、魅力ならより若い人を、同じ条件なら自分の趣味により接近した姿の人の方を……。要するにその範



罫が広く、その範囲の中で二者択一を迫られた時により、ベターを取るといふのが私の考えなのです。緊縛方法は私自身としての特有の趣味、趣味というものはありません。皆様と同じです。後手、急所々々に縄を掛け、高手小手、首縄、別にとり立てて云う程のことはないのです。ただ猿轡は必ずはめることが好ましく、眼かくしは余り感心しません。長々とこの様なことを羅列しては体験談も読んで頂けない中にあきられてしまいそうです。次に移りましょう。

## 二、私の体験

“女性を縛りたいならばその女性にほれられることだ”とは奇ク誌上によく現れる偉大な格言(?)であります。私も双手を挙げて賛成したい。私がこれからお話ししようとするK子もR子も(これから登場する全ての女性は、姓も名もその実名の頭文字を使うことにします)このケースに入るからです。私はここで彼女等との恋愛関係を細々と述べる積りはありません。しかし“女を縛る”と云うことはそう容易なことではないのです。空想の世界では、それは様々の型の女性を縛ることも出来ましょう。どの様な高貴な令嬢でも人気絶頂の女優でも夢の世界に於てなら容易に縛り猿轡をはめることも出来るのです。ところが実際には、隣家の娘だって仲々そう簡単には縛ることは出来ません。これが現実なのです。実際に縛ることは勿論“縛る”とか“猿轡”とかいう言葉すらも口外すること自体、余程の人でない限り出来ません。私は女性を縛り得る為には二つの場合しかないと言いたいのです。その一つは、現実の縄や紐で縛る前にその女に既に何か眼に見えない束縛を与えている場合と、その二は、その女性が偶然にもマゾヒストであった場合、の二つしか無いと思う。勿論非合法的に人を縛ることは出来ても一例えれば強盗の様に―それは問題になりません。後者即ちマゾの女性と何かの方法で知合い、お互いの傾向を認め合って、緊縛プレイに発展す

るケースは、皆無とは云わないまでも、ごく少い例でしょう。又、いくらマゾの女の人で、絶えず“縛られてみたい”と考えていてもその様なことを簡単に口外しますまい。見も知らずの男に、そう簡単に縛らせることは少いでしょう。特に女性はこの様な傾向の人であつても、矢張りそれを通して精神的な連りを欲するものです。そう考えてゆくとこのケースも第一の場合に包含されてしまうことは確かです。女性を或る束縛状態におくということ……これは或る場合には容易、或場合には難しいこと、云えます。湯水の如くと云わないまでも、そちらに向け得る資力のある人ならば容易に出来るかも知れません。二号さんを囲って、その傾向を徐々に持出すことも出来ましょう。そうでなくとも、料理屋、飲屋の女中又は芸者、特飲街の女性、ダンサー等を縛ろうと思えば、考え様に依つては簡単とも云えます。彼女等は既に何かに縛られているからです。彼女等が素直に後ろに手を廻したのは“商売”“勤務”という觀念が全部であるとは云わなくとも、それが大きく支配していることと思えます。“いや、そんな事を云つても、本当に喜んで縛らせて呉れた”とおっしゃる方が居れば、その女性は貴男を好いていたからです。偶然にもマゾであつたのかも知れません。この種の世界の女の人は、色々な型のお客と接しているため開放的であり、素人の娘さんとは違って、余り深刻に考えない点で、言い出し易く、又縛らせる可能性も多いことは確かです。緊縛プレイそのものを経験してみたいと思ひなら、この種の女のひとと親しくするのも一方法でしょう。然し、ここまでの資力の無い人、又はこの種の“商売的”な觀念のもとで縛られる女には満足しない(少くとも私はそうです)方は、ある女性と恋愛関係を持つことが最も良い方法であり、“寝て果報を待て”式の、突然美貌のマゾヒスチンの出現を待っている人より、その実現の確率からいっても数段優っています。しかし、ここに一言しなくてはならないのは、同じ恋愛関係と云つても二種類



あり、一つは初めから相思相愛、又は自分の方がより熱烈である型と、相手の女が特に自分を熱望し、自分としては当初はその関心が無かったのが、その人の情にほだされ、次第にその様な関係に入ってゆく型とあります。私の経験では後者の場合が前者より緊縛プレイに入るには容易なことだけは云えます。そうでしょう、自分が相手を熱望し、どうしてもあの人と結婚したい、あの人なしでは生きてゆかれない、失いたくない、と思い、その感情が強烈であればある程、縛らせて下さい”なんて言えるものではありません。そんな傾向はおくびにも出せない筈です。又そこまでの感情を持てば、空想の世界でもその人を縛りの対象にするなんていうことは出来ないものです。“嫌われたくない”という想のみが支配してプレイへの欲求も純粋な愛情の前には薄いでしうものなのです。例えばサディスト、マゾヒストの男女であってもお互に“失いたくない”と思う気持が強烈な限り、結婚するまでお互の傾向を口に出さず悶々とする、一見不思議な関係が現実です。いささか主観に過ぎたかも知れませんが、然し私が嘗てM子という結婚の約束までした女性を持ちながらこの体験記の中に登場させることが出来ないのも以上の様な心理に私自身が陥ってしまったからに他なりません。後者の場合は自分の感情が段々その人に移ってゆくのですから、その間に傾向を持ち出す機会も見出せるのです。私は厭がる女性を無理に縛りたいとは思わない。すすんで“縛って下さい”と言われるか、黙示でも明示でもその女に“縛ってもいい”という意味表示がみられるかでないといふ余りに罪悪感、自己嫌悪に陥ってしまうからです。そうだからと云って、私は皆様に目的の為に手段を選ばない“偽りの恋”をおすすめしているのではないのです。愛情はあくまで尊いもの、純粋なものでありたいと思います。すべて初めから合意で行えれば結構です。そうでなく、何も知らない相手の方を、それまでに熱中させプレイだけを行った後は、もうかえりみないというのでは余りに残

酷です。素人の女の人自分が自分の身体を縛らせるといふ程の決心をするのは並大抵ではありません。年上の女性とか、未亡人とか、或種の奥様等がそう欲するのは女の人の好奇心に依る場合もありましよう。結婚適令の男女の恋愛に於て、女性が愛する男の為に自ら衣服をぬぎ、自分の素肌に縄紐が触れるのを甘受するのは、マゾヒストでない限り、余程のこととあります。従ってその女の人の心情を汲んであげなくてはなりません。そうでなければ、その理由をはっきり云って、その上でプレイをすることです。一旦縄目の経験をもらった女性が、それからはその行為を再三再四要求することもありましよう。そうだからと云ってその女性が純然たるマゾであったのだと思うことは間違いです。女の人は精神的連りを欲するものだと前述しました。自分が縛られていることによつて“あゝ私はこの人のものなんだ”とつぶやく心理、その点をよく理解してあげなくてはなりません。

それから、私は惨虐なことが嫌いで、血を見るのも怖しく、鞭で打ったりするのも女性がそう要求しない限り致しません。あくまでも“縛られた女”で満足し又そうでありたいのです。

### 第一の体験 K子の場合

私は旧制専門学校を出てから、その年の九月に東京下町の某新制中学に奉職しました。大学直進には家庭の事情に困難があったからでした。私の専門は化学でしたが丁度数学と体育の教師に欠員があったとかで私は数学の教師として勤めることになりました。その他若い先生は体育も一度は受持たされるそうで私も一週に四時間体育の教師も勤めました。職員室での校長の紹介があった後、私は定められた席に座りました。私の席と向き合った前に女の先生が居ました。K・Mという音楽の先生で、九州から単身上京し東京の音楽学校を出て直ぐこの学校へ勤め、もう二年になるということでした。



小づくりの、それでいて十分肥えたこの女先生はとても愛嬌がありました。九月一日でしたので、まだ皆夏姿、彼女もサンマードレスにボレロといった恰好で私に挨拶しました。大きく開いた胸もとから健康そうな肌がのぞいていました。決して美人ではなく十人並と云ったところですが、丸顔で南国育ちの情熱的な眼をしていました。髪は縦ロールにして肩の辺までたれ一見まだ音楽学校の学生といった様な人でした。学校の教師というのとはとても喧しく、特に女の先生は余り華美な服装、目立つ化粧をしてはならないので、他の先生もM先生も普通のオフィスガールよりは地味な恰好でしたが、その中で彼女はいささか大胆でもありました。そこで生れて初めて「先生」と呼ばれ、いささか面喰った思出を持っています。私の教師生活はかくて始まりました。前の机のM先生は私にとっても親切でした。どこの勤めでも同じことでしょうが、勤め初め程、孤独なことはありません。まして表面的に固苦しい職員室の中で一人ぼつねんと座っている私がその淋しさを味っていたとて不思議はありません。どの様な美貌の先生が存在よりも、親しく話しかけてくるK・M先生の印象がより大きかったのも当然でありましょう。私はそれから半月後にM先生と恋愛関係に陥りました。彼女は私より年上の二十二でした。私は先生中で最も若く入った時が満二十才であったのです。

翌年の四月の新学期から私も二年生の担任になり、勤めも楽しくなりました。その年の夏に私達二人は遂にすべてを許し合う仲になりました。それから彼女は年下の私を「パパ」と呼び、私はM先生を「K子」と呼ぶ様になったのです。彼女の愛情は南国特有の強烈なものでした。ひつこいと云う言葉は少し酷でしようが、そう感じたことも正直にあるのです。それは彼女の性格の為か、それとも家を離れ、東京に一人下宿していたその為であったのか、多分その両方であったでしょう。私が授業から帰って昼の食

事をしようとする必ず余分なおかずが机の上に乗っていました。「パパが結核で血を吐いたらK子が吸ってあげる」とまで言いました。私は初めから純粹な気持で彼女を欲していたとは申せません。寂しさの為K子の存在が強かったことは前に書きました。そして、彼女が私より年上だという責任回避の念もあったことは確かです。次第にK子の情熱の渦に巻き込まれていったと云えば当たっているでしょう。先生には夏休という特典があります。その夏休み中の或る一日、私はK子に初めて縄を掛けました。K子にという言葉は当てています。私は生れて初めて他人を縛ったのです。私はそれまで、もう告白しました女装外出の経験もありました。女装自縛行為もしていました。でも奇巧は知りませんでしたし、現実他人の身体を縛る等ということはそれこそ思ってもいませんでした。

K子が尋ねて来た時、私はまだ蒲団の中で本を読んでいた。家人は全部出払って私が留守番。彼女はありふれたワンピース姿で私の好きな、あの弾力性ある腕を肩から露出して、私の側へ来て色々と話し始めました。そして彼女は唇を求めました。私はそんな時は必ずといってよい程、相手の手首を握って、それを背後に廻し、手を握りしめながら唇を合せます。片方の手を握む時もあれば両方一緒に握んでいる時もあるのです。決して不自然な姿ではありません。両手を背後に握まれてキスをされる女の人の気持は知るよしもありませんが私の経験では、その表情から決して厭だという様な現れは無かったことは断言出来ます。

「どうも持ち難いな、一寸縛っておくといいたけど……」  
私は一旦手を離して何気なくそう云いました。今考えて、これは計画的な言葉だったのか、本当にその時そう感じたから出た言葉なのか判断しかねます。その様な姿にはもう慣れてしまっているK子は別段驚く様子もなく  
「そうね。パパが面倒臭かったら括っこしておいて」



とこれも平然と言いました。

「じゃあ——そこに、寝巻の紐が——一寸取って」

私は今ぬいだばかりの寝巻の紐を眼で教え彼女に取らせると無難な作に手首を縛ってしまったのです。

「パパ本当に括るの？誰か来ない？そこだけにして——胸は厭よ」

私はK子の要望を入れて両手首だけを縛り今迄の通り、何んの気にもとめないK子を、そこにごろりと寝転がしました。仰向けに寝ると縛られた手首が身体の下になるので、さすがのK子も、「一寸痛いわ」と言いながらすぐ横向きになったりしていましたが、別に「ほどいて」とは云いませんでした。縛られているという自分の姿をそう余り意識にとめていないK子の様子が私の気を楽にさせました。「胸は厭よ」という希望を踏みにじって奇巧のグラビアの様に胸までぐるぐる巻いたらどうだったでしょう。少くとも横になったとき「早くほどいて頂戴」と注文されたことだと思います。女の人を縛るには「縛る」ということに余り深く考えない様にしなければなりません。「どうしても縛るんだ」と思って眼尻を決した表情を見たら、いくら自分を慕って呉れる女性でも一応、二応は「そんなにまでしなくとも」と敬遠されるでしょう。一度限りならそれで結構です。でも二度三度とその満足を得るためには潜在的にはどの様な強い気持があるかと、あくまで「余技」と自分で思い「相手にもそう思わせることが非常に重要なのです。これらは復刊以前の奇巧に連続掲載された吾妻新作の「感情教育」の中の諸種の意見が非常に私の体験とも合致している点は奇巧を知ってから驚いた程です。「縛り」を或種の習慣化してしまう事が理想的でもあります。習慣くせと云うものはそれ自体余り意識はしますまい。お互に（特に女の人の方に）何の嫌悪も感じること無くプレイを楽しむにはこの方法が最も良いのです。

K子の両手首の合さった部分を解放して、私は彼女を駅まで送り

帰ってから、初めて人を縛った興奮に沸きました。帰り道、「人を括ってあんな事をするなんて強盗みたいね」とK子は笑っていましたが、帰りになって初めて「縛り」の意識がK子の心に浮んだのかも知れません。

それからK子と逢う時は、事情が許せば今迄の様に自分の手で彼女の手首を握む苦勞は省けました。外出中はその様なことは出来ません（後述する一寸変った体験以外は）。私がK子の下宿に行けば彼女の手首は殆んど毎度後ろに縛られました。K子も別に意にもとめません。それどころか、「はい！紐」なんて言いながら勢良く腰紐を渡して呉れました。一度、「今日はこれ！」と差出されたのを見て驚ろいたのは、何か送って来た荷物を開けたのでしよう、細い紙紐で、それが物凄くこんがらがっているのです。「そんなの駄目だよ」。私が押し返すと、「これでも使えるわよ」、と言いなから自分でその縛れたのを解いていたこともありました。風呂敷やハンケチで間に合せる事もありましたが、何かの拍子にそれが解けてしまふ様なことがあると、「ほどけちゃったわ。すっかり括っておかなきゃ駄目よ」と私の方が叱られてしまうこともありました。この様な二人の関係でも、私はK子の胸まで縛ることは仲々しませんでした。まして彼女を高手小手に縛り上げ、首縄まで掛けたということは数える程しかないのです。ただ後手に手首だけを縛った経験なら、ことK子に関する限り数え切れません。猿轡の方は私の場合案外容易でした。彼女が下宿生活なので夜分訪ねて色々の行為をする時は、その話声、呻き声が隣の部屋の人に聞えてしまうので私はよくK子の口を縛りました。もっとも呻き声は少々口を縛る位では駄目で必要に応じてそれぞれ布の厚さを変えました。口を強く縛りその上からウールのマフラーで鼻口と一緒に覆い強く引締めますと大部分呻き声でも消す事も出来ますが、例え冬でも相当熱く汗を流して我慢していたことがあります。猿轡も初めの中は、たゞ手ぬぐ



いで口を覆うだけでしたが、「どうも駄目だな、もっと静かにしないと隣に聞えるよ」との私の言葉に、それからは自分でハシケチを口に押込みその上から紅いネッカチーフで縛る様になりました。私がそうする時もあれば、彼女自身で自分の口をその様に処置することもありました。口を紅いネッカチーフで猿轡されて、両手を背後に廻したK子の姿は今の私にも昨日の出来事の様鮮かに思い出されて来るのです。

奇クのグラビア写真の様に本式に(?) K子を縛ってみたことは二、三回あります。いずれも二人とも可成り酔っていた時間で、この様な「縛り」それ自体のプレイは矢張りお酒の勢が必要でした(特にその時分の私には)。その中の一つをお話してみましよう。

あれは秋の運動会の日だったと思います。運動会にはPTAから慰労として沢山の寄附酒が出ますので、余り強く無い私は随分酔って何んだか解らず、K子の下宿へ帰り、その晩は泊ってしまいました。私は他家へ泊ったことは余りありませんが、これも酔の為だったのでしよう。幾分我に返って、いつもの様にK子に猿轡をさせ、両手首を背後に縛りました。ところが手首を縛ったただだと随分縄が余るのです。あの縄を何んて云うのか名前を知りませんが、要するに縄飛びにする、あの糸を編んだ縄です。K子も何かふらふらして重心がとれず、直ぐ横になってしまいます。私は思切って、その余っている縄を彼女の胸に廻し、上下二段に締め、それを首に掛け、殆んど雁字搦目に縛り上げて転てしまいました。酒の勢で力まかせに、シュミーズ一枚の肌の上から縛られたのですからたまりません。何か言おうとして瞬間私の顔を見ましたが、そのままの姿で敷蒲団の上にごろりと転がり眼を閉じてしまいました。私はK子の上に蒲団を掛け、私自身もそのまま眠ってしまいました。アル





ゴールの魔力程怖ろしいものはありません。私はとも角、K子までがそんな姿でうとうと眠っている様子。もっとも本当には眠れませんまい。私自身、女装して自縄し、一つ朝まで眠ってみてやろう”と思ひ、無理にでも寝入ろうとしたことがあります、うとうと位が関の山で決して我知らずに寝入ることはまず不可能です。夜中にふと私は眼を覚しました。水が欲しかったのです。真暗の中を起き様とすると、耳元でK子が、「パパ、パパ痛くてしょうがない。一寸ほどいて——」と言うのです。「はっ」と思つて蒲団の中から手を伸してK子の身体に触れると、縄と縄との間に盛上った肌の感触でその凸凹した肌触りは全く異様なものだった事を覚えています。人間の素肌を触っているという気持でなく、何か——ゴムマリを並べてその上をさわっている様な感じでした。起上つて電燈を点けて見ると蒲団からK子が顔だけ出しています。枕もとに、吐き出したハシケチが唾でべとべとに濡れて置かれ、ネッカチーフの猿轡が頤の方へずり落ちてゐる状態。蒲団を除くと、我ながらひどい縛り方をしたものだと思ふ程の雁字搦目で、初めの方は、ちやんとした乳房の上下に縄が掛けていましたが、その後は首から肩から、縦、横、斜めと目茶々に縄が掛けていて、縄と縄との間から素肌が盛上っているのです。

「ひどく縛られているもんだなあ——。強盗にでもやられたのかい？」

私は自分が縛ったことを知りながらこう切り出しました。

「痛くて痛くて、うとうとしても直ぐ眼が覚めちゃうのよ。早くほどいてよ」

とK子の返事。私も、これではたまらないだろうと思ひ、自分の掛けた縄目を苦勞して解いた経験があります。ひどいもので縄の跡は赤く筋が入っており、腕などは五種間隔に横に縄ずれの跡がついているのです。少しどころか全く可愛相でした。それから何も無

く朝迄寝入りましたが、夏であつたならK子は翌日直ぐ勤めに行くことは出来なかつたでしょう。秋であつたのが幸でしたが、首についた跡は目立ち、仕方がないのでその部分を小型のネッカチーフで覆ひ、そんな姿で一日仕事をしていました。今日まで私の縛つた経験でこれ程までの縛り方をしたケースは有りません。K子も一生を通じて、あの様に手ひどく縛り上げられる事はありません。奇巧の写真のモデル嬢にも一寸居ないかも知れません。あれで猿轡でももっと嚴重に嵌めておいたら、真暗の中、K子は朝まで縛られなしていたかも知らなかつたのです。何故なら私達は随分隣に氣を使ひ、無理に呻き声を大きくたて、私の注意を引かせることを彼女は躊躇したでしょうから。朝聞いたところに依ると、余りひどく縛られて眠れもせず、それに一寸でも身体を動かすと縄の掛っている所が切れる様に痛くなつて寝返りも打てないし、それ以上に次第に手や腕がしびれて来たので、初めは私の耳もとで「うーうー」うなつてみたけれど私が一向眼を覚す氣配が無いので、枕に口をこすりつけてネッカチーフを外すと言つていましたが、さすがのK子も酔がさめた後の何時間とはとても苦しかったことでしょう。普通の猿轡のかけ方ならば大抵この様にすれば外されるものです。

K子に関するその他の体験は一々もう申しますまい。ただ一つだけ奇妙な経験があるので。それは、縛つたままのK子を白昼、大道を連れて歩き、その上映館にも、そのまま入った事があるので……と書けば、ほら、いよいよ作り話が始めた——とお思ひでしょう。まあお聞き下さい。

古川裕子さんの告白記にあつた様に女を狂人に仕立て、その縄付きの姿のまま引き廻すと云ふことは非常に刺激的な事で、してみた様な氣もします。古川さんの様な真のマゾヒストの方にとってはこの様な姿で衆人の好奇の眼の前に立つこと程興奮を呼ぶことはありますまい。又サディストの方も、縛られて、恥しくとも顔を隠す



ことも出来ないこの様な姿の女性を、衆人觀視の中で連れて歩けばどんなにか欲情を満足させ得るか分りません。しかし、法律的に言っても、その様な手続を公然と取ることは殆んど現在では不可能です。大分以前の新聞に、急停車した自動車の傍に居た人が何気無く車内を見たところ二、三人の男に囲れて一人の若い女が後手に縛られ苦悶の表情。すわ、誘拐事件！と思ってその人の急報で手配した処、実は精神病院から女患者を移送するところだった、という記事が載って居ましたが（この切抜きは現在持っています）、本物の患者でも他人には殆んど眼に付かない様に移送するもので、まして高小手に縛って歩かせることは致しません（以前には確にあった様です）。私の方法は、K子が縛られていることは彼女自身と私との二人しか判らない状態——そうです。他からはK子が縛られている事は全然判らない状態でのプレイに他なりません。他から見られるという興奮の要素が無いのですから純然たる二人だけのプレイだと云えます。冬に皆オーバーを着る頃に、まずK子の両手を後手に縛り、その上からオーバーを着せました。勿論オーバーの腕は中身がありませんからだらりと垂れていますが、一番上のボタンだけを留める様にすれば、一見した処、オーバーをはおっている様にしか見えません。ただ縛った手首を高く吊上げる様にすると背後に盛上って外からでも判りますが、腰の辺で縛られている分では、まあ判りません。そんなK子と連れだって街を歩き、映画に入ったのです。人間は歩く時には腕を幾分でも振って歩くもので、その手が後ろに縛られていると非常に不安定になるものです。K子は初めの中は、どうも歩き難い様でしたが直ぐ慣れたと云っています。これは普段でも私が彼女の手を背後に持って歩いていた習慣からでもありません。薄いスプリングの様なものではすぐ判ってしまいます。多少厚地の、幾分ゆったりしたオーバーなら大丈夫外から分りません。判っても、ただ「手を後ろに組んでいるんだろう」と思われる

位で、まさか縛られているとは思いませんまい。映画館で「トイレに行くから」というK子の言葉で解いたのですが、一寸面白い経験でした。（悪趣味だったかな）。もっとも、同じ人に長い間、見られればズレるかも知れません。暗い映画館に入るのが最も良いように思えます。私が今考えているのは、冬にその様に縛ってから、口にハンケチをつめ、細引きの様なものでその上を固く縛り（西洋風の猿轡）、その様にした口を大きなマスクで覆って、細引きを隠す為に顔をネッカチーフで包んで連れて歩いてみたいと考えます。K子にはそこまではしませんでした。私がネッカチーフにマスクの女性の顔が好きだと第一項の「女装」でお話しましたが、その様にして歩かせたいというのも、その趣味の一要素です。外から見たらただマスクをして、オーバーを肩にはおった女の人としか見えないのに実は猿轡を嵌められ、後手に縛られているなんて、一寸素晴らしいではありませんか。もっとも、そんな姿で一人で外へ放り出されたら大いに気の毒ですが——。ふと道を聞かれても「う、うー」と呻くだけで何もしやべれないなんて……益々悪趣味ですね。これ等一連のアイディアは或る映画のシーンから思い付いたものですが、K子連れて歩いたのは、その映画を観る以前であり、猿轡の件は映画のシーンからヒントを得たものであることをお断りしておきます。

K子との体験談は以上で終わります。たゞ手首は喜んで（？）縛らせた彼女も、足を縛ることは厭がりました。理由は「足を括られると、とても痛いから」と云うことでしたが、その他にも何か訳があったのかも知れません。又猿轡も、殆んど口だけで鼻口共に覆うことは前述した特別の事情のある場合以外は余りありませんでした。「鼻をフタされると、息苦しくて」という注文で、私も専ら口だけを縛りました。それに口だけだと非常に強く締めることが出来て都合が良く、鼻も覆う方が本当は好きなのですが実際には余りやりま



せんでした。K子は自分自らの手で猿轡を嵌め、縄紐を私に差出しては手を後ろに廻して縛られていました。が以上のお話で判りの様に彼女は決してマゾではありませんでした。マゾヒストならば一度縄の味を知れば、二度三度とその傾向は強まって行くと思います。より息苦しい猿轡が好ましくなるでしょう。K子には「縛り」そのものには余り意識がないのです。後手に縛られるということが習慣化してしまったが故に、その行為自体に対しては何等深く考えようと云う様子はありませんでした。両手首を私の手で握れることも、縄や紐で縛り合わされることも、彼女にとっては同じ事でした。猿轡にしても、自分の声を隣に聞かれない為には「こうして口を物をつめ、この様に覆うのが一番いいのだ」と自分で認め、そう信じていたに過ぎないのです。大掃除にほこりを吸うといけないから、手拭で鼻口を覆うのと何等変りはありません。——そこには被虐という観念は微塵も無いのです。愛撫される時に後手に縛られる必要はありません。然し、これも一つの習慣であって、それ以外の何物でも無いのです。習慣というものは、その必要性の有無とは、あくまでも別個のものなのです。「グセ」といった言葉が最もぴったりする様に思われます。「縛られるくせ」、これ程可笑な癖は無いかも知れません。でもその様な癖に染ってしまった本人自身には、それを変だとか、可笑しいとか感ずる余裕はないのです。従って、私の様に手首だけでなく高手小手、首縄と縛り上げられる事が一つの習慣化して、その自分の意識の中に入って来ない様にまで或女性を慣らしてしまうことに成功したならば、何等この種の体験に不自由は致しません。この様に「縛り」を習慣化してしまうことは極めて難しくもあり、又考え様によっては容易でもあります。その導入方法の難易とは別に、この場合極めて重要な事はその相手の女性に何者被虐感が無いという一事です。私は「女を縛る為には、その緊縛行為はあくまでも余技として、習慣化してしまうことが一番良

策だ」と書きました。これを今、訂正しようとは思いません。然しこれはあくまでも「女を縛る為には」であって、「サディスティックな体験を得るためには」ではないのです。サディズムSadism(加虐淫乱症)とは、相手を虐待して快感を覚えることです。虐待しなければならぬのです。被虐者の苦悶の表情を見て喜ぶ人——これがサディストの真の意味に他なりません。そこには「虐」の存在を必要とするのです。私とK子との間には少くとも「虐待」なる観念は皆無でありました。K子自身、縛られ猿轡を噛まれた自分が被虐の立場にあるとの意識は毛頭無かつたでしょう。従ってこの一連の私の告白記はサディズムに関する体験談ではないのです。あくまでも「女を縛った」体験に過ぎません。緊縛行為を習慣化してしまうことは被虐の観念を無くしてしまうことからして真の意味のサディストには向かない方法だと申せます。私は厭がる女を縛り上げ、鞭打つのは余り好まないこともお話ししました。私は以上の論理よりして女性緊縛愛好者であっても、サディストではないのです。真のサディストなら女性が厭がる程、苦しめば苦しむ程より快感が湧くのです。現実には或る女性を縛り上げたところ、その人が「厭だから早く解いて呉れ」と泣き叫べば、私は即座に縄を解き、もう決して縛ったりしないと謝るかも知れません。然し私はサディストでないとは言いい切れないのです。私とて、空想の世界に於ては、見も知らぬゆきずりの女を縛り上げ、女友達に縄を掛け、そのものがき廻る姿態を想像して大きな興奮を感ずるのです。又映画のシーンの中で、縛られて、にやにや笑っている女優よりも嚴重に引締められ、苦し気に呻く姿をより好むことは事実です。要するに、私は空想的サディストであるのです。そして現実的サディストにはなりきれない人間なのです。「女を縛るのが好きだ」と私が口外したら、「あゝあいつはひどいサディストだ」と思われるかもしれません。しかし、会社、役所等で、女事務員を理由なく呼びつけ、ひつこく細々と叱り、泣



き出す女の子を冷然と眺めている上役の方が、この私より何倍ものサディストであると云ったと言過ぎでしょうか。奇巧にもマゾの女性との交際を希望するサディストの通信が多々見られますが、その人が真の意味の現実的サディストであったならば、相手の女はマゾである必要はない——否、マゾであってはならないのです。縛られること等、考えてみただけで怖いと言う女の人を無理矢理に押え付け、縄を掛けた方がその満足を得る度合が大きいのではないかと思います。もつとも、サチ、マゾの男女には「加虐、被虐」の観念もあることは確かですので、この種の経験のない私には、この種の心理過程の詳細は判りかねます。どうも又愚考を述べ過ぎました。私は二年間、中学教師をやって改めて大学へ入りました。教師から大学生になっても、K子とは相変らず逢っていました。間もなく別れました。別離の情景を、ここでしみじみと書いても本稿と余

り関係ありませんし、又何故別れねばならなかったかも説明する必要はありません。私は、あくまでも清く別れ、お互に温やかな人間としての愛情に変えることが出来た積りです。今でも時々便りがあります。相変らず小さい身体で、声量のある声で生徒に音楽を教えていることでしょうか。K子——と云うより今はM先生と云った方がいい様にも思えますが——はもう二十九になり、まだ未婚の事です。私を愛し、私の為に全てを投げ出して呉れた彼女に、私は懐しい想いと、その多幸を祈りたい気持ちで一ぱいになるのです。K子との体験で最後につけ加えておきたいのは、彼女は一度も「しばられる」とか「しぼる」とかの言葉を使わずに、いつも「くくられる」又は「くるくる」という言葉を使っていたことです。九州の方では「縛る」と云わず「括る」というのかどうか私は知りませんがどうもその言葉、その発音が後々までも私の耳に残っています(続)



(褌 美 通 信)

## 褌 と ブ リ ー フ (二)

池 田 ふ み 子

○ 皆さんが、もし褌を着用して見ようかとお  
思いなら、私は『もっこ褌』をおすすめしま  
す。『もっこ褌』や『越中褌』はきらいだ  
という人が良くありますが、越中褌とはまった  
くちがいます。大部分の男の方のように一巾  
の布を用いて長くつくって、ダラリとお尻を

つつむように着用したら、勿論、越中褌とた  
いしてちがいないでしょうが……。私  
たちの『もっこ褌』は決してそんなもの  
でなく、幅も長さも極めて短い小さなもので  
す。大体(これは私本位に考えた女子用です  
から、男子のお方は前のふくらみがあります  
から、もう少し大型になるかもしれません)

幅十六センチ、長さ四十五センチの布の片方  
を紐に縫いつけ、片方を紐通しにして、縫い  
つけた方を前にして股に十分に深く強く喰い  
こませ、後は逆三角形になるように布を拡げ  
て締め上げるのです。布地は、冬はデシンで  
もよろしいのですが、春から夏にかけては汗  
が出ますので、汗をよく吸い取る様に薄いさ



らしが良い様です。私は殆んどガーゼに近い様なさらしを用いています。この禪は、股やお尻への喰い込みも実に気持良く、又、どんなに広く股を拡いても逆立ちをしても、絶対に股下が露出する様なことはない様です。この点、ウーリーナイロンの三角禪や、前に述べたデルタカバーですと股下が紐になっっていますので、広く股を拡げたり坐わって立て膝をしたりした様な時、思わぬ恥をかくことがあります。これは、私がお友達と色々やって見た結果です。

○

前にいつか書いたように、私は、『もっこ禪』は家でも公認ですので、家族の前で脱衣する時は、たいてい『もっこ禪』をはいています。夜、やすむときは下半身は冬のどんな寒い時でも『もっこ禪』か、又は『三角禪』一つです。勿論、上半身は薄いメリヤスのシヤツを着ますが、『お前、それでも寒くないのかい、お尻が冷えるよ。』とよく母が申しますが、『うち、若いんだモン、寒くなんかないワ。これが一番気持良いのヨ。』と言ってこれを実行しています。夜、起きてお便所に行く時など、禪の喰いこんだ大きなお尻を丸出しにして、家族の寝ている所を通りますので「ふみちやんは男みたいだね。」とか「この寒いのに大きなお尻を出して。」とか、くちぐちに言い合います。おばあさんは「ほんとに今

の若い娘といったら……」とあきれかえっています。

夏は勿論、上のシヤツもぬぎ捨て、ブラジヤーもはずし、禪一つでねます。思いきって禪もはずして寝ることもたびたびあります。

○

ここで一つ、奇クの読者、東京のア・ファ・ン・オブ・ユア・マガジンさんにお問い合わせがあります。いつか貴方がお書きになっていた、フランスで売り出している新型式のパンティというのとはどんなものでしょうか。また、大阪のデザイナーがつくって売り出している、スキヤンティというのとは、どんなものでしょうか。相当、手をつくして調べましたが、全くわからないのです。少しでも禪に近いような、お尻や太股の余計に露出する下穿きが出現し、一般の女の方たちに用いられることだけが、私の願いでございます。

○

冬休みに入ってから、私一人で留守番をする日がありましたので、その日、禪を愛用しているお友達五人をうちに呼んで、一日中楽しく遊びました。その日お友達は、皆思い思いの三角禪を着用していましたが、私は極端に小さいデルタ・カバー一つで逆立ちをしたり転回したりして見せました。「あなたの禪ストリップパーのパタフライみたいネ。」と皆申しますが、全くその通りです。前だけをカバ

ーする小さな三角形（一辺の長さは十センチ程度）で、股下やお尻の部分は紐なのですから。

私はデルタ・パットの必要を感じません。読者のみなさまの中には、禪が股に喰いこみすぎるとおっしゃるお方がありますが、私の経験から申しますと、喰いこみすぎて不快だということとは全くないのです。長いこと禪を強く喰いこませる習慣を身につけたものだから、股間の皮膚がそういう風になってしまったのでしょうか。

○

私は今『はりパタ』の研究をしています。これは紐のないパタフライで、ストリップパーの人が用いますが、一名『カセセックス』とも申します。これは股部の圧迫感はありませんが、露出面積は勿論最大です。なにしろ股下からお尻にかけてはなんにも無いし、腰のまわりの紐もないのですから。このカセセックスの取付方について色々なことをやって見て、試作品も、二、三作って見ましたが、これはまた後ほど書きます。勿論こんなものを着用出来るのも、男性には出来ない女性の特権の一つです。近いうちにこのカセセックスの試作品を着用して、お友達に披露したいと思っています。





## マゾヒズム見たり

## 聞いたりためしたり

(3)

春 木 俊 野

東京都品川区の桐ヶ谷の片隅での出来事である。東京の人なら大てい知っていると思うが、桐ヶ谷は火葬場のある関係で、昼間でも風の具合によっては妙な臭気を感じる処で、場所柄だけに墓場やお寺の多い淋しい町だ。まして夜になったら真暗の一語に尽きる処でもある。

そろ／＼冬のオーバーが欲しくなってきた十一月半ばの事だ、Y生命保険会社の外交員石原しげ子さん(三十五才、仮名)は日も暮れて真暗になった八時半頃、集金しての帰りに此処を通ったのである。鞆には十万円近くの現金が入っているのだが、毎日の商売の事だから気にもかけず、家に残している二人の子供の事を考え乍ら歩いていた。夫に死に別れて六年、十才になる男の子と七才の女の子を女手でこゝまで育てゝ来た苦労は並大抵の

ものではなかったが、幸い子供は元気で素直に育っている。処がそのしげ子さんをあたかも待伏せしていたかの様に、一人の若い男が暗い木立の蔭から(そこは高い塀をはりめぐらしたお寺の門の脇で)とび出して来た。そして「おい、金を出せ」と云うや否や、しげ子さんの持っている革の手提鞆をひったくろうとした。

「あッ、泥棒！」しげ子さんは咄嗟に感じたが、恐怖の前に早くもしげ子さんの右足が男の下腹部を蹴りあげていた。かってしげ子さんは講堂館に通い乍ら、死んだ夫と結ばれたという、柔道二段の腕前なのだ。

「ぐうっ」男は奇妙な声を出して、その場にうずくまってしまった。すかさずしげ子さんの足は再び男の肩先を蹴とばすと、男は俯伏せにのびてうん／＼うなっている。しげ子さ

んは逃げようかと思ったが、二十そこ／＼の若い男が、と思うとはげしい憤りを感じて、男の背に馬のりになると両腕をぐっと後手にねじりあげた。

「お前は此の辺で何度もこんな事をやっていたのだろう、今縛って警察へつき出してやるから覚えてなさい。私みたいに一銭もお金なんか持っていない者を狙うなんて馬鹿な奴」と云うと、しげ子さんはぐい／＼後へ廻した男の手を締めあげた。

「ううん／＼、痛い／＼、ゆるして下さい。もう二度とはしません、助けて下さい。お許し下さいませ」

男は泣き声をあげて許しを乞い始めたが、蹴りあげられた処も相当苦痛らしく、低くうめいては泣き叫んでいる。

「もう二度と致しません、許して下さい」



しげ子さんは馬のりに跨ったまゝ、ふっと許してやろうという気になって——と云うのは、永年の外交商売で人を見る目がいくらか出来て、此の男は決して芯からの悪人じやないらしいと思ったのだ。それでも用心してわざと

「ほら、向うからパトロールのお巡りさんが来た、今度だけは許してあげるからおゆき」と手を放して立上ると、男は

「すみません」と云うや、立上れなくて四ツ這いになったまゝ、あわてふためいてバタ／＼と逃げ始めた。その恰好のおかしさに思わずしげ子さんは笑い出すと、どう感違ひしたのか「キヤア」と男は叫ぶとシヤンと立上り、ヒュウと駆け出して逃げて行ってしまった。

しげ子さんは女にしては大柄で、身体の線も美しいモダンな未亡人であり、よきマ、さんなのである。

× × ×

婦人雑誌の「主婦と生活」に中川与一が谷崎潤一郎の事を少年時代から書き始めたものに「耽美の夜」があるが、谷崎は誰でも知っている通り「痴人の愛」「少年」「饒太郎」「富美子の足」等々マゾヒストにとって忘れられない傑作を書いている作家だ。恐らく私生活その他に、文字通り耽美の生活があると思われるが、それを余す処なく書いてもらいたいものだ。

× × ×

或るマゾ愛好者は云った。

女性で一番健全、且つ美しいのはフアッシヨンモデルだ。身体の線を崩さないためにもあらゆる事に不摂生は禁物である。一日に一度は必ず水着一枚の姿になって美容体操は行わないといけない。此の姿体我々にはひれ伏したいそのものであるのに、殊に食事に於いては最少にして最も栄養の高いものを摂りヨーグルトを欠かさず食して整腸には殊の他注意する、と云う事は彼女らのハイセツ物は誰のよりも上品で美しい筈である。

此の女神の神酒に酔えたら自分は死んでもいゝ——と。

× × ×

渋谷の或る酒亭で、もうカンバンになったので、あとは残っている酔客を帰すばかり。その女給はみんな通いなので、手のあいた者から終電に間に合う様帰り支度を始めてゆく。特に御指名で、ハイヤーで送られる者もあるが、それ以外はみんな電車で帰る。その時間に満員になるのがトイレットである。

衝立でトイレの前は仕切ってはあがあるが、満員になると、あぶれた女給は客の横の方にはみ出て、

「早く出てくれないかなア、もるわよ」と足ぶみを始める事になる。

割と売れッ子の幸子と云う二十四、五の美人女給、身体も豊満でこゝのクイーン格、此の日は神妙に帰宅のつもりなのか、早々と帰り支度を始め、トイレにあぶれて足をばたつかせる破目になった。幸子は同じく待っている同僚の背後から両手を肩にかけて、酔っている機嫌の故もあつたのか、

「早く出てくれないかなア、もっちやうわよオ」

すると、客席から一人の男が、  
「幸ちゃん、そこでやればいゝじやないか」  
「あら駄目よ、此処の掃除は、私達がするのよ。水びたしになってじやない、おしっこびたしになったら大変よ」  
すると声あり、

「よし、俺がのむよ」

処が幸子はすかさず、

「あら本当、うれしいわ、あなた早く此処へ来てあーんと口をあけて」

みんなはドツと笑ったが、私はノーマルとアブの境界は決して離れているものでないと思った。

× × ×

大分古い映画だが、アチャコとエンタツの弥次喜多道中で、旅先でフグにあてられ、土に首だけ出して埋められるシーンがあつた。そこへ二人の女房達が、此の二人を浮気でもしているのではないかと、探し訪ねてくるの



だが、首だけ出している二人の頭を坐り台と間違えて頭の上にお尻をすえて坐るシーンがあった。

一人はたしか清川虹子だったと記憶するがロングシーンなので、頭の上に腰をかける時は本当の人間のアタマではなかったかも知れないが面白かった。

× × ×

晴れた日の午さがり、私が乗った省線電車は立っている人は四、五人と云う空きかただった。私が坐っている背に冬の陽がさんさんと射しこんでボカ／＼と暖かく眠くなる様な車内だった。

ふと私は前に凄く美しい女性が坐っているのに気づいた。その人の脚の線の美しい事は一寸眼をみはるばかり、暖かいし、考える事はないしで、むら／＼と持前のマゾ心が頭にうかんで来た時、背後からの太陽の影が前の座席の足許に投げかかり、我々の頭の影が前の人の足の処に映し出されているのだ。そして電車がカーブにさしかかったのか、皆の影が右から左へ移動を始めた。そしてみている裡に私の頭の影がスーと移動して前の彼女の足にかゝり、その一寸開いた足の間にはさまって電車の走る故か、そこでピタリと停ってしまった。

我独り知る、シルエットの淡いマゾ。彼女の膝下に組みしかれている思いよろしく、私

はしばし陶然と（陽の故ばかりでなく）なっていた。

× × ×

東京新聞社発行の『週刊東京』十一月二十四日号の連載マンガ「東京チャキ／＼娘」（杉浦幸雄画）は傑作であった。

チャキ娘の母が指圧師に治療をうけているのだが、布団の上に腹這っている腰の上から馬乗りになされて治療をうけている。

そこへ父が帰って来て、自分もやってもらおうと云うわけだが、ワイシャツに口紅がついているのをみつけて治療をうけているチャキの父、即ち夫の首のあたりに馬のりに跨って頭をおしつぶしている図がラスト。

そして、此の号の表紙は新東宝第四期ニューフェイスの三ツ矢歌子が鋼鉄製の椅子に逆に馬乗りになった姿を正面からみせているカラー写真。こんなものにも私の心は疼く。

× × ×

十二月二十一日夜八時からの日本放送、ナ

## （雑誌通信）

### 帝国憲兵要務綱領

稲田安夫 提供

△「探偵実話」昭和32年1月号（久生十蘭作「みんなを愛したら」）より▽

シヨナル提供のお笑い演芸館の漫才「ギター流して」で暁伸とミス・ハワイの会話の中で暁「こら、男をつかまえて偉そうに云うな」ミス・ハワイ「なに云うてるかい、男は女の馬じやないか、文句云わんと黙って敷かれてたらえゝのや、敷かれる／＼」暁「はいわかりました。それでは……」とギターと歌と云うのが、何気なく聞いているらあった。

男は女の馬、たとえ漫才にせよ女性の口からはつきりそれを聞くと云うのは一寸楽しい事である。

× × ×

森赫子の「女優」等、ヘレン・ヒギンス、河上敬子と暴露的なものを書いて、いわゆる「書きますわよ」旋風をまき起しているが、喫茶店で二十そこ／＼の女性三人の話を聞いていると、それによく似ている言葉を耳にした。話は何だか男性の品定めで、自分達の結婚の事についてに発展してきた。そして女房



関白が亭主関白かに到って一人の女性が云った。

「モチ、私はしきますわよ」

× × ×

郷里から従妹が上京して来た。おてんばな娘で、郷里ではいわゆるモ・ガで通っていたらしい。東京見物がてら有楽町のN劇場に「秋の踊り」を観に行った。帰る時、トイレに行くと云って手洗所へ行ったので待っている。暫くして出て来た。その時はそのまゝで済んだが、家に帰ってからとぶ様にしてトイレットへ駆け込んでからの話が面白い。

N劇でトイレへ入ったものゝ洋式のものゝため、どうも勝手が悪く、うまく乗っかゝったものゝなかゝ用が足せず、人も多勢待っている、何も出来ず出てしまったと云うのだ。

「何だか人の上に跨ってする様でとても出来ないわよ」

と云う従妹の無邪気な顔を私は好ましく眺めていた。

南田洋子は性典もの、「十代の性典」で売出したが、その頃のプロマイドに女高生の服装で、同じく男高生の仰向けになった上に馬のりになった？と思うが腕を組んで得意そうに頬笑んでいるものがあった。映画雑誌にもよくその写真が出て居り、私もいさゝか期待して映画を観たが、残念乍らそのシーンはなかった。

マゾ気が多い、優秀な映画監督なんてものが一人位、現われないものかと思う。(未完)

先日、貸本屋で借りた雑誌の中で面白い記事がありましたのでお知らせします。それは、「探偵実話」と云う月刊誌の昭和三十三年一月号に掲載された久生蘭の「みんな愛したら」と云う題の小説で、第二次大戦中の日本憲兵に対する、国際赤十字の仕事で日本へ来た一日日本人青年の反抗が主体として構成された小説です。さてその文中に「帝国憲兵要務綱領」と云うのがあります。もちろん小説の中にある事だから真疑のほどはわかりませんが次に参考のためその全文を掲げます。

#### 「第〇項、訊問」

一、鞭打ちによる(訊問予備)「なぜお前は逮捕サレタか」と質問する。「知らぬ」と答えたものに鞭打ち(五十回より二百回)を与える。鞭の種類①懲治棒(又は木刀)②籐(又は弓の折)③金属の錘のついた革鞭④鉄鈎(六個より八個)のついた革鞭、(⑤⑥)を使用する場合は手向いせぬよう、柱に縛りつけるか、両手錠を施す。

二、「指間に棒を挟む」。各指間直径八ミリ位の棒を挟み、両手に固く繃帯を施すか縄にて巻き締め、四日より六日の間放置する。

三、「ヨーチンの塗布」頭を剃り、十個以

上の創傷をつくってヨーチンを塗る、又は男の場合は亀頭に、女の場合は乳頭に施す。

四、「平板の抑圧による」床に仰臥せしめ幅三尺、長さ五尺の平板を、その胸に平らに置き、三人又は五人が板の上に乗って足踏みする。

五、「濡衣による」紀州ネルの襦袢を着せ二時間毎に水を浴せ、冷暗なる場所の壁に背を接し、二十四時間より百時間迄直立せしむ。

六、「灌水による」日本手拭を顔にかぶせバケツにて水を注ぐ。水が口より鼻腔に及び完全に窒息するところにて止む。この方法は五回より六回連続反覆する。

七、「電流による」(百十ボルト)男の場合は電極を腕又は鼻隔に、女の場合は乳頭に接続する。

八、「鋼線による」ギタのE線を示し、これが心臓の心室に達すれば、心臓麻痺にて致死するべきことを予め説明して置き四肢を緊縛して床に平臥せしめ、鋼線を胸廓の心部に徐々に刺し通し、逐次返答せしむ。以下二十六号迄拷問の方法、器具、用法を精細に規定してある。

と書かれてあります。くりかえして申し上げますが、以上の事の真疑のほどは存じません。



# 探検服姿の女腹切

藤 山 秀 緒

## いけにえ

中央アジア探検のため、はるばる日本からやって来たのは、団長前田芳樹をはじめ十一人の学術調査団でした。「文明」から隔絶されたこの奥地、これからの困難を思えば、十人は互に責任の重さを痛感するのでした。案内人は、これから先へは、原住民の力をかりなければ進めないこと、その際に、どんな難しい条件が出るかもしれぬことを語り、諦めて帰るように進言します。

前田団長は、その条件さえ承知なら、原住民の協力が得られるのか、と訊ね、おめおめ此のままは帰れぬ、その条件をきいた上で、善処しよう、と案内人に云います。案内人は口ごもりながら、実は、是から先へ行くには女の腹を裂き、臓腑を原住民の神へいけにえに捧げ、無事をいのらなければ、進むことは出来ぬ、女といえ、一行の中に、助手として同行している寿美子さん一人。とても寿美子さんを殺すわけにはいかないから、これから先は行かれないのだ、と答えます。

これをきいて一同は、ハッと当惑します。国を出る時の華々しい見送り、全国民をあげての声援を思い出せば、とても手をこまねいては帰れない。さればとて寿美子を殺すことは到底出来ません。重苦しい沈黙が一行の上を覆いました。

ややしばらくして、紅一点の寿美子が顔をあげます。カーキ色の勇ましい探検服、乗馬ズボン、編上げの長靴という男装の寿美子は決心したように、顔を紅潮させて、「私、死にます……。私一人の命で、学問のために貢献できるものなら、喜んで死にます……。私の体を、どうぞお役に立てて下さい」ニッコリと微笑みます。団長は、「何を云うのだ、寿美子君。君を殺すわけには行かん」

「いいえ、一生に一度は死ぬもの、少しでもお役に立つ時に死にたいのです。お願いです。私をいけにえにして奥地へおすすみになって……」

夜を徹して、議論がつづけられました。そして、寿美子の気高い決意は遂に一同を動かして奥地へ進むことが決議されたのでした。

## 死をみつめて

原住民の代表者が、迎えに来ました。これから三日ばかり進んだ処に、原住民の本拠があり、いけにえはそこで捧げられる、と告げます。一同は徒歩で出発しました。

寿美子は、死ぬために三日の道のりを歩かねばならないのです。きりりとした探検服姿に身を固めて、悪るびれる様子もなく、一同にいたわられながら進みます。

三日目の夕方、一行は目的地へたどりつき



ました。原住民の酋長は一行を出迎え、いけにえになる寿美子には深い同情を示しながらも、神の掟には背むかれぬ、と一行に説明します。

寿美子は、ひとり酋長に案内されて、神殿へ入りました。祭は明日の夕方行われます。

彼女は、一段高い祭壇に立ち、更に十三段のきざしを上って、いけにえ台の前にすすみます。そこには、あまたの娘の生血を吸って黒びかりに光った木の台が据えられて居ります。ああ、明日の夜は、ここにつめたい屍をさらすのだ。この黒ずんだ木の台が、私の血汐で朱に染まるのだ。明後日には、私は、もう居ない……。

夕美子はジッと物思いに沈む。……そして静かに祭壇を下りて行きました。

彼女は酋長に、日本の作法に従って切腹した上で、いけにえになりたい、と申出ます。酋長は、しからば、一段高い祭壇の上で、腹を切った上、自力で十三段のステップを上りいけにえ台に横たわる迄、一切手出しをしない、と約束します。寿美子は日本人らしく、女乍らも腹を切って、誇らかに死んで行きたいのです。

彼女は、其の夜から食を絶ちました。臓腑と共に汚物の流れ出るのを避けようとするたしなみでした。夜明けには、浣腸して、腸を洗い、歯もみがき、心ばかりの化粧をつくし

て静かに最期の時を待ちました。時計が三時をさす頃から、祭壇の前は、原住民の聲が騒がしく、此の美しいいけにえの噂でもちきりです。寿美子は時めく胸を抑えてジッと一行の別れの言葉に耳をかたむけていました。

### 散る花

原住民の僧侶、酋長、執行吏など、祭壇の前にずらりと並び、時刻が移ると、僧侶に導かれて、先ず前田団長以下十名が神前にぬかづきます。僧侶は、これから、いけにえを供え、奥地へ進むことを許されるようにおいのりする、と神に告げます。原住民たちは、祭壇の庭にあつまって、成行きを見守っています。

寿美子が現れます！ なんとという美しさ。左手には、守り刀の懐剣が一ふり、右手は軽くにぎり、探検服姿で一行の前に立ちます。「さようなら。立派に死んでお目にかけます。御成功をおいのり致します……」

一人々と固い握手。そして、ためらう様子もなく一段高い祭壇の拝殿にのぼります。一同の方へ向き直り、ヒザをつきます。

探検服の前がくつろげられ、ふくよかな服がのぞきます。寿美子は、懐剣を白布で巻き一行に目礼しました。

寿美子は大きく息を吸いこんで、腰をうかせたと見るや、左の脇腹へ、グッ！ と突立

てました。

「うっ——ッ……」

彼女は苦しそうに前にのめりながら、必死に呻きを泳えています。

一行十名は、顔をあげえず、只管死んで行く寿美子の冥福をいのるばかりです。

原住民たちの唱える呪文の声。

「……ツム……ツ」

寿美子の歯をくいしばる息遣い。

「ウウッ……」

刃を右へ引廻そうと、彼女は体をひねってそのまま、じりじりと前かがみになります。

「……つツム……。う——ッ……」

歯をくいしばっています。寿美子は喘ぎながらも、次第に豊かな下腹を両の手で裂いて行くのです。朱に染った懐剣が、ふるえる手の中で、ぎらりと無気味に光り、そして傷口はぐわっと厚い脂肪層をのぞかせています。臍の真只中を、刃が断ち切ります。

「……うっ……」

彼女は苦しげに一寸呻き、その儘、上体をおこして、ぐッ、ぐッと懐剣を挟みます。

「ク、クムムッ……むうっ——ッ……」

血汐は乗馬ズボンを染め、彼女の腹は、四寸ほど切ったのでしうか、でも、まだ切り終ってはいないので。彼女は、次第にあせりを見せ、体をかじめながら、必死に刃を右へと引廻しています。



「——う、うゝつッ……」

最後の二寸ばかりを、いさましくも一気にかき切った彼女。苦痛に蒼白んだ顔の異様な美しさ。

寿美子は、苦痛のうちにも、満足げな吐息をつき、ぐっ！と刃を抜き取ります。

「ア、ア……」

唇を噛んで声をしのび、深傷の激痛をこらえる健気な寿美子。

## 断腸

やがて、彼女は、顔を引きつらせながら両の手に傷口を抑え、よろよろと立ち上ります。立ちかけて苦痛にたえかね、何度か膝をついて喘ぎ、そして気丈にも、前めりの姿ながら、一人で立派に立ち上ったのです。

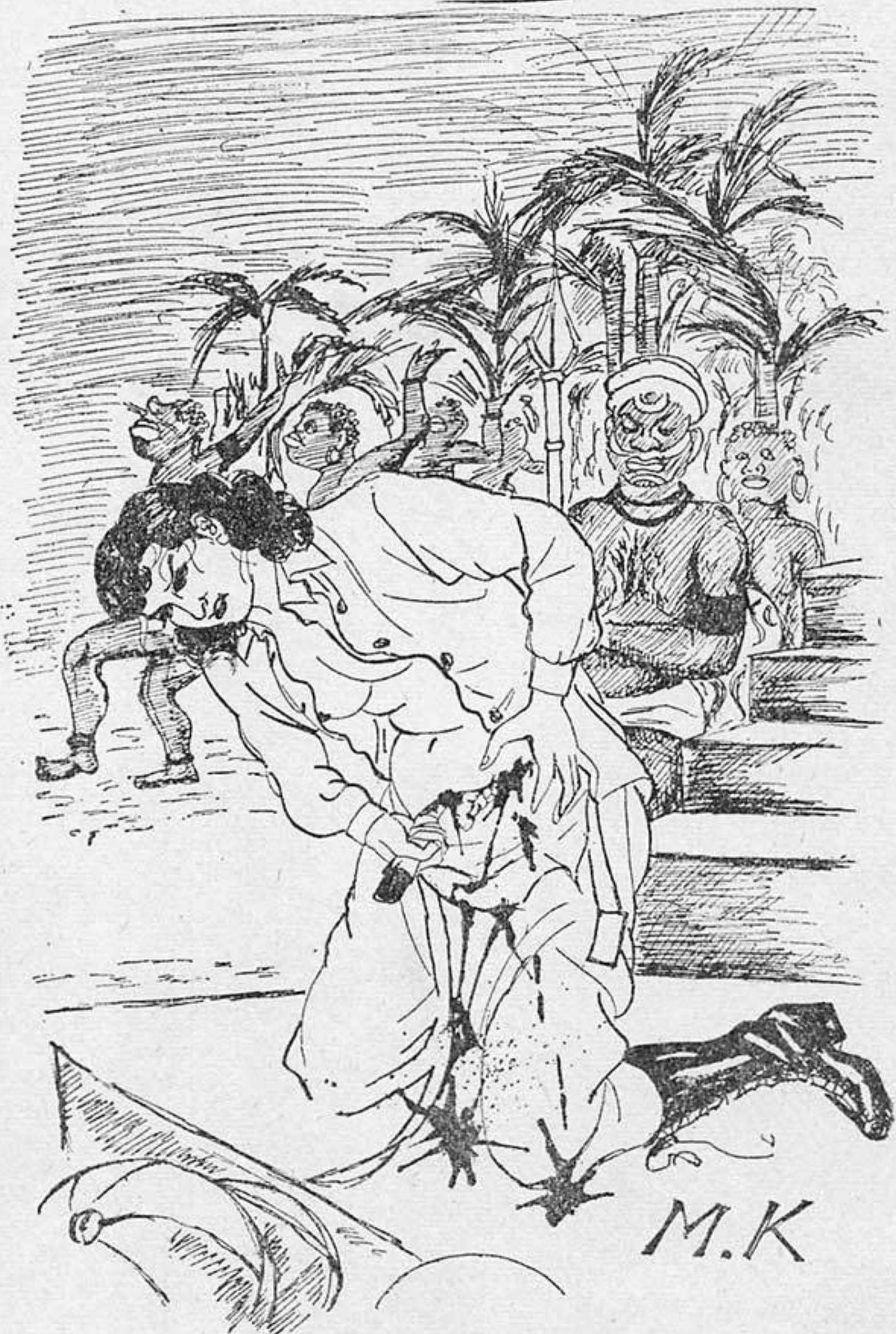
そして彼女は、膝がしらをワナワナふるわせながら、十三段のステップを、一段一段ふみしめるように昇りはじめたのです。

四段、五段、六段……

苦しかりう。でも、彼女は懸命に頑張っています。段をふみはずして、何度かのめりかかりながら、九段まで辛うじてのぼって来ました。

「う、うゝ、うゝむ……ウ……ツゝ！」

低いうめきがきこえます。なんとという壮烈さ。ああ、彼女は十段目へ膝をついてしま



ました！左の足が、むなしく泳いでいます。

「ウーム……」

流石の彼女も、脂汗にまみれて、男のようにうめきました。

「ウウム、ウゝム、ウゝッ……」

彼女は、這うようにして十三段のきざしを昇って行きます。男装の彼女が、這いな

らステップをのぼって行く姿は、玉碎する日本軍人の最後の突撃を思わせるのです。

「あゝむ、ううっ——」

のぼりつめて、息をはづませる彼女の背中が、大きく波を打っています。

どっと前にのめって若悶する寿美子。

僧侶が左右から彼女を抱きおこします。



「ムウッ……。うゝつッ！」

彼女は苦しうに顔をゆがめながらも、起き直り、気丈にも、自分で立とうとします。左右から助けられつつ、やっとの思いで立上った寿美子は、一行を見おろして、かすかにほほえみました。

彼女は、そのまま、いけにえ台まで、懸命に苦痛を泳えながら立派に歩いて行きます。そして静かに台上に体を横たえるのでした。

附添って居た二人の僧は、やがて、寿美子を正しく仰臥させ、一人は供物皿を捧げ、一人は短剣を逆手に持って身構えます。

あゝ、美しい寿美子の断末魔が、刻々とせまってきた。覚悟した彼女のことですから、狙上の鯉のように、目をとじて、ただ最期の時を待っています。

僧たちの呪文の音が、一きわ烈しくなってきました。台上の二人の僧は、目くばせをする、短剣を持った方が、左の手を、ぐッ！と寿美子の腹腔へ突込みました。流石の彼女も、両眼を飛び出すばかりに見ひらき、

「ウ、ウーッ！」

とばかりに泳えかねて呻き苦しみます。

乗馬ズボンの両肢は、空を蹴って泳ぎ、血汐がはね飛んで、見るも無残な地獄絵です。僧は、彼女の苦悶する姿を冷然と見下しながら、大きな手を彼女の腹の中へ手首まで突込んで、臓腑をつかんでいます。

「む、むゝつ！ア、アーッ、ウウッ……」

切なげにくねる彼女の姿体。血みどろの腸が情容赦もなくズルズルと引き出されます。

僧は、大きな手に、一杯になるほどの彼女の臓腑を、しっかりとつかんで、短剣を取り直し、供物皿にのせるために、彼女の体から断ち切ろうとします。うねうねとした腸管の両端が、傷口から腹中へとつながって、露出した部分は、すでに供物皿に盛られて居ます。

「ウーッ……うう、ウウッ！」

腸管は、傷口のところでプツリと切り取られました。身をふるわせる寿美子。

臓腑が切り取られると同時に、いけにえの祭は最高潮に達します。大ぜいの僧侶、原住民たちは、口々に呪文をとなえて神にいのります。彼女のいまを限りの呻き声も、呪文に消されて聞えません。

祭は延々としてつづいています。彼女は、いけにえ台に横たわったまま、死にきれずに苦しんでいます。

「げえっ！ げえっ！」

彼女は血を吐いて、口もとを朱に染めながら悶えつづけます。

たまりかねた前田団長以下の人々は堰を切ったように、いけにえ台にかけ寄りしました。

「寿美子さん！有難う。立派だった……」

「寿美子さん……しっかりと呉れ、気をたしかに！」

寿美子は血まみれになりながらも、意識はたしかでした。一人々々の顔を、きッと見渡して満足げにうなづきます。そして

「は、はやく……死なせて……」

と呻くように云って、懐剣を渡してくれ、と手をさしのべます。団員の一人が、血まみれの懐剣を拾って来て、涙ながらに彼女の右手に握らせてやります。うなづく彼女。

彼女は、体をおこし、心臓めがけて懐剣を突込みます。ブスリ！

「アア、ウムー、ウムーッ……」

びりびりと五体をふるわせ、寿美子は、遂に自らの命を断ちました。

がばと俯伏せに倒れて行く彼女。男泣きに泣き伏す団員たち。狂ったように踊りつづける原住民。

男装の寿美子の乗馬ズボンにつつまれたふくよかな腰の線、ゆたかな黒い髪、サジスチンを思わせる黒光りのした編上げの長靴。悩ましくも美しいMスタイル。彼女は死んだ。倒錯美の極致の中で、中山寿美子は二十四年の生涯を終ったのです。

翌日、大ぜいの原住民に助けられながら、一行十名は、勇躍奥地へとむかいます。彼女の血汐によって奥地への門は、いまひらかれたのでした。





## 【ポケット告白】

## ズ ロ ー ス E T C

並 原 新 一

私は三十三才のいまだに独身の男です。私の女装マニアは、それを人の前に、しかも若い女性の前にさらして心理的なはずかしめや軽蔑をうけたいという露出欲とむすびついているようです。女装といっても、上から下まで一切女装するということは、現在の私には不可能なことですし、ほとんど下着の、それもズロースやストッキングなどに限られています。私はタンスの中に、いろいろな女性の下穿きをあつめています。白いキヤラコや木綿のズロース、メリヤス、ネルのズロース、そして黒いズロース、ぶかぶかの女学生用ブルーマース、その他、はずかしいのを無理して町の素人の仕立屋に注文して作らせた、華麗な色模様のついたズロース、最近流行の七

色パンティ、コルセット、白、黒、ピンクのメンスバンド、そしてこれも又、苦心して手に入れたビニール製のピンクのズロース、ゴム張りの大人用おむつカバー、ETC。

大抵はこれ等の下穿きを、夜、床の中で穿いて楽しんだり、自分の穿いているところをセルフタイマーで写真に写したりして満足しています。時々、自分の姿を人目にさらしたいという衝動にかられることがあります。その時は、私はよく女あんなのところにいきます。今夜も女学生用の大きなブルーマースを穿いて、黒のストッキングに赤い靴下止めをつけて、あんなまに行きました。そこは女ばかりのあんなクラブで、一人一人、カーテンでしきられたベッドがあります。私は何喰わぬ

顔をしてズボンや上衣をぬいで横になります。今は寒いので薄いズボン下を履いてゆきますが、うつぶせになって揉んで貰っている時、ズボン下を通して太腿にびっちり喰いこんでいるブルーマースの、裾口のゴムのギザギザが手にとるようにわかります。(気の弱い私には、まだ直接にズロースやブルーマースを見せる勇氣はありません) 足や腰をもむ女の指先のゆきに注意をこらしていますと、わずかに反応が伝ってきます。男の太腿に触れるギザ／＼の堅い部分に、女の指先がとまどいます。女はその時、何と知っているのだろうかと、考えるだけでとき／＼してきます。いつだったか夏のある日、目が余り見えな



いらしい人からもんでもらいました。その時暑かったし、又、大胆になった私は、ステテコもとって白いズロース一枚になってベッドの上に横になっていました。女は黙々ともんでいました。(商売がらか、女たちはまだ一度も口に出して話しかけたり笑ったりはしない。物足りない気もするが、一方、かえってその方が色々相手の心中をおしはかって興味がある。)ほとんど終りかけた頃、隣りの終った女が、急にカーテンから頭を出した時には、驚いて息がつまりそうでした。幸に私のズロースには気がつかなかったようでしたがしかし過敏な女たちのことですから、きつと後で集って私のことを散々笑っているのかもしれない。一度位は彼女からとりまかれて言葉に出してからかわれてみたいという夢も持っています。その時、彼女らによってはぎとられた後の、黒いストッキングと白いズロースだけの私の不恰好なポーズ！その上に浴せかけられる激しい罵倒と軽蔑の声！

昼までもパンツのかわりにズロースを穿いているので、風呂に行くときは困ります。腿のゴム跡が消えるまで待たねばならないのです。一度は、それを忘れてズロースのままです。風呂に行き、人かげにかくれてこっそりと脱いだものの、赤いゴム跡を人がじろく／＼と見ているようで弱ったことがありました。

私の夢のいくつかを紹介しましょう。

(一)私が風邪をひいて或る町医者のところへ行く。私はいつものように下に黒いズロースを穿いていて、おまけにその日はメンスバンドをはめていた。医者は診療の後で急に浣腸をするといひます。私は赫くなりながら、しかし仕方なく台に上ると、若い美しい看護婦さんが来てズボンを取りはじめ。ああ、その下のズロースとバンド！看護婦さんはそれでも何喰ぬ顔をつくらって下に下げる。バリバリとゴムの音、ゴボゴボと腸の中に入ってゆく石鹼液。しかも私は、許されて便所に走ってゆく途中で、堪らなくなつてズロースの中に粗相してしまう。ついて来た看護婦さんがからかいながら世話してくれるならば……代りに自分のズロースを借してくれるならば……それが絹の柔い白いレースのついた可愛いらしいズロースならば……私はなんと幸福だろう。

(二)夜更けに公園で不良少女にとりかこまれる。金を持たない私は、着ているものをはぎとられる。ナイフにおどされて震えながら上衣やズボンを脱ぐ。あつ、その下にあらわれたピンクのズロースに、彼女等が気がついた時の驚きと軽蔑と！私は彼女等から木の幹にがんじがらめに縛られて弄ばれる。声が出ないように誰かのズロースを口の中につめこまれて。一晚中そのまゝの姿勢で縛られたまま彼女等は去っていった、夜が明ける時ぼつ

ぼつ人通りがやってくる。私の穿いたピンクのズロースは、こらえきれなくなったオシッコでぐしょ／＼に濡れていて……登校してくる女学生の足音が近づいてくる。

(三)私が奇巧の同好の志に頼んで送って貰った小包が、途中で破けて中の黄白色のフランネルのズロースがはみ出している。その上、それが下宿の娘の手に渡って。二階にその包を持って上ってきた娘の目……。

(いやらしい人！ズロースを送って貰うなんて！しかも内側にはビニールが二重になつていて、まるでおむつみたいなものを。この人が穿くのかしら？)

若い娘の空想はひろがってゆく。

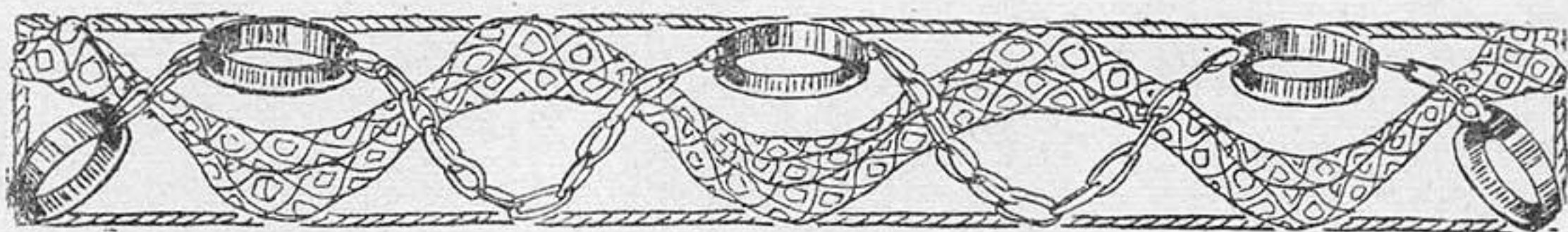
(そういえば、この頃私の下穿が時々なくなると思っていたら、この人がもっていったのだわ！いやらしい人、白状させるから！)

その後、私は娘に折檻されて娘の奴隷にされる。彼女のズロースを洗濯させられたり、排泄物のあとしまつをさせられたり……頭から彼女のズロースをかぶせられて浣腸をさせられて、トイレに行くことが許されなかったり……我慢が出来なくなった私は、泣きながら彼女にしがみつき、彼女のスカートの上に洩らしてしまつたり……あとで罰として……

E T C.

(おわり)





〔女優緊縛監督列伝〕

「女優を縛る監督達」

升岡金吉

映画の緊縛シーンを毎号御教示下さる諸兄姉に感謝の意を表し、緊縛映画ファン諸氏の今後の御参考の為に、私の貧しい記憶をたどって緊縛映画の監督を記して見ます。

澁谷実

「情炎」の中で木暮実千代を後手に縛って晒者にした時、中々緊縛感が出ていた「青銅のキリスト」ラストシーンの集団火刑シーンは真に迫って、山田五十鈴、香川京子の磔姿には大いに興奮させられた。

谷口千吉

「ジャコ万と鉄」で浜田百合子を文字通りの雁字がらめに縄に太綱で縛りつけた時は驚いたものだ。近作「乱菊物語」で可憐の乙女八千草薫を、太綱でギリ／＼縛りあげて、そのまま横倒しにしたものである。

斎藤寅次郎

「吃七捕物帖」で真知子女優、岸恵子を本縄式に後手に縛って、中々リアルな縛り姿を前から後から映し出してくれた。「大江戸大平記」は星美智子を完全に荒縄で縛って、これも後から縄目をはっきり見せた。「花の二十八人集」で入江たか子と矢島ひろ子を背中合せてグルグル巻にしまった。縛りのうまい監督さんだ。

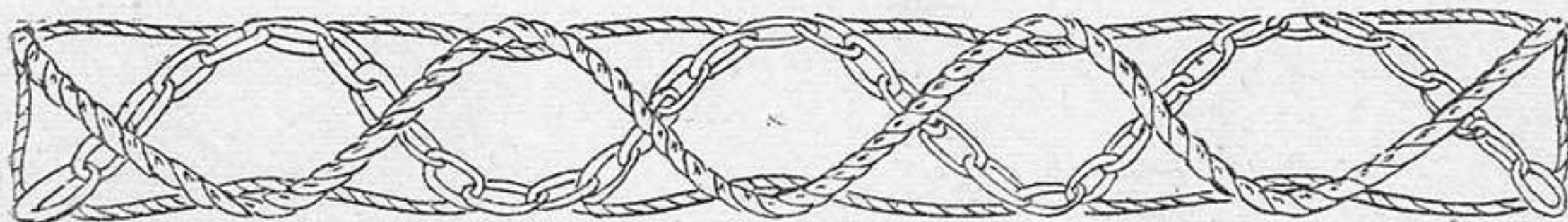
渡辺邦男

「地獄谷の豪族」で可憐な女優を、本縄で裸馬に乗せて磔柱にキッチリ縛りつけた。「鉄仮面」で月丘千秋を後手に縛り、罪木上に火あぶりの哀れなる姿をくっきりと浮彫りにしてくれた。

佐々木康

「暗黒街の鬼」千恵蔵をして、若かりし千石規子をいきなり手袋を口の中へ押し込み、マフラーで口を見事に猿ぐつわにして、両腕をぐいと後に捻じ上げて縛り上げる。実に堂に





入った緊縛シーンであった。後手、猿ぐつわのリアルにして大胆なる見本である。“片目の魔王”で花柳小菊と千原しのぶを椅子に縛りつけた。“赤穂浪士”でニュースターであった嵯峨美智子を、後手に縛りロウソク責めにするシーンは、ぞく／＼する程の迫力だった。スローに後手姿から、横から前からと見事に映し出された時の彼女は、どんな気持だったろう。“闇太郎変化”でミス平凡、田代百合子が後手の猿ぐつわで非人共に拐わかされる。いきなり後手に縛り上げて手拭の猿ぐつわ、テンポは早い美しい演出だ。そして再び喜多川千鶴を新人女優をミス平凡を、後手に猿ぐつわで珠数つなぎにする。“謎の決斗状”で美空ひばりと三笠博子を後手の猿ぐつわでひし／＼と縛った。緊縛監督のナンバー・ワンである。

### 佐々木啓祐

“七つの宝石”では日高澄子を後手にして鞭打ち、ハンカチの猿ぐつわ。月丘夢路を椅子へぐる／＼巻きにした。

### 大曾根辰夫

“フランチエスカの鐘”で桂木洋子を縛ったり檻禁したり“角兵衛獅子”でひばりちゃんを、これはひどいと思う程にキリ／＼と後手に縛り上げた。背後からくつきりと手首の縛りを見せる。“鞍馬の火祭”でもひばりちゃんを後手に縛り岸恵子も縛り、ひばりちゃんの後手のまゝで水中へ顔を押えつけられて、つけられたり出されたり可愛想な責場面を見せる。“花の生涯”では宮城千賀子を縛って囚人駕の中へ、淡島千景も囚人駕へ、立木へさらし者として太綱で縛る。“素浪人日和”で浅茅しのぶを縛り上げて、もがく後手首の苦悶を映し出す。クローズアップの後手が美しく残る。

### 森 一生

“私は狙われている”でミスカニーバルで初出演の荒川さつきを、両手足をぐる／＼巻きにしてアドバルンに縛りつける。“ごろつき船”で若杉須美子を後手に縛り“銭形平次”で長谷川裕見子と三条美樹を後手の猿ぐつわにして、もがく姿を中々に長く映す。“人肌蜘蛛”でミス日本、山本富士子を後手の宙吊りにする。彼女、中々の肉体美だから縛るのも大変だったろうに、太綱が喰入った胸元が痛そうであった。

### 丸根賛太郎

“大江戸七変化”で大女、相馬千恵子をぐるぐる巻きにした。“月笛日笛”で宇治みさを縛り“弓張月”で長谷川裕見子を太綱で縛り上げて、中々の緊縛感を見せる。

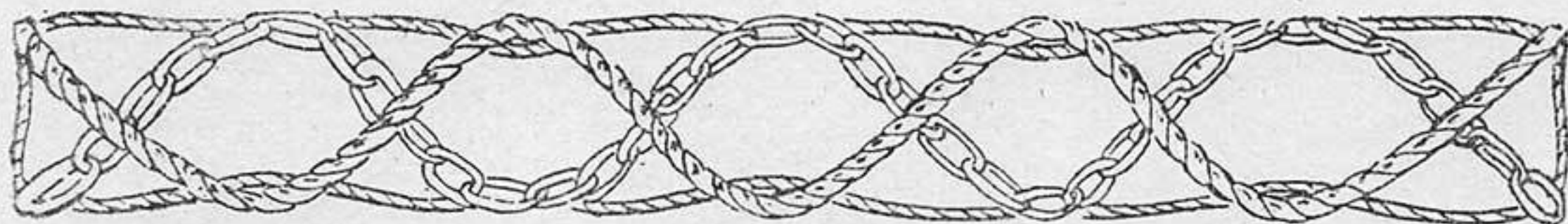
### 伊藤 大輔

往年の時代物賣場の第一人者だが、余り知らない。“次郎吉格子”で高峰三枝子を縛った時は、さすがと思った。ひし／＼とよく両手足が美しく縛られ猿ぐつわもきれい。

### マキノ正博

“春風無刀流”で花柳小菊を大勢の男と共に縛らせる。髪を乱して乱斗の後、遂に高手小手に縛り上げられた姿がよく出ていた。“よいどれ八万騎”での藤間紫が、目明しに引立てられてゆく後手の縛りは完全なもの。宮城千賀子が縛られ打たれて転げ廻るシーンもいいし、最後の白装束での股さばきのシーンでは、思わず固くなった両足が綱で縛られて牛につながれ、美女危しの一瞬を画き出す。“素つ飛び男”の縛りも、ひし／＼とよく巻かれていた。“めくら狼”の変形アクロバット縛りは、晴雨好みのグロ味もまじえて、綱、鎖と中々の緊縛であった。





## 松田定次

戦後のヒット作になった探偵シリーズ「廿一の指紋」「十三の足跡」等々で、喜多川千鶴を縛られ女優で売出した。綱で全身ぐるぐる巻きにしてベッドへ縛りつけた彼女の上へ今にも落下せんとする吊した短剣と、スリルある責場の数々だった。「難船岬の決斗」で、朝雲照代を椅子へ後手の猿ぐつわ、ぐるぐる巻にギッチリと縛りつけた時は、サジ好みの人ぞと思った。「影法師一番手柄」のグロシーン、吊るされた死美人。「風雲将棋谷」で、長谷川裕見子をサソリ責めにするシーンはどうです。身動きもならぬ彼女の胸から首へ、恐怖におののく彼女の顔へ迫るサソリ、思わず震えたものだ。「髑髏銭」でも、裕見子の中綱で縛り上げて責め叩く。縛られれば強烈なサジスチックシーンを画き出してくれるこの人の作品には、大いに楽しみを抱く。

## 小石栄一

「奴隷の町」で千石規子を荒縄の後手、猿ぐつわ。貴族スター、久我美子を帯で縛って、髪を掴んで仰向けた顔のクロースアップは忘れられない。「群狼の街」では、三条美樹を後手縛りにしたり、女のリンチ姿を見せた。「拳銃を捨てろ」では縛りはなかったが、田代百合子をシユミーズ姿にして首をしめ、悶絶するまでリアルなサジシーンをさせる。

## 衣笠貞之助

男だが、「蛇姫様」の長谷川一夫の緊縛シーンは印象的だった。「折鶴笠」で山田五十鈴を縛り、猿ぐつわをはめる所を見せてくれた。

## 中川信夫

「宇津宮釣天井」で藤木ノ実を後手に縛って猿ぐつわをは

める。これはきれいな縛りだった。「右門捕物帖、緋鹿の子異変」で花井蘭子を縛って引摺り廻した。「伊豆の佐太郎」で嵯峨美智子を縛り、「恋姿狐御殿」で美空ひばりを柱にぐるぐる巻きにした。

## 並木鏡太郎

「風雲七化け峠」で嵐寛を逆吊りにし、新人女優をぐるぐる巻きの猿ぐつわ、「トンチンカン八犬伝」で珍らしい簾縛りにした。「御用盗異変」で幾人もの女優連を後手にして映し出して、縛り監督らしい片鱗を見せてくれた。「疾風鞍馬天狗」でも、松島トモ子ちゃんの縛り姿を可憐に映してくれた。「大江戸異変」で沢村昌子は、細帯で縛り上げられて猿ぐつわをされ、男に挑みかゝられる所は中々の迫力である。「からす組異変」でも、後手姿の女を背後から追ってカメラに入れたし、この人も中々味がある。

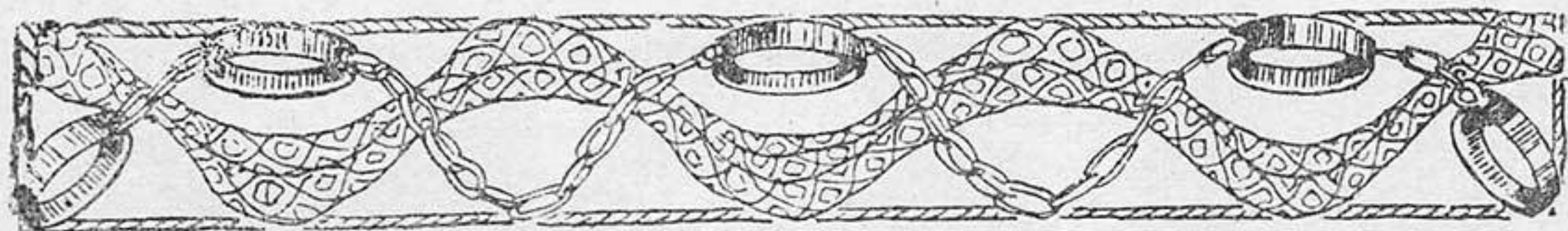
## 志村敏夫

「すつ飛び千両旅」で嵯峨美智子を太綱でぐるぐる巻きにして、足元から裾の乱れと胸の縄目を写して、自由なき口へ食物を入れてやるアブシーンを心憎く見せる。「照る日曇る日」で後手猿ぐつわの南悠子を、火煙の中でのたうち廻らせての苦悶のアップは、中々見事なものであった。

## 安田公義

「鉄路の弾痕」で利根はるえを荒縄で縛った時は、かなりの喰込みが胸へと巻きついていて「振袖狂女」で宮城野由美子を太綱で縛り上げて吊し上げた時の縛りは凄かった。「美女決斗」で筑紫あけみを樹上へ吊した時の縛りもよかった。荒縄が手首へ喰入って、彼女はさぞ痛かったであろう。「踊子行状記」で山本富士子を帯で縛ったが、これは少し緊縛感





にかけていた。

### 冬島泰三

“恋文道中”で三浦光子の縛りを中々美しく見せた。“恋風街道”で美人の尾上さくらを縛った。“快盗三人吉三”で若かりし井川邦子を美しく縛り上げた。

### 滝沢英輔

“袴垂保輔”で可憐な若山セツ子を後手に縛り上げた時は痛々しい限りだった。

### 加戸敏

“狸銀座をゆく”でターキーを縛った戦後派人の彼が“絢爛たる殺人”で喜多川千鶴を縛り上げて猿ぐつわ、悪人に抱きかゝえられて鉄橋上へ引摺り上げられるシーンは、細紐ながら完全なる後手を見せてくれる。“木曾路の子守唄”で霧立のぼるを縛り、“逢魔ヶ辻で橘公子をキリキリ縛り”覆面どくろ隊”で長谷川裕見子を、太綱できびしく後手縛りを見せてくれる。

### 荻原遼

“春風無刀流”で花柳小菊を手ひどく縛り上げた。“又四郎笠”で花井蘭子を縛り、浪人共の面前に転がしての晒を見せる。“千人悲願”で市川春代を縛り上げた。“新選組”で花柳小菊の縛りは、大勢の隊士の面前へ綱で縛り上げた小菊の観念し切った顔と、胸に喰入った縛しめに名画の味を感じた。“青空浪人”で、関千恵子と今一人の女優を縛り上げての鞭打ちは、残忍美を出していた。“青空大名”で、新入社当時の千原しのぶのなやかな体には痛々しすぎる中綱で美しい後手縛りを見せる。このシーンは、彼女を大勢の人々の中に引きすえて置いて、背後から前から実に長い縛りを展

開してくれた。“危し鞍馬天狗”では嵐寛を逆吊りに、宮城千賀子を後手の責折檻で堪能させてくれた。“自雷也”で嵯峨美智子と利根はるえを吊上げ、新倉美子の美しい猿ぐつわ姿を見せてくれた。この人は大衆の前での責めが好きらしい

### 内出好吉

“江戸いろは祭”で岸恵子を縛り、“疾風からす隊”で藤乃高子を縛り、“美男天狗党”で新人女優を縛ったが、いささか平凡であった。

### 荒井良平

戦前に“牢獄の花嫁”“神変麝香猫”で市川春代を縛っている。“地獄太鼓”で若杉旺子を縛った。“死美人屋敷”で伏見和子をお綱で天井から吊り下げた。“酔いどれ牡丹”では浅茅しのぶを二度も後手に縛り、紫千代も縛られている。

### 新藤兼人

これは一本だが“縮図”の乙羽信子の細帯の高手小手は素晴らしい縛りの構図だった。“狼”でも乙羽に手錠をはめているし、“どぶ”でも縛りはなかったが、乙羽をサドの犠牲として手荒い加虐シーンを見せてくれた。

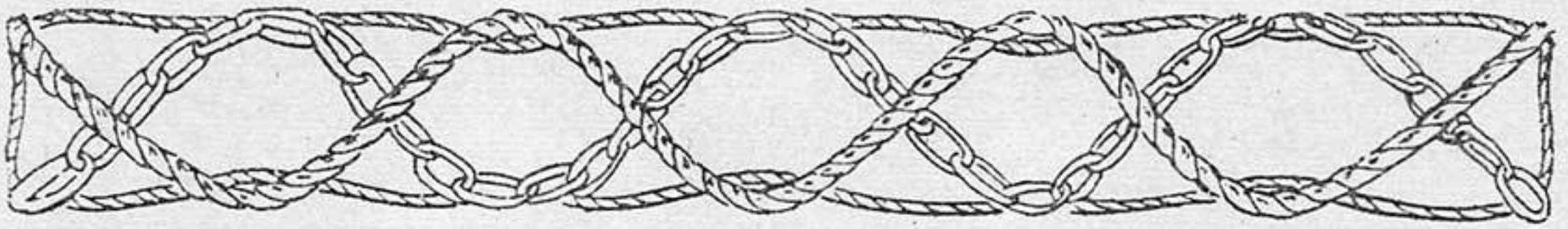
### 安達伸生

“千大ヶ嶽の火祭”で相馬千恵子を崖から釣下げた。“あばれ鬘斗”で三浦光子の後手姿を、かなりの緊縛で見せてくれた。

### 福田晴一

“人肌千両”の伝七シリーズで初の縛り、しかも美人女優の月丘夢路を後手の猿ぐつわにして見せてくれた。“黄金弁天”でも、夢路の両腕を背に捻じ廻して縛り上げ、鼻、唇を覆う猿ぐつわをして、尚、背面から写して縄を切る迄、リア





ルで美しい縛りを見せる。『女郎蜘蛛』で夢路の代役の草笛光子を縛って猿ぐつわ、『花嫁小判』では、伊吹友木子を後手に縛り上げて猿ぐつわをはめて、かなりの緊縛シーンを見せる。

### 酒井辰夫

この人も、同じ松竹映画の時代物では忘れてはならぬ人である。『風雲日月草紙』で、売出中の七浦弘子を美しく粧おいさせて、両手足を縛り上げて猿ぐつわをさせ、カメラは乱れる裾から苦悶の顔までシリ／＼と映し出す。『稚児の剣法』で、雨の中へ紙京子を荒縄で縛り上げて、無惨美を出す。ラストでは宮城千賀子と小山明子を縛ってくれる。『弁天夜叉』（本誌二月号口絵写真）では、高峰三枝子の後手、猿ぐつわ姿を満点の姿態で見せてくれた。『マリア観音』での強烈な夏川静江の責場はよかった。若い女優なら尚更と思っただ。『この女に手を出すな』で小嶋くるみを見させて、中々好ましいシーンを見せてくれた。

### 芦原 正

『好法院勘八』で小園蓉子を縛って可憐な姿を見せた。『顔のない男』で浅茅しのぶを後手にしての鞭打ちは、中々迫力ある責場だったし、後手の縛りを見せてくれる。

### 伊賀山正徳

東映のシリーズ映画、『水戸黄門』で千原しのぶをよく縛ったものだ。『火牛坂の悪鬼』では火あぶりに、『幽霊城のセムシ』ではハリツケに、新人女優もこの中では幾人も縛られている。『力斗空手打ち』の後姿は、この人の代表傑作ともいふべき縛りを見せる。『怪猫乱舞』でも、月丘千秋を後手にして背面を映し出して、緊縛映画の楽しさを満喫させてく

れた。『人喰い狒々』でも、大の字に縛りつけた女の生血を取るシーンは、グロながら面白いが、猿ぐつわから声を上げるのはまずい。『鳴門の妖鬼』の吊し責めは、（本誌新年号口絵写真）見事な責場の味を与えてくれた。

### 小沢茂弘

『百面童子』で浦里はるみの後手姿を見せてくれる。『長脇差奉行』で千原しのぶを縛る。『浅草三四郎』で三条美樹をぐるぐる巻きにして見せた。

### 野口博志

『謎の金塊』で新人女優を縛ってちよっぴり見せる。『殺人計画完了』では、日高澄子をぐるぐる巻きに、多摩桂子の後手の猿ぐつわにして楽しませてくれた。

### 阿倍 豊

『江戸城炎上』で関千恵子の艶な縛り姿を見せてくれた。『肉体の密輸』で美多川光子を吊して、中々のリンチ場面を見せている。

### 河野寿一

『雪之丞変化』で喜多川千鶴の縛り姿を、『里見八犬伝』で田代百合子の縛りは、痛々しい程に思えた。『虚無僧系図』で長谷川裕見子を縛り、『薩摩飛脚』で花柳小菊を猿ぐつわ。

### 三隅研二

『こけ猿の壺』で縛りはなかったが、三田トキ子を両腕取って押えつけるシーンは、緊縛する様な迫力だった。『花の兄弟』でも三田登喜子を、後手の猿ぐつわにしてシリ／＼と映したが、中々色っぽかった。

### 天野 信





“腰元行状記”で立花宮子と江島みどりを縛って猿ぐつわで、しっかりとした後手姿も見せ、中々長い間の縛り芸術を味あわせてくれた。

#### 津田不二夫

“中野源治の冒険”で、可憐なる中原ひとみを、中々しっかりした後手縛りにして引立て、一室の中で動きのある縛り姿を、長い間楽しませてくれた。

#### 荻原正

“顔のない男”で、細縄でぐる／＼巻きの後手にされた浅茅しのぶを鞭打つシーンは、実感があつたし、胸のはだけた膚へ鞭の跡が印されて、痛々しく後手もきっちり見せた。

#### 稲垣浩

往年の武蔵で見せた縛りの女群像は眼に残る。“戦国無頼”で、国際女優の山口淑子を後手の猿ぐつわにして、今に忘れ得ぬ場面を見せてくれた。

#### 島耕二

“静と義経”の淡島千景への縛りは、無惨な程の喰込みを見せて、鞭打つ音とカラーの実感で、美の探究ここにありと叫びしめた。

#### 堀内真直

“喧嘩烏”の山根寿子の縛り姿（本誌二月号口絵写真）は中々味のある美しさで、短時間だったが見事な立体感があった。

#### 倉橋良介

“のんき侍大暴れ”で水原真知子が大綱で後手に縛り、吊し上げての折檻場面は、中々どうして大した責場であった。

#### 浜野信彦

“魔の花嫁衣裳”で南左斗子を椅子に縛りつけて、唇に噛ました猿ぐつわ姿で頬を打ち髪を掴んでの責場は捨て難い作品であった。

#### 石原均

“流れ星三度笠”で、新人女優をきれいな後手姿にして、平凡なチャンバラ劇に美を与えてくれた。

#### 滝内康雄

“酔いどれ囃子”で雪代敬子の猿ぐつわ姿を大きく映して可憐なる縛り画を見せてくれる。

#### 内川清一郎

“暴力の王者”で、久保菜穂子と今一人の女優を縛って猿ぐつわで背面を見せてくれたし、口を縛ったハンカチも中々その実感をこめて見事。

#### 松村昌治

“若衆変化”でひばりちゃんを縛って猿ぐつわ、手首だけだったが、邪怪に突きとぼしたり牢に縛ったまゝ入れたりで上々の演出だった。

#### 小林恒夫

“少年探偵団”で、中原ひとみを両手足ぐるぐる巻きの眼だけ残して猿ぐつわ、手ひどく縛られていて彼女も切なそうだった。

縛り場面が必ずある映画であつたら、監督名を見てから入場すれば、今か／＼と期待と興奮に胸躍らせる事でしよう。今後共、映画演劇の緊縛シーンの速報を本誌に御発表の程を緊縛ファン諸兄にお願いします。

（おわり）





# 灰色のノート

—ある浣腸マニアの日記—

(II)

矢崎 竜一

のみ使われる。(フローペル・紋切型辞典)

六月十日

△「灌腸」Clystereなる語に続いて「浣腸」Lavement という語が出て来たのを見たえす  
いつと教会派の連中は、聖シランの僧院長を買収し、更にルイ十四世の膝元で信任の厚い彼等は、破廉恥な表現の中に入ってしまった語「浣腸」を獲得すべく、採用したV(テノドラック「好色な古代」)

※

△「Lavement」とはキリストが弟子たちの足を洗う儀式について語られる場合に

M教授の授業の終り頃、さし込むような腹痛に襲われる。痛みは下腹部一面に拡がって来て、腹が固く張って無性に嘔きたくなる。隣りに座っていたTが「龍ちゃん、脂汗が流れているぞ。どうかしたんじやねえか」と俺の耳で囁く。俺は両手で腹をおさえて苦しさ

を堪えていた。「大丈夫だ」、しかしこう答えた俺の声はまるで百日咳を患っている人間のように妙にかすれていた。

「おい、本当に大丈夫なのか」

と、Tの大きな目が俺の顔を覗き込む。Tはおやじの車を呼ぶから、と教室をぬけ出していった。

黒塗りのベンツが、すべるように車寄に入って来て玄関の前で止る。俺はTに抱かれるようにして車に乗せられた。「坊ちゃん、お父様がJ病院へお話をしに置かれたそうですから」と年寄りの運転手がTにつげた。

Tの膝にもたれている俺は車のゆるやかな震動の中にこの美青年の閉じられたきれの長い目蓋の下にかくされている。美しい大きな瞳を想い浮べていた。

俺の腹を撫でていた医者は、どうも盲腸炎らしい、一度肛門で体温を測るという。Tが俺のズボンをゆるめる。俺は両脚をまげて、診察室の白い壁のしみを眺めていた。Tと医者となにかぼそ／＼低い声で話をしているのが聞えて来る。

「じゃあ、用意をして置いて」

と言いながら、医者は俺の背後に立った。「三十八度ですから、そう心配はないと思います。若し痛みが治らないようでしたら明日



入院なさい。手術は簡単ですから」

検温のすんだ俺が診察室のベッドから起き上ろうとすると、若い看護婦のやつ、「浣腸しますから、もう一度横になって下さい」と云う。なんだか馬鹿にされているようで俺は癪に障った。

「龍ちゃん、そんな顔するなよ」

Tは俺の肩にやさしく手をかけて

「俺が先生に頼んだのさ。な、やっとけよ。本場の浣腸って甘いもんだぜ」とニヤ／＼する。ひや／＼とするものが体に触れて思わずぎく／＼とした。俺の肉体が急に硬直してしまうような気がした。

「いきまないで下さい」

「龍ちゃん、口あけて、楽に息をしろよ」

とTが言う。冷たいものが、しびれるように腸のなかを上って来た。浣腸器がはずされる。ほ／＼とした俺は一息つく、ゆ／＼と両脚を延ばしてみた。

「もう一本浣腸しますから」

浣腸の結果は、多量の排便があつて俺の気分は少しよくなった。しかし疼痛はひかなかった。

家までTの車で送られる。

氷嚢で右の下腹部を冷やす。Tは××に帰るのを止めて一晩中俺の看病をして呉れた。

## 六月十六日

こゝに入院して今日で六日になる。腹の水嚢は取れず仰向けに寝かされている。

午後の体温計が腋の下にはさまれた。カルテを調べていた婦長が俺の顔を見た。

「全然お通じがありませんのね。検温がお済みになったら浣腸いたしますから」

俺は赫くなつてうなずいた。一週間前のTの△好意△がなつかしく想い浮ぶ。

俺は生理的に不愉快な便秘の苦痛に耐えていることに、なにかほのぼのとした肉体的な喜びを感じていたのだ。

「しばらく我慢してして下さいね」

俺はじつと目を閉じていてあの女の声を聞いた。自分の腹を右手で繃帯の上から撫でながら。排泄を抑制させられる気分は丁度 *Spem atorie* に耐えようと辛棒するそれに似ている。いくら跳いても、足摺りしても見えない力強い腕に握まれて暗い牢獄の中へ連れこまれて行くような、妙にうら淋しく物悲しい気分には俺はひたっていた。……手術台、そして白いタイルの床。時々金属製の音が鳴る。皮膚が切られているのか、静寂さの中に唯、いつまでもに鉄の音が続いている。腹が重苦しくなつて来た。金属の触れあう響きがますます盛んになる。腹部の重圧感がひどくなる。息がつけない。まるで俺の腸が体の外へぐい

／＼と引っ張りだされていくようだ。途端に刺すような激痛が、じーんと頭のしんに伝わって来た。ちよ／＼と止む、又痛む。早く止めてくれないかなあ、俺は思わず独言を言ったようだ。

「しばらく我慢してして下さいね」

俺はあの女の声を聞いた。診察室で俺に浣腸した若いあの女の声を。その時飛び上るような痛みを受けた。……俺はこらえていられなくなった。ひよいと頭をもち上げると、思ひ切つて息んだ。天井の電燈がいやに大きく見えた。ごぼ／＼と俺の氷枕が鳴る。

病室の窓から梧桐の大きな葉越しに六月の青い空が見える。

夏の雲がぼ／＼と二つ浮んでいた。カーテンが静かにゆれていた。

## 六月十七日

疵口の抜糸が行なわれた。

「経過はすこぶるよいです」

と医者は言う。午後Tが遊びに来る。彼に泊ってもらう。

## 六月十八日

朝食後、浣腸される。Tに便器の世話をさせる。



六月十九日

就寝前、看護婦に浣腸してもらう。

六月二十日

午後、イルリガートルが用意された。俺の脚の下に冷たいゴムシートが敷きこまれていた時、SとAが遊びに来る。

Sのやつ俺のベッドの横にしつらえられたイルリガートルと俺の恰好を一瞥して、あわてゝ目をそらす。彼の顔が真赧になる。俺も恥かしかつた。Sは俺の方を見ないようにしてAに

「悪いよA、外で待ってゝやろうよ」

と云う。Aは

「いゝじやねえか。俺たちはみんな親友だ。なあ龍ちゃん。俺たちだっておめえの浣腸ぐらい手伝ってやるぜ」というと「ねえ看護婦さん、こいつって全く贅沢だね。もう起きられるんだらう。自分でさっさとトイレへ行つてやればいゝのに、お大名みてえに寝るところがって、お嬢さん方にやらせていゝ氣になつてやがんのつて」

若い見習いの女がくすくす笑い出す。看護婦はAに、だって御病氣なんですもの、しよるがないでしよ、とシニカルな表情で答える。「それもそうだな。じやあ龍ちゃん、しばらく外へ行ってくるぜ。看護婦さん、よろしく頼まっせ」と云うと二人は連立って病室から

出ていった。俺は再び膝を立てた。

夜、見習いの女を入れて四人でトランプをする。

六月二十三日

退院。

二週間ぐらいお宅で静養した方がよいと医者に言われる。

夕方TとFが遊びに来る。Fがこれ俺たちのお見舞だと、洋蘭に似た花房をつけた珍妙な鉢植を卓子テーブルの上に飾った。食虫植物の一種らしい。花の名を聞いたが二人とも知らなかった。

Tが帰りしなに「寝ていて退屈だらうから本を持って来てやったせ。学校休んでいる間にせいゝこの聖書でも愛読しな」と、ぶ厚い仮綴本を一冊、俺の枕元に置いて行った。標題を見たら、シテエケルの「自慰と同性愛」という、たじかに性書であった。

七月一日

S病院にUを見舞う。久しぶりの再会をよろこぶ。

七月四日

学校に出る。月曜、TとIに行く約束をする。

七月五日

今朝われわれの仲間に新しいことがおこつた。昨夜Uが死んだのだ。おそい日曜日の朝食をひとりで摂っていた時、俺はAからの電話を受けた。AはいまS病院にいますという。よし俺も行くからと電話を切る。

俺は家の前から車をひろう。病院近くまで来ると、急に彼の死顔を見るのを止めたくなつた。俺は受付にAを呼び出して、これで花を買ってやっつと金を渡すと、Aの留めるのもきかずに引返して家へ帰つて来た。

Uは肺結核でひと月前からS病院に入院していた。五日前、俺が彼を見舞つた時には彼はベッドの上に起きあがりたりして元気そうにはしゃいでいた。龍ちゃん切られたとき痛かった？僕もあと四日たつと切られるんだ。

手術の日の朝にはね、龍ちゃん僕も……と云うと、ちよつと顔を伏せたが、思い切つたように俺の顔を見つめて「浣腸されるんだって」。そしてこのいたずらっぽい十八歳の高校生の顔には、俺は堪らなく好きになつて来てはにかむように微笑が浮んでいた。

ベッドの前の壁には、俺と一緒に写したUの写真と、アメリカの映画雑誌から切りとつたサル・ミネオの写真が貼つてあった。

「なあ、兄貴、兄貴は今じやいゝ児を見つけ可憐いがつてるんだらう。分っているよ。」



けど妬けるなあ」

そう言うUは美しい白い歯で軽く俺の腕を噛んだ。

Uがとう／＼死んでしまった。灰色の彼の青春は暗黒の世界へひきづられていつてしまったのだ。まるで美少年ナルキッソスの最期のように。

### 七月六日

Tと銀座に出る。コロンパンの二階で彼は俺にクリーム・ソーダをすゝめた。

「あいつは淋しがりやだったがいゝ児だったね。龍ちやんも淋しいだろう。君に会わしてやった晩、あいつととても喜んでいたぜ」

彼はストローを口から離すと、

「Uが君に話したかもしれないが、UはM銀行の重役をしている奴の叔父さんの処へ世話になっていたんだ。その人はUをすごく可愛いがって呉れていたらしい。その叔父に八お前は変態だ」と言われたのが、彼に非常なショックになったんだ。

奴は毎晩そつとベッドの中へ浣腸器をもちこんでそれを握りしめたまゝ寝る妙な習慣があったらしい。それをある朝、彼の叔母に見つけられて叔父に報告されたんだそうだ。叔母は「いやな子ねえ」と云って叔父と顔を見合せた。叔父は憤然としてUに向って「お前は歴とした変態者だぞ」と云うと、彼の手か

ら浣腸器を取り上げて庭石目がけてこなごなに

にしてしまったんだって。Uは随分泣いたそう。俺にはやつがそれ程までに浣腸器に執着した理由を知らないが、Uの気持だけはわかるような気がする。どうだい、これからLへ行かねえか」

俺は今夜は止めて置こうといって立ち上った。コロンパンの階段をおりながらTが言う。

「龍ちやん、海へ来い。気持が晴れるぞ。又俺の家へとまれよ」

### 七月八日

例の名の知れぬ植物はベランダで朝の陽を浴びていた。芝生の上では二羽の雀が追いかけくらをしている。時たまからみあつては、盛んにわめきあつていた。その姿は異質の俺たちの生活を皮肉る単純な、明るい青春の謳歌のように俺には想えた。

彼等は仲のよい雄と雌の番いのようだ。ガラス戸に俺が近ずくと、彼等はそろって飛立ってしまった。(次号へ続く)

## 【口 絵 写 真 解 説】

藤 木 仙 治

### 縛られ拷問を受けるジナ・ロロブリジダ

——フランス映画 Notre-Dame Paris から——

物語はもう文学、映画好きの方ならば充分に知っている筈の「ノートルダム」のせむし男」。ジプシーの美少女エスメラルダとノートルダム寺院で鐘つきをしている醜悪の権化のようなせむし男との純愛が「美女と野獣」的な異様なグロテスク・ロマンスを

寸前のシーンがある。写真を見ればよくおわかりだが、手錠をかけられ、乳房の下から背中にかけて巾広い皮の帯で縛られたジナが、足かせをはめられた拷問のシーンはすさまじい。

監督、ジャン・ドラノア。カシモドにアソニー・クインという豪華な顔ぶれは、期待するに充分の緊縛シーンが展開されよう。(本月号口絵参照)

ジナの扮するエスメラルダが、フロロ副司教の奸計のために捕われ、拷問され、死刑



# 木馬責に関するノート

甲斐仁参

栗原伸画

木馬責は公刑でなく、地方に於て、年貢未納の百姓等を責めるのに使用されたということが史実に散見するに過ぎない。にもかゝわらず、その絵画は、美しく艶めかしいものが数多く描かれ、我々の目を楽しました。

本誌「潰滅の前夜」の自転状の拷問台は、素晴らしい描写で読む者を魅了したが、女が何かに跨されて身もだえると云う状景は確かに、サディストの心を引きつける何ものかである。

さて日本の木馬に相当するものは、西洋に於ては、「泣き叫ぶ青春」に出て来る鞭打台とも考えられるが、形態は酷似して居ても、それに乗せられる事自体、羞恥心は別として差別の苦痛を伴わないから、これは単なる台であり、むしろ、同種単行本「南北戦争」に

載って居る、レールの垣根に跨される話の方が、日本の木馬に似通って居ると思われる。

又歐洲中世紀に於て円椎形の刑具に乗せて両脚に錘を附ける拷問があったと記憶するが、これは串刺と見做す事も出来るが、何処か日本の木馬に共通する所がある。これについては、Guillaume Apollinaire: The DEBAUCHEE HOSPODAR (啓明社版)の第六章に鉄の棒の上に腰かけさせられた男が、昔の恋人をその上で抱かされ、腹部を貫らぬかれて殺される話が載って居る。

「南北戦争」は何処の古本屋の店頭にも見られるものであるし、後者は一度、沼氏が手帖で取上られた事もあり、又翻譯しても、公表を憚るものなので、今回は引用を略し、某地方の旧家の土蔵から発見された記録に手を加

えたもののみ発表させていたゞく。

◇

柿が色ずき、抜けたように青い秋空の下に刈入の済んだ田が黒々と続いて居た。例年なら秋祭の笛や太鼓の音が、秋の色濃い鎮守の森から聴えて来る筈なのに、今年は静まりかえった畔道のあちらこちらで百姓達が額を集めて、ひそ／＼と何やら立話をして居る光景が見られるだけだった。二年続きの凶作の上に、今年は年貢の取立てが目立ってきびしく、納め切れぬ割当に農家が四苦八苦して居る折も折、今日早朝、太兵衛の家のたえ、五助の所のこまと九兵衛の長女くまと云う三人の娘が代官所に引立てられていったと云うのだった。

村はずれの林を抜けて、畔道を若い百姓が





一人馳けて来た。

「おーい、大変だ、御布れが出たぞ、御布れが。」

「ごそぐと相談をして居た、ちよんまげが一齊に振りかえった。」

「今日中に年貢米を出さないと、明日娘っ子を木馬にのせると。」

「何、木馬だ？」

「一人の年取った百姓は、もう目をしよぼつかせた。」

「可愛想に、俺は子供の頃見た事があるだ、大きな石を足にぶら下げられて、ひい／＼泣いとした。何でも当分歩く事も出来ずに寝たきりだったがな。」

「五助や九兵衛は何とかなるだべいが、太兵衛の所は内入れも出来ぬ。おまけに名主様が太兵衛には絶対に米を借してはなんねいと云われてるしな。」

「おたえを代官様の二男坊が好きなんだとさっさと女中奉公に出せば良いのだ。」

「おたえはもう仮祝言も済んでるしな。」

「いやだと云っても、仕方あるめい、太兵衛も気の毒に」

◇

その頃、代官邸の裏手の牢に今朝捕えられた三人の娘が、目を泣きはらせて、うずくまって居た。牢番がにや／＼しながら、それを覗き込んで居た。

「そんなに泣いたって仕方あるめい、おまえ達は明日、木馬に乗せられるんだぞ。」

「ええっ」

「驚くなって事よ。生きた馬みていに跳ねねいし、喰附かねえし、何もおっかねい事はあるめい。」

一人がひいと泣き声を上げると、他の二人も一緒に泣き出すのだった。衆人環視の中で、奇妙な形の責具に乗せられる恥かしさ、恐しさは娘達の身にしてはどれ程であ



ろうか、しかも、自分達はたゞ手を拱ねて身内の者が一刻も早く年貢を納めて呉れる事を神に祈るより他に術もないのだ。いつしか秋の日も傾いて、ねぐらに帰る鳥の鳴声が聴え、牢の奥に夕暮の気配が濃くなって来た。

「たえを引出して参れ」

裏庭に通じる枝折戸の先から声が掛った。

「へえい」

牢番は抱えて居た六尺棒を脇に立て掛けると一尺程の太い鎖の附いた手錠を取出し、牢格子の大きな錠前を開いた。

「たえ、出て来い。」

たえと呼ばれた娘は、はっと顔を上げた。一際美しい容貌が鮮かに浮んだ。もしかしたら釈放されると云う希望に、いそ／＼と立ち上った。

「手を出せ。」

娘は素直に手を出した。牢番はがっしりと重い手錠をそれに掛けた。娘はだまって嫌悪の目でちらとそれを眺めた。

「こっちへ来い。」

牢番は鎖を掴んで娘を引ずり出すと、再び格子の錠を下し、枝折戸を開いた。そこにはあのいま／＼しい代官の二男、次左衛門が薄気味悪い笑顔を見せて立って居た。儚い希望も消え去った娘は、はって立ち竦み、思わず二三歩うしろにさがって、牢番に握られた鎖を鳴らした。牢番は再びぐいと引戻し次左衛

門の手にそれを渡した。

「こちらへ参れ」

彼は鎖を握って乱暴に引いた。たえは前へのめってどうと地に倒れた。白い獄衣の裾が割れて、すんなりした脚が蹴いた。

「な、何をなさるんです。」

たえは叫び声を上げた。

「へ、お楽しみで……」

牢番は枝折戸を閉じた。ようやく膝を衝いて起き上った娘を引ずるようにして、次左衛門は庭伝いに自分の居間の方に歩を移した。

たえは観念したように俯向いて、それに従った。敷きつめた小砂利の角が裸足の裏に突さゝるように痛かった。居間の前に来ると次左衛門はたえを地面に叩きつけるように投げ出して自分は縁側にどっかりと腰を降ろした。

たえは投げ出されて、小砂利の上に犬のように這いつくばり、それでも慌てて坐り直すと、不自由な手で裾の乱れをかき合せた。

「どうじや、奉公に参る気はないか。」

「……」(誰がこんな奴の……)

たえは憎悪の目を向けて唇を噛んだ。

「そちの父は、年貢を納める事は出来んぞ。そうすれば、今度はそちの父を水牢に入れる事になるぞ、それでも良いのか、この親不孝者め！」

「……」(そんな筈はない、叔父が、本家の人が何とかして呉れるだろう)

「他所から融通を附ける事は出来んぞ、米を借さぬよう名主共に申し渡ししてある。」

「……」(そこまで手を廻したかしら)

「強情張らずにそちが諾と云えば、円く治まる。聴いたであろうが、明日は木馬に乗せるぞ。身体が裂けても良いのか、痛い目を見ぬうちに、云う事を聞くのが得策じゃ。」

次左衛門は、そう云いながら立ち上り、たえの前に来るといきなり囚衣の前をはだけようとした。

「ああっ」

たえは夢中で、次左衛門の手に武者振り附くと爪を立てて引き走った。

「おゝ」

彼は驚いて手を振り切ると足を上げて、たえの胸を力一ぱい蹴り上げた。

「ううっ」

鎖の音を鳴らして、たえは仰様に倒れ、腿の附根まで露われになった足が宙に躍った。

「こやつめ、思い知らせて呉れる。」

次左衛門は倒れた娘の腰を、背を乱暴に蹴りつけた。娘は小石の上を転って呻いた。この騒ぎに枝折戸が少し開いて牢番が顔を覗かせた。

「次左衛門様、どうかなさいましたか。」

「この女を連れて行け、後手錠で片足を吊っておけ！」

牢番は急いで六尺棒を抱えて飛び込んで来



ると、ようやく膝をついて起き上った娘の襟首を掴んで引き起した。次左衛門は牢番の手から棒を取り上げると力まかせにたえの尻に打ちおろした。娘は再び前にのめって悲鳴を上げた。次左衛門は小気味良さそうにそれを見ると棒を投出した。牢番はそれを拾うと、娘を促して枝折戸の内へ戻った。牢の前には篝火が焚かれ、木格子の間からこまとくまの心配そうな顔が覗いて居た。先刻からの悲鳴を聴き、乱れた囚衣から覗く膝頭は擦り剥いて血が滲み、息を切らせて喘ぐたえを見て、二人の娘ははっと目を見張った。牢番はたえの手錠を後手にして掛け直すと、格子戸を開いて中に入り、片隅にたえを立たせ、片足を掴んで持ち上げると、低い天井から下った鎖の先に附いた鉄の環をその足首に嵌め、ぴしりと鍵を掛けた。

「おめえ達、この娘に手を触れてはなんねえぞ、もしそうすると、おめえ達も同じ恰好にするぞ」

牢番に睨まれて、二人の娘は黙って頷くだけだった。牢番は表に出ると将児を持ち出しそれに腰掛けると哀れなたえを面白そうに見つめた。片足を吊られ、鷲のように片足立った娘は乱れた前を合わせようと、後手錠の手を動かしたが、それは徒らに乱れをひどくするだけだった。囚衣に附いた短い紐も何時弛んだか胸がはだけ、乙女らしい乳房、薄紅色

に色づいた乳首が痛々しく露われて居た。

時が経つにつれ、吊られた足は冷えて、感覚が鈍くなり、床についた足は不安定な上体を支えるため、棒のように突張り痛くなった。その上夕闇と共に牢内に忍び込んだ寒気が露わな皮膚を責め苛んだ。たえは羞恥を忘れ、何とかもう少し楽にならないかと、不自由な身体をもじ／＼動かして、牢番の淫らな眼を楽しませた。喉はひり／＼と乾いて居るのに下腹が張って尿意をもよおした。こまが片隅の桶に跨って尿の音を立てた。たえはもう我慢が出来なくなつた。

「あの、一寸と、降ろして下さいませんかでしょうか。」

たえはおず／＼と声を掛けた。

「何だ、何するだ。」

牢番は薄笑を浮べた。

「あの……あの、お手水を……。」

たえは頬を染めて口ごもった。

「そのまゝすればいいだ、一寸でも降ろすわけにはなんねえ。」

こまが慌てて桶を持ち上げて、たえの方に持って行こうとした。

「何するだ、おめえも吊されてえか。」

こまは驚いて桶を降した。たえは余りの情け無さに又涙を新にし、唇を震わせた。そのうちにたえはぶる／＼と全身を戦慄させ、冷汗を流し始めた。いくらこらえても、ううっ

／＼と悲げな呻き声が喉から出て来た……。

◇

暁方近くなり、東の空が白みかけた。こまとくまは何時か泣き疲れて眠り込んで居たがたえは囚衣の下半身を濡らし、脂汗を流しながら呻き続けて居た。床に附いた片足は痛みを通り越し痺れてもう身体を支える事が出来なくなつて居た。遂に目が眩んで、濡れた床の上にどうと倒れた。烈しく鎖が鳴り、今度は片足を上に吊られて、自由な片足をもがかせた。この物音に、二人の娘も、うつら／＼して居た牢番もはっと目を開いた。

「おたえ、大丈夫か」

こまが駆け寄った。

「何するだ、くま」

牢番が怒鳴った。くまは跳び下った。

「ち、畜生、畜生……。」

たえは泣きじやく／＼と、不自由な身体を床の上でのたうたせた。後手錠の身体はいくらもがいても立ち上る事は出来なかった。脚が宙で躍る度に、鎖が嘲笑うように鳴るだけだった。

朝日が射し始めた頃、又枝折戸が開き、次左衛門がぬつと顔を見せた。つか／＼と牢に近づく薄暗い内を覗き込んだ。

「ふゝ、たえ、よく寝られたか。」

こまとくまは怖ろしげに目を伏せてちびこまった。片足を吊り上げられてもがいて居た



娘は首を捻って、憎惡の瞳を向けた。その顔には一夜のうちに疲労の影が濃く宿って居た。

「さあ、此奴等を表へ引き出せ、そろ／＼仕度も出来たようじや。」

次左衛門の声に牢番は縄を取り出すと、格子戸の錠を開いて内へ入った。二人の娘は怯えて奥の方へかたまつたまゝ上目使いに牢番を見つめるだけだった。

「さあ、こっちへ来い。」

「いや、いや、たのむから勘忍して……。」

くまはもう涙を溜めて牢番の方に手を合せた。牢番はくまの手をぐいと引いて手早く縄を掛けてひし／＼と後手に縛り上げた。くまはわっと泣き出して俯伏せた。こまは観念したように、涙をぼろ／＼とこぼしながら温和しく縛られた。次左衛門も牢へ入り込むとたえの側に立って、薄笑を浮かべながら恥かしい恰好で身をもむ娘を見下ろした。

「何じや、この女は、臭いのお、赤子のように着物を濡らし居って、洗ってやれ。」

牢番は昨夜からたえの足に喰附いて苛んで居た鉄の環の鍵をはずすと、後手の鎖を掴んでずる／＼と外へ引き出した。濡れた床の上で悶えた囚衣がぐっしり濡れて身体に吸いつき、冷たい朝風に齒を鳴らして震える娘を六尺棒の先で小突きながら次左衛門は牢番に言いつけた。

「手桶に水を汲んで参れ。」

◇

その頃、表の広場では竹矢来を組み終った人足が、大きな三角木に脚のついた木馬を三台引き出して居た。嘗つて何十人もの血と汗を吸ってどす黒い背が、朝日に鋭く切り立って居た。矢来の表にはもう物見高い人々が足を停めて居た。

「娘っ子が、あんなものに乗せられたらたまるめいな。」

「九兵衛は何か都合がつきそうだと云つたから、おくまは助かるかも知れねえな。」やがて三人、四人と人が集まり、間もなく矢来の周囲は人で埋まる程になった。この事を伝え聴いてわざわざ遠くの村から見物に来る者も多かった。

突然ざわめいて居た人々がびたりと押黙ると横手の不浄門から高手小手に縛られ、白い獄衣を着せられた娘達がよるめきながら、足軽の六尺棒に追たてられて現われた。可愛そうにと云う声があちこちで囁き交された。やがて木馬の前に敷かれた三枚の荒むしろの上に、娘達はそれぞれ見物人の方を向いて座らされた。やがて表門から警護の武士を従えた代官が中央の台に登り将児に腰を降ろした。一人の武士が進み出て、見物人の方に向って大声で呼わった。

「太兵衛、五助、並びに九兵衛の三名は度び

度び申し附けたるにも拘わらず、未だ年貢を納め申さず、不屈至極である。依つてその娘を木馬責に致すが、御上の御慈悲に依り、今日一日は猶予をつかわし、三名の娘は終日こゝに晒す事に致す。重ねて申しつけるが、本日に年貢を納めざる時は、明日こそ木馬責申附けるに附、左様心得よ。」

見物人は安堵と失望にざわめいた。足軽が片方を削いで尖らせた太い竹を三本運んで、引据えられて居る娘の後ろに、それ／＼大きな槌で荒むしろの上から打ち込み、縄尻をそれに結びつけた。

「不埒者の顔をよく見せてつかわせ。」

次左衛門が横から声を掛けた。足軽は俯向いて居る娘の髪をぐいと掴んで顔を仰向けさせその髪を竹に巻きつけて結んだ。娘達は泣き腫れた目を釣り上げ、痛さに思わず声を立てるのだった。

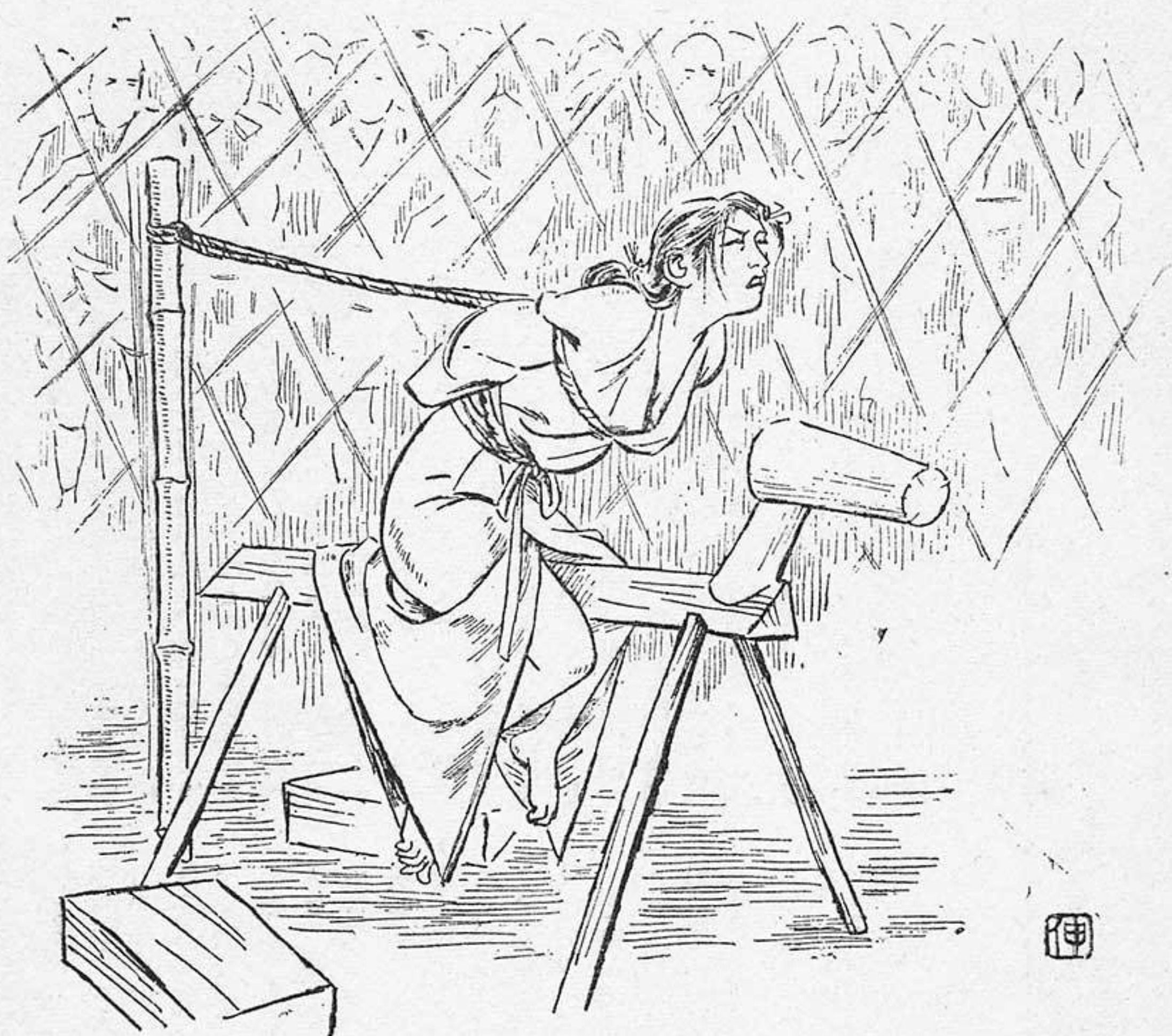
「おゝおくま、もう一寸辛抱してくんろ、もうすぐ父様が米持って来るでな。」

矢来の竹を掴んで哀れな我が娘の名を呼ぶ母親の目も、昨日から泣き腫らして真赤だった。

日が蒼空の中程に登っても娘達は顔一つ動かさずに正坐させられて居た。今はもう人々に見られる羞かしさも消え果て、荒むしろを通して喰い込む小石の痛さと、髪を引張られ頭の皮が剥かれるような苦しさをじっと呟え



るのが精一杯だった。娘達の頭には昨日からの忌わしい出来事が走馬燈のように何度も何度も浮び上って来た。朝、縄をかけられ代官屋敷に引立てられる道に、立停って見送る人々の好奇な目、髪をとかし、着物から腰のものまで剥ぎ取り、更に死ぬ程恥かしい所まで念入にあらためた意地悪い婆、白い囚衣一枚の身体を六尺棒で小突き廻した牢番の嫌らしい顔、今は露わな膝頭をかくす事も出来ず苦しみ悶える自分を見つめる人々の瞳、そうして、もし年貢米を納めて呉れなければ明日こそ、後に置かれた恐ろしい木馬に乗せられる……。たえは更に惨めだった。妾奉公をする位なら死んだ方がよい程嫌な次左衛門に恥かしい恰好を見られた上、更に囚衣まで脱され、冷い水と六尺棒に転々と地面の上をのたうたせられ穢わしい言葉で嘲られ、その上……。三人の目には、それを思い出す度に涙が溜り、耳



に流れ込んだ。その痒ささえどうする事も出来なかった。

◇

その日の夕刻、九兵衛が方々から借り集めた年貢のお陰でくまは釈放された。牢にはこまが一人踞まって暮れて行く空を格子の間から眺めて涙を流して居た。たえは又しても枝折戸の向うから、恐ろしい悲鳴を響かせて居た。どのような責方をされて居るのか、始めは呻くような苦しげな声だったが、やがて人の声とは思われぬような凄まじさになり、又かすれたような声に変わった。突然ぶつとりと悲鳴が絶え、暫くすると板戸が開かれ、足軽がたえを担いで現われ、牢の内へ荷物か何かのように放り込んだ。こまは篝火の光でその双肌ぬがされた身体を見て思わず悲鳴を上げた。二の腕も、胸にも、鳩尾にも深く縄の跡が喰い込み紫色のその醜い跡には血が滲んで居た。死んだのではないかしらとそばへ寄ると、胸が



せわしく息ずき、呻き声が白い齒並の間から洩れて居た。

「たえちゃん、たえちゃん。」

こまはたえに抱きついて揺った。失神して居た娘は、はっと目を開き、暫くこまの顔をぼんやり眺めて居たが、それがこまと解ると突然わっと泣きながらこまにしがみついた。

翌朝、木馬は二頭に減った代りに、その両側と後に踏み台が置かれ、二本の柱が両側に立てられ、更にその上に横木が渡された。二人の娘は昨日のように後ろ手に縛られて引出され、代官の合図で足輕に抱きかゝえられて踏み台にのせられ、木馬に跨された。一人の足輕が木馬の後の踏み台に登り、縄尻を柱の上の横木に少し弛ませて縛りつけた。二人の娘は木馬に跨ったまゝ踏み台の上に立って、恐ろしい三角の木から身を離した。再び代官の合図で足輕が娘の立って居る踏み台を無慈悲に取り払った。

「あゝっ」

二人は同時に叫んで、腰を木馬の背に落した。囚衣の裾が乱れて太腿まで露われた。暫くじっとして居た二人の娘の顔は次第に紅潮し息が荒くなり、腰をもじくと動かし、鋭く尖った木馬の背から身体を浮き上らせようとし出した。身体を倒すようにして横木に縛られた縄をぴんと張って、太腿で木馬の背を挟むようにすると少し身体を浮かせる事が出

来た。しかしそれもほんの暫しか持たなかった。すぐ太腿がだる／＼なり、縄を引張った後手が痛くなり、再び鋭い木の上に身体を押しつけなければならなかった。齒のくいしばった唇が開いて白い齒が見え、押し出すような呻き声が聴え出した。何とか身体を浮かせ度いと腿の内側を激しく木馬の背に擦り附けながら足をもがく、その足にはもう脂汗が光

って流れ出して居た。すぐ呻き声はひい／＼と云う悲鳴に変わり、この責苦から逃れようと夢中で身体をよじり、足をばたつかせ始めた。これを見て代官は合図をし、踏み台を足の下に入れさせた。娘達はわなわなと震えながら、鎧立つように、その上に立ち上って息を切らせた。額には汗が流れ、涙が頬を伝った。だが休む暇は無かった。再び残酷な合図と共に踏み台ははずされ、娘達は齒を鳴らし、悲鳴を上げて苦悶するのだった。苦しさの余り、失神しそうになると踏み台が押し込まれ、又すぐはずされた。仕舞には踏み台を入れられても立ち上る気力も失せて、ぜい／＼と息を切らせるだけになった。苦悶の余り遂に尿を洩らした時、この惨めな娘達は木馬から引ずりおろされた。もう起き上る気力も無い娘達は、地面に倒れたまま呻き続けた。

「太兵衛、五助両名の者、今日中に年貢を納めざる時は、明朝娘どもを再び木馬責にいたし、両足に錘りを附する。」

と呼ぶる武士の声も耳に入ったかどうかは解らなかつた。

その日の午後、五助は年貢を納めて、こまは許された。太兵衛夫婦や兄弟は何か年貢米を集めようと必死の努力を続けたが、代官の差し金で名主から堅く言渡された親族、友人は災難が自分達に振りかゝるのを恐れて、誰も米を借そうとしなかつた。太兵衛は意を決し娘の婚約を破棄し、娘を代官邸に奉公に出すからと名主に申し出た。名主も早速代官にその事を上申ししたが「たえ本人が承知すれば、直ちに引取らせる。」と云う返答しか得られなかつた。

そのたえは又今日も次左衛門の前に引き出されて居た。その目の前にはあの忌わしい木馬が据えられて居た。その削ぎ立った背は娘の流した汗と尿に濡れて黒ずんで居た。

「たえ、そちの家ではまだ年貢を持参致せんぞ、いゝ加減であきらめて拙者の云う事をきけ。」

「……」

「ふゝ、まだ馬に乗り度いのじやな、こやつ

の衣を剥げ。」  
疲れ果てた娘は抗う気力も無く、足輕達に手足を取られあゝと云う間に囚衣を剥ぎ取られた。白い皮膚の上に昨夜の折檻の跡が痛々しかった。



「後手に括って木馬に跨せい。」

麻縄でぎりぐりといまじめられた娘は、足軽達に引ずり起されると再び木馬の上に跨され、縄尻を丁度上に張り出した松の太枝に結びつけられた。

「あゝ、あゝ、あつ、」

たえは悲しげな声を振り絞って身をよじった。風もないのに小枝が揺れ動いた。次左衛門は弓の折れを取り上げて木馬に近よった。「ふゝ、よい身体をして居るの、無理に言う事をきかせてもよいが、それでは興が無い。是非にもそちにうんと云わして見せるぞ。」たえは身体に喰い込んでくる激痛に髪をふり乱し、くねくねと腰をよじり、太腿を震わせた。

「どうじやな、乗り心持ちは。」

次左衛門は手にした弓の折れで苦痛にふるえる乳房や、悩ましく動く尻を、腿を小突いた。

「あゝ、く、くるしい、くるしい。」

「うんと云うか。」

「だ、だれが云うものか、ち、畜生……。」

びしりと弓の折れが娘の汗を浮べた尻の上で激しく鳴った。

「あーっ」

娘は木馬の上で跳び上ったのけぞった。今度は腿を、続けて尻を発止々と打たれ、絶叫があたりに響き渡った。

## ◇

翌日たえは牢番に引ずり起されるまで何も知らなかった。昨日は何度も、何度も悶絶しながら木馬の上で打たれ続け、まだ意識はもうろうと——、身体中火のように火照り、骨がばらばらになったように痛かった。

「さあ、早く着ろ。」

牢番の声に娘は横にまるめて投げ込まれて居る囚衣に腕を通そうとしたが、それさえも腕が引き抜かれるように痛かった。ぐみの実のように赤く可愛らしかった唇も白く荒れ、つぶらな澄んだ目は苦しい苛責に赤く泣き腫れ、その縁はどす黒く隈取られ、長くつややかだった黒髪は乾いて乱れ、こけて血の気の失せた頬にまつわりついて居た。押せばはじき返されるようだった身体も、醜い紫色の傷痕が百足虫のようにあちこちに這って居た。

「さあ、出る。」

よろ／＼と立ち上った娘は又そのまゝぼったりと床に倒れた。牢番は舌打ちをして引ずり出し、又後手に縛り上げると背中をかゝえるようにして、今日も見物人が矢来の外で待っていて居る門前へと連れ出した。

歩く事も出来ず、身体を支えられてよろめき出た我が娘を見た太兵衛夫婦は胸を掻きむしられるように苦しかった。

「た、たえ、だ、だめだ、米は集まらねえ。」  
「云う事を聴いて、は、早く許してもらえ。」

その声も見物人のどよめきにかき消されてたえの耳には入らなかった。昨日のように木馬へ跨されたたえの両足には太縄が巻きつけられ、沢庵石程の錘が縛りつけられた、次左衛門は娘の側に歩み寄った。

「どうじや、早う云う事を聞け」

たえはかっと思悪に燃える目を見開いた。

「ち、畜生、けがらわしい。」

踏み台が音を立てて蹴倒され、ぼらりと囚衣が乱れ、娘の両足は棒のように突張り、ぶら下った石がはずみでぎり／＼と廻った。

「ぎや——っ。」

凄さまじい悲鳴が、見物人の肺腑を抉ぐった。

「た、たえ、たえ、」

太兵衛夫婦は夢中で叫んで矢来の竹を揺った。身をよじる事も、腰を動かす事も出来ず肉に喰い込み、骨を砕くような恐ろしい痛さに娘はぼり／＼と歯を噛み鳴らし、後手に縛られた指を苦痛にひし／＼と震わした。露わになった太腿に残る紫色の痕を見せて苦しみ悶える娘に見物人は騒ぎ出した。

「何んてこった。」

女達は目をそむけた。

「可愛そうに、ひでえ事をする。」

囁き声があちこちで聴え、涙を出して念仏をとねえる老婆もあった。

「云う事を聞か。」



たえの耳に次左衛門の冷たい声が聴える。  
「あ、あつ、痛い、く、くるしい、ひしっ」  
口から泡を吹き出し、目をひきつらせて娘は上体を捻った。

「あゝ、血が……、血が……」

見物人の口から恐ろしそうな声が上がった。  
木馬の背に鮮血が流れ出し娘の足を伝った。

「まだか、たえ。」

娘は悶絶した。足軽が急いで踏み台を入れて  
て手桶の水をたえの顔に浴びせた。娘は木馬  
の上で目を開く。

「それっ」

次左衛門の声にすかさず踏み台が倒され、  
又凄まじい叫び声が尾を引いた。哀れな娘は  
もうこの恐ろしい責苦に堪える事は出来な  
った。引抜かれるような足、腰から背骨、更  
に脳天に突き上げる激痛は意地も、恋人のこ  
とも何もかも吹き飛ばして仕舞った。  
「まだ、強情張るのか。」  
「ひーっ、く、くるしい、ひ、助けて、」  
「云う事を聞くか。」  
「あゝ、あゝ、……、き、きく、早く、な、  
何でも、何でもきく……」  
娘の悲しい叫び声が見物人の耳にもはつき

りと聞きとれた。次左衛門は勝ち誇った笑を  
頬に浮べた。足軽が踏み台を入れると同時に  
娘は再びがっくりと失神した。

◇

健康が回復次第奉行所に差し出す事を約束  
し、ようやく年貢米を借り集めた太兵衛は死  
んだような娘を戸板へのせて帰った。たえは  
一週間経っても起き上る事も出来ず寝床に呻  
吟した。十日目の朝、村はずれを流れる川に  
身を投げた娘の死体を早起きの百姓が見つ  
けた。

## 現代マゾヒズム芸術時評

原 忠 正



復刊第二〇項。米映画「ジャイアンツ」

主演 ロック・ハドソン

エリザベス・テイラー

ジエームズ・デイン

五七年の正月は、洋画二社が創始以来と  
称される大作を提供して、夫々覇を競って  
いるが、これはその一つ、故人となったジ  
エームズ・デインの狂気じみた人気に投  
ずべくこの時期を択んで上映されたもので  
ある。この作品を上映している東京の日比  
谷映画劇場は、これらのファンに囲繞され  
て賑やかである。併し、本項が、この作品を  
こゝに採り上げた理由は、故人となった一



人気俳優の「ヴァレンティノ以来空前」と称される昂奮の故ではない。この作品はシネマスコープでもなく、ヴィスタヴィジョンでもなく、只のテクニカラアの映画であるが、こゝに展開される物語は実に欧州の数ヶ国に匹敵する面積と地下に巨大な富を持つ米合衆国の一州たるテキサスの雄大な風土誌である。ここには二回の婚姻、二度の葬儀、五人の出生が含まれ、セダンの創始の時代のフォードのトラックと往時のロルス・ロイスの荘重な高級車に始まり家用旅客機に終る米国交通機関の歴史がある。人々のモードは一九〇〇年初頭に始まり現代に至る壮麗な服飾史の一節でさえある。そして数多くの龐大な内容物の中で我々に最も強く印象づけられるのは、この米南部諸州の雄たるテキサスが、有色人種に対する稀に見る偏見に掩われていること。そうしてそれが、この作品の全ゆる画面に様々な形で紹介されていることである。人種平等の名分を内外に掲げ乍ら、その内幕に烈しい黄色人種嫌悪の精神を持続している、この地方の伝統が終始一貫、この作品を貫いているのである。最後の部分で、エリザベス・テイラー扮する牧場主夫人の語る殊更に付会した様な人種平等の台詞は白

々しく、又夫人の息子に嫁いだメキシコ人の女性の侮辱される場面の背景に用いられた赤白青——自由、平等、友情のフランス大革命当時の象徴色——のトリコロールも効果空しく感じられる。メキシコは有色人である。この人種差別の観念は、その保有する豊沃な富に支持されるこの地方の白人優越の同定観念によって逞しく正当化されているのである。この作品の梗概を一々述べることは煩を避ける為に割愛しよう。

端的にいつて、中級の映画作品である。冗長な画面と、饒舌さに比べて効果の一向に上らない台詞、不鮮明な色彩、奇抜な御都合主義はこの作品を決して第一級のものとしていない。只、この中において巷間に噂される意味とは異った意味でJ・デーリンの演技が甚だ印象的である。この演技はまさしく我々がルイ・ジュウヴェの死後絶えて得られなかった質のものである。怠惰と傲岸、陰険と哀愁、そうして権威に対する本能的な反逆は、この作品全体の属する世界とは全く異質のものである。だがこの既成の権威と伝統に対する反逆の精神の持主たるこの人物すら人種差別は大前提として固守するのである。こゝに特異なテキサスの精神がある。

場面的に動物虐待の数場面（特に鋭い拍車で馬が虐めて虐め抜かれ脇腹から血を流し乍ら、まだ女騎手に拍車で責められる部分が迫力がある。）の他三四の女性サディズムの開花と見られる部分があるが、到底蕩々たるテキサス全体の有色人種に対する淫虐の雰囲気の中にあつては物の数ではない。筆者が再三再四渴仰の念を以って伝えたイリイナ・ブルデーモヴァ（ブルグリーモヴァは誤り）女史の属する帝政ロシアの誇らしく高貴な陰影に富むサディズムとは又違った植民地の粗野な魅力の期待すべき断片が此処に在る。

復刊第二十一項 芬仏合作映画 「野

性の誘惑」主演 マリナ・ウラディ

青春期の青くさいお色気が売物のマリナ・ウラディ主演の北欧の伝説映画。但し、時代はすべて現代に直してある。曾ってジャン・コクトオが非凡の才能と満々たる野心を以って世に問うた「美女と野獣」、「オルフェ」、「悲恋」などと同様に、超自然的の力を現代に再現しようとしたが、コクトオが映画史上最も注目されるべき名作を完成したのとは異り、余りにもお粗末な自分勝手な作品となつてしまふ。合作映



画としての缺点ばかりが目立つ様なものになつてしまつてゐる。

物語は、或る土木技師がフィンランドの富豪の未亡人が何の為か判らないが私費を投じて着工した大工事の監督に扱はれてフィンランドの田舎にゆく。未亡人クリステイヌは技師に愛情を感じるのであるが、工事の妨げとなつてゐる巨岩が靈石であるのに拘らず技師が皆の反対を押し切つてこれを爆破するので、石の中に閉じ込められていた妖精（マリナ・ウラヴィ扮）が現れて技師の心を捉える。妖精は全くの野女として描かれており、人智として認められる常識は殆んど持っていない原始人である。彼女は魔力を持つてゐるのだが、後に技師が結婚を迫り、そこで式をあげるときいて恐る／＼生れて始めて様子をうかがひに行つた教会で、村人に石を投げられて死ぬ。筋立てもこの様に乱暴であるし、妖精がキリスト教徒に嫌はれること、魔力は妖精自身の為にも、愛人の為にも重大な時に一向に力を現わさないし、妖精が、同時に未亡人の敷地に生活する一種のジプシイ乞食でもあること等々、不合理な点が多すぎる。森の妖精の超自然よりも話の超自然的な御都合主義が目立つて仕方がない。

本項は、この映画を二つの理由で採り上げた。一つは未亡人クリステイヌが技師とその前任者、それから仕事に携る人々に対する領主的な態度の故に、一つは、異種族被支配民族としての妖精とその母親に対する村人達の甚だしい優越的な態度の故にある。殊に後半、クリステイヌが妖精の小屋を訪れて立退きを迫る場面の中、鞭で妖精のアゴを突く部分、更に妖精に同情心を感じて最終部分で妖精を虐める村人達を馬車用の長い鞭で打ちのめす部分は場面的に印象深い。映画としては見るべき処は少いが序になら一度見ておいてよい。マゾヒストを刺戟する事は勿論である。

復刊第二十二項 米映画「モンタナ」

主演 エロル・フリン  
アレクシス・スミス

大分古い映画であるが、最近再映されるので簡単に紹介だけの意味で挙げておく。劇中、フリンが嘘をついていた事が判り欺されてゐた事を知つて激怒したスミス扮する女牧場主が、激しく乗馬鞭でフリンを打ち据える場面がある。此の時使用されるのが、現在アメリカで愛用される西班牙風乗馬鞭である。

#### 番外、雑記

(一) 時評で「鉄のペティコート」という題名で紹介した映画は正月一週よりロード・ショウで上映された。其の時の題名が「ロマンス・ライン」と変えられていたのだから、こゝにお知らせしておく。

(二) 筆者が、昨年の時評で採り上げた女猛獣使い「イリナ・ブルジョーモオヴァ女史」に関連してモククワのニュース誌（ノヴォステイ誌）よりスタイル写真の提供された事をお知らせしたと思うが、その好意に対して筆者の出した礼状が、同誌に掲載され、その雑誌の送付があつて、挨拶状が送られてきたので、こゝに大方の読者に御伝えしておく。

(三) 去る一月十三日『週刊サンケイ』別冊の人が来訪され変態性慾についての写真提供を求められたが先方が同性愛の中変装狂に特に希望があり、就中男性の女装（既に同誌では「ムッシュユウ・パリジエンヌ」という題で昨秋同様の企画をしている。）に興味を持つてゐる様に思われたが、実現の可否は別として、すでに勢威揚々たる新聞社が、変態性慾の一部について、世人の注意を肯定的に喚起しようとした意図は充分に認められるべき事である。





〔通信〕

## 最近の二つの話題から

近 藤

一

この処すつかり御無沙汰してしまいました  
が、地味な歩みを続ける奇クは決して私から  
離れてはおりません。昨年十二月号には思  
いがけず、私の拙文に五ページにも亘る誌面  
を割いて下さり、本当に感謝致しました。早  
速お便りすべき処でしたが、感冒に悩まされ  
かつまた雑事に追われどうして失礼してしま  
いました。

只今、私の文机の上には、十数回も繰返し  
読了した奇クが、昨年十二月号、本年一月号  
二月号と三部載っています。思いつくままに  
読後感を記してみたいと思います。どの記事  
も独得の印象を与えてくれましたが、私の性  
向に合致し強く心に残ったもののみを挙げる  
に止めて、お許し願いたいと思います。先ず  
十二月号ですが、やはり表紙にまでタイトル

あゝの「沈黙の館」は結構でした。些かサド  
に走りすぎたためか、構成として突飛な点や  
(例えばイネスの逮捕や処刑)説明の欲しい  
点(教会における審問)がありました。奇ク  
にマッチした力作だと思います。欲を  
云えば夫人が罰として緊縛台にかけられ、  
虐げられている絵があればと思います。イネ  
スの処刑の絵は実感に乏しい気がします。如  
何かがでしょう。いつも北原さんばかりに当  
るようですが、私は最近、死刑(絞首刑)に  
関心を持っておりますので、あれでは直感に  
訴えるものがないのです。吊り綱の上部を見  
せるのも、吊り上げの進行を描くのも、また  
イネスが僧の祈りを受けながら台上に立つて  
首へ縄をつけられる処を写生してもよかった  
と思います。この他では、林靖彦氏の文が印

象に残ります。藤見郁氏の御労作には敬意を  
表すると共に感謝します。久留木栄氏の文に  
は健康な社会人としての落着きを感じられ、  
以前から好きな筆致でした。何か古川さんの  
筆致に繋がるものがあるせいかも知れません。  
藤山秀緒さんの作品、今度は女武者ですが一  
向に惨酷に感じられない処をみると、私も女  
腹切の魔力に魅せられ始めたのでしうか。  
一月号については「電気責めに関するノー  
ト」(甲斐仁参氏)を賞讃しておられた方が  
ありました。確かに同感です。順を追って  
みますと、藤見郁氏の労作は本当に感謝にた  
えません。北原さんの作品、この度は文句な  
しです。私にとっては十分楽しめる傑作で、  
画も立派でした。真木不二夫氏の作品は第二  
部ですが第三部が待たれます。八五号の生活



描写を期待します。日下絹子、旭森薫、本田由郎、岸本青柳、鷹野めぐみの皆さんの愈々御健勝御活躍をお祈りします。さてシナリオの丘与志夫には京都の堀田氏と同感です。藤山秀緒さんは乗馬服の切腹ですが、内容が同じものながら繰返して読ませられるのは、妙な魔力とでも申しませうか。

二月号では藤山(二篇)、北原、鷹野の皆さんの作品、いずれも続篇が期待されます。白金紅次氏のシリーズは長い間、楽しませて頂きました。立派な挿画で、正に有終の美を飾ったと云えるでしょう。丘与志夫氏の今後の作品に期待します。岸本青柳氏の作品、実感において抜群ですが、写真の限り氏の女装は女教員に勝るようですね。巻頭の口絵では第一が十二月号の滝れい子デッサン、続いて同号の「いでゆ」の右頁の絵と、一月号「お灸せめ」が優れていました。映画のステイールでは、やはり高峰三枝子が絶品で、あごからのどへかけての豊満な肉のくびれなど素晴らしいものです。

二月号、一四三頁所載のイビキ防止装置については、日本写真新聞の十二月二十六日号にあった筈で、私もお便りするつもりで、時機を失してしまいました。確かに有効な猿轡になるでしょう。同じ頃、やはり婦人モデルで、ロンドンのスモッグ除けがあったと思います。

昨年末から年始にかけ、池袋のアヴァン座では軽い責め場を扱った劇を演じておりました。二月号所載、本田由郎氏の「異人屋敷の裸女」の続篇で「魔窟X荘」というタイトルでした。正月興行の「はりつけ裸女」では若草瞳(四日は代役の銀幸子)のキリシタンが十字架にかけられ、火に焙られながら竹槍で刺されるシーンがありました。この座は二、三を除いて女優の演技力がゼロに等しいのであまり期待なさらないほうがよろしいと思います。詳細は本田氏のレポートに俟ちたいと思います。

美空といえば、ひばりちゃんの事件が話題になりましたが、恐らく諸氏から通信があったと思いますので、私は反響の一部をお伝えするだけになりたいと思います。私は単に嫉妬憎悪に因る傷害行為と断じていますが、刑法的にも、加害者の少女をサドだ変態だ異常だときめつけるのは不得策ではありませんか。尚、斎藤署長は誠実剛直な警察官として尊敬しており、また望月教授は私淑する学者ですが、余りにも旧派的態度をとられたことを遺憾に思います。

もう一件のレポートも通知済でしょうが、若い女中を裸にした上で、マッチの火で胸や首や手足を焼いたり、更に口に絆創膏をはって食を断ったというのは些か手がこんでいますし、またその女中もされるままになってい

たとしたら、縄や鞭や猿轡のせいばかりでもなからうと興味を持ったものです。容疑者が妊娠中でもあり経済力もあるようですから、示談で不起訴になりそうですが、どうなりますか。

世間は広いようで狭いと申しますが、全くその通りですね。読者通信の森本信一氏と私は、かつては善国寺坂一つを隔てて居たようです。私は木村氏をよく存じておりますがその故か、森本氏のために良き同好者が現われるよう祈ってやみません。大分長くなりました。いずれまたお便りすることにして今日はこの位で擱筆しますが、衷心より奇巧の健闘を祈るものであります。

## 〔新聞の切抜〕

### 美空ひばり塩酸事件

(一月十四日附八毎日新聞/朝刊)

K子は興奮しきっているため取調べは困難である。ただメモ帳にマジック・ペン書きで「ひばりちゃんに夢中になっている。あの美しい顔、にくらしいほど。みにくい顔にしてみたい」とあり、別のページには

「ひばりちゃん、ごめんなさい。ひばりちゃん、こんな姿になり全国のファンおよ



びそれ以上に家中のものが悲しむことである。ひばりちゃん、私は本当に悪い人間です。ひばりちゃんがみにくい顔になって……」

など、ときれとぎれの異常なフアン心理がつづられてあった。

斎藤浅草署長は「同性愛のサディズムか、ゆきすぎたフアンの独占心からか。いずれにしても変態的な異常心理の兆候だ。極度に興奮しているので自殺のおそれもあり、詳しい取調はもっと落着いてからでないと危険だ」と語り詳しい取調べは十四日、興奮がさめてから行なうことになった。

(一月十四日附八毎日新聞V朝刊)

## 愛するあまりの異常心理

千葉大教授望月衛氏の話 三島由紀夫氏の「金閣寺」と同じケースだ。愛するあまり心理状態がゴツチャになり、美しいものを傷つけようという気持が起ってくる。人によってサディズム、マゾヒズムがあるように、一種の異常心理で、食べたいほどかわいいなどというのがある。

(筆者註) 後刻本人の自供で、羨望、嫉妬に因る憎悪ということになった訳です。

(一月十六日附八毎日新聞V朝刊)

## 犯人の少女送検

### ひばり事件

美空ひばり事件の犯人板橋区本蓮沼町吉原さん方女中のK子(一九)は十五日傷害、器物損壊の疑いで浅草署から送検された。取調べの同署田村刑事係長らは「非常にすなおなお子だがやはり少女特有の異常心理で事件を起したものだろ」といっている。地検で一応調べたのち家庭裁判所へ送られ起訴するか保護処分するかを決定する。

(筆者註) 「少女特有の異常心理」というのは、一体どういう意味でしょうか。

(一月十八日附八毎日新聞V朝刊)

## 「あれこれ」欄

◇浅草国際劇場のショー出演中の人気歌手三橋美智也が十七日、浅草署の斎藤署長ら幹部にサイン入りの色紙五枚を贈った。

◇十三日夜の「ひばり事件」以来神経をとがらせた同署では人気歌手や俳優のまわりに制私服警官五人を派遣しているので、そのお礼心だそう。

◇色紙は署の幹部が一枚ずつ持ち帰ったがミィーハー族に塩酸をかけられて、色紙争奪事件の起らぬため名前だけはひらに……というの

が同署警備係の弁。

(一月十九日八毎日新聞V夕刊)

## 《「茶の間」という困い記事》

塩 酸 望月 衛

欲求不満がおきたときに、それをどのような形で解決するかは、個人によってそれぞれの特徴がある。他人をシットした場合をとってみても、陽性に暴れるのあり、だまって白眼を向けるのありで、どう方法をとるか傾向がすなわち個性である。

それは文化によっても異なる。ある未開の種族では、相手をやっつけるのに、悪口の歌合戦をやって勝負をつけ、またある種族では相手の前で自分の持ち物をすてたり、こわしたり、他人にくれたりして、勝負をきめる。男と女とをくらべると、男の方が、物にアタるといわれる。おぜんをひっくりかえし、茶わんを床にたたきつけたりなど。会社でクサッタあげく、ワイフをなぐったりするのなどは、ワイフを器物と心得てのことか。男の子は、教師や親にしかられたりなどと、こうした親父のやり方をまねしたり、また悪いのになるとレールの上に石をならべたり、家に火をつけたりする。女の子は、この種のいたずらはしない。その代りには、むしろ人にアタるといわれている。



陰口、悪口、意地悪などはそれである。

金閣寺に火をつけるなどのことは、男のやりそうなことの最もだいそれた行為であるのに対し、羨望（せんぼう）とシットの対象に塩酸をかけるのなどは、どちらかといえば、女のやり口であり、男は不得手である。犯行をくらすために被害者をバラバラにするなども、男は必要上やるのに対して、女は必要以上たんねんにやることもある。

なんだか話が気持の悪いことになってしまったが、不満のはけ口や、犯人の手口は、ひとのすることをまねするのではこまる。罪のないクイズや、パチンコがはやるほうが始末がいい。だが、結局の問題としては、我々の不満の出どころをつきとめることだ。

（千葉大学教授・社会心理学）

（筆者註）この記事では「羨望と嫉妬」になっています。

## 女中虐待事件

（一月八日附八毎日新聞／朝刊）

### 虐待されて半殺しに

女中さんの母親が訴え

【横浜】女中奉公に出した娘が主人から殴るけるの暴行を受け、そのうえ時々食事を与えられなかったため左目がつぶれ、右腕が折れてしまったと六日夜母親の横浜市戸塚区

上倉田町二三〇角津満智子さんが泣いて戸塚署にかけこんだ。主人は港区麻布西町一七、斎藤アスベスト会社社長斎藤栄一郎さん（三三）と妻良子さん（三〇）で、同署では二人を不法監禁、暴行、強迫の疑いで取調べる方針をきめたが、斎藤さん方では全く事実を否定。どう感違いをしているのだろうと語っており、警察でも奇怪な事件とみて背後関係などを捜査することになった。

母親満智子さんの話によると長女の玲子さん（二一）が去る二十九年十月斎藤家に住込んだ直後、お客の金を盗んだ疑いをかけられ以後夫妻からことごとく難くせをつけられはじめた。そして昨年二月ごろから十二月ごろまでの間に同夫妻から棒、えもん掛、オモチヤなどで顔や頭を殴られたり、火のついたマツチを首、胸などに押しつけられ、あげくの果てには口にばんそうこうをはられて何も食べさせられないなど、あらゆる暴行を受けたといっている。玲子さんは去る三日母親が引き取り現在戸塚の共立病院に収容されているが左目失明、右腕骨折、栄養失調などで生命危篤である。

### 乱暴など何か感違いでは

斎藤良子さんの話 玲子さんは大森の職安から三年間の契約で来た。親もなく似たお金をおじさんにとられてしまうというので、か

わいそうだと世話していたが、時々金を盗むクセがありてこずった。昨年秋、十五日間の契約で休みをとったが、二カ月たっても連絡がなく十二月二十三日ごろ帰って来た。その時は体が悪くなっていたので去る四日お母さんに引き取ってもらった。その時は「病気がなおったらまたお世話になります」とていねいなあいさつだったので、どうしてこんなことになったかわからない。三人の子供をかかえており、教育上そんなにひどいことができずるわけもなく、また多少怒ったことはあったが、実際に暴行を加えたことはない。何か感違いがいしているのではないか。

沢田戸塚署長の話 事件になるかどうかかわからないにしても相当ひどいことになっている。妻良子さんに対しては八日にでも逮捕状を請求し、栄一郎氏も在宅で取調べる方針だ。

斎藤さんの近所の魚屋さんの話 八月ごろまで出入りしていたがときどき手に傷をしてホウタイをまいたり、髪の毛もばさばさで、あんな立派な家の女中さんにしてはおかしいと思ったことがある。

（筆者註）左眼失明、右腕骨折、栄養失調、

というのは、縛り上げて殴打したものか、或は吊した挙句、何か物の角のような処へ倒した拍子に左眼を打ったものと思われる。更に昼夜を分たず仕置したための栄養失調でしよう。魚屋さんの話からでも縛り上げたまま長



時間放置し或は折檻し続けたらしいことがうかがわれます。

(一月十二日八毎日新聞夕刊)

## 女中虐待の社長宅搜索

主婦も不法監禁で取調べ

既報「女中に出していた娘が虐待された」と横浜市戸塚区上倉田町角津吉松さん(五二)が神奈川県戸塚警察署に訴え出た「女中虐待事件」について、同署では十二日午前八時から午後まで角津さんの長女玲子さん(二一)の奉公先だった港区麻布西町一一斎藤アズベスト会社社長斎藤栄一郎さん(三一)方の家宅捜査を行なった。容疑者である斎藤さんの妻良子(三〇)は妊娠七カ月なので逮捕せず在宅のまま不法監禁、暴行傷害の疑いで取調べた。

調べによると被害者の玲子さんは二十九年末斎藤さん方へ住み込んだが、客の金を盗んだと疑われ洗たく板、衣紋掛けでなぐられ、裸にされてマッチで手足を焼かれるなど虐待されたという。玲子さんは戸塚病院に入院中だが左眼は失明して重態である。

(筆者註)洗濯板をどう使ったのでしょうか。

(一月十四日八毎日新聞夕刊)

## 妻から事情聴取

女中虐待事件

〔横浜〕女中奉公中主人に虐待されたという横浜市戸塚区上倉田町、角津吉松さん(五二)の長女玲子さん(二一)の暴行傷害事件を捜査中の神奈川県警戸塚署では、さる十二日玲子さんの奉公先だった東京都港区麻布西町一

## 女装愛好者の方へ

滋賀雄二

演劇関係や男娼など、特殊な職業以外の者で女装を愛好する事はなかなか難しい。若し露見すると、その本人は家人や世間から変態者と見なされてしまうからである。

然し世の中では、素人の方で女装を愛好する人が以外に多いのである。筆者も男が女装するのが好きで、幼時、芝居の女形や祭

に出る女装者を見物しては、胸をとどろかせたものである。終戦後、新聞や奇ク、人間探究、風科、あまとりあ、風草等の雑誌で女装に関する記事や写真を見ると、矢もたてもたまらず、早速連絡し、文通や面会して、この悩みを語り合ってきた。

さて、一昨年十月、遂々小敷であるが、この女装愛好者だけで、小さな秘密の会を結成することが出来た。現在三十名の会員で毎月パンフレット程度の会報を発行し、お互の連絡を取っている。

一斎藤アズベスト会社社長斎藤栄一郎さん(三三)の家宅捜査を行った結果、暴行傷害容疑の濃くなった斎藤さんの妻良子さん(三〇)を十四日午前十時から東京都内某所に任意出頭を求め、当時の事情を調べている。

筆者が女装愛好者の小さな会を結成出来た大きな原因の一つに、奇クの編集に対する熱意に動かされた事を挙げ得ると思う、奇クが永年に亘って、人間の本能と取り組み、我々読者に光を与え、且つ指導的立場を堅持されたその努力に、筆者は強く心が動かされたからである。

次に筆者がこの記事を本誌に寄せるのは会の宣伝の為ではない。女装に悩んで居られる方達へ、この様な会のある事を知らせて安心して貰いたい一念からで他意はない。そして男が女装する事を、罪悪かの様に考えることを改めて欲しいのである。女装愛好者の方へ特に申し上げたい。女装する事は人間の倒錯的本能の現れであって、これは何も悪い事ではない。只、この事と社会生活とをうまく調和してゆく事が大切なのである。



# ある夢想家の手帖から

沼 正 三

## 第百六 司令官夫人のこと

禁を破って自分のことを書いたついでに、私の最初にして最大のドミナのことに少し触れておく。正直な話、彼女のことを書くのは気が進まぬ面がある。それは、もし単なる虚構としか受け取られなかったら、彼女に対する冒瀆だろう、という気がするからだ。冒瀆ということばを使ったが、それが私の気持ちに不自然でないほど、思出の中の彼女は神聖なのだ。彼女は私の女神なのである。その名前も私に取っては諱<sup>いみな</sup>であって、筆に出来ない位だ。そんな彼女のことを書いて私の空想の産物視されたくない。然し文士でない私は、実際にこんな女性が実在したと納得させる叙述をする自信がない。殊に、公刊誌としての多大の制約を考えると具体的記述が殆んど望めぬのだから尚更だ。

然し、こういう躊躇にも拘らず、敢てここに書くのは、既に本誌上の長年の寄稿者として文献による実録と空想に基く創作とを峻別して来た私の実績というものが、多少は私の味方をして呉れるだろうという期待を持っているからである。

地名も部隊名も書けないが常夏の国のある中都市。英軍に降伏して武装解除され、駐屯自活で復員の日を待っているある部隊の部隊本部で庶務の仕事をしていた私は、部隊長から直きく英軍司令官宅伝令勤務を命ぜられて色を失った。というのは、三日前に私達は、以前の部隊長宿舎として勝手知ったその家に戦友の死骸を引き取りに行ったばかりだったからだ。

司令官宅伝令勤務というのは、名目は英軍からの命令伝達を確実に迅速にするということになっていたが、別に将校が日直で昼の間司令部に詰めて命令を受けてくるので、その方の用事は全然ない。半月程前司令官夫人が本国から来て司令官宅に落ち着くとすぐ、「英語の分る兵隊を一名出せ」と向うから要求して来た。学歴が大学というのは兵隊中で兵長の私と上等兵のKだけなので、庶務の要員であり、兵長にもなっている私が残って、Kが出たわけであった。将校当番は兵隊ならどんなものか知らぬ者はない、Kの場合も、下男代りになるのだらうと思われたが、夫人は、司令官が二度の勤めとすぐ分る老体なのに比し、意外に若い人だという噂があつて、艶福を想像する向きもあったのだ。



そのKが射殺された。誰が何で殺したのか、何も知らせられない。唯引取に來い、というのだ。Kの小隊から使役を出して私が指揮して行った。裸に布が掛けてあり、服の包みが別にあった。現地人の召使との応待だけで早々に引き上げて来たが、後味は悪かった。死体は胸に一発受けていた。後から考えれば、鞭の痕なども捜せば見当ったのだろうが、その時は氣附かなかった。復員を待たずに横死したKが可哀そうだった（部隊記録ではK上等兵は戦病死となっている筈である。Kの遺族の人にも真相は知らせないことに当時部隊本部で決めたのだ。）

そのKの代りに私に出ろという命令なのである。会話教育を受けていないから、英語を学ばぬ連中と同じなのだが、学歴があるから退き引きならぬ。「兵長に当番はさせたくないが、祖国のためだ、行って呉れ」と部隊長に言われては断れない。終戦後も軍紀の保たれていた部隊で、命令は絶対だったのだ。

然し私は死にたくなかった。復員したかった……その氣持を察する様に、部隊長の説明したところでは、Kの殺された理由は命令不服従ということだが、実際には司令官夫人に怪しからん行動にでもらしく、それが理由で夫人に射殺された、と召使が通訳に話したそう。こちらが慎んでおれば心配はいらん、多少無理を云われても逆わず、部隊の為にもお前の為にも服従第一で行くんじや、……こういう話であった。

まず司令部に行つて、老司令官に申告した。通訳を通じて「すぐ自宅に行け。私の妻の許へ。召使達と無駄話するな」といわれた。通訳が本宅まで送つて来て、夫人に新らしい当番兵として私を紹介して呉れた。

年恰好、容貌、姿態等は「家畜人ヤプー」の中のポーリーンと同じである。（むしろポーリーンこそ彼女を理想化した小説人物なのである。）

「お前は私の用をすることになっている。この前のKのあとを継ぐのだ。私の命じたことだけすれば良いから、余計なことをするな。無駄口をきくな。分らぬことを訊ねる時はW（召使の名）に訊け。服を更えて来い」

赤い小さい唇がペラ／＼動くのがそう通訳された。Kがこの夫人に失礼なことをしたため射殺されたと聞いたことが、途端に思い出された。私は正面からシロ／＼見られて目をそらした。

Wから輕装の服を貰つて着更えて、もう一度この部屋に入つた時は、通訳はもう居なかった。会話には自信がないが弱つたなと思つた。室の中央に立つ夫人に指で指示されて床の絨氈の上に正座した。手に鞭が……と氣附いた瞬間、頬にピシリと一発あてられた。今でもこの時のことを思うと、身体中が煮えくり返るほど昂奮して来るのである。

初年兵以来、肉体への暴力は随分経験していた。学歴があるので変に憎まれて、他人が上靴でやられるところを鉄を打った編上靴の底で撲られて唇を裂いたことさえあった。然しこの時の鞭から感じるのは、それとは全く異質な痛みだった。白人から鞭たれたからか、女性から鞭たれたからか、本物の乗馬鞭で鞭たれたからか、捕虜として征服者に鞭たれたからか……初めての条件が輻輳するのでそのどれであるかは分らない。恐らくそのいずれもであつたろうし、又彼女自身に特殊の魔力があつたのかも知れぬ。とにかく、この時私は、灼けつくような顔の痛みと同時に、かつて味わつたことのない一種の陶酔感に囚えられた。全く抵抗する力なしにこの女の鞭を受けねばならない。何の為に与えられる鞭かも知れぬ。唯この自分の身体は今後この女の自由ひそおもしろにされる……云うことを聞かなければ射殺されてしまう。——涅槃ニルヴァーナというのがこんな氣持かも知れない。自分の主体性がゼロになつてしまつた、という恍惚感、これを感じたのだ。



これが私のマゾヒストとしての誕生である。少年時代のことを考えるとマゾ的素質もあったことは自覚できるが、この時まで意識的ではなかった。それがこの鞭で目覚めさせられたのである。それ以後の私はマゾヒストとしての自分を片時も忘れたことはないのだ。

勿論、この一鞭で完全に目覚めたのではない。第一、素質的なものといってもその趣味の態様まで潜在しているわけではない。だからそこには無限の可能性がある。いわば私は粘土であった。この一鞭で粘土に水を与えた彼女は、以後思いどおりにこの粘土をこねまわした。そして私というマゾヒストの一生の関心事を規定してしまつたのだ。恐しい宿命というべきか、楽しい呪縛というべきか、ともあれ、彼女に別れて以来も、私は彼女に仕込まれたこと以外には、殆んど関心を懷き得ないでいる。犬と便器が私の最も愛好する主題であることは、手帖を一貫して読まれた方には明白であろうが、それは彼女が私を馬にするより犬にしたからだし、緊縛して鞭撻する代りに排泄物によって凌辱したからである。

彼女が渴きと餓えとを手段として私にそういうものを口にすることを仕込んだ詳細を書くつもりであったが、検閲を顧慮して筆を矯めながらでは、充分に書けないから、残念ながらやはり省略する。時勢が代つたら是非書くつもりである。宣教師が神について語りたいのと同じく、私は彼女について書きたいことを無限に持っているのだから。

## 第七百 トローペンコレル

欧州人（白人）に熱帯の氣候が作用すると、性的快感を伴う特殊な残酷性を惹き起す。これがいわゆる「熱帯性狂暴症」<sup>トロピカルモラルインセンシティ</sup>「Tropenkoller」である。その心理的原因是複雑だ。トローペンコレルを爆発させるのに好都合な色々の事情が協力している。

先ず第一に、このトローペンコレルの起るのは、殆んど例外なし

に、本国では持つて居なかつた大きな権力を賦与されて、熱帯にやつて来た官公職にある白人だということである。それも、半ば畜生の様に、或いは全然畜生と同じに、見たり取り扱ったりする「劣等な」種族が相手に、文明人なら全く心の赴く儘に行動することのできる、慣習道徳や本国での社会的つながりなどの諸制約が一切除去された土地に来た場合が多い。（この観点を特に強調するはフェリックス・V・ルシヤンである。）

同様に無視し得ぬ重要さを示すのが氣候の影響である。尤も、ハンス・V・ベッケル説のように、高氣温が新陳代謝障礙を惹き起し、更にこの障礙から毒素が形成され、かくて中枢神経や精神が害われて、「熱帯性背徳」<sup>トロピカルモラルインセンシティ</sup>即ち、美的道徳的原理の完全な無価値化を伴う病的衝動をもたらすのであるか、それとも熱帯衛生学者ブレーンの説の如く、異常な高温、慢性酒精中毒者においてのみ「トローペンコレル」の形での激発を招来するのであるか、は別問題だが。いずれにせよ、この後者においては、極めて嗜虐的<sup>サディスティック</sup>な行為が時に屢々特徴的であることは、どこの植民地醜聞でも明らかとおりでである。これに関連して云えば、奴隷制や農奴制が、一般に、一個人が他の人間の身体なり生命なりの無制約な処分権をもっている様なすべての制度が、昔から、嗜虐的本能を生み、育てることがいかに甚だしかったか、今更説明を要すまい。

× × ×  
 以上はいワン・ブロッホの「現代の性生活」の一節を逐語訳したものであるが、私は、司令官夫人の私達に対する態度を説明するには、このトローペンコレルの概念を以てする他にはないと考えている。右の記述は男女を区別していないが、これが白人女性にも適用しうることは言うまでもない。本誌連載中の「残酷な女性」の第二章「奴隷所有者としての女性」の中には、これを確認させる資料が沢山示されていたのを読者は記憶しておられるだろう。例えばシェ



ルヒエルの著書から次の様な文章が引用されている。「今迄は極めて温良だった女性達が植民地においては特殊な加虐の欲望に襲われる……」

夫人の場合を考えて見よう。次項で述べる様に彼女は南阿連邦の生れだったが、嫁して後は英本国に居た。そこからこの赤道近い南洋の都市に來たのである。寒帯人種が熱帯に來た時の新陳代謝異常は程度の差こそあれ、勿論あっただろう。しかもそればかりではない、身は司令官夫人として捕虜に対して絶対の権力を以て臨み得た。日本人一般は、先の文章に云う如き「畜生同然の劣等種族」ではない。しかし、ここでは彼等は捕虜であつた。捕虜を相手に彼女は「全く心の赴く儘に行動することができた」、しかも戦時中の敵国民に対しては「慣習道德の制約も除去されていた」面がある。……夫人が、本国時代に全く知らなかった権力意識に酔い、知らず識らずその病的過剰状態に移行して行つたと考えて、不自然はない。もとより彼女を傷けることにもならぬと思う。

勿論、初めから、私に対してそうであつた様な極端な症状ではなかつたろう。然し、無抵抗の捕虜であるKを使役する中、これを凌辱することに快感を覚え始めるに至ると、次第に症状は昂進したに違いない。Kは初めの中こそ、捕虜の身の悲しさ、否も応もなく服従してゐたであらうが、その服従によつて更に昂進した夫人の一段と屈辱的な要求に、遂には応じ得ぬという所まで行つたのであらう。私のようにKの死を見ている者には——或いは素質も手伝つてだらうが——越えられた一線を彼は越えられなかつたのだ。然し、その拒絶は、彼女に対し「怪しからぬこと」であつたから、彼は射殺された。そして、彼を射殺しても何の咎も受けなかつたことが、逆に彼女の権力意識を一段と強化したことであらう。「女は、そのための権力を持たせれば、あらゆる方法で男を奴隷として用いるのに躊躇しない」とは、アルフレット・キンツの結論であるが、正にその

好適な実例として、彼女が権力の自覚によつて変貌した時、私が行った。彼女は、最初から鞭によつて私に臨み、漸進的過程を省略して、いきなりKの後継者として私を取り扱い、思い通りの者にまで仕込んだのだらう。

Kも、私も、彼女のトロローペンコレルの犠牲になつたのだつた。だが、文字通り大死したKと、生きながら便器にされながら、その便器だった生活を「生涯の最良の日」として想起する様な精神状態——恐らく今後死ぬまで癒るまい——に墮し終つた私と、どちらかが本当に幸福だか、それは疑問である。

尚、最後に一言「アリスの様な町」という英国映画でも明らか様な、日本人の英人虐待が英人の復讐欲を唆つたことは否定できない。この種の虐待で、夫人の親戚でも死んでゐたとすれば、それ丈でも彼女の私達日本軍捕虜への虐待は説明できるかも知れない。然し、それは私には全く擲めないことだから、私としては、そういう想像を排しても、つまり復讐という様な残酷行為への強力な動機なしにも、尚充分納得のできる説明を求めざるを得ないのだ。それがトロローペンコレルなのである。

## 第百八 南阿連邦の人種差別

司令官夫人はトロローペンコレルの状態にあつたのだらうと、私は推測するのだが、この状態に彼女が容易に陥つたのには——前記の様な、征服者対捕虜の關係とか考え得られる復讐心理とかを離れて——彼女の出身地も一役買つてゐたに違いないと思われるのだ。彼女は南阿連邦の生れであつた。私は仕えてゐた頃既にそのことを知つたのだが、右の様に、その生国が彼女のトロローペンコレルの一因を成したと考えるに至つたのは近年のことである。というのは、南阿連邦という国がどんな国かということを近年まで私は知らなかつたのだ。



南阿連邦は現在世界の文明國中、人種差別を合法的に制度化している唯一の国である。成程アメリカにも人種差別はある。南部諸州での白黒共学反対の騒動でもそれは分る。然し少くとも世論の上では、人種差別の声は強くは聞かれない。大多数の米国人は黒人を輕蔑嫌悪しているが、その感情の声を一旦抑えて理性に発言させることを知っている。ところが南阿ではそうでない。前首相だったマラソン博士はこう云ったそうである。「黒人には家は無くても良いではないか、彼等は樹の下で寝られるのだから」

こういう言葉から窺える様に、為政者が明らかに差別待遇を政策としている国だ。「貧乏人は麦を食え」が失言となる国では想像もできないことだが。暑中休暇に英本国に旅行した南阿の少年少女達は、市中で白人と有色人とが同じバスに乗ったり、同じレストランで食事したりするのに吃驚したというが、その位、すべての点で差別待遇が徹底してるのだ。郵便局の入口迄欧州人用と非欧州人用とドアが違うそうである。(ドアが違うのに中の窓口は共通の場合もあるらしい。それを嘲笑的に書いている旅行記もあるが、然し、そのドアの違いが非欧州人への劣等意識育成に対して持つている効果はやはり無視すべきでないと思われる。)

「家はなくても良い」黒人達には、不動産の所有権がない。それどころか、彼等には居住の自由さえない。黒人部落は、首都の中心部から十里離され、部落相互間は広い原野になって連絡は不可能になっている。電話で、と思うかも知れないが、電話は公用電話が部落全体に一つ許されている丈で、私用電話は全くないのだ。部落間の道路は真直ぐだ……と云えば聞えが良いが、実は、いざという時、道路の一端から銃砲による掃射が利く様に設計されているのである。こういう部落以外には住む所がない、のみならず、地方官憲は中央の命令なしに、独自の権限で、好ましかる黒人を移住させることができる。つまり自分からは動けず、他から動かされるので、

まるで昔の農奴見たいなものだ。

彼等は社会の下層から絶対に浮び上れない。肉体的勞働以外の職業には就労できないし、非熟練勞働者の九八パーセント強を占めていながら、組合活動が禁止されている。勿論選挙権もない。人口の圧倒的多数を占める彼等の利益を代表するためには、二四八人の議員の中から、たった七人が任ぜられているが、七人共白人であって、利益代表といっても形式的なおぎなりに過ぎない。だからマランに次ぐストリッド首相がアパライドを徹底して、全土中不毛の一四パーセントに黒人共を押し込め、都市のすべてを含む沃野八六パーセントの白人区から全然黒人を占め出すという法律改正を企てた時にも、何の反対意見らしいものも出なかった。

南阿の人口千五百万人中欧州系は二百五十万人足らず、六分の一の白人が残りの非欧州人を支配しているのである。(こういう数字は南阿に限らず、アフリカの各植民地にも妥当する。例えば、ガンサーによれば、一九〇一年にはケニアの白人は十三人であったが、今は二万人に増えた。この二万人が沃野農地の殆んど全部五百万エーカーを所有し、残りの五百五十万の土着黒人を猫の額ほどの土地に圧迫しているのである。(尚ケニアの状態は『デラメア卿と白人帝国ケニアの成立』(英文二冊)に詳しい。)

ほんの一握みの白人達が圧倒的多数の黒人達をこの様に圧制しているのである。沖縄の米軍が農地を潰して柵を作りゴルフ場にしてしまった様な、横浜の山下公園が接収されて白人専用の住宅地になってしまった様なことが大規模に行われ、日本人は狭い所に居住を強制され、白人の所有する土地の小作をするか、白人の経営する会社の工員や鉱夫となるしか許されず、高級社員も、官吏もすべて白人のみとなり……要するに、征服者たる白人達がこの日本の国土の上に白人の為の白人国家を建設しようとしたら……私達マゾ族にとっては魅惑的だが、大多数の日本人は黙っておるまい。暴動にな



るだろう。では何故、これと同じことが行われている南阿で、暴動が起らないのだろうか。

その一つの理由は文教にある。どの学校も黒人を劣等種属と教え、彼等が自分を劣等だと意識する様な教育方針を取らぬ限り、閉鎖される。ミッジョン・スクールと雖も例外でない。それに南阿連邦の国教「オランダ教会」では「神は白人と黒人とを別々に創り給うた」という教義を取っている。勿論白人を支配者にする様に創り給うたというのだ。奴隷制時代の米国南部諸州の話聞く様だが、二十世紀の現代の話なのである。こうやって教育と宗教の力で、幼い時から劣等意識を植えつけられているから、優秀な白人に取って代ろうとする気持が全然ない。又高等教育を受けられぬから、実際に取って代る丈の能力もない。

然し、一寸の虫にも五分の魂で、いくら劣等種族でも、こうまで踏みつけにされては、蠢動する者が出て来るのは当然である。これに対処する警察制度が、暴動のない第二の理由だ。前記のような部落配置であり、危険な奴は移住させ得る外に、逮捕が非常に容易である。黒人への禁令は緻密な法網になっていて、警察がその気になれば、有罪の理由はいくらでもあるのだ。あまり頻繁なので、南阿黒人の間には、監獄に入れられても別に恥でない、という思想が行きわたっているが、この気風の馴致こそ政府の望むところで、監獄の囚人を農業用、鉱業用労働者として使役する国としては、兇悪犯でない囚人が増えることは労働力の増強として歓迎されるのである。

こんな国にいたくない、と思っても国外移住の自由はないのだ。南阿連邦は白人の国だと言いながら、白人達はこの下等労働力の供給者達を国外に放逐する気はちっともないのである。

一生社会の下層から浮び上れる希望なしにその土地に縛られていなければならぬ。面白くないから酒でも呑みたいところだが、ど

っこい、黒人には酒も許されていない。カファビールと云って、アルコール分二パーセント以下で、しかも変な味のする擬いの酒を少量許される以外は、すべての酒場から黒人は閉め出されている。黒人は酒を飲むと暴れるから、という理由である。多くの娯楽施設が彼等にとってオフ・リミッツになっていることはいうまでもない。

詳述すればきりが無いから止めるが、南阿連邦の黒人差別分離はこんなひどいものである。南部諸州の黒人問題を抱えている米国人でも、この公然たる圧迫には驚いている位だ。米国の黒人その他の被圧迫民族が少数民族として国民の多数を占める民族から迫害されているのと異り、ここでは少数の外来民族が多数の土着民族を隷属させているのであって、それ丈に、周囲の多数者に同化吸収されまいとするからであろうか。再びマラン博士の言葉を引けば「皮膚の色の違いは相容れぬ二つの生き方の相違を肉体的にあらわしたものに過ぎない。野蠻と文明、異教とキリスト教、圧倒的多数とほんの一握りの小人数……」

有色人に対するこの恐ろしいまでに強烈な特権的優越意識こそ、南阿連邦の白人を特徴づけるものである。学校教育や宗教教義が黒人の意識にもたらす効果は、正反対のものを白人の意識に及ぼす。彼等は肌の色で人間の本質的価値を区別して疑わない。

戦争から復員した当座は私は南阿連邦について、殆ど何も知らなかった。只司令官夫人の生国として関心を持ったので、以来耳目にふれる資料を調べ中、次第にこういう実情を知り、それにつれて、夫人の私に対する態度があのように極端化した一理由として、彼女が南阿の生れだったことをあげても良い、と考えるようになった。

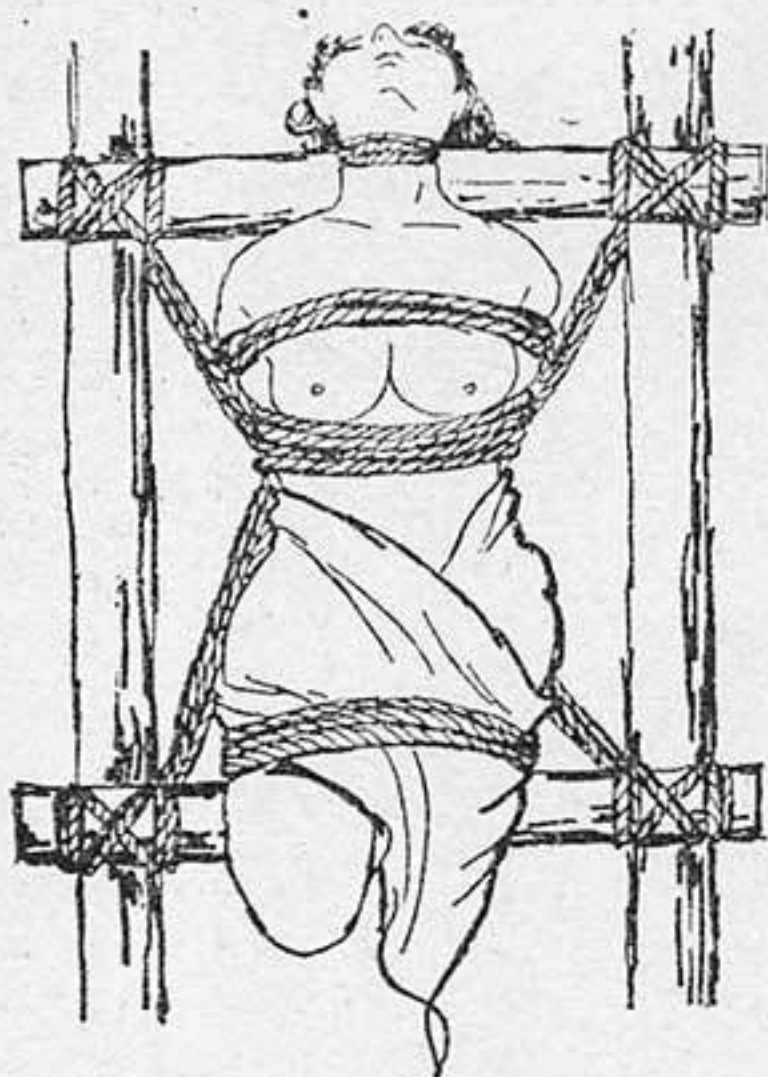
思い当ることがある。『とづくにびと』の著者向井啓雄氏は、南阿ほどに表立って人種差別をしてない様に見える植民領でさえ、白人は黒人を動物視している例として、「私は黒人のボーイやメイドには絶対にありがとうと云わないことにしています。あんな犬見た



いな奴等に礼を云うなんて変な話ですものね」というある白人婦人の言葉を録しているが、白人である将校の客に対しては実に礼儀正しい淑女だった夫人は、現地人の召使に対しては決して優しい言葉を掛けなかった。つまり、「残酷な女性」の中で著者が「白人女性達の持っていた優しい、女性的な気持とは、常に、白人即ち同人種に対する場合に限られていた」と述べている、正にそのとおりの現象が見られたのである。

更に引用するなら、アフリカ植民地における白人女性について「彼女達の多くは、奴隷制度以外の部分では、常に優雅で人類愛に富

んでいたに拘らず、奴隷共に対して加えられる残忍な行為に目を掩わないのみならず、却って喜びの色を隠そうとしなかったのである」とビルリッゲルの述べている条りは、私やKに対する彼女の行動そのものを語っていると云えよう。前記の現地人召使に対する態度からも窺える深い有色人侮蔑心理が素地にあったからこそ、トロロープンコレルが、捕虜という無抵抗相手にもせよ、あゝまで極端な人格無視にまで発展したのではあるまいか、——そう今の私は考えている。



## 或る（モデル志願の）女性から

## 編集長への手紙

編 集 部

編集長さま

思切ってお手紙をさしあげます。

愛読者の方々、投稿家の方々は殆ど男性の方ばかりで、そうした中にお手紙をさしあげますことは、どんなに厚かましい女と思われ

幾度か書いては破り、一度は封筒に入れて投函するまぎわに恥しくなって破りすてました。

恥しいけれど勇気をだして申し上げます。

編集長さま

私を縛られた女の写真モデルに使っていただけませんか。

私は明けて二十八歳、身長一六五センチ、自分で申すのもなんでけれど、香川京子さんに似ているといわれます。すんなりとのびた肢体をもっています。少しお乳が小さいので



パットを使用しています。

女学生とか、お姫様とか、或は処女がいけにえに供えられるといったポーズが似合うと思います。

正直に申しますと一度結婚いたしました。

二十五歳のとき勤めて居た会社の同僚と愛しあい、二年同棲の後不幸死別しました。現在はひとりで知人の家に寄宿して、あるお店の会計係として勤めて居ります。

私に縛られる女の快感を覚えてくれたのは夫であります。その当時、生きていた郷里の父は結婚に反対でしたが私は彼の胸にとび込み、彼のアパートで同棲しました。

結婚後三ヶ月程夢中で暮して居りました、そのある土曜日の夜、さゝやかな夕食の膳に一本用意したビールにほゝを染めた夫が——夫はお酒は弱い方でした——突然何気なく、

『かよ子、君は僕を愛しているね』

『もちろんよ、私はみんな貴方のものよ』

『じゃあ、僕が要求したら十分間、どんなことでも僕の云うことを絶対に服従するかい』

『十分間だなんて、一時間でも二時間でも貴方のおっしゃる通りにしますわ』

——私は幸福でいっぱいになり夫の顔を見上げました。

『じゃあ、目をつぶって、じっとしておいで』

十分間だよ』

何か手にのせてくれるのかと思ひながら私は何気なく目をつぶって居ました。すると立

上って私の後にまわった夫は私に目かくしをしました。

私の右手首に、冷たい金属の感触がしました。最初は腕時計をプレゼントしてはめてくれたのかと思ひました。でも、それは一瞬のことです。手を後へまわされたかと思う間もなく左の手首も後へまわされ、カチリと小さな音がして左の手首にも冷たい触感が伝わり私は後手にいましめられて居ました。

『あら、何をなさるの』

『静かに、じっとして居るんだよ、十分間』

『いやよ、いやよ、外してちょうだい。ひどいわ』

『……………』

『ねえ、かんにんして、私、何か悪いことをしたんだったらあやまりますわ、ねえあなた、許して』

『……………』

『ねえ、どうしてだまってらっしゃるの』

私の口は夫の口でふさがれました。

目かくしされて後手に手錠でいましめられて——今思出してもペンを持つ手もふるえ胸

この手紙の封筒には、連絡場所も書いてありましたが、誌上に発表する方がよさそうなのでお返事は殊更に出さずに、敢てここに原文のまゝ（但し仮名遣や誤字は訂正した）掲載してみました。如何ですか。

がときめきますが、其の時はびっくりして夢中でした。

それから毎日の愛撫

には手錠が付きものとなり、銀鎖や、紐、目

かくし、猿轡が寢室の必需品になりました。

夫は純情可憐好みで残酷な責め方や、女の腹切、浣腸、汚物等はひどく嫌っていました。

しびれるような幸福に夢中の二年間——不幸はどこからやってくるかわかりません。かりその病に夫を奪われ幸福の絶頂から悲しみのどん底につき落とされました。

子供には恵まれませんでした。再婚をすゝめて下さる方も大ぜいありますが、その気にはなりません。独りで仿いて生活しています。恋しい夫の残したかたみの鎖や手錠、猿ぐつわ等を深夜ひそかに身体にまとい、一時間くらいじっとして居ますと、夫のさまざまな仕草が思出されて胸があつくなくなります。

でも自分で自分を縛ることは物足らなくなってきました。

編集長様

私の身体をいろ／＼に縛っていたゞけませんか。



たゞし、四つのお願いがあります。

第一、素顔がわかると恥しいから必ず目かくしをして下さること。顔がわかることは困ります。

第二、残酷な縛り方や苦しめ方、それに肌に傷がつくようなことは絶対いやです。

第三、全裸になるのは絶対いや。必ずブラジャーとパンティーズ——又はブリーフをつけてさせて下さい。

第四、いやらしい事をしない事。

モデル料は一ポーズ一枚如何程いたゞけますか。

私のすきなポーズは飽くまでも華奢に嫋々として縛られてじっとしているといったものです。

例をあげますと、

(イ)ブラジャーとコルセットとストッキングハイヒールで立姿のまま後手に鎖でくゝられる。足もとに剝がれた服が無残に捨てられている。都会の美しいオフィスガールが色魔にとらえられたといった趣向です。

(ロ)パレートの踊子の衣裳で両手首を前に手錠をはめられ座っている。斜めに伸びた足首——トウシューズをはいている——には鎖が巻

きつけられ、鎖は室の隅の鉄環につながれている。

(ハ)海水着——セパレートの出来る丈肌を露出したもの——で両手を上にして紐で縛り吊り下げられる。サンダルシューズをはいて爪先で立つ。宙吊りにはしないで下さい。

(ニ)アラビアンナイト風のコスチュームで太い手錠、足錠をかけられ、腰にも金属のベルトを締められ太い鎖がついている。白色奴隷がサルタンのハレムに売られてゆく姿です。

(ホ)芝居のお姫様が美しい衣裳で胸の上を二三重あまり、巻き太い紐で後手に縛られている姿。

これまでお姫様の裾をまくったり、片足を無理にあげて縛ったり、不自然なポーズの写真を見ますが、お姫様は芝居のように上品に縛られているのが美しいと思います。

(ヘ)ヌードの踊子。これはちよつと恥しいのですが、美しいブリーフをつけて——テグスでつるバタフライはいやです。それから前にも申し上げました通り必ずブラジャーをつけさせて下さい。——幅の狭いもの或はお腕のような型で細い紐でつけるのもよいです。そして十字架に両足をきっちり揃えて縛られ

ます。或は両足を広げて大の字磔になります。手首、二の腕、胸、腰、太もも、足首に鎖が巻きつきます。此の場合には華奢なサンダル式のハイヒールをはきます。大の字にハリツケになる時は特にピッタリしたパンティーズをはかせて下さい。

(ト)蜘蛛の巣にかゝった蝶。ロープで張った大きな蜘蛛の巣に蝶の踊子の紛装でつながれます。背中に蝶の羽をつけ、短いスカートにトウシューズをはきます。顔は目かくしの代りに仮面をつけさせて下さい。蝶の姿に扮したときは少し無理な姿勢で縛られてもかまいません。大きな蜘蛛の造物が蝶の肩のあたりにあれば一層効果的だと思います。

(チ)肌がすいて見える薄いビジャマを着て乳当と股当がすいて見える。紐で後手に縛り胸にも二巻き——乳当がハッキリ見えるように。サブリナ靴をはいて足首を紐で三巻き位。仰向けに寝台に転がされています。目かくしされ濡れ濡れと悩ましい唇。或は目かくしをせず大きな猿轡を喰まされ観念の眼をとじてじっとしている姿。

(リ)可憐な女学生。セーラ服或はつりスカートのジュニアスタイル、但しスカートは少し短か目に、後手に椅子に縛られている。手ぬ



ぐいで猿ぐつわ。視線の先に大きい写真がかけられている。その写真は(イ)の女が洋服を剥がれて無残に縛られた姿です。これから自分もまたそのような恥しい姿にされるかと、ふるえ、おののいている風情です。此のときは縛られた部分を画面に見せず、僅かに縛った紐の端の垂れている部分だけをのぞかせた方が効果的だと思います。

(又)地下室に監禁されていて壁に十字架、鎖、手錠、革鞭等が吊るしてあるのを見て立ちすくんでいる姿。これは縛られています。既に洋服は剥がれていまして、ブラジャー、パンティーズ、靴下吊——腰に細く巻き吊る——ストッキング、ハイヒールで棒立ちとなり両手にシユミーズをもって顔の下半部をかくし恐怖に眼をみはります。これから鎖をはめようとしている男のシルエットが壁にうつゝていれば一層効果的だと思います。

此のほかさまざまに工夫すれば愉しいポーズがたくさんできると思います。

こゝで呉々お願いしたいことは、はじめに申しました通り、顔全体を写さないこと、乳当と下穿きをつけること、苦しい姿勢を絶対にしなないということを条件にして下さいませ。

撮影は写真のスタジオで編集長様と写真師

の方と女の美容師(なるべく年とった方)と三人でして下さい。乳当を背中や腋の下でとめたり、股当のスナップをはめたりすることは女の美容師の方にしてもらいます。縛られたポーズがきまってシャッターを切る前に口紅を直してもらったり、肩のあたりにもう一度パフで白粉をはたいてもらったりしたら、どんなに嬉しいことでしょう。

縛ることやポーズをつけることなど全部編集長様にしていただきます。

縛られたまゝでなかなかかよいポーズが出来ない時は叱って下さい。一生けんめい良いポーズをつくらうと努力します。そのときは小さいコップで冷たい飲物を飲ませて下さい。写真師の方は一切無言で只機械的に動作し、モデルの身体には絶対に触らないようにして下さい。

それから申しおくれましたが、いろ／＼の下着や衣裳、靴などは上等品を用意して下さい。鎖や手錠なども、

金色メッキ、銀色メッキの美しいものを用意して下さい。

私の縛られた姿が、大勢の愛読者の方々のお目を愉しませることは嬉しいのです。そして色々な姿で縛られてみたいのです。それに少しお金がほしいのです。亡き夫もゆるしてくれるでしょう。

此の手紙につき次第お返事下さい。返事は封書で女名前の差出人にして下さい。お待ちしています。

泉かよ子

### 鞭打のアイデア (1) 甲斐 仁参





## 〔緊縛の輕演劇〕

本<sup>ほん</sup> 田<sup>だ</sup> 由<sup>よし</sup> 郎<sup>お</sup>

怪 奇 現 代 劇

## 魔 窟 X 莊

（「異人屋敷の裸女」続篇）

△（池袋アヴァン座第一〇一回公演）より▽

（一）

国際港香港、魔都香港、この香港の町も一歩裏通りに踏みこめば、表面とは一変して暗黒街にその姿を変えていた。古い家が今にも崩れそうに隣の家と抱き合っていて、軒には蘭灯がゆれ、ほのかにともっている。道のところどころには雨水が溜っている。蘭灯の火がその水に泳いでいた。

売淫、麻薬の巢として魔窟X莊が、この裏町の中に存在していた。X莊のボス、暗黒街香港の夜の支配者、日本の名を桐畑鹿造と名乗る男、桐畑鹿造、この名前は香港、いや遠く上海までも知られていた。

或る夜、桐畑の腹身の部下、頼珍珍が一人の支那服を着た日本の女を、X莊につれてきた。

「さあ、早く家の内にはいりな。」

頼珍珍はピストルを女の腹部に突きつけると、豊かな肉体を支那服の中に包んだ女は、恐怖におののき乍ら、

「私をどうしようとするのです。どうして、こんな所に連れてきたのです。私は春蓮という踊子です。私をここから帰して下さい。」

「なにをぐずぐず云ってやがるんだい。言訳は中にへいってから、とっくりしな。さあ早く入りな。とっとと入れよ。」

頼は、女の腹部にピストルを凝しながら入

口からはいつてきた。

（二）

春蓮は一室に入れられ、室の入口には全身真黒な服を着て、頭からも黒い布を被った老婆が一人立っていた。口から一言も言葉を発せず、こっくりと頷いた老婆はどこかに消えていった。室の中に残された二人の間に、重苦しい時が流れていった。時折、室の外を流して歩く盲目の姉妹のかなでる胡弓が聞えてくる。哀愁を含んだ曲の音、この曲、この曲の調べこそ、捕えられた春蓮の身を悲しんのか、すすり泣くかの様に夜の戸外に流れて、遠くへ消えていった。

不意に戸が開いて、

「頼さん、この女がこの間話した女かい。」

「ええ、そうなんです。この女が傘黒兵衛の色女ですよ。捕えるまでには随分、苦勞しましたぞ大姐。」

入ってきた女を見上げて、自分の手柄話をしている。

「ふん、それは充分御苦勞だったね。」

軽くうなづいているこの女は、桐畑鹿造の夫人で奥様お千賀と異名をとった女。白い手で長いシガレットホルダに煙草をさし、形のよい口から紫煙をゆるがしている。

「大姐、ぼつぼつ泥をはかせ始めましょうか





い。」

「それじや始めて貰いましょうか。私は隅でゆっくり見物でもさせて貰いますよ。」

「では、ごゆっくり御覧なすって。」

(三)

「女、傘黒兵衛をどこに逃がしたんだ。」

頼が女に云った。

「私はなにも知りません。前にもいった通り春蓮という踊子で、傘黒兵衛なんて人は全然しりません。」

「なにをどたどた言ってやがるんだ。全部種ネタ

が上ってるんだぜ。」

「でも私は春蓮と……」

「なにが春蓮だい。れっきとした日本人のくせに、なにをぬかしやがるんだい。」

「えーそうかい。それまで知られているんじやね。でも私は傘黒兵衛の逃げた先など知りやしないよ。」

「よし、言わねば泥をはかすまでよ。いくら強情はっても無駄だってことをな。」

「なに言ってやがるんだい。どんな目に会っても言うものかい。」

どうにでもなれと捨鉢の気だ。

「貴様、逃がしたな。素直に泥をはいちめいよ。痛い目に会わないうちによ。」

「なに、言ってたまるものかよ。」

「どうしても痛い目に会いたいらしいな。」

「おい、この女を責めるんだ。手のあいている若い者、二三人手伝いにこい。」

「へーい。」

戸を開けて、顔じゆう鬚だらけの男を先頭に手下が三人入ってきた。

「ぼつぼつ始めますよ大姐。」

「あゝいいよ。始めておくれ。」

千賀は軽くなずいた。頼の大きな平手が春蓮の頬を打った。続いて足が下腹部を蹴り上げた。

「うゝ」

と呻いて冷たい床に身を伏せてしまった。



「ふん口ほどにもねえ。早いとこ着物を脱がしてしまえ。」

三人の手下に手取り足取りされ、床に伏した体を引き立て、支那服、下着を脱がされた春蓮は、豊かな肉つき、乳房から腹部に描く美しい曲線をおしげもなく出している。

「そのパンティも脱がしてしまえ。」

頼の命令で身に纏う最後の物まで脱がされ生れたまゝの赤裸にされてしまった。

「頼さん、これからどんな責めを見せてくれるんです。」

千賀の乙にすました声が……。

「大姐、退屈させませんよ。日本の憲兵隊がスパイに加えた責めをみせますよ。」

「おい、綱を持ってこい。」

春蓮は、その綱で後手に高手小手に縛られたまゝ横倒しにされ、足を折曲げて手と一緒に縛られてしまった。

「おい、気分はどうだい。これからお前の体を吊ってみるんだ。自分自身の体重を手と足で支えてみな。」

綱が天井の梁に通され、春蓮の体は引き上げられていた。

「どん／＼吊り上げろ。」

「重いですよ、この女は。」

「なにを、この野郎、助平根性を起しやがって。」

「だって本当に重いはず。」

「文句を言わずに力一杯吊り上げろ。重ければ重い程、吊上げられた手足が余計に痛むから、面白いじゃないか。」

春蓮は吊り上げられて、自分の肉体を充分に知らされた。こんなに手と足で支える苦しさ。

「よし、その辺で止める。」

頼の声で手下達は綱の引くのを止めた。春蓮の全裸の体は宙ぶらりんとなっている。

「どうだい、苦しいだろう。いい加減に白状しなよ、えー白状しないとこの鞭でその玉の肌を可愛がってやることになるんだがね。」

「なに、畜生、ペツ」

頼の顔に唾をはきつけた。

「生意気な、鞭で十分可愛がってやろうぜ」

春蓮の美しい玉の肌に、無惨にも鞭の後が赤いみみずばれになって全身に走っていた。肉体に鞭があたるたびに、春蓮の体は宙に廻っている。悪鬼の如く鞭は振り続けられた。ピシリピシリと鳴る鞭の音と共に「ううっ、ううっ、ううむ」と春蓮は悲鳴を上げ、その声は室の中に二重になって流れ、異様な空気に包まれた。「ううん」春蓮はついに責苦に堪えかね、気を失なってしまった。

「ちえっ、今少し責めてみようと思ったのに手を離して女の体を地面にたたきつけてみる気を吹きかえすかもしれねえから。」

「えー、じや離しますよ。」

綱を持っていた手が離された。春蓮の体は綱を切られた荷物の様に落下して、地面にどすんと不気味な音をたてて落ちた。「うう」

「おい、気がついたらしいぜ。今一度責めてみる、綱を引け。」

「又、吊るんですか」

「そうだ、思い切り高く吊り上げろ。」  
春蓮の体は又、高々と吊り上げられ、鞭が加えられた。春蓮は泣声を上げて苦しみもだえた。「ひー、ひえー」長く声が尾を引いている。苦しい責めのため、全身から玉の汗を流している。ピシリ、ピシリ、尚も春蓮の肌に鞭が加えられた。

春蓮はついに責苦に堪えかね、傘黒兵衛が日本に逃がれたことを白状してしまった。

魔窟X荘は「異人屋敷の裸女」の続として上演されたものです。第二景で春蓮の拷問があるのです。二景全部が二十分近くも有るのですが、長々と責めが続きます。春蓮を演ずる女優は、ストリップパーが腰に纏う黒い三角布一枚の素裸になり、黒い三角布が白い肌には一きわ印象的に目に映じます。この様に裸のまま舞台の床に転がされ、太い綱で後手に縛られ足も折曲げて手と一緒に縛られます。綱は天井にある滑車に通され、体全体が弓なりになる程綱を引かれて吊られていました。三角布一枚、身につけたまゝの姿で鞭打たれ



ます。私は舞台の一番前で見ていましたが、手に汗を握る思いでした。この舞台で使われた鞭は、細い木の鞭でした。その鞭を振る時「しゅう、しゅう」と風を切る音が聞え、鞭に合わせて舞台のそばで、効果の人が鞭の音を出しています。照明は赤一色で、弓なりに鞭打たれる白い肌を真紅に染め上げます。景の終り近くでは、拷問のため髪の毛まで引っぱられました。正に名状しがたいほどの強い迫力でした。

池袋のアヴァン座は小さな劇場というより芝居小屋といった方がピッタリする様な小劇場です。定員などは二百名に満たないでしょう。腰掛などもボロボロで数年間も修理しない様な荒れ方です。舞台も床がゆるんで、中央の板が下にさがっています。万事この通りで照明、音楽ともに充分とはいえません。いかえれば、全ての装置が不充分なのです。只、アヴァン座が私を引きつける魅力は、主催者の北里俊夫氏の書く原作の面白味、舞台上のリアルな、そして迫真的な演出、これが私を捕える原因でしょう。若しもアヴァン座から北里俊夫氏が消えていったら、このアヴァン座になに残るでしょう。私の様な責めファンにとっては、北里氏の様な作者が多く世の中に出て、作品をどしどし発表して貰うことです。北里氏もアヴァン座に於てどしどし作品を書きまくり、迫力のある芝居を続

々と上演していただきたく、又、アヴァン座が、都内でも一流の劇場と比べて遜色のないまでの充分な装置をもち、舞台上に大きな効果をあげることが出来たら、一段と芝居に迫力が加わると思います。しかし現在のア

## 怪奇時代劇

### はりつけ裸女

△(池袋アヴァン座第一〇二回公演)より▽

池袋、アヴァン座の新春に公演された怪奇時代劇「はりつけ裸女」。アヴァン座の前には油絵で毒々しく、十字柱に赤い腰の物一枚の半裸体の女性が、足元から火を燃やされ苦しむ姿が、看板に大きく画かれてあります。スケールにも、火あぶりにされた女の写真がはってありました。

この物語は、キリスト教徒に対する圧迫がきびしかった頃、九州の有明海に臨んだ城下町での出来事である。

町の辻々では毎日の様に踏絵が行われた。この踏絵を踏めぬ者は忽ち縄をうたれ奉行所

ヴァン座は実に残念です。これをカバーするのは、原作の良さと演出だけです。アヴァン座よ、大きく伸び大きく生きて、良い作品を上演して下さい。

に引きたてられ、改宗せよと責められ、キリスト教を捨てぬ限り、拷問で責め殺されるか刑死するか兎角、生命は保たれなかった。

信者の美女おしほは踏絵が踏めぬので、捕われの身と成ってしまった。おしほ捕縛の報が切支丹信者の中心人物、有明閃之丞に伝えられた。おしほは、有明閃之丞とは深い仲の間柄であった。有明閃之丞達は、おしほ奪還の用意を整えていた。

奉行所ではおしほを、手を変え品を変え責めてみたが、おしほの小さな美しい口は石よりも硬かった。おしほの処刑はきまった。明日の夕刻、生きたまゝで火で焼かれ殺される



ことになった。町の辻々には切支丹信者おしほの火あぶりの刑が高札で発表された。おしほ処刑の時こそ、神の与えてくれた絶好の機会、この機会を逃して愛しいおしほを助ける時は無いと有明閃之丞は思った。

町の人々は話し合っていた。

「いくら切支丹だって、素っ裸でさらし物にされちやよ、それに若い娘じゃ、ましてのことだ。」

「その娘ッ子、えらく別嬪だとよ。」

「別嬪も別嬪だが良いからだをしているぞ羽二重の様な肌こんもり盛り上った乳房、その上顔がきれいときていら、そばに役人さえいなけりや飛びつきたい思ひさ。」

「そんなこと言ってお前さん、おしほとか云う切支丹娘のさらされている所を見てきなすたか。」

「まだだが。」

「まだ見ぬ先から、どうして解りなすった？」

「なに、ここにくるまで多勢の人が話しているのを聞いたものですから。」

と頭に手をやりながら話した。

「なんだ、又聞きかい。どうです皆様は、私は今の話が嘘か本当か、この二ツの眼でしかと見てきようと思ひますが。」

「嘘か本当か私も一緒に参りましょう。」

「えー、私も。」



「手前も参りますんでー。」

町の人々は、こうしておしほが裸体でさらされる姿を、見物しにおしかけていた。有明海の砂丘に、おしほは湯文字一枚の裸体で、十字柱に思い切り大きく手を拡げられ、塩水を含ませた縄で横の柱の両の端にさびしく縛しめられ、たての柱には胴を縛られ肌に喰い込むほど乳房の上を縛られたため、おしほの乳房は不自然なほど大きく見えた。夕暮も近

づき日は西に傾き、おしほの縛られている十字柱の影が長く伸びて、海水に浸っている見物人の中で、おしほと同じ年頃の娘がささやきあっていた。

「いくら切支丹だからって可愛想ね。」

「役人もひどいことをするわね、裸体でさらすなんて。」

「私なら、あんなに裸体でさらし物にされたら、舌を噛み切って死んでやるのに。」



「あの人には、裸体をこんな大勢の人に見られてるのが恥かしくないのかしら。」

「恥かしくないんでしよう、切支丹女は。」

「憎くたらしい。あんな女は早く殺されてしまえばよい。」

「そうよく。」

同情がだん／＼変じて、早く殺してしまえばよいとの声に変わっていた。おしほとて女、裸体でさらされる恥しさは充分感じていたが、さらされる以前に舌を噛み切れぬ用心に、役人の手でおしほの口の中に金具がはめられてあるのだ。そのためにおしほは声をさえ出すことが出来ない。時折風が吹き出して来た。十字柱に縛しめられた裸体に、冬の風が冷たくその肌を責め苛んでいた。吹く風に、身に纏った最後の一枚の湯文字さえはた／＼と吹き上げられ、太股を露出させている。太股が露出してもおしほにはどうすることも出来ない。恥かしさのため早く殺されることを希った。処刑の時がきた。十字柱の下に木が山の様に積み上げられ、油がかけられた。上役人の命令で十字柱の下の木に火が点じられた。火は足元から這い上り、湯文字に燃え移り始めた。おしほは苦しさに身をよじたが、厳しく縛した縄はそれを阻んだ。ただ自由になる首を動かして苦しさにさからっている。夕暮の暗を焦す炎。有明の海水まで焼けているのか――見物の群れが「わあー」と散っている。

た。有明閃之丞達がおしほを助けに来たのだ。この有明閃之丞と役人達の間に、おしほの火柱を囲んで死斗が展開されていた。どさくさに紛れておしほを助け出されては御上の一大事と、槍で突き殺してしまえと、槍をおしほの乳房を目がけて繰り出した。乱陣の中に有明閃之丞はこの様子を見てとって、役人に一刀を浴せた。が既に遅かった。役人の槍先はおしほの白い乳房に喰い込み血汐を噴き上げていた。血汐は白い肌を流れて、おしほは息絶えてしまった。有明閃之丞はおしほの弔い合戦と、役人をばた／＼斬り倒していった。

数刻後、役人は逃げ去り残るは有明閃之丞達だけとなった。閃之丞はおしほの十字柱にすがりつき泣きぐずれていた。

「おしほ殿、お前の死は無下にはしない。天主様の元で安らかなれ。」

吹いていた風も、おしほの死を悲しむかの様にはたと止り、やがて月も上った。十字柱上の炎で焼かれたおしほの死体を美しく写し出した。心なしか十字柱の上のおしほは、有明閃之丞に微笑を浮かべているかの様に見えた。

## 〔雑誌通信〕

(同好の士よりの報告)

### 九雅節夫氏へ

川村公人「盆栽記」

さて、いつものお仕置が始まった。寒吉はえんえん泣き乍ら、それでも叩かれるに委せていた。小さな蒼味のある丸い尻がピタピタと鳴った。母の掌が寒吉の尻に飛ぶ毎に、傍で見て居た善吉は、自分の良心を叩かれて眼を瞑ったが堪らない辛さに思はず母の手に飛びつき赦してくんなんせエ、赦てくんなんせエ、と、泣き声で獅歯みついたものであった。

昭和十九年「日本文学者」九月号。後、小山書店の川端康成編集の「日本小説代表全集十三巻」に収められて居る。

寒吉は善吉の弟で、この時七ツ、小学校の一年生。二人は一緒のふとんにねて居るが、寒吉はね小便の常習犯。ところが、この日だけは、善吉がね小便をしたのだが、善吉は寒吉に罪をきせてしまうのである。

(麻生 保)





# ジャーナリズムに現われた

## 『第三の性』

—週刊雑誌のアブ・ニュース—

矢 桐 重 八

### 第三の性の秘密

「ノイローゼ」これは戦後の混沌たる社会が生み出した一種の精神病だが、性的倒錯、とくに「男性の同性愛」も戦争の副産物としてうかび上っている。それは三島由起夫の「禁色」「秘楽」、フランスのジャン・ジュネの「泥棒日記」「花のノートルダム」、アメリカのロバート・アンダーソンの「お茶と同情」などでもうなづけよう。「第三の性」といわれる日蔭の花の秘密を追ってみよう。

○ 浅草の新仲見世通りからちよつと入った飲屋小路の中でも、一きわ大きな赤提灯をさげたT店。八畳ほどの日本風の店内には三つ四つのテーブル。左手には白木のカウンターを

回って奇声笑声がひしめいている。客は四十から五十年輩が十人、二十代が、三、四人ほど。いずれも顔なじみらしく和気あいあいと、さしたりさされたり。

「まアお父さん、今晚ワ」

「あらットキ子さんしばらく……でもいやよ、お父さんなんて！ お母さんっていつて頂戴。それにしても、あんた何時もお美しいわネ」

「まアお上手……あーあ、誰かい人いないかしら。この頃さっぱりなの」

「あらッ。何言ってるの、おトキさん。おとといだって理想（理想の人の意味）と……」  
「あら、ミツ子さんいうわね。わかってんだらうね、いけず」

こんな会話が華やかに交されれば、一同微

笑のうちに、きき耳をたてる。もちろん、ゲソカでもなく商売人（男娼）でもない。一歩店をでれば、サラリーマンとして、商店の旦那として、何ら普通の男性と変らない人々だが、ここへ相手を求めに足をはこび、例え見つからなくとも裸の自分をさらけ出せる愉しみを味わいにきているわけである。

○

国電を有楽町で下りて、丸の内橋を渡った都電通りのBは、さすがは銀座だけにフランス名前で、店内も洋風。赤いライトがともつて五、六人のボーイはいずれもマンボスタイル。客もシヨウ洒ないでたちで、あちこちのテーブルにボーイと寄りそったり、客同士で寄りそってはいるが、会話はひそひそと聞えるべくもない。



それでも酔がまわってくれば、片隅の豪華な電蓄から流れる甘美なメロディに誘われてか、九畳程のフロアーで踊っているものもある。それも、じつと寄りそい、チークダンスの桃酔境といった風情。

「あの子いやにタチぶっているから小児科かと思ったら耳鼻科なのね」

「でもちよっと泣かせる子ね」

ボーイはこんなことをささやく。

○

このような酒場——つまりゲイ・バーは、都内では浅草の十余軒を筆頭に、新宿、銀座、池袋、渋谷、新橋など、しめて二十五、六軒はあるが、大半は戦後の開店で、乱立のため何れも経営は決してラクではないらしい。

ここで意気投合した彼らは、旅館へ行くのが常道で、そのために浅草や青山にはこれ専門の旅館まである。

○

男娼は余りにも有名な上野公園をはじめとして、新宿、新橋、浅草などの街頭に出没している。このほかにも女装をしていない男娼——いわゆるゲイボーイが「禁色」で一躍有名をはせたH公園、その他都内各所の公衆便所のまわりにたむろし、中には金品を強奪するような悪質者もあるので「質が低下した」と好事家を嘆かせ、女装グループからは白眼視されている。

性問題の大家Q博士のもとによせられた深刻な相談の手紙をひろってみよう。

### その一

今春高校を卒業しましたが、日夜悩み続けています。容貌は生来しごく女性的で、これが災いし、小学校五年の初めに兄の通う中学教師に……この関係は中学の二年の終頃まで続きました。高校にすすんでからは教師からは全く離れました。が、同性愛は消えうせません。

むしろ女性に対しても同性以上に愛着をおぼえますが……それでいながら過去の生活のためでしょうか、僕の容貌は相変らず女性的で、多くの人から白眼視されています。

ある時は大量の男性ホルモン投与も考えましたが、他の影響の心配の余り、実行に移しませんでした。現在の僕は目をつぶり、耳をふさいで同性愛から逃避していますし、これ以上進展させない自信はあります。だが、女性的容貌の劣等感からは逃避できません。

こんな自分は勿論、このような悲劇を秘めた人々のために医師になろうとも考え、家業の米屋をつぐ気持も自信ありません。それでいながら、老後の両親の面倒をみなければならない僕は、これからどう生きていったらよいのでしょうか。(群馬県・十九才)

### その二

幼時から言動すべてが女性的だった僕は、高校を卒業した今なお、これに思い悩んでおります。級友からは「女の席へ行け」と侮辱され、学校の通知表までに「男らしい遊びをしていない、男らしくしてほしい」と記入されたものです。異性には全く心を惹かれることはなく、美貌の男性をみれば、心のときめきをどうすることもできません。趣味にしても、普通の男性の好む野球、水泳その他のスポーツごとを好みません。

そんなこんなで、学校はでたものの、社会へ飛び出すのが恐ろしく、また恥かしく、勤労意欲さえ失っています。男性として生れてきた以上、男らしい人間になりたい！ 瞬時にも離れぬこの悩みに神経衰弱にもなる思いです。生きていてなんの愉しみがあるのか——といって死ぬ気もありません。もって生れたこの宿命を背負って、これから僕はどうやってこの苦難をきりひらいてゆけばいいのでしょうか。(岐阜県・十八才)

### その三

ある病院に勤務する医師で、五尺四寸十四貫弱の痩身なれど至って健康。性格は外面は明朗で社交的に振舞っていますが、その実、内気で淋しがりやです。中学上級の時、一年下の美少年に恋心を抱き、大学では同じ運動



部の同輩と同性愛に……が卒業後いつか離れ離れになってしまいました。その後、四年下の学生に強い思慕をおぼえましたが、これも彼の転居によって消え去りました。

この間、ガールフレンドを数人持ちましたが、一線を画して積極的にでられず、ついに精神的なつながりを得られませんでした。それでも理想の女性が現われればプロポーズも結婚生活もできるものと思いいこんでいたのです。

しかし、病院勤めをしてからは同性愛について深く考え、この傾向の本を選択するようになくなりました。そして最近ではテニス指導してやっている一高校生に愛情をよせています。といって私も結婚適令なので、いつまでもこんな生活に甘んじてはいられず、どうかしてこれから脱却しようとして売春婦を……

また、同性愛の汚なさを見究めたら……とも思い、東京のソドミアの店を訪れましたがこれも徒勞でした。他人にも家人にも打明けられず、ただ一人悩んでおります。

(千葉県・二十八才)

#### その四

私はD大学の学生ですが、自分でもはっきりせぬ同性愛なるようなものに悩んでおります。今年の八月、ある会社へアルバイトにゆ

きました。その折に三十すぎらしい一工員を一眼みて慕うようになりました。彼の家は農家でインテリジエンスもありませんが、むき出しの逞しさに私の心は惹かれるのです。

こんな経験は高校一年の時にもありました。やはり農家の人で、年令もタイプも今度の人とよく似ています。その人とは話をしたことすらありませんが、それ以来、来今日まで思い続けてきました。私の家族は両親に姉が二人で、私はあととりだけに、いずれは結婚をしなければなりません。しかし今の私は異性に興味をおぼえませんし、例え結婚したとしても同性を恋う気持は変わらないのではないかと思われます。といっても全くの女嫌いではなく、女友達もいますし、行動も共にしています。それでいながら、近頃は時おり前記の工員の夢をみます。(大阪府・二十才)

#### その五

商家の若主人で一人息子です。幼い頃、女中たちと遊んでばかりいたせいか、内攻的で活動的な遊びは嫌いです。両親は一日も早く嫁を、といいますが、私は何やかやと断り続けています。と、いうのは女性に感情をおぼえないからです。そのくせ同性、それも五十年輩の太った(鼻下にひげでもあれば一層)人にはいい知れぬ愛著を感じます。そんなタイプの人に逢おうものなら私は……。

#### その六

▼長い髪には柔かくウェーブがでて、夜眼には男性とはみえない通称「子(二九)」はこう語る。

——生れは新潟。小さい時、よく姉さんたちの着物をきて叱られたものです。兄の電車や自動車にはちよつとも関心がなくてね。小学校ではみんなにからかわれたワ、オトコオンナって……。それで学校いくのいやなつちやって、よくサボって山へ遊びに行ったのヨ。

そんな或る日、その山で繁ちゃんっていう中学四年の子にいたずらされたの。それがやみつきで近所の年上の子とよく遊ぶようになって。それでもどうやら中学校を了えたんだから不思議。その夏に叔父さんを頼って上京したの。胸をわくわくさせて。ところがどこへ勤めても変な目でみられちゃうの。しまいには、叔父さん達まで邪魔者扱いなの。しやくにさわってそこを飛び出したのが、この商売の第一歩ってわけ。国へ帰ろうか。どうしようかって考えながら上野の山を歩いていたら男の人に呼びとめられたの。旅館に泊って帰る時、その人がお金を呉れたのよ。嬉しかったり悲しかったり。あの時の気持、今でもはつきりおぼえてるワ。それから毎晩そこへ出るようになったの。



男だと知ってつき合って下さる方もいるけれど、全然女だと思ってしつこくからまれる時は、本当に困ってしまうわね。でもいつまでもこんな商売してられるわけじゃないですよ。それで二年前に国へ帰ったのよ。ところがせまい町だからますます口がうるさくて……それに母親も死んでしまったしね。……で、また逆もどりってわけなのよ。一度入ったら中々ぬけられるもんじやないワ。四十すぎの「お姐さん」だっているけれど、私はせっせと貯めて、どんな小さな飲屋でもいいから持ちたいと思っているの。結婚？とんでもない！考えただけでも身ぶるいするわ……

(以上「週刊アサヒ芸能」11月25日号より)

## 少年の敵アプトン

「パパ、学校の先生が僕に変なことするよ」と、十才のジョー・ハミルトン君は、夕食の食卓につきながら父親に訴えた。子供のいうことで一向要領を得ないまま聞き流して一週間が過ぎたある日、ハミルトン君の母親が、彼に代って、こう父親に訴えた。

「学校から帰ったジョーの様子がおかしいので、どうしたのかと聞くと、ママ、僕病気になるまいかしらと変なことをいいますから、一体どうしたのですか、正直におっしゃいと問いつめると、何でも学校の先生に放課後、教室に残れといわれ、だれもいないところで

抱きすくめられたというじやありませんか。ただそれだけではないのです。いうにたえないいやなことをされたんですって。この前にも何だかそんなことがあったんだそうですが逃げて帰ったといっています。何とかしなくちや、あの学校に子供はあずけられませんか」

英国ウオーキングハム市の郊外でハミルトン家といえは名代の旧家。従ってジョー君も私立学校では指折りに数えられる貴族の子供の多いビックショット小学に通学しているわけだ。

驚いた父親はジョー君のいう「僕だけじゃない」を頼りに、それとなく調査してみるとジョー君と同じクラスばかりでなく、主として下級生に四、五名の被害者が出て来た。

しかも、加害者は小学校の評判のよい先生で、貴族出身のヘンリー・エリック・マントジョイ・スポルディング・アプトンといやに長い名前の容姿端麗な紳士であった。「まさか」といぶかる父親が被害者に数度念を押しても同じことだった。「容易ならざること」と父親はさっそくウオーキングハムのイングリッド教会の神父にそつと相談を持ち込んだ。

こうしたことから本年三十九才の一学期給百ポンド(十万円)のアプトンは異常な変態性慾者で、特に男色あさりの奇人であること

がわかってきた。

アプトンは学校を出て体育教員の資格を得るとカナダに渡り、オタワ、トロントなどの小学校に奉職していたが、やはり先天的な男あさりから幼い子供を傷つけ、国外追放になり、インドに渡りニューデリーでも、同じように男の子のしりを追い廻して問題を起し、学校から追放処分を受けている。二年前オーストリアに流れて小学生を犯している現場をみつきり、軽い刑ではあったが投獄されるなどの性犯罪の数々で、身をあやましている。

アプトンはそれでもイングリッド教会の熱烈な信者であったところから、ことしの五月四日ビックショット小学校にあっせんを受けて、その教頭に就任している。すちろんその前身、前科はひたかくしに隠し、また信者である点でだれも前歴を調べようとしなかった。大抵英国の私立学校は、文部省の管轄外であり、教会の信用さえあればその身元調査は一切されないことになっている。

この小学校は、六才から十六才までの男子六十八名しかいない小さな学校ではあるが、英国特有の伝統と上流社会の支援によって経営も豊かであり、こうした問題は開校以来はじめてのことだとあって大騒ぎとなったものの、世間体もあって、内聞にすませるべく、いろいろの工作が行われた。アプトンは就任してからわずか三週間で追放になったが、問



題はいまなお、くすぶり続けている。

というのは、イギリス教会がアプトンの場合、明白に性的犯罪であるにかかわらず、なぜか、事件をもみけし、警察の手からアプトンを守るばかりか、被害者の少年たちには、そういうことをされても何ら実害はないときとして、ということが伝わったからである。

この問題を大々的にとりあげたのは英国の週刊誌「サンデーピクトリアル」(サンデー画報)で、とくにイングランド教会の人道厚生協会レポートが「そういうことをする先生が、必しも悪いとはいえない」といっていることに対し「イングランド教会が悪いことをしている者をかばうことは、英国の法律に挑戦するものだ。教会がこんなアドバイスをしているとすれば、英国の文部省はいかに努力しても性犯罪を阻止することは出来ないもつとも驚くべきことは、被害者の少年を何でもないと、さとしていっていることである。これは婦人と子供とを第一に考えねばならぬ英国古来の風習を破ろうとしているものだ」と激烈な反論を掲げて、世論に問うている(週刊新潮、昭和三十一年九月三日号)

○  
ここで興味あるのは、イングランド教会の人道厚生協会レポートが、「そういうことをする先生が必しも悪くない、そういうことを

されても実際の被害はない」としていることで、このニュースだけでは詳細が判らないのが残念だが教会の単なるモミ消し策でも無さ

そうである。それにしても、投獄されるに至っても少年のシリを追いかけてアプトンという人間も、まずたいした男である。

## 「続・潰滅の前夜」に寄せて

甲 斐 仁 参

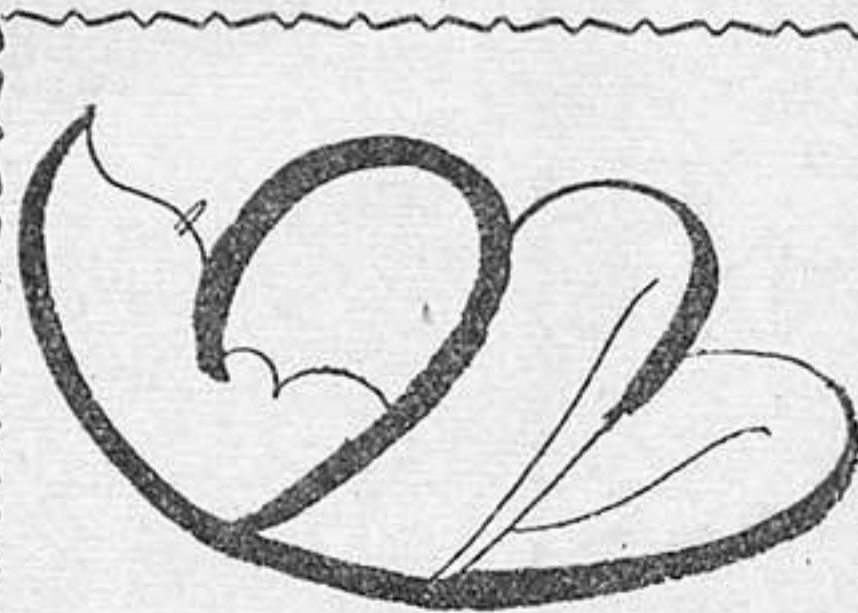
待望久しかった「潰滅の前夜」の続篇が三月号を飾った。期待に背かぬ素晴らしさで頁を繰るのももどかしく、息もつかずに読み終った。ストーリーも描写も全く素晴らしいの一語に尽きる。自分の描いた夢が、生々しい表現で具現される喜びは何とも言語に表わせぬものである。中でも小生の特に興味を引いたのは「畜体検査書」である。幾つかの箇条書にされたその検査が如何にして行われたか、又行われるか、その様子を想像する時、小生は異常な興奮に襲われる。涙液を採取する時の方法はどうであるか。何により、どのような方法で持続的な苦痛を与えて涙を絞り取るのだろうか。汗はどうして分泌されるのだろうか。湿度100%の密室で加熱するのだろうか。等々。余談になるがインドのある行者は女体から大きなグラス一杯の愛液を一晚で絞り出す者があると聴いた時、どんな方法をもつ

てするのかいろ／＼興味を引かれた事があったが、種々の液はビニール包による添付も必要だが、量の如何(一定時間内、一定作業中に出る量)分析による質の点も問題になるのではなからうか。能力検定の際でも、肉体の屈伸限度は如何なる体位によつてどのような測定されるのだろうか。その限度を更に広げべく訓練が行われるのだろうか。呼吸停止は家畜の意によるものでなく、口と鼻を密封して失神するまでの時間でなければならぬが、どのような反応が起るだろうか。等々と勝手な想像が次々と浮び、目を閉じると、検査の苦痛と激しい調教に泣くF三八七号の裸身が網膜に映じて来る仕末……。もし更に氏が続篇を執筆される際には、畜体検査の更に細密な方法と、検査中の家畜の反応についても描写願えればと愚考する次第である。



責めの道具にゴム製品は忘れる事の出来ないもので、ゴムの持つ独特な感触が、何か肉感的な肌ざわりを持ち、責める者責められる者も特異な官能をくすぐられる。メンスパンドの替ゴム等は猿轡によく用いられているがゴムが薄くて弱い為にすぐ破れてしまう欠点がある。その点Yシャツの上からオシヤレをするインナーベルトは理想的なのだが、案外誌上でお目にかゝらないのはどうした事かインナーベルトは普通の細巾のものと、その二倍位の太巾のもの（ヘルシーバンド）とがあるが、どちらもすべり止めに丸い孔とイボが交互に一面につけてある。この穴は用いる場所によりどんな長さにもボタンが自由にかけられる便宜があるし、イボは特異な肌ざわりの刺戟を増すのに非常に有効なものだ。

このインナーベルトを用いる責め方は勿論お好み次第なのだが、口絵写真にふさわしいものを一つ二つ述べてみよう。先ず縄か紐で女性を後手高手小手首縄に縛り上げる。（これはゴムを用いる他の責めも同様だが、ゴム管やゴム紐では緊縛は出来ないものだ。ゴムが伸びる為に固定する事が出来難い上に縮む



（アイデア）

## インナーベルト責め

武田源之助

力で余りにも苦痛を与え過ぎるからである。そして細巾のインナーベルトを股間縛りに用いるのだ。この場合インナーベルトは胴を巻き締めている縄か紐に掛け前後共折りかえしてボタンで止めればよい。このボタンの位置で股間に喰い込むゴムの強さが加減出来る。その為首縄は後手を吊るのでなく、このイン

いる。口の中にハンカチその他お好みの結めものをし、その上にインナーベルトを巻きつけるのだが、巾広いものでは鼻の上迄充分かける事が出来る。この場合は全面にあいている孔が、任意の場所でボタンをかけられるだけでなく、鼻の呼吸をさまたげない事が利点だ。只インナーそのまゝでは少しゴムが厚い

為に肌に沿いにくいし、二巻きする位長過ぎるので、今狼ぐつわ専用に加工をしようと考えている。一個の掛金で抵抗する女性をアツとも云わせず猿ぐつわをかませ、ピツタリと鼻からあごを締めつけ乍ら、呼吸をとめる事もないと云う理想的なものを作るのもそうむつかしくないと思っている。

ナーベルトを吊るように、前後とも掛ける方が縄が崩れなくてよい。インナーベルトのイボが被縛者に微妙な刺戟を与えるため、余り強く締めない方がかえって効果的とも云える口絵写真の為には女性に黒いブロースかパンティをはかせた方が白いゴムとコントラストがついてよいかも知れない。

次に巾広いインナーベルトは猿ぐつわに用

写真が間に合わないのは残念ですが、アイデアのイニシアチフの為取急ぎお知らせする次第です。手近の洋品店ではどこでも入手出来るものですから、是非次号の口絵に紹介して頂きたいものと願って居ります。

（おわり）





(投稿)

## メデカル礼讃

南川 和子

編集部の皆様ならびに読者の皆様、お久しぶりで御座いました。長い間の私の斗病生活ならびに老いたる母の婦人科手術などで猫の手も借りたような三年間で御座いました。でも、お蔭様で社会復帰も出来、母も元気になって、今では幸福な毎日を通しておりますから御安心下さい。

羽村さんの「アヌス礼讃」や、各先生のサスティックな「責絵」のヒロインに憧れていた私で御座いますが、このたび異様な体験を重ねると共に、母の看護などで、実際に「アヌス礼讃」の事実などを知り、最近では殆ん

ど「サスティック」な画風から「マゾ的」な私に変化している現状です。

責絵も大分描いてまいりましたが、体験の裏付のない責絵は、お人形を縛り上げて、鞭を打つようなもので、殆んど現実感はありません。それが、私の絵の缺陷で御座いました。

長い間の斗病生活が私に幸じたのか、その間に、私の肉体に加えられた医師の治療行為が「責絵」に悩む、私の頭脳に開眼を与えたものと思います。最近の画調は、私自身なためでも、ぞくぞくするような緊迫感に溢れて

くるようになりました。何事も貴重な体験の上に組立てられた芸術でない限り、三条先生や伊藤晴雨先生のような迫実した雰囲気は得られないものと悟った次第で御座います。

私の体験と申しますのは、現在では治療の進歩であまり問題にされなくなりました「気胸」で御座います。裸にされた私は医師の命令で寝台の上に横臥させられます。そして脇の肋骨が見えるように片腕を頭上に伸ばし頭の後で手首を組ませられます。その時の心境と申しましたら、俎上の鯉魚にも似ていると申しましたら妥当でしょうか。兎に角、次に来るチクリと肺を刺すような疼痛、続いて消毒された空気が肋膜腔に流れこむ、重苦しい圧迫感。それが片肺でも六百CCから七百度のCCもつめられるのですから丁度、自転車の空気入れで苦しめられる赤蛙のようなものです。終わりますと、いきなりプスンと長い、三寸もあろうかと思われる気胸針を引抜くのです。その痛いこと。お話になりません。それも一週間に二回も補充しなければなりません。肥満体の私は「白ながす鯨」と仇名されました。生れつき肌の細かい雪白の肌だと褒められて来た私にとって、あまり有難くない評判でした。その上、私の脇は濃い方なので、腕を上げなければならぬと思うと、その方が恥しくて、何度、剃って終おうかと思つた程でしたが一旦、医師に肉体の秘密を細かに



診察されて終った以上、殊更に医師に、その異状さを知らせるようなもので、それも、いまとなつては出来ません。それでも鏡を覗きこんでは長そうな一本二本を鋏で以て、よく切ったもので御座いました。するとおかしなもので、直ぐに、切られた毛髪は若芽のように生え揃って、一層、逞しくなるので御座います。これには殆んど、まいて終いました。患者さんの中には男女を問わず人が悪い方が居られるので御座いまして、丁度、代診の若い先生とお二人で診察なさる時など大勢の患者さんを見なければならぬので、患者さんの意見など問題にせず受付順に聴診器を当てようとなさいます。その時の当惑。私などは、よいので御座いますが十六、七才の、やっと乳房の膨みかゝったお嬢さんなど、それは耳のつけ根まで真赤に染めて俯向いて終います。向い合つた男性の遠慮のない眼が乙女の曝き出された胸の辺り、白い背筋をなめるように匍いまわります。そんな時など、かい間みていた私でさえ飛び出して行って、脱いだ自分の羽織をかけてやりたいような衝動に駆られます。でも、医務室では、それも出来ません。

今度は、私の番で御座います。私は医師の前に腰を下し、肌脱ぎにならなければなりません。折悪しく、隣の椅子には、代ったばかりの新らしい男の患者さんが腰掛けていらっ

しやいます。先刻の少女は既に診察を終つて気胸台の上に横になつております。その横臥した肌の美しいこと、西欧の美術作品など、とても及ばぬ程です。それに私と同じように両腕を挙上しているのですから腋の凹みが丸見えになつており、男の患者さん達は、その場冥利に尽きないと言つた顔付です。

プツリと太い気胸針が少女の脇に突き刺されました。なかば観念したように瞳を閉じていた少女の長いまつ毛が一瞬、苦痛に歪み、血の氣を失つた唇から微かに悲鳴にならぬ呻きが洩れたようです。私は、はっと愉悦とも恍惚とも知れぬ陶醉感に打たれ、この貴重な瞬間を見のがすまいと凝視しました。こうして死ぬ程つらかつた気胸療法が私には次第に楽しみに代えられ、むしろ、太い針を刺される時の苦痛が快よい刺激に感じられるようになったので御座います。あれから三年、私はこうしてサドからマゾを好むような性格に変化して行つたので御座います。あの日、あの時、最初に私の肉体を仮令、上半身とはいへ同室して盗み見た若い男達は、私の太り肉した豊富な中年女の魅力に圧倒されたので御座います。好んで私と順を待合せ同室して診断を求めるようになりました。私は殊更に医師の前で双肌を曝し、熱れ切つた鐘乳石のような乳房を彼等の前に誇示するのでした。彼等は戸惑い乍らも、私の素肌に喰い入るよ

うな視線を送るさまがよく分りました。私は結核でしたので、理解ある夫と別居し、毎日栄養食を摂つておりましたから患者とは思えぬ程、血色もよく、体重も増える一方で、絵筆を絶つて安静につとめておりましたのも原因となつて、こうした肥満体になつたものと思われまふ。

さて、こうした或る日。老いたとは云え、まだ六十才に満たない私の母が看護の疲れのせいでしようか突然倒れ、近所の病院の寝台へ担ぎこまれたので御座います。子宮筋腫だったのだそうです。もう拳大のしこりが出来ており、重態との事で、即日手術しなければならぬとの診断でした。大変よくなりかけていた私は、取る物も取り合えず医院へ駆けつけました。母は苦し気にベッドに臥つており無表情に看護婦が附添つておりました。

初めてお目に掛つた院長先生は、堂々とした恰幅のお方でして私は不幸中にも幸いと安堵の胸をなでおろし、すがりつきたいような氣持で、じつと先生のお顔を覗めたもので御座います。手術には私が立会うと言われ、とりあえず手術室へ入りました。

「アヌス礼讃」とも云うべき白と黒と赤のポーズは次回にでも折を見て発表させて頂きたいと思ひますが、私は只今こうした貴重な体験を基礎にして迫真的な責絵に精進しております。絵に関心をお寄せの皆様のアドバイスを御待ちすることが出来たらとお願いいたしております。如何で御座いましょうか。



# 続・切腹曼陀羅図絵

法 谷 四 郎

## 序

古い読者なら御記憶の方もありであろうが、私が先に御紹介した「切腹曼陀羅図絵」は切腹の図絵をめくり、宿命的な縁につかれた或る少年が愛する少女と共に自ら腹切つて果てる様を画いたものである。そして其の主人公のうら若い二人は勿論現代の少年少女であつたが、そのもととなり内容をいゝどつて居る凄惨な幾多の挿話は、実は越前の国唐獅子家の秘録であつて、或る部分は紙魚に喰われ、或る部分は血を吸つてか赤黒く変色した鳥の子和紙凡そ百枚をとじたものである。その中には、此の北の国の一小藩に行われた幾多の切腹の模様をうつし取つた文有り絵有りで、見る者をして思わず血生臭い一種の涅槃境にさそひ込んで止まない。

筆者は其の凡その筋書を前回御紹介したのであるが、今此処に筆を改めて幾つかの切腹の話を書きつゞけて行きたいと思う。と云うのは、その昔唐獅子家に於て奇かしき運命を担つて打ち出された一振りの刀をめくり、嘗ての少年がそうであつた如く再びこの現世に住む筆者の身近かに、新たな切腹の曼陀羅図絵がくり拡げられたからなのである。

## 第一話 腹切丸誕生の図

越前の冬は寒い。北国の故であろう、何時降り止むとも知れぬ牡丹雪、繽紛と白鷺の羽毛の様に暗い夜空を果も無く舞い降ちて来る雪を見つめて刀匠小鍛冶実秀の娘まみは祈る様に静かに自をとじた。

耳をすませば雪音にまじつて父実秀が刀を鍛える槌の音がきこえて来る。唐獅子家に若君が出生し、その守刀を作る様にと実秀が命を受けたのはつい二十日程前の事であつた。しかも此処一年程病床にあつた実秀が病をおして登場して見ると、この命令はもう一人、菊宗にも降つて居り、若君御出生を祝う守刀は此の二人の中の優れた方の刀を用いるというのであつた。

菊宗は昔実秀の所で修行をつんでいた刀鍛冶であるが、酒と女に身をもち崩して破門された人間である。しかし世渡りの術に優れ今は菊宗と名乗つて師の実秀に対抗しているのである。

そして彼は此の刀比べに勝つた暁には、まみを妻に申し受けたいのべ、これに対して実秀は自分が勝つたならば、娘のまみと従兄の小長慎之介との婚約をゆるされる様にと言上し、夫々主君の許しを得たのである。かゝるが故にこの比べは、実秀にとつても、又娘





い吐息をついた。

『お父さま、どうか御立派な刀を作って下さい。そして神さま、慎之介様が弓の試合に勝たれる様に、そのためにはこのまみの命を縮めてもお恨みには存じません』

しかしまみは父の勝利を信じて疑わなかった。刀比べと云う事がどういう事か彼女は知らない。しかし遠い江戸にさえ響いて居ると云う父の小鍛治実秀が嘗っては門弟であった菊宗くんだりに負けよう筈はない。唯心配なのは弓の試合におもむく慎之助の事である。一番の名誉をかけての戦に敗れたならば武士の意気地、慎之介は決して生きて帰ってはこないであろう。今年ばかりではない、毎年行われる此の試合は今迄も多くの犠牲者を出して居るのである。去年敗れた岸辺兄弟も悲惨だった。試合出場前になって急病で起てなくなった兄の代りに弟の次郎丸が刀を合わせたが、六尺近い敵の大太刀に翻弄されて惨めな敗北をとげた。控えの席に戻った次郎丸は襷、鉢巻も其儘に下腹をくつろげ

と物も云わずに短刀を突き立てると左から右へ一気にかき切った。そして刀をなげ出すと始めて「むう、ううむ無、無念、ううっ」と腹の底からうめいて朋輩の介錯をうけたという。更に弟の敗北を知った兄の一郎は病床に端坐すると枕許の屏風を逆さに張りめぐらして割腹した。

余程無念であったのだろう。下腹を深くジリ／＼と切りさくと、膝の上から蒲団の上迄ガバツとこぼれ出た青黒い腸を口にくわえて引きちぎったという。

敗れ、ば武士の常、恋しい慎之介とて其の場を去らずに割腹するであろう。『どうか、このまみの生命を縮めても慎之介様に勝をお与え下さい……』

十八才、色白の顔に黒くうるんだ眸は何時までも雪空を見つめて動かない……。

※

※

しかし運命の神はまみに傷ましかった。病をおして夜となく昼となく仕事を続けた父の実秀は刀が出来上った瞬間、気がゆるんだのかその魂を天に帰依して仕舞ったのだ。

そして刀比べを今日に控えた昨日のこと、慎之介も又隣国との弓の試合の為に藤原家に向って旅立って行ったのだった。別れの前、「もう会えぬかも知れぬ、お達者で……」

と云う慎之介にまみは凡てをすてゝすがりついた。美しく恥じらいと含んだ胸のふくら

のまみにとっても、どうしても敗れる事の出来ないものとなったのである。そしてまみが生命よりも愛して居る慎之介は日置流の弓の名手であって、半月程後には隣国藤原家との試合におもむくことになって居る。

さん／＼と降る雪に向ってまみはほっと深



みそしてふつくと雪よりも白い腹部。そして刀比べの今日身仕度を整えたまみは、静かに神前から父の遺作ともなった二尺六寸焼紋様の太刀をとり上げて胸に抱くと唐獅子城におもむくのである。

かくて御主君頼人卿を始め、奥方、局、家老など綺羅星の如く居並ぶ城内の大広間で刀比べは始った。

形、幅、長さ、そり具合、紋様、血流れ、重さ、そして仕上げ……あらゆる角度から実秀と菊宗の刀が比べられた。

「斬れさえすれば」という菊宗と、「武士の魂」として打った父実秀の刀との間には自ら品格の優劣がある。まみは静かにこの二本の刀を見比べ乍ら心の中で『さすがに父は……』と思つて居た。

所が意外、鑑定の任にあたつた家老は「優劣つき難し、この上は切味で」と述べたのである。思うにこの家老の頭には菊宗の称える「切味こそ刀の本領」という言葉が悪魔の様にしみつゝいて居たのであらう。

喜んだのは菊宗である。腕にも覚えのある彼は早速太さ五寸程もある檜の丸太を所望すると唯一刀で鮮やかにこれを切った。そして得意気に

「まみ殿は何を切られるな、藁束か、それとも兜でも切られるか、女のやさ腕でお気の毒でござったな」

と憎く憎くし気に云い放つ。父ならば仮令南蛮渡りの兜でも真二つに切る事であらう。しかし如何に父実秀の鍛えた名刀とはいえ剣の道を知らぬまみでは青竹さえおぼつかなく。しかもこの刀比べ丈は他人に頼むことは許されぬのが習わしなのである。まみはじつと畳に目を落した。

「……」

「まみ殿、お答えはなきか」家老の声が響く。

「お答えがなければ、この刀比べは菊宗殿の

勝ちと決まりましたぞ」

「お待ち下さい……」

「待たれよと……、ならば切味を見せてたもつしやれ」

「はい……」

まみは静かに顔をあげた。そのやゝ蒼白な顔にはつきつめた覚悟がうかゞわれる。父の名をはずかしめない為に、そして武道を知らない女の身で刀の切味を人に見せる為には、嗚呼、まみはその鋼鉄の刃を吾れと吾が身に加えようと決心したのだ。



「……」と  
思ふう左の脇腹に



それも一息に胸をつくと言うのではなく、刀の切味を見せる為に、武士でさえ容易でない切腹をするつもりなのである。

「いさゝか用意をしたいと存じますので、次の間を拝借いたしたう存じます。」

こう云ってまみは刀をさげて立ち上った。何をするつもりであろうと見つめる人々の視線を模てさえぎると、静かに帯を解き始めます。

まさかの時にはと、白の死装束をまとってきた吾が身が嬉しい。「いさぎよく」と心につぶやき乍らまみは両の手でかゝえる様にしてふつくらとした下腹を押さえるのです。吾が身乍ら美しい柔餅の様な皮膚の下に、慎之介と合わした喜びが未だうづく様に感じられ、しかももう寸時の後には、それは自ら切りさかねばならない……。

「慎之介様、まみはお先に参ります。末長くおくらしなされませ……。」

二度、三度、心に念じると立った儘、白装束の前を開け、腰の紐をぐっと押し下げると背中を壁にあて、ヒヤリと冷めたい切先を「ここぞ」と思う左の脇腹に当てて深く息をします。

足をふみしめると、両手で刀身を抱く様にかゝえ「ウム」とばかり突立てました。激痛が身内にぐーっと走ったのを押しこらえ、もう一度、深々と突き立てるとよろめき乍ら右

手を刀から放なし間の襖をサラリとあけ放つ。そしてアツと驚く人々に向って「ううっむむっ、方々、ご、ごらんあれ、小鍛治実秀の、きき、きれ味はこの通り……」うめく様に云い放つとまみは刀を腹に刺したまゝ広間の中央に進み出ます。髪がやゝ乱れ、ほつれ毛が二、三本、じつとりと汗ばんだ顔にまといつき、黒い眸がカツと見開かれて凄惨な美しさ。

「あ、あ、うむ」と肩で息をするまみの目に何時の間にか青い畳の上にとたりと花を咲かせた血だまりが何か遠い所のものの様に映ってくる。

まみは広間の中央に静かに坐った。そして主君頼人卿に向って一礼すると両手をもう一度にぎり直し齒をかみしめてずぶずぶと右へ廻わし始める……。

「むうっ、ううむ、うっ、う、う、うーむ」

十八才、未だ固い果物の様にピチツと引きしまった美しい下腹は刀の進むにつれてパツクリと無惨に口をあけていく。

臍の下まで切ると今はさすがに震える手を止めて、顔をあげます。苦しいのであろう。肩が波の様にゆれ、傷口からは「はッ、ハッハッ」と云う激しい息の度に血の糸が溢れてくる。

「小鍛治実秀、よ、よ、よう切れまする、う

ーッ、むう、むうっ、アツ、うーむ」

身をよぢって前のめりになり乍ら、一息「うーっ」とうめいてギリギリと右までかききった。そして刀を投げ出す様に抜くとぱつたりと血にまみれた両手を畳についてうつ伏せになる。かみしめた口許から洩れる

「むう、むうっ、アアッ、なんの、あーっ」と云ううめき声、美しく結ばれた髪がぼつさり乱れて、芍薬の花を散らした様なまみの身体の下から赤い血潮が少しづつ滲み出る。

「まみ殿、しっかりなされい、誰か介錯を……」

慌てた家老の声、しかし余りにも壮烈なまみの割腹に打たれたのか、誰一人腰をあげる者もない。

「し、しばらく、しばらくお待ち下さい、かかたな……比べの議は……刀比べの議は如何小鍛治実秀の……父の刀の……ううむ、うっ……切味は如何……」

「……」  
「お、お答えがなければ……今一度……これこの通り……」

無念気に云うより早く、まみは刀をハッしとばかり臍のやゝ上に刺すと、片膝を立て真一文字に腰紐まで押しきりました。

身をやゝのけぞらし気味に、十文字にかき切られた下腹は、真赤な花をたゝきつけた様



「ううむ、アッ、ううむ」

苦しみに身をよじり、左手を思わず傷口にあてがうと、厚い脂肪の中から押し出される様に腸がずる／＼と溢れてきた。

「見事じゃ、刀比べは其方の勝ちや、今より後はこの刀を『腹切丸』と名づけて、長く和子の守り刀にしようぞ、誰ぞある、介錯をして苦しみをのぞいてとらせい」

頼人卿の感にたたえた様な声……。

「ううっ、か、かたじけなう……だ、だれか布を……、むむっ、うっ、は、はやく……」

声に応じて女中頭が白布をまみに渡します白布を手にしたまみはぶる／＼と震える血まみれの手をぬぐい、ついで小鍛治実秀、今はもう、「腹切丸」と銘をあたえられた刀の血糊をふきとると鑑定役の家老に手渡します。

「まみ殿、武士も及ばぬ見事な御最期じゃ、さあ手を組んで合掌されい」

すらりと刀を抜き放つ家老に、しかしまみは弱々しく首をふると、畳の上にまで溢れ出た腸を布でくるむ様にして傷口にあてるのです。女のたしなみ、として腸を人の前にさらしたまゝ死にたくないかしもう中へは入れる事はできない、赤紅色の小腸はうね／＼とうごめいて生きて居るものの様に布からこぼれ落ちて仕舞うのです。

「今はこれまで」と覚悟したまみは、胸許の守り刀をぬくと静かに心の臓をさぐります。

居並ぶ人々に向って、そして又なつかしい慎之介に向ってか、「おさらば……」と言葉低く最後を告げると、かすかに口許に笑を浮かべ胸深く柄も通れと刺しつらぬいたのです。「ううーっ」

## 〔雑誌通信〕

マンガルポ

### ジャズ学校拝見

（八音楽の友／昭和32年新年号「岡部冬彦」画と文）

（前略）——「先月から女の人が一人、ドラム科に入っていていらっしやいました。」とにかくステイックが折れたり先が欠けたりするんだそうだ？ 物を引叩く快感というものは、女の人にとっては相当の魅力なんだろう。——

（以下略）

（感想）——若し、これがジャズ学校拝見でなくて乗馬教習所拝見だったらどうだろう。「とにかく鞭が折れたり（マサカ！）馬のお尻にみみずばれが出来たり、拍車が血だらけになったりするんだそうです。ものを引叩く快感や、蹴り飛ばす快感というもの、女の人にとって相当の魅力なんだろう。」とでもするか？ そうしたら少し穏やかで無くなるだろう。

（麻生 保）提供

わあつ驚いた

### 新鋭機勢揃い

（週間朝日）一月二十日号）「グラビヤ写真

ダクラスDCTCのオモチャを沢山並べてその中にステュワーデスが一人立っているが彼女の足しか見えない。オモチャの飛行機とステュワーデスの大きさのバランスが奇抜である。遠景に羽田空港。

（感想）——何と美しい足であろう。そしてただ形がいいとか美しいとかいう事ばかりでなくて、ひどくマゾヒスティックな神経を刺戟する。恐らく、この足に対して飛行機が異常に小さいからであろう。美しき女王の足下に飛行機が勢揃いしたという感じである。しかし、そればかりではないようだ。筆者はこのステュワーデスの右足のふくらはぎや、左足の踵の辺りにたゞよう一種の鬼気を見逃すことは出来ない。それは、この美しい足の持主の「高貴なる残忍」



の為にその切味を実証するために、自らの腹にその刃を加えて十八才と云う花の蕾を散らしたまみの見事な割腹、居並ぶ人々もホッと溜息をつくばかり。

「あたら乙女を散らせて仕舞うた……、せめてものつぐないに、おゝそうじや」

頼人卿は何を思ったのか家老に何事かさゝやきます。

漸てまみの死体が鄭重にかたづけられ、多くの人々がほっと一息ついた頃隣国藤原家に通じる雪の街道を早駕籠が矢の様にとんで行きます。そして其の駕籠の中には美しく死化粧をほどこしたまみの首と「腹切丸」とをかゝえた家老がのっているのである。それは藤原家に弓の試合におもむいた小野慎之介に何とかして追いつきまみの死を知らせ、そして出来ればあれ程にまで望み合っていた二人に冥途と此の世の区別こそあれ祝言の真似事なりともさせてやりたいと云う頼人卿のせめてもの情なのです。

早駕籠は「エイホー、エイホー」という懸声も勇ましく暮かゝる街道を走り続けて行きます。

そしてその駕籠の上を、今夜も又雪になるのであろうか。恰もまみの見事な最期をとむらうかの様にチラホラと白いものが舞い始めるのでした……。

(第一話終)

を垣間見せてくれているのである。若しこのステュワーデスが馬上の人となったらこのふくらみはぎや踵が容赦なく馬を責め続けるだろう。——ああ、この足に接吻出来たら——そして踏まれ蹴飛ばされたい等と思うのは、筆者ばかりでもあるまいと思うが如何？

(後記)——撮影、菅野喜勝。案、(東京都世田谷区玉川等々力町二ノ四六五)内田湛子、川人勝子。この案を出された方は、並々ならぬセンスの持主と思われまます。又撮影の菅野氏にも敬意を表します。

## 男性を御指南する

### インストラクトレスという女性

(「週間新潮」二月四日号) グラビア写真  
軽いマゾ好みではある。見ていて愉快ではあるが、それ以上の刺戟は少い。黒板の前に立って男達を見下し乍ら教えている若い女性に、せめて教室用の鞭を持たせて置きたかった。彼女は指で黒板を指して何と残念。小島啓治氏撮影。

## 有馬稲子 男を叱る

(「同誌」十七頁)

男のエチケットというラジオ番組のメン

バーを引受けて、大いに男性を叱る由。有難やな——。

## 河上敬子

「サンデー毎日」二月十日号、「そのひととき」のグラビア、(石井周治氏撮影)

奇ク二月号で春木俊郎氏が、一寸河上敬子に関心を示された。筆者は「女だけの部屋」さえ、まだ読んだ事がないが、以前から彼女に異常な関心を全く何の理由もなく持っていたので、春木氏の文は正に我が意を得たものだった。早く「女だけの部屋」を読む事にするとして、この横の彼女の写真の大笑しは、なか／＼美しい。(特にマゾヒズムに関係なく……)

## スーパードレイ

たくましい女性たち

(「週間読売」二月十七日号)

林百合子、星鳩子、寿岳章子、永井絹子、佐藤みさを、青野操子、鈴木百合子、の七人のスーパードレイの記事。何はともあれ嬉しい記事ではある。猶、林百合子さんが白馬に跨った写真が載っていたが、余りよい写真でなかったのが、がっかり。



# 花 と 朔 風

北 原 純 子

☆

日曜だというのに珍しく部屋に居て、机に向って、楽譜の整理をしたり、アルバムに新しい写真を貼り付けたりして、雑事に追われている健に向って、道子は思い切って話しかけた。

「あたくし、お話があるんですの」

「何だ？」

健は手を動かしたままで言った。

「三木さんにお目にかかって来ましたの」

健の反応を試す様に、わざとゆっくりと言った。

「それで？」

と健はうながした。動ずる色もなかった。

道子は後の言葉に詰った。

三木進介は道子に健との縁談を勧めた人で、道子が嫁いで来る時も、親代りになって色々面倒を見てくれた、かつての上役である。

その頃、道子は商事会社でタイプライターを叩いていた。

道子が三木を尋ねた目的は、健との生活を解消する事にあつたが、その第一の理由は、道子自身の旧悪が暴露される事を恐れたからである。健の愛情がヒロミの上にある事を、ハッキリと知ってしまった今になっては、一日も早く健のもとを離れてしまう事が安心であつた。愛されてはいなくても、他人になつてしまふにしても、健に過去の汚点を知られる事は、身を切られる様に辛い事であつた。

「三木さんは何と言つた？」

「三木さんは、はっきりした事は仰言ひませんでしたけれど……」

「そんな変態とは一緒にいても為にならんから、別れてしまえ、とは言わなかったか？」  
「あたくし、そんな事を三木さんには申しません」

「バカ！ 三木さんがお前の味方なんかするか。三木さんは俺の親父に恩を受けた人間なんだ。俺のためになされた結婚なんだぞ。お前には何と言つたか知らないが」

「そうね。あたくしにだって判りましたワ。でも、あたくし別に腹も立ちません。あたくし自身、あなたの処へ来るのが厭ではなかったのですから」

「今は厭になったから、別れたいと言う訳だな」

道子はムカムカした。三木を尋ねた目的の第一の理由が何であつたかも忘れて、道子は言つた。

「平気でそう仰言れるあなたは、妻って一体何だと考えていらつしやるんです？」

「何度聞いたら判るんだ」

健は呆れた様に道子をつくづくと見た。  
「改めて伺いたいワ。ハッキリと、今」



此んな勝手な男に対して、何であんなちっぽけな過去のあやまちなどを恥じる必要があるものか、と、盗人猛々しい気持になった。

「ホウ！ 君は従順で、黒いものでも白だと言いくるめられれば、黙ってそれに従う女だと聞いてたがね。聞くと見るとは大違いだ。そう開き直ったところは、仲々どうして、女剣劇そのけじやないか」

「それだけスツキリして見たいワ。そう出来なくて困っています。でもあたくしだって、戦後の教育を受けた女よ」

「なるほど」

「人形ではありません。生きていますワ」

「言いたい事は何でも言え。聞くだけは聞いてやろう。併しその前に、俺自身の考えを言うのだ。女は皆、素晴らしい。女神の様に崇高な生きものかも知れんよ。女の事は余り詳しくないから判らないがね。併しだ。お前は違う。妻という家庭の道具に過ぎん。何度も言うようにね」

「台所用品だって仰言るんでしよう」

「いや、よく考えて見ると、其処までも行かん。飯一つ満足に炊けないお前を、台所用品に格上げしてやる訳には行かないね。俺にとっては、妻なんてものは謂わば置物みたいな存在だね。なかったらみつともないけど、有っても別に役には立たない」

「じゃヒロミさんは何？あなたの奥さんね」

「ヒロミか。そうだなア。排水管みたいなものかな？ 要するに、判るか道子？ 内部に停滞させて置く訳には行かないから。少なくとも君以上の価値はある」

健は閉じたアルバムに顎を乗つけて、悪戯っ子の様に含み笑いをした。

「あなたは可哀そうな人ね。一番大切な愛人の事まで、そんな風にしか考えられないなんて」

「そうでも言わなければ、君に悪いだろう」

道子は何だか、またも健に負けてしまう様な気がした。口惜しいと思うけれど、今別れてしまったら二度と健の身近かに暮す事は出来ないのだと思うと、切ない未練が湧いた。

あの事さえなければ……と道子は思う。

「今直ぐあなたとお別れしたいって申上げたら、どうなさる」

「そんな事は言やしない。君には帰る家なんてないんだから」

「あたくし言うかも知れませんが。一人で忸怩りですから……」

「許さないだけの事だ」

「そんな乱暴な……妻として扱っても下さらないでいて——」

「妻として、何が欲しいんだい？ 女って案外貪婪なものなんだア」

健は矢庭に道子の肩を引寄せて、驚いている道子の唇を性急に強く吸った。気の遠くなる程の抱擁力。

る程の抱擁力。

道子は夢中で逃れようとした。

健はあっさりと道子を離して、傍の水こぼしへ、強く唾を吐き捨てた。何という侮辱！

道子は却って自分の方が恥かしくなった。

健は立ち上って言った。

「君は此ういう事をして貰いたい為にボクの傍に居る。ボクはそんな君に時々憫みをかけてやる。此れはボクの余白なんだ。本分は別に取ってあるが、此奴は一寸、君にはやれない」

健は音高く障子を閉めて出て行った。

「バカにしてるワ。キチガイよ」

道子は思いつ切り罵る事で、せめて幾らかでも救われたいと願った。

☆

暫らく姿を見せなかった隼夫から健宛に手紙で、

『前々から、おかしいと思っていた胸が案の条、大分悪くて喀血したので、三日前から表記の病院に入院している』

と、知らせて来た。

健は、

「明日、早速見舞いに行け」

と、道子に言った。健自身は絶対に、人の見舞いや用もない訪問などはした事がない。

朝、大学へ出掛ける際になって、健は道子に、チャ子も連れて行け、と言った。



「お前を一人で出してやると、新宿辺りを浮浪者みたいにはつつき歩かないとも限らないからな。知った奴に見られでもすると、みっともない」

チャ子は太い迷惑そうな顔をして、

「肺病の病院？　イアあだなあ。チャ子は何時だって、そういう最低よりありつけないんだから憂鬱よ。偶の外出だっていうのに、でっかいマスクしてゆかなくちやあならない処なんて」

と文句を言ったが、病院の所在地が清瀬と聞くと、急に目を輝して承知した。

「オーケ。オーケよ。チャ子ゼヒゼヒ行きます」

清瀬村には、国立、私立取り混ぜた沢山の療養所が点在していたが、隼夫の入っている病院はカトリック系の小さな病院であった。「ベトレヘムの園」と石の門柱に刻まれていた。

隼夫の病室は二人部屋で、瀟洒な和室にベツトが入れてあった。偶然にも須田が見舞いに来ていた。隼夫は案外元気で、

「チャー坊までが見舞ってくれるとは思わなかったなあ」

と嬉んだ。チャ子は頬をふくらませて、お見舞いの果物籠を床頭台ヘドスンと置いた。「そうよオ。大ブロク付きでしょうよ。ホント

はチャ子来るんじやなかったのよ。お兄さまが、行けッて、命令したんで仕様がなから来たのよ」

「そう言う事を言うから君はオールドミスになる口だって、心配するんだ」

須田が言った。須田も隼夫もチャ子とばかり話した。殊に隼夫は、何となく道子の視線を面映ゆがっている様に見えた。併し、途中から、須田とチャ子は何処へ姿を消したのか、かなり長い間、帰って来なかったのだから、二人は黙り合っている訳にも行かなくなつた。

「健ちゃんも仲々気難しいから、機嫌を取るのが大変でしょう」

隼夫はいたわる様な目をして言った。

急にそんな事を言われたので、道子は途迷つた。自分の身が憫れになった。

「あたくしの様な気の効かない女には、骨折れる事ですわ」

「そんな事もないでしょうが……。でも、健ちゃんも信仰する様になってから変りましたよ。徹底したピューリタントですね。自分にも厳格ですが人にも厳格です。あれで反面優しいところもある奴なんです。小さい時から苦勞をしていますから、人の気持も判るんですね。兎に角、モーレッツな孤独癖を持っていますから、母親のような気持で務めてやって下さい」

道子は笑っていて答えなかった。まっとうな返辞をする事が、ひどくバカらしい気がした。

——健の事なら何でも御存知の積りで、おいでの様ですが、本当は何一つ御存知ではないのです——。

人間なんて、うわべだけで価値のきまるものなのだ。乞食と紳士が一つ場所に居合わせた場合にしても、紛失物があれば、必ず疑いをかけられるのは、乞食であるにきまつている。健は秀才でお金持でクリスチャンで、将来は父親の会社を継いで社長の位置に坐り、教授の職をも兼ねて、益々天晴れた社会人となる男である。道子の小ぼけな足掻きなどは犬に喰われて死んでしまえ、である。もし例え、道子が夫の悪口を知人全部にふれ歩いて見たにしても、それはそれだけの話で終る。健の値打にはいささかの変わりもない。社会という大きな機構は、道子のくだらないネゴトなどは受け付けない様に、ガツチリと出来ている。道子は、チエツ、と舌打ちしたい気持ちになった。道子自身も、もっと太々しく生きなければ……。健のエゴイズムに負けてなどいる事は愚劣である、と。併し、併し。道子は矢張り弱い。健の妻である限り、ドレイの位置を抜け出す事は出来ないだろう。日が西に傾き始めると、めっきりと秋めいて、果物の肌のような清冽な風が吹いた。



隼夫の床頭の書見器に掛けられた青い表紙の本のページをサラサラと繰って過ぎる。

須田とチャ子がバルコニーの方から、笑い転げるばかりにして入って来た。

「今ね、おかしいったらないの。此の向うの病棟でね。須田さんったら、ロイド眼鏡の先生にね。寝てなくちやいかん。顔色がとても悪いって、注意されたんです」

「いや、ドクトル近眼なんですね。ボクが此んな竹の杖なんか振り廻してたから、病人と間違えたんだよ」

「風体がお粗末だからよ。セビロを着てないからです」

チャ子が言った。

「あれだ！ さっきは何か変な事を言ったくせに。あれ何だい？」

「枯木死灰」

「コボクシカイって何だい？」

「学がないなあ。ユウレイみたいに生気の無い人の事を言うの」

「ひでえな、どうも」

「須田君！」

チャ子はそう言って、須田を睨んで盛んに目配せした。

「大丈夫だよ」

須田も盛んに目配せして答えた。

☆

帰りは須田も一緒に、直ぐ大通りへ抜けられ

る近道を帰る事になった。隼夫の病棟からはかなり離れた病棟の端れにある大部屋の脇を通る時、不意に頭上の窓から、道子の頭をコッソリと叩いた者があった。道子は須田とチャ子の後から従って歩いていたので、前の二人には判らなかつた。上を見上げた瞬間、道子の五体は凍りついてしまった。咄嗟に、知らないふりをしようかと心をきめたが、道子の只ならぬ気配に須田が振返ってしまった。「あたくし、一寸知った人に逢いましたから一足先にいらして」

道子は辛じて須田に言った。

窓の顔は引込みもしないで、道子達を見ていやに慣れ慣れしく頭を下げた。

「さっきも其処で出逢ったのですが、どういうお知り合いの人ですか？さし出がましい様だけど、またになすったらどうです」

須田が小さい声で言った。チャ子は観察する様な目付きで道子と窓とを見比べた。

「ええ、でも一寸。お手間は取らせませんワ」

道子は、もうとても逃れられないところだと観念していた。

「早くいらっしやいね。車とめて待ってるから」

チャ子が言った。二人が去ると、顔が引込んで、

「道ちゃん。此っちだ」

と大声で呼んだ。

道子はやたらと哀しくて、涙が出そうであった。健の笑顔や寝姿や、果ては怒った時の意地の悪い表情までがなつかしく胸に迫って来るのである。あんな薄情な不倫な夫の何処がいいのかと思う後から、忽ち健の顔が大笑しになって、道子の目の前に浮び上った。石段を上ると、病棟をつなぐ廊下になっていて、その角に大部屋が孤立している。その入口に男は立っていて、道子が近づくとニコニコして、言った。

「此んな処で逢うなんて、思いがけなかったな」

「本当に困った偶然ですワ」

「ま、そう言うなよ。実はボクも友人を見舞いに来てね」

「その、のびきならない間柄の方ね」

「そうなんだ」

此の男、高井清と言って、健も一度見て知っている。

病室の窓は全部開いていて、八ッ程並んだベットの男たちは一せいに、盛装の道子を眺めて、冷やかしかげ味にわざと大声で意味の通じない事を話し合った。高井も患者達の暴圧的な視線を迷惑に感じたらしく、

「一寸その辺を歩かないか？」

と道子を誘った。道子はそれどころではな



「あの事ならダメよ。あたくし急いでいますし、それにもう此れ以上、あなたにお目にかかる理由がないワ」

道子は怒りを込めて言った。

「まあ、いいよ、いいよ。その辺まで一緒に行くよ」

高井は軽く受け流して、巧みに道子を誘った。

其の時、病室の直ぐ横手の廊下から、白い寝巻を着て、帯の代りにベルトを巻いた長身の男が姿を現した。高井を見ると笑いかけて「今終った。どうもありがとう」と言った。

「いよいよ手術ですね」

高井が言った。男は一寸道子に目を止めて、黙礼すると部屋の中へ入ってしまった。

「あの方は？」

道子は急ぎ込んで訊いた。遠い記憶を呼び起す顔であった。もしやあの人では？

何時もブックバンドで縛った本を小脇に抱いて、同じ電車に乗り合わせたムッシュ・土屋

「あの方、何て仰言るの？」

道子は青年のベッドに目を向けたままで重ねて訊いた。

「何だ？知ってるのかい！」

「それが判らないのよ。何処かで見た事のある人だと思っ

て」

「上田って言うんだよ」

「上田？それ偽名でしょ」

須田はビックリした様な顔をして、





「よく知ってるね。偽名なんだ。本当は清川哲二」

「キョカワ？ 変ね」

「変なものか、それが本名だよ。清川哲二。併し、余り人に言うなよ」

「言いたくても言う人がないわ。でも、清川じゃなかったわ」

「道ちやんの思い出の人がかい？ 道ちやんも案外隅に置けないんだね。旦那さまが気の毒みたいなものだ」

「イヤな事を言わないで」

道子は今になって、高井から慣れ慣れしくされたり、夫の事を軽々しく口にされる事は虫図が走る程厭であった。

「兎に角、例のお話はお断りするより仕方がないのよ」

道子が断乎として言うのを、高井は軽く受けて、

「その事なら、もう時効にかかってるよ。決算日なんてとくに過ぎちゃってらあ」

「まあ！ じゃ、どうなすったの？」

「心配してくれるのかい？ 道ちやんが。」

高井は思わせぶりの様子で言った。

「首になったさ」

「本当に？ じゃどうなさるの、此れから先」

「相談に乗ってくれるかい？」

「そんな事は出来ませんけれど」

「旦那さんに頼んでくれよ。君の旦那さんの

会社、仲々隆盛なんだそうじゃないか。一人位い何とかなるだろう」

「冗談にもそんな事を仰言らないでね」

「チエツ。薄情なんだなア。自分さえ幸せになれば、昔の愛人なんかどうしようと平気なんだって言うから、女は怖いよ」

道子つくづくと男を見た。

「あなたは変ったの？ それとも、それが地金なのかしら？ あたくし帰ります」

道子は飄然と高井から離れた。

「ま、待てよ。道ちやん」

高井は道子の腕を取った。

「あら！ あの子、あの男の子。何でしょう」

道子は思わず言った。

松の蔭になった廊下の石段を、二人で連れ立って中庭の方へ下りて行く先刻の青年に目を止めた。青年の後に従っている学生服の少年が、今しも、石段に足を掛けたところである。ヒロミであった。

「あの人の弟さんね」

道子は物蔭へ隠れるようにして、つとめて

何気なく言った。

「どうしてそんなに、清川さんが気になるんだい？」

「だってとても似てるんですもの」

「何が似てるもんか。気のせいだよ。兄弟でも何でもないさ」

「そうかしら。とても似てる様な気がするワ」

「美男子が三人寄れば、三人とも似てるように見えるものなんだ。道ちやんは前からそうだったよ。俺が誰かに似てるとか。そんな事を言うのが好きなんだな」

併し道子はどうしても、土屋と、青年と、ヒロミとに、共通した面影を認めるのであるが、兄弟でないとすれば、見る人によって感じ方も違う。道子の見方は錯覚というのかも知れなかった。久しぶりに懐しい理想像が道子の胸に帰って来た。此の不埒な観念の浮気も、あながち道子の罪とばかりは言えない。道子は愛されざる妻なのだから。併し、理想というものは、あくまでも肉慾を伴わない静かな海のようなもので、道子が健に感じる、血の湧き立つような荒々しい陶醉はない。折ふしに道子の心をよぎって過ぎる感傷である。

「あれはね。あの人のいろなんだよ」

高井がコッソリと言った。

「いろとは？」

「知らないのかい？ 情婦みたいなものだ」

「ウソを仰言いッ！」

道子は自分でも驚く程厳しく否定した。

「変な声を出すなよ。ハハハハ。ボクも其処までは知らないんだ、実を言うところ……併しね。どうも清川さんのあの子に対する様子が普通ではないんで勘ぐって考える訳さ。ところであの子はね。今とってもいい身分なん



だって。或る会社のバカダンナの書生をしてるんだそうだけど、そいつがまた、とてつもない甘っちょろい奴なんだそう。あの坊主虫も殺さない様な面してやがって、仲々のしたたか者らしいんだ。九ッ位の頃から上野辺や浅草りで稼いでた奴だからね。スリだよ。その頃、清川さんが学生アルバイトにピナツか何かを売っていて、知り合ってたんだそう。それから暫らく清川さんが宿なしのあの坊主を自分の下宿へ泊めてやったりしてたって言うからね。ついでの事に黽つた事もあるんじゃないのかって気を廻しちゃうよ、あの坊主、見るのはボクも今日が始めてだ。向うは知ってるらしいんだがね。」

「それで、清川さんに逢いに來たって訳なのね」

「金を届けに來たんだよ」

「まあ！ お金を」

「そうさ。バリツとしてるよ。あやかりたいよ。此方は」

高井は自分が会社の金を使い込んでまで尽したという、清川とのつながりに就いては、ケロリとして話もしなかった。

それから五分と経たない後に、道子はヒロミとバツタリ顔を合せてしまったのである。

須田とチャ子は痺れを切らして道子を待っていた。

「チャ子断然、フンガイした。須田君！ チ

ヤ子に協力してね。」

☆

道子は頭の中を整理するのに、かなりの時を費やした。道子は他人の事に干渉的な人間では決してなかったのだが、今度ばかりは、自分の事も棚にあげて、ヒロミの不行跡を詰る気持になっていた。

次の朝、道子だけが部屋に居る時、不意にヒロミがやって來た。

昨日療養所で顔を合せた時のヒロミの狼狽ぶりからして、此れはきつと、昨日の事を内証にしてくれとでも、虫のいい事を頼みに來たのに違いないと道子は思った。ヒロミがスリだったと聞いた途端にヒロミ軽蔑の目で見てしまっていた。人間の価値はうわべだけできまるものではない筈であったのに。

ヒロミは踏石の上に立って、外方を見ながら、

「ボク、昨日、高井さんから言伝ったのですが、お話があるから、もう一度新宿のお店でお逢いしたいって言っていました」

と、言い捨てると、庭石伝いに軽々とジャンプしながら行ってしまった。

道子は背筋が冷えて行くのを感じた。

高井はヒロミに何も彼も、或いは無い事をつけ足しまでして話したに違いないと気が付いた。道子は高井の事など、もうどうでもよかった。

ヒロミが憎くてならなかった。

道子は駆けて行って、蔵の前でヒロミに追付いた。

「ヒロミさん。あなたは健を裏切るような事をして、よく平気でいられるわね。あたくしあなたの事を、何も彼も聞きましたのよ」

道子は声を震わせて言った。ヒロミの唇が微かに綻びた。

「ボクだって、あなたの事は高井さんから聞きましたけど、それがどうしました」

「あたくし健のために言うのですワ。健に陰れて変な真似をしないで下さいな。余り健をバカにしないで欲しいのです」

ヒロミは一言も答えなかった。一寸考え込むように眉をよせて、道子の足もとに目を落した。道子はそんなしおらしいヒロミの姿にふっと我れに帰った。自分に対する反省が帰って來た。道子は秘かに赤くなった。

「ゴメンなさい。あたくしだってあなたに此んな事の言える人間ではないわ。でもあなたは健に愛されている人でしょ。だからあたくし言うんです」

道子は辛い気持でそう言った。

「あなたは先生の奥さんじゃありませんか。自重なさらないければいけません。先生の名誉は、あなたの行動の一つ一つにかかってます。ボクなんか何でしょう。どうなったってどうせ影の存在です」



ヒロミは淋しいような笑いを浮べた。まだ何か言うのかと思ったが、一寸頭を下げかける様な挨拶を残して蔵の中へ入って行った。網戸が閉る時、顔を俯向けたヒロミの暗い目の辺りが確かに清川という男に似ている様な気がした。道子は哀しかった。人生には錯覚が至るところに転がっている。道子はその錯覚に足を取られて青春を汚したのである。それでも尚懲りないで今も此うして錯覚に誑されている。

チャ子は深刻な顔をして、健の前に坐っていた。

「新宿のみよしって外食食堂でやっと高井って人に逢えたの。そして、此の事全部聞いたのよ。チャ子口惜しいワ。お姉さまにも、ヒロミ君にも、直ぐ出て行って貰う様に、お兄さま仰言らないとダメよ。須田さんも物凄くブンガイしていたワ」

☆

と、逐一報告した。健にとって此れ程の侮辱はなかった。夜毎此の腕に抱いて、あるだけの愛をそそぎ続けて来たヒロミに、顔色一つ変えないで欺かれていたという事。而もそれを人から告げられて気が付くなどとは、恥辱千万であると口惜しがった。それなら妻の裏切りに対する怒りはなかったかと言えば、決してそうではないが、それはヒロミに対す

る胸を切られる切ない怒りとは違って、幾分の自嘲が含まれていた。健よ、ザマあ見る！というような。それだけヒロミに対する怒りの方が大きかったと言える。

ヒロミには何時も充分に小遣いを与えてあったが、早急に纏った金を持っている筈はなかったもので、会社へ問い合すと、会計の川上という男が、

「つい四、五日前に、急なお入用だと仰言るので御用立致しました」と言った。

と言った。

健はその夜何時もの時間にヒロミの部屋へおもむいた。此の時間には何時も網戸が開いている筈なのに、今夜はカギがかけてある。健はムシヤクシヤして自棄に口笛を吹き立てた。ヒロミが降りて来た。健は無言でヒロミの部屋に通った。窓際の籐椅子にどっかりと腰を下すと、部屋の中をグルリと見廻した。夜になると此うしてやって来て、此の椅子に腰を下す。ヒロミは髪をくしけずり、肌着に匂いまでもふりかけて、俺の来るのを待っている。健は妾を置いている中年男のような塩っぱい感慨が湧いて、急に十も年を取ったようなうそ寒い気がした。

ピアノの横の小綺麗な机の上に青いシェードの電気スタンドが置かれていて、その傍に万年筆が転がっている。健は手を延ばして万年筆を手を取った。キヤップを抜いて見た。

ヒロミはピアノにもたれて立っている。その顔に狼狽の色が見えた。

「ヒロミ！ 今何を書いていた？」

ヒロミは激しく頭を振った。

「何にも！」

「書いたものを見せろ」

健は厳しく言った。

「ごめんなさい！」

ヒロミは健の膝に崩れ伏した。

健はヒロミをふり払うように立ち上って、机の引出しから、本箱の中まで探して見た。便箋二枚に書きかけの手紙が、ゴムの下敷の下から出て来た。

「カンニンして、読まないで——。御生だから」

健は、すがり付く、その手を握まえたまま手紙を読んだ。健は読み終るとニヤリとした。

「なる程、君は芝居がうまい。此の手紙は何のために書いたか言ってやろう。俺に見せるために書いた。そうだろう？」

——清川のお兄さま。ボクはお兄さまの処へ帰りたくてなりません。お兄さまはボクの事を幸せだと仰言いましたけれど、ボクがどうして幸せなものですか。ボクには暗い将来が控えているだけなのです。……幾らその人が奥さんを愛していないと言っても、その人と奥さんとの間は生涯続けられて行くでし



よう。そしてボクとの間は、後暫らくもしたら清算されなければならないのです。ボクはその人を愛しながら憎んでいます……ボクがお届けしたお金がお役に立って本当に嬉しく思います——

ヒロミらしい記帳面な子供っぽい字で、此れだけの事が書かれていた。

健は便箋を丸めてヒロミの顔へ放った。

「ボクへの当てつけが、一杯書いてある手紙だ。それをボクに見せなくて誰に見せる訳がある。ロミって奴は、そんな知られざる苦労はやらない様に、チャッカリと出来ている筈だ。言い換えれば、それだけボクの愛情を欲しがっている訳だ。どうだ？ 凶星だろう」

「自惚れないで！」

ヒロミは真剣な目をして言った。

「じゃ何だ？」

「ボクは本当に清川の兄さんの所へ行きたくなったのです。此んな生活はもう苦しくて、耐えられないんです」

「その男とはどういう間柄だ？ お前の旦那さまか」

「違います！ ボクはあの頃はまだ子供だったのですよ」

「それだって判るものか。愛される事位知っていたさ」

健は憎しみを込めて言った。

「ひどい！ そんなにボクを信じられなく

て、ボクの何を愛すると誘ってくれたの？ ケン

ヒロミの顔が子供の様にあどけなくゆがんで、涙が溢れ出した。ヒロミはピアノに顔を伏せて泣いた。

「言っちゃ悪いけど、清川さんは、ボクやケンの様な態度ではない。あの人は貧しいために、自棄になって悪い事をしたけど、心は正常な人です」

「お前の兄さんという人はどうした？」

「あれはボクのフィクションです」

「どうしてだ？」

「ボクはみなし児だったから、兄さんが欲しかったのです。だから清川さんの事を、実の兄さんの様に思っていました」

ピアノの蓋がヒロミの息で白く曇った。

健は立ち上って、ヒロミの髪を掴んで引き倒した。

「お前がボクから離れたいと、本気で思っているなら、ボクは尚の事離してやる訳には行かんね。お前には随分金をかけたから、その金が惜しい」

「お金位い。ボク泥棒してでも返します。どうせボクなんか、そんな事しか出来ない人間なんです」

「それだけでもない。まだお前を飽きるところまで行ってないよ。飽きてしまったら何処へでも行かせてやる」

「ボクは出ると言ったら出ます」

死に死になつて抵抗するヒロミを健は馬乗りになって組敷いた。ヒロミの首を締めようとする健の手にヒロミが噛みついた。

「ボクだって男だ！ 女の真似なんてもう懲々した。女の子を愛する事に変えたんだ」

ヒロミの頭をしっかりと畳に押さえつけて健は言った。

「それで幕切れにして置け。下手な芝居を長びかせると退屈してしまう」

いやがるヒロミの口に強引に唇を押しつけた。

「そんな細い胴をして、大きな尻をして、女を愛せる道理がないじゃないか。気味悪がつて逃げられてしまうよ。ロミはボクに愛される事が一番幸せなんだ」

健はまたしても、ヒロミにしてやられた事を知っていた。今度の様な、事件は別にしても、健は絶えずヒロミに籠絡されて来た。併しヒロミの気持が判って見れば、そうまでひたむきに自分の愛情を繋ぎとめて置こうとするヒロミの気持が哀れであった。健は自分の愛する者に対しては、あくまでも寛大で、溺愛に等しい愛し方をしたのである。健自身が、その愛情にすがり付いていなければ淋しくてやり切れなかった。だから健はヒロミを絶対に束縛した。



一時間も後には、二人はしつとりと打ち解けてしまっていた。椅子にかけた健は膝に抱いたヒロミの耳に口を寄せて言った。

「ロミがタンカを切るところを始めて見た。ロミが新しくなった様な気がするよ」

ヒロミは照れ臭そうに笑った。

「さて！ 道子に引導を渡してやらなければならん。ロミ。呼んで来い」

健は快活な声で言った。ヒロミは領いて出て行った。

健は道子を離別する事にきめた。

道子は何処の馬の骨のとも判らない男に純潔を汚されていた。それを偽って自分と結婚した。その妻を愛し続ける事は、如何に頑張っても至難である。それだけで離婚の理由はなり立つ。

健は口笛を吹きながら、硯を磨り始めた。更に本棚から一冊の本を取り出して、頁を繰った。「ある前科者の手記」と、表題が出ている。



☆

道子は結局、健の

呼んでいる処へ行かなければならなかった。此うして夫から

屈辱を受ける日も、

後幾らでもないだろ

うと道子はきめている。ホツとすると同時に、言い知れぬ悲哀も湧くが、そんなものも、道子はもう諦観の淵へ投げ込んでしまっていた。

始めて見る部屋であった。外で想像するよりも、ずっと住み心地よく清頓されていた。鳥籠は布を被せて窓際に吊りあっていた。



健は、廻転椅子をぐるツと道子の方に向けてと、垂れた頭髪をかき上げた。

「呼び出したりして、済まなかったな」

与太者のような凄んだ言い方に、思わず道子は微笑した。此の男が将来、若い人達を指導するプロフェッサーの地位につくだろう事を想像すると、とてもコッケイな気がした。併し、此のハンディキャップは、やはり道子にとって魅力であった。きつと、健は若い人達に好かれる小意気な先生になるに違いないのである。

「道子。ボクはもう何にも言わない。言わなくても判るだろうからね。今まで君を苦しめて済まなかった。今度こそ、君を、暴風圏内から逃がしてやる。先ず其処へ坐れ」

道子は言われるままに、健の前に坐った。五ツや六ツのビンタを喰う事は覚悟してなければならなかった。道子は既に、何度もの夫の虐待に慣れては来たが、それでも責められる事は、何時の場合でも苦しい事である。併し、今日は我慢しなければならなかった。此れが多分、健を思い出す最後となるであらう。

健は手許の螢光燈スタンドを燈して、「ロミ。此れを彼方に置いて、長持の蓋を開けて置いてくれ」

と、真紅のカーテンが垂れている部屋の隅を顎で示した。

道子はその中へ放り込まれるのかと思つて思わず叫んだ。

「余りです。乱暴はやめて……」

「静かにしろ。今更君を責めて何になる。ボクもそれ程モタつく事はキライだ」

そう言つて、道子を抱き上げると、長持の際まで運んで、ドスンと降した。足を持って膝まで長持の中へ引ずり込んだ。重い蓋を下した。道子の上半身は畳に転がった。ハラリと単衣の裾がまぐれて、白い股が露わになる「いやです。死んだ方がましです」

仮りにも健の妻である自分が、ヒロミの前に此の浅ましい姿をさらす屈辱。

「あなたにとっては、ヒロミさんは愛人かも知れないけど、あたくしにしたら使用人も同じよ。その前で妻を侮辱する事は、あなたの恥にはならないのでしょうか？ヒロミさんって何をしていた人だか、あなた御存知？スリだったのよ。人のものをかすめ取る」

「生きて行くためには、それもしなければならぬ事がある」

健は道子の口を足で踏みつけた。

「一寸の間、辛抱し給え。足が痺れたら蓋を開けてやる。此うしないと君の足は暴れて仕事邪魔をするからな」

健はうるさい道子の口に手拭いでさるぐつわをした。それでも尚、いやがる道子の腕首を腰へ廻したロープで縛りつけた。首を縛つ

た。それを簾椅子の足へ結びつける、とヒロミに命じた。

ヒロミは頭を振った。

「俺の言う事がきけないのか？」

「だってボク。此んな残酷な事をするのは、怖いんだもの」

「知らない者が聞いたら本気にするぞ」

ヒロミは急に声高に笑い出して、

「知ってる人が聞いたら、またかと思う？」

だってボク、本当よ。子供の頃にね。牛に女を殺させる話を讀んだ事があるの。その挿絵が、とても凄いの。首も手も足も縛った女を二人ね。それぞれ三頭の牛に引きずらせて、二頭の牛を闘わせるの。終いには牛も傷ついて、女は二人とも死んでしまうのだけど、とても怖かった」

「ロミにもそんな可愛い頃があつたんだ」

「此んなボクに誰がした」

ヒロミは冗談を言いながら、首を縛ったロープを椅子の足に結びつけた。

健は道子のセルの単衣の胸を開いた。湯上りのさわやかな匂いがした。

道子は怨みを込めて健の顔を睨み付けた。

「君が何時までもボクを忘れないでいる様に記念の文字を此処へ印して置いてやろう。何と言つても、ボクには、君は初めて知った女の人だからな。一寸型変りのベアトリチエかも知れないよ」



健は先刻の本を取り上げた。「ある前科者の手記」此の中に入墨について詳しく書かれている個所があった。健は入墨などというものをまだ行った事がない。此れからそれを行う。

ヒロミは、何あんだ、そんな事が、と言う顔で、

「それならボクに任して、針を作るのならボクお茶の子サイサイだから」

ヒロミは筆の尻へナイフで切込みを入れて絹針を五、六本挟むと、糸できつく縛った。要領は誰がやるのも、玄人でない限りはみな同じで、突きさして抉ればいい訳である。

健は針を墨の池に突込んだ。

素人に肌をえぐられるから此れ程までに痛むのか、焦々する様な鋭利な痛みは脳天にまで駆け上って、道子を気遣いにしそうであった。針を見詰めていた健の目が光を受けてキラキラした。時々熱くなった目ぶたを軽く閉じた。健の重身は道子の胸にかかっている。

道子は何時が痛みに慣れた。健の熱い手に胸を撫でられる事が快い刺激となった。此れ程までに慕わしい男の許を離れて何処へ行こうと望むだろう。健のドレイとしてでも、その足許に蠢めいていられるなら、満足であると思った。

足が痺れて感覚がなくなると、ヒロミが蓋を開けてくれた。

道子は何時か、夢を見る心地になって行った。

随分長い時間が過ぎて行った。

道子の左の乳房の上に、くつきりと、「非処女」という文字が印されていた。

道子は綱を解かれて自由になった。

「感想を言ってみて見給え」

勝ち誇った様に健が言った。

健にじっと見詰められているうちに、道子は妙に胸が震えて、気の遠くなる様な歓喜が湧いた。

「あなたに此うされた事は、あなたに女にされたという事と同じですワ。あたくしは嬉しいと思います」

心なしか、ヒロミの目が嫉妬に潤んだ様に見えた。道子はもうヒロミが憎い事もなかった。死に際に人の心が優しくなる様に、道子の心も平穏に帰っていた。

「でもあたくし、唯一寸、あなたの言葉に矛盾を感じます。あなたは先刻、あたくしを逃がしてやると仰言いましたけれど、此れではあたくし自由になる事は出来ません」

「自由にしてやるとは言っていない。ボクの暴圧圏内から逃がしてやると言ったまでだ。君がボクから離れて自由に他の男と生活が出来る様になる事は、ボクの望まないところだからね。君は生涯その……」

と、胸の入墨を指さして。

「刑罰を背負って、一人でいなければならぬ。其れがボクの復讐である」

「でも、或いは此んなあたくしに同情して下さる様な男の人が現れないとも限りません」「そこまでは、ボクも追求しないさ。ま、精々幸せになつてくれ給え」

その夜、道子は一人寝の床で、健の事を思つて、自分でも呆れる程涙を流した。胸の文字が愛しいような気がした。

☆

翌日、道子は桂に呼ばれた。

桂は物腰の柔かい瘡身の四十男で、実業家というよりも学者タイプの、語学に秀でた人であった。十年程前に結婚した妻に死なれてからは、独身を続けている。真からのクリスチャンで、彼の頭の中には信仰と、主人への忠誠以外に何もなかった。

桂の横に、カスリの単衣を着た健が気難しい顔をして腕を組んで坐っていた。

桂は卓に肘をついて、身をのり出す様にしと言った。

「何も彼もわたしは存じていますので、今日とは言わせて貰いますよ。お互いに不満も、言いつてもあると思いますが、一旦御夫婦になられた以上は、それだけの我慢をなさらなければいけないです。いいですか？わたしは何も此処でカトリックの教義をお話ししようとするのではありませんが、結婚は続けられて行く



からこそ、意義があるので、途中で挫折する  
なら此れは野合にも等しいものと言わなければ  
なりません……」

「ボクはイヤだよ。桂はそう言うけど、忍耐  
だけで結婚が続けられるものなら離婚するバ  
カは居ないよ。ボクの悩みがどんなものか、  
桂に解るものか」

健はプイと席を立ててしまった。

桂は驚いた風もなく言葉を続けた。

「坊ちやまの性格は此の桂が一番よく知って  
いる積りです。小さい時からああいふ難しい  
我が儘な方ですが、本当は気の弱い淋しい人  
なんでしてね。あなたが辛抱して下されば決  
して悪い時ばかりはないでしょうし、子供で  
もお出来になれば、きっと考えも変わと思ひ  
ますから、今度だけは此の桂に免じて我慢し  
て下さい」

桂は頭を下げて、道子に頼んだのである。

道子が部屋に帰ると、健は先刻の続きのよ  
うに腕組みのままに坐っていた。

「桂は何と言っていた？」

「あなたのお傍に居ると仰言っていました」

「それで？お前は居る積りかい？、図々し  
い。ボクはね、お前の顔なんか見たくもない  
んだ」

健は吐き捨てる様に言った。

「でも桂さんに、あたくし……」

「桂に頼まれたから此処に居るのか？桂に

死ね、と言われたら死ぬのか……」

道子は首垂れた。

健は淋しい人なのだと桂は言った。隼夫も  
何時か、健の事を孤独な人だと言っていた。

そう言えば何も彼も、健の言う事する事には  
虚勢を張っている様な、ムキなところが見ら  
れた。或いは此れは、道子の一人よがりな推  
測であつたかも知れなかったが。併しはずれ  
にしても、道子は健を心から愛している。愛  
しているなどという上品な言葉は此の場合ふ  
さわしくないの、道子は擲られても蹴られ  
ても、真底此の男に惚れていると言った方が  
適切である。健が冷たければ冷たいだけ、い  
やもしかすると、健が冷たいからこそ、健に  
惹かれるのか？道子自身にも今だに自分のバ  
カらしい感情は摺み切れない。

「桂が別の男と結婚しろと言ったら、明日に  
でもするのか？」

「違います。あたくし、自分があなたの傍に  
居たいからです」

「どうしてだ？」

道子は含羞んだ。

「どうしてだか言ってみろ」

「あなたを忘れてしまう事は……」

「何イッ？」

「出来ないから」

そのまま健の膝に崩れて終いたい様な熱い  
思いが胸を焼いた。

「今までと何一つ変りはしないのだぞ。ヒロ  
ミとボクとの事も、お前に対するボクの気持  
も。却ってお前など穢わしいと思うだけだ。  
今後は公然と、女中として扱う」

「いいのです。あたくし……」

道子は自分のしおらしい言葉に酔った。し  
いたげられる事も今は楽しい。

「じゃ、勝手にしろ」

健は畳を蹴って出て行ってしまった。

道子はホッと肩を落して、傍の鏡台ににじ  
り寄った。そっと胸をはだけて無惨な烙印を  
鏡に写して見た。

「道子のおバカさん！」

青いシェードの蔭で、ヒロミが此んな事を  
健に言っていた。

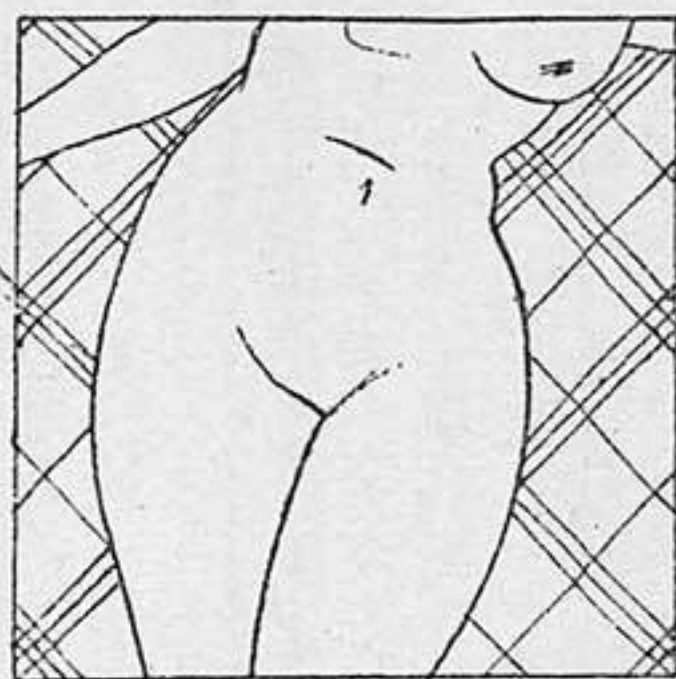
「大事な奥さんを離すなんて、ケンに出来る  
訳がないと思っていた。でもボク、本当は奥  
さんの事なんかどうだっていいの。その代り  
ボク、うんと我がままをするから。どうせケ  
ンに愛されている間がボクの生涯ですもの  
——」

「当分、また此の事で、ヒロミに責められる  
のを覚悟しなきゃならないか」

健はくすぐったそうに笑った。

(おしまい)





## 緊縛映画雑感

楓 月 太 郎

今月号より編集者の御厚意により、貴重な頁をさいて拙稿をのせて頂くことになりましたので緊縛を通じて私の思っている事など、映画の御紹介を兼ねて書いてゆきたいと思います。他の紹介者と重複する点も多いと思いますが、私は私なりに違った角度から筆を走らせてゆこうと思いますから、他の方々も重複を厭わずどうぞ御感想を発表して頂けたら大変愉しく思います。さて、前置きはこの位にして本題に入りましょう。

松竹映画、まだら頭巾剣を抜けば「乱れ白菊」(山鳩くるみ)の姫が悪人に捕えられ、山上に磔にされる場面。私は思わず胸の高鳴る様なショックを受けた。何故なら、この磔シーン、カメラが真正面から狙いをつけているので立体映画式に客席の前に画面がのり出

してくるカメラアングルの巧みさ。スクリーン一杯に磔のシーンを写した事と、背面から撮ったり、顔だけのクローズ・アップを狙ったり、あらゆる角度から山鳩くるみの磔を撮ったカメラマンをほめたゝえていゝだろう。水原真知子の悪人の手先の姐御が、恋仇の姫の磔姿を下から眺めるシーンも心憎いばかりの演技で、手、足、腹部まで御丁寧に縄が掛けてあったのは、細い芸であった。こゝでは磔に両方の綱で十字架を引張って立てゝいたのは、とても変ったアイデアだと思う。こういう磔シーンと云うものは、近くからスターの顔だけアップで撮ったのでは、折角の縛られている姿の描写が台無しになってしまうのである。そこにカメラマンの腕の見せどころがあるので、うまく撮る人とツボを逃

してしまふ映画会社の別が出てくる。

磔といえ、東映作品「七つの誓い」第三部のラスト・シーンで、姫(千原しのぶ)が人質に捕われ、おびき寄せのおとりとして磔の火あぶりにされようとする場面。このカメラの撮り方は、二本の磔柱の中手前の加賀邦男の磔から斜めにとつてあるので実に惜しかった。正面からの場面を、今か今かと待っていたが、出た時には上半身のクローズ・アップでがっかりしてしまった。

みものだったのは、裸馬に乘せられ罪状の木札を首から下げて縛られた姿で刑場に入ってくるシーンだった。縄目といゝ縛り具合といゝ、実によく撮影されていた。それだけに一層火あぶりの場面を楽しみにしていたのだが、落胆も大きかった。千原しのぶの磔姿は実に壮観で、火あぶりにされる最中苦しみに悶える姿が、痛々しいまでに迫ってきた。

この映画で敵方へ腰元となって潜入し、遂に見破られ、味方の同志の眼前へ引出されてきた腰元楓(三笠博子)。縛られムチで吉田義夫に叩き責められるシーンの素晴らしさ、立っている楓の背中を後からピシリピシリと叩く。「ウムム」と痛さに身体が地上にくずれる姿。更に情容赦なく振り下されるムチ、此の三笠博子の呻き声と苦悶の表情は、実に真に迫っていて、私は自分の身体に焼火箸をあてられたような気がした。「私に構わず逃げ



て下さい。」と叫ぶ声。起き上ろうとしても足輕の二人に縄尻を引いて引戻される。時間的にも相当長く、このムチ打ち責めの描写には全く陶醉させられた。

松竹映画「伝七捕物帖美女蝙蝠」では伝七の女房お俊(草笛光子)が悪人の本家に乗込み証拠をつかもうと牢屋に捕われているお咲(嵯峨三智子)を助け出す為に腰元になりお咲を救う寸前、捕われて縛られてしまう一カットがあったが、ほんの一瞬で画面から消えさった事は残念でたまらなかった。此の伝七捕物帖シリーズ第一話の「人肌千両」「黄金弁天」「女郎蜘蛛」「花嫁小判」「美女蝙蝠」に至るまでの作品の中には必ずと云ってはいくらゐ猿轡緊縛場面が出てくるので、私は伝七捕物帖の内容はともかくとして、縛られ場面がふんだんに出てくるので此の映画が封切されると最先に映画館に胸躍せながら飛んで行ったものである。

「美女蝙蝠」では縛られてる場面が一カットにすぎなかったが、此処に特筆すべきは武家娘、腰元、腰巻、フンドシマニアにとって思いがけない収穫があった事も見逃せない。——こゝで出てくる大衆風呂湯で女が裸体姿で湯殿に入っていく一カット／ロングのもの。舟奉行の(北龍二)その情婦(水戸光子)の男女入浴シーン。亦伝七と悪人の乱斗場面で湯上りの男女が、フンドシ、腰巻姿で逃げ

まどう素晴らしいシーンが出て来たので思わぬ拾物であった。まして天然色で白と赤の腰巻姿の女の後姿の縛られシーンと違ったエロツボさは又格別であった。振袖姿武家娘腰元の時代衣装に興味のある方には(嵯峨三智子、草笛光子)の腰元の御殿女中の着物のすそを引きずって歩く所に目を丸くした事だろう。歩くたびに前がはだけて赤い腰巻がチラホラさせたなまめかしい真赤なお腰(長襦袢かも知れないが)それに謎の人物(大谷友衛門)にお咲の腰元(嵯峨三智子)の身体の刺青をみる為に手荒く矢結びの帯を解く凄惨迫力ある場面もあった事は見逃せない所だった。

新東宝映画「関八州大根の対決」(北沢典子)で悪代官に見染められてやくざ者に寝床を襲われて長襦袢姿で猿轡をはめられて数人のやくざ者にかどわかされて舟に乗せられて行く場面と、舟からそのまゝ下ろされて街の中をかつがれて行く場面がよかったが縛られていないのが惜しい。殊に場面が夜であるので画面が暗くてももの足りない感じ前田通子(町人娘に扮す)が悪人に着物の前をはだけられて前田通子御自慢の乳房のふっくらした上部を写したのも「女真珠の復讐」の裸体姿で売出しただけに、これもお色気のサービスとも云えよう。

日活映画「復讐は誰がやる」新人(筑波久子)シユミーズ一枚で悪人にムチでリンチを

受ける場面があったが、逃げまわる場面と女のひめいを聞かして叩かれるシーンを撮さなくて気のきかないカメラマンと思った。この新人(筑波久子)のベッドシーン。シユミーズ姿で大きな乳房がシユミーズの上からのぞかせたのも素敵なポリウムの持主で今後の活躍に期待しよう。

最近新版で上映された「鬨腰銭」日活映画で(市川春代)二役(お小夜、檜)の緊縛場面でお小夜・フアンにとつては懐かしい思い出の名画といっているだろう。一つは檜がお小夜と間違えられて役人に縄目を受けて引立てられてくるシーンともう一つはお小夜が駕籠で連れさられる猿轡緊縛場面。

前者の方は唯縛られているだけと云った感じで緊縛場面とは遠いしろもの。後者の方は夜であるので猿轡縛りがはっきり撮されていないし、一寸の間でスクリーンから消えさった事はかえすがえすも残念だった。

かつての日活映画「神変麝香猫」時代の市川春代の緊縛映画が懐かしい。名画と云えばその頃の宙吊り責めの映画を御紹介して筆を置こう。

日活映画、月形龍之介、大倉千代子の「山彦呪文」で橋の下に(大倉千代子)が宙吊りの責め場面と新興映画「宝の山に入る退屈男」の(甲斐世津子)武家娘の吊責めの描写は今だに忘れられない。



## (口 絵 写 真 解 説)

## 縛られた女優たち

楓 月 太 郎 解 説

## 一、流賊黒馬隊／＼後篇

(西条鮎子)

ラストシーンで悪代官に捕われ磔にされるため裸馬に乗せられて、刑場へ向う。本縄の後手姿、白装束は哀れにも美しい一幅の責面である。緊縛映画ファンにとっては誠に得難き一場面といえよう。東映作品。

## 二、若君罷り通る

(高千穂ひづる)

姫君(高千穂ひづる扮す)が悪人に誘拐されて一室に監禁される。猿ぐつわの緊縛場面、前に長く垂れた黒髪が美しく、伊藤晴雨翁好みの写真となつていゝ。黒布で大きく覆った猿轡、一条の紐による縛り、そして白の衣裳がよきコントラストを示している。哀調を帯びた瞳も、まことに印象的。松竹作品。

## 三、吃七一番手柄(岸恵子)

町娘に扮した岸恵子が、柳家

金語楼扮する偽金造りの悪人達

に拐われて縛られる。伴淳の丹下左膳が右手にムチを持って、岸恵子の身体を左手で押している。父親の前に娘が連れ出された場面。「これ娘を連れてこい」「ああお父様」「おお娘」「千両箱を出すか、それとも娘の命をもらうがどうか」という応答があつて、金語楼が「どうだ、おやち、返答は？」といった、緊迫した、ファンにとって懐しい一コマ。岸恵子は「鞍馬の火祭り」では猿ぐつわだけで、黒川弥太郎の悪人に抱えられて行くシーンがあつたが、この場面は数少ない岸恵子の縛り場面、奇ク独壇上の緊縛映画場面紹介である。同じく松竹作品。

## 四、夕立勘五郎(花柳小菊)

花柳小菊が花嫁姿で縛られる珍しいシーンの写真である。

## スクリーンで縛られた女優たち

千 葉 栄 市

## 一、宝塚映画「鞍馬天狗斬り

(新珠美千代)

込む」

火事の晩に(小林重四郎)の為に当身をくわされて気を失ってしまった(新珠美千代)は、

やがて意識を取り戻した時は既に手足の自由を奪われ、黒布の猿轡までされている自分に気がつき、この窮地をどうして逃れようかと思案する空虚な瞳。

## 二、東映映画「魚河岸の石松」

(西条鮎子)

借金の抵当に(沢田清)の家へ連れてこられた(西条鮎子)

は、あまり抵抗したため後手しぼり、ハンカチの猿轡で押入れに閉じ込められてしまう。

## 三、松竹映画「弁天夜叉」

(高峰三枝子)

長襦袢一枚にむかれ後手に縛り上げられた(高峰三枝子)は隣座敷へ自分を救いに(高田浩吉)が来たので、助けを求めよ

うとするが、(大泉晃)のため

に豆しぼりの手拭で猿轡をはめられ声も出せず、身動きも出来ないままに、隣座敷の話に耳をすます哀れな姿。

△註△このシーンの続きが、二月号の口絵の「猿轡を噛まされた女優たち」(一)で自分がここにゐる事を隣座敷へ知らせようと、猿轡の顔を向けて、「ううゝゝ」と呻めく場面のアップです。

## 四、東映映画

「まぼろし頭巾」

(千原しのぶ)

新しい火薬の秘密を知っていたばかりに、外人達に誘拐された(千原しのぶ)は、秘密を白状してしまつたあと、人買いに売られるため、後手に縛られ、白布の猿轡でトランクに詰め込まれる。



# 続・潰滅の前夜

(惑乱の犠牲者)

土 路 草 一  
瀧 れ い 子・画

△「潰滅の前夜」(私は悪いことをしません)は本誌31年7月号並に8月号に、「続・潰滅の前夜」(晦冥の悲歌)は本誌32年3月号に掲載▽

## (一) 伶子の日記帳

多穂子は緋絹の夜具を展べると、いつもの通り、姉の枕を並べて縞ネルの寝巻も置いた。

幾夜同じことを繰返したことだろう。「多穂ちゃん」とあの優しい頬に微笑を浮かべて今夜こそ帰って来るか、と胸で手を組んで、廊下の登音に耳を敏だてて待った毎夜。香わしい姉の体臭を夢の中でまさぐって、はだけた胸乳に甘えようとして、冷えたシーツを掴んで愕然と現実に戻った幾夜。

とろ／＼とまどろんで、爽やかに射しこんでくる朝の陽が白々しく、脱殻のような淋しきでカーテンを引開けたことが幾日続いたことだろうか？

今夜も、多穂子は眠れそうにもなかった。寝巻の上にコートを羽織って窓を開けた。細い雨が顔に湿って、しっとりした夜の静寂の中で、ぼうと駅前盛り場の空が明るく映えて、近くでは眠りに入らぬ灯が煙雨に霑けて瞬いているのが美しかった。幸福な一家の団

樂が、その灯の下で営まれているのだろう。父と子、母と娘、或いは、自分のような姉と妹達が就寝前の一刻を茶でも喫みながら、今日の出来ごとを話題に笑いさざめいているのかもしれない。

「姉さん！ 何処に居るの？ きつと悪者に捕まっているのね。多穂子だって危かったんですもの、教えて！ 何処に居るの？ 研一さんがきつと救けに行ってくれることよ、ね！ 知らせて、お姉さん！ 今日だって姉さんの好きなハンバークを作ったのよ、富士屋でシュークリームも買って来たわ、お紅茶もいれて待っているのよ。帰って来て、姉さん！ 多穂子は淋しい、とても淋しいわ」

多穂子は胸が一杯になって、我知らず円らな瞳からきらきらと露の玉が濡れ出た。

併し、そんな妹の人並な感傷など、微塵も通わぬ暗黒の世界にいる姉には、ハンバークやシュークリームや紅茶は雲上の夢物語なのだ、寝巻は無用の贅沢物なのだが、多穂子には、そんなことは分らなかった。力なく窓を閉めるとスタンドの鎖を引いた。赤いシーツを透して部屋全体が艶しく沈む。



多穂子は緋絹の上に、がばと身体を投げ出すと、よゝと姉の寝巻を掻き抱いて泣き咽んだ。白い項が震え、二の腕が布地の上を這った。一しきり感情の嵐が過ぎ去ると又弱々しく立上って戸棚を開けた。そこには姉の古い日記帳が積み重ねられているのだ。

姉と自分の楽しかった過去を繙くことに淋しさを紛わそうとする哀愁の手は、色褪せた一冊のノートブックを抜きとって臥床に入った。

昭和十×年十二月×日。

広東に来てから三日。内地ではオーバーで肩を凍めている頃なのに此処はとても暑い。河では子供達が水泳ぎをしている。でも、よくあの汚い水の中で泳げるものだと思う。

父が南支派遣軍の招聘で広東へ行くと云ったとき、私と多穂子は丁度冬休みなので、どうしても連れて行ってくれとせがんだ。

外交儀礼的な訪問で、中華民国の要人に逢う、家族同伴という指定なのだが、私達迄連れて行くことは、考えていなかったらしい。父の苦い顔、今思い出しても笑って了うが、次代の子供に他国を見せるには、こんなよい機会でもなかったら出来ないでしょうと説いたら、とうとう承諾してくれた。

来て良かったと思う。内地では想像出来ない大陸の雄大さ、そして騒々しい中にも漫々的な中国人の暮しぶり。今日は可愛らしい姑娘を助けてやった。姑娘と云っても少女で、私より二つ三つ年下の子供だった。

李さんの処からの帰り、蛋船を見ようと車を珠江の岸へ走らせていると前方でわい／＼と人だかりがしていた。何だろうと運転手さんが警笛を鳴らすと人の群れが割れて、中から可愛らしい少女が何やら喚きながら走り出て来た。藍色の旗袍チーパオを着て大人並に胸を張って小さな口元から黄色な強いアクセントが飛び出した。すると脇か

ら額骨の張った男が出て来て、ぺら／＼と抗議する。男の尖った口から唾がとんで猛烈に怒っている様子である。群集がぐるっと自動車を取囲んで、私は少し怖かった。事情と云うのは少女は横楼（蛋船の技楼）。広東では蛋民と謂われる水上生活者があって、海辺で漁業を営み、陸上の者との血族関係其の他を避けている。横楼とは、つまり、こうした蛋民の娘達が脂粉を売る船の館であり、お座敷である。の使い女で店で卵を買った。内懐へ手を入れて財布を探るとあるべき筈の銭入れが無い、青くなって包みを解いて卵を返そうとした。ところが、小さい手で掴んでいた卵は受ける手に触れるか触れない内に転り落ちて盤の上で無惨にも潰れて了った。商人は金を払えと云い張り、少女は割れたのはお前の手落だと主張して譲らず、このような人だかりを招いているのだという。

父が卵の代金を支払ってやったら商人はペコペコと頭を下げた。私は少女の名前を訊いてみた。翠妃ツォイフンエイと云うのだそう。可哀相だったので私の宿舎を教えて遊びに来るよう誘って置いた。

多穂子は其処迄読んで、あら！と胸を押えた。次を読む迄もなく脳裡にその翌日からのことが生々しく甦った。

少女は次の日に訪ねて来た。昨日の礼を云った後で、金を失くした為に酷く折檻されて横楼から逃げて来たと言った。そして何でもいゝから使ってくれと手を前に合せてお辞儀をする。

僅か二週間程の滞在なのだからと言いつつ含めても仲々承知しない、果てには床に跪く仕末に、姉妹は困って父に懇願してみた。

父も持て余してか、帰国の時に司令部の人にも頼むことにして、それ迄姉妹の遊び相手として置くことに折れてくれた。

が、翠妃は忠実な少女だった。

日本人だったら、まだ／＼飴でもしやぶって駄々をこねている年頃なのに、一っぱしの料理はする、繕い物はする。お嬢様々々と



尊つて姉妹の身の廻りの雑用をこま鼠のようになって働く。使つてみると仲々調法な存在だった。だが、ふつと姿が見えなくなる事が再三あり、召使にとつて父の書類をいじることがタブーになっているに拘らず、掃除に託けて触れていることを二度程発見された。

子供心では大して気にも留めていなかったが、帰国の時、司令部の参謀に預けて来たのだが、戦後、その参謀に邂逅した際、あの娘はどうもスパイらしかったですなあ、子供だから誰かに金でも貰つて唆かされたのでしようが」と笑いながら、客が来ると扉の蔭で立聴したり、私の鞆を覗いたりしましたんで厳しく脅しましたら、出ていってしまいましたよ」

それから姉妹は女学生時代、翠妃に近づいたことがある。近づいたと云つても立話の時間であつたが、香港から横浜經由で桑港へ行く船に、親戚の留学生を見送りに行った際のことである。船室へ入りこんで、始めて渡航する興奮に上気している青年に、ロンドン帰りの先輩ぶりを撒いていると出航のドラの音。名残りを惜しみながらデッキ迄来ると擦れ違つたのが翠妃であつた。

「翠妃さん！」  
伶子が呼ぶと彼女は思い出せぬようだったが、広東を仄めかすと驚いて

「まあ！」  
と思いがけぬ邂逅に眼を瞠つた。

「お久しぶりね、アメリカへでもいらっしゃるの？」

彼女は貴やかに飾つて、姉妹達よりは素晴らしい令嬢ぶりだった。

「えゝ、ちよつと」と言葉を濁して、

「お嬢様方もお変わりありませんか？」

「お蔭様で。でも翠妃さんは見違えちゃうわ、すっかり御立派になつて」

「そんなことございませんわ。」

と傍の人目を気にして、もじもじした。

「私のアドレスはこの人が知つて居ますわ」

と一緒に出来た留学生を見返つて

「向うからお便り頂戴ね、又お交際しましょうよ、ね、多穂ちゃん」

と伶子は妹に同調を求める。

「お待ちしますわ、翠妃さん」

あどけなく凝視める多穂子の眼を逸らして

「えゝ、有難う」

と何か翠妃はそわついて、顔を伏せた。

ドラが退船を促す。

「じゃ、さようなら、お元気でね」

そんな淡い邂逅だったのである。それきり、彼女からは便りは無かつた。

多穂子は日記を伏せて横臥した。

ぬく／＼と絹蒲団の中へ足を伸ばしながら、まさか？と胸で呟いた。

翠妃、翠妃がY国人だとは？が、併し、参謀も云つていた。あの娘はスパイらしいと——すると、彼女は中国人を粧つた国際的なスパイだったのかしら？——

多穂子は眼を瞑つた。

羽田で機上から颯爽と降りた女性と翠妃。二つの顔が網膜で重なつた。間違いないわ、早速、研一さんに話してみよう。多穂子はもう一度、リーレ・ルホーターの端麗な顔を險に焼きつけて、眠り入っていた。

## (二) 女 体 輓 畜

地底の異国に、先頃、鉄道が開通した。しかし鉄道とは言つても、石炭や電気、ガソリン等を動力とするものではなかったが。



幹部達の個室や家畜矯正の部屋々々を繋ぎ厩や調教馬場と連絡している8字形の環状線である。地上の電車軌道よりやや狭かったが舗装されたレールの上を、音を立てないゴム車輪の無蓋車が走る。楕円に設計されたグリーンの中車は、軽合金を材料とし、お伽の国の車のように軽やかでモダンであった。

ボギー車の三分の一程の大きさしかないがピカピカに光っているステップを上ると中央に白肌の女体が中世紀の奴隷船の奴隷のように、動力源として、一列に配置されてあるのを見ることが出来る。しかし、中世紀の奴隷船の奴隷は手摺を漕いで船を進めるのだが、家畜は二本の足で箱車を走らせる。驚くべきことに、この鉄道の動力源はすべて、こゝで飼育している家畜だったのだ。五匹乃至十匹の熟れた肉体は後手に縛められた儘、下半身を床の穴に嵌めこんで肩と腰部に鉄と皮の索具を装着されている。

箱車の為、輓女達の視線は車外と遮断されている。軌道があり、環状線である以上、計器に示される一周の定分を忠実に守って、ひたすら、車を推進させればよいのだ。一路盲進、交代の時間迄休むことは許されない。息をきらし全能力を挙げて、輓馬のようにがむしやりに足を運ばなければならない。

乗客の腰掛には、輓女の肩が足台になるように例の肉椅子が設置されている。手摺りの下には客用の遊び道具、即ち鉛玉のぶらさがった鞭や尖端に針のついている笞や皮膚を焼く鑊が掛かっている。そして壁掲示板は次のように謳っている。

乗客の皆様へのお願ひ。

この車は調教と実益を兼ねた乗物です。輓畜達は体力のあるものばかりを選別したのですから、お気の儘に走らせて下さい。

速くなさるには、足下のアクセルを踏んで下さい。車軸に連結した歯車によって、家畜達の臀部をプロペラ式回転鞭が叩くようにな

って居ります。それでも、もっと速くと御希望の方は、お手元の道具で直接急かせて下さい。

お停めになるにはブレーキを踏んで戴ければ結構です。車輪に作用すると同時に家畜達の足鎖を締め上げて停止致します。

尚、家畜に餌や飲物を与えることは絶対に御遠慮下さい。調教上支障をきたしますから。

畜体審査室から逢坂辰一と緑川百合子とが連れだって出て来た。立止って、ボタンを押すと、レールの間に一条のバネが浮き出る。来かゝった箱車の数本の足に弾んで触れる。

輓畜は、乗客が待っていることを知らされて車を停めた。

「逢坂さん、この頃、ちっとも顔を見せないわね」

乗り込んだ二人は前部の肉シートに深々と腰を下した。

「いやあ、多穂子のことで失敗してしまったので当分、足止めですよ」

「そう、お気の毒ね、けどあれは、少しばかりへまだったわね」

「申訳ありません。一切下準備をして下さった貴女に対しても全く顔向も出来ません。」

後頭を搔く調教師に

「ふふふ、多穂子を何とかすればいいんでしょう。そうすれば又街を歩ける？」

「いえ、あの時は尾けられていたんですから、そいつに顔を見られていますから拙いですよ。」

「承知の助よ。そいつはね、相本研一って云う、オツチヨコチヨイよ。」

多穂子のフィアンセ、アルプス貿易の社員だわ」

得意気に微笑む百合子に

「有難い！ 調べがついているんですか」

と逢坂は喜色を露わに浮かべて咳きこんだ。



「そいつさえ仕末してしまえば……」

「でも、只の鼠じやないらしいわよ、消音拳銃を持って位だからね」

「課長に相談してみますよ、その節はよろしく頼みます」

「まかしときなさい。多穂子だって、あの儘には、しとけませんからね」

逢坂は軽くあしらわれるので、なんとなく後味が悪く虫酔が胸に走った。ぐいとアクセルを踏むと窓際の鞭をとった。ぴしっ！　ぴしっ！

「急げ！」

車はがくんと揺れて、俄然、速度をあげる。

輓畜達は自分の廻す車軸で自分の臀部を打たれて気狂いのように駆けた。

「その調子、その調子！」

百合子は鞭をふり上げて婉然と笑う。

「今日も一匹獲って来たそうですね」

「えゝ、お得意様を一人失って、愛玩品が一匹出来ただけよ。」

「洋装店って云うのは全く良い猟場ですね、入れ代り立ち代り獲物が服を作りに来るから」

「それを、バスト、ウエスト、ヒップとメージャーで計って選ぶんだから確実ね」

「まったく、やりきれない。竦腕家ですよ、貴女は……」

「でも、手当り次第じやすぐ足がつくわ。これでも仲々苦心がいるのよ、眼をつけても直ぐには手が出せないよ、暫く泳がしておいてチャン





スを狙うの。今日だって、ばったり渋谷で遇ったのがよかったのよ、この偶然を待つのが中々辛抱がいるのよ。先方の住居や勤め先へうっかり乗り込むと顔を晒すことになり、足跡を手繰られることになるものね。逢坂さんの二の舞になるのは嫌だわ」

「それ、皮肉ですか、勘忍して下さいよ」

一匹の家畜が、踏みっ放しの廻転鞭の痛さに耐えかねてか、「ああゝっ」と悲鳴を洩らした。

百合子の視線が、ふと、注がれて。

「おや、お前だったの」

口元を綻ばしながら立上って、その輓女の前のシートに坐り替える。

「知ってる奴？」

「私の仕入れた品よ、お得意様の銀ブラ族」

大柄な個性的な美貌だった。バストは九〇糎は十分あるだろう。

たわゝに実った乳房が、走る反動でぶり／＼と揺れ喘いでいる。それがウエストへきて、きゅんと引緊まり、又ヒップで急激な円みを持つてひろがる。典型的な八頭身である。その八頭身の背中は大粒の汗がふき上り逞ましいヒップの方へ流れている。

「どう？ 少しは慣れたかい？ 折角のその身体を布地で包んでうなんて勿体ないことよ。そんな風に走ったり、のけぞったりしてさまゝな曲線を見せて、私達を楽しませてくれた方が、その身体を活用するのだと云うことを忘れてはいけないんだよ。お前を発見した私に感謝すべきよ。さあ、こっちを向いて」

八頭身の輓畜は、激動を鼻翼で荒々しく吐きながら、苦しげに顔を廻す。

「くず牝！ もっと機敏にやれ！」

逢坂の靴が躍って、彫の深い横髪を踏み振る。極限まで押しひしがれた首の骨が軋んで、銀ブラ族は哀切の悲鳴を挙げる。

「ぶら／＼と毎日銀座を無駄歩きしているより、この車を輓く方が余程有益だよ。そもっと、しっかり走れ！」

ぴしり！ 鞭が肩先に落ちる。家畜の膝関節は宙をふんで狂奔し、心臓がとどろしく鳴った。にんまり凝視していた百合子は、弾んでいる白い肩を足台にしながら、

「鞭の撥ね具合はどう？ これがお店で寸法を採らせた時に、ワンピースを通した肌触りから、むち／＼と背中に脂肪が載っているの、で早速、家畜候補にしてやったの、色は白いし、艶々した皮膚を持つているでしょう。直ぐにでも鞭打機に装着してみたかったのよ。大柄で鞭を受ける面積が広いから響きがいゝだろうと思って……どう？ 手応えは悪くないでしょう？」

調教師は一、二度鞭の素振をくれてから、今度はゆっくり味うように、みやびな背に振り下した。

「ああっ！」

反身になって避ける羞花の肌に、練達した鞭は、続いてぴしっ！

「あゝっ！ あむっ！」

月のように耀っている肌を汗まみれにして、阿修羅のように馳せた。

### (三) 大阪家畜捕獲連絡所

リーレ・ルホータは伏せさせた伶子の髪に靴を載せながら、逢坂と緑川を迎えた。

「わざ／＼お呼びたてして済みませんでした。どうぞお掛けになって」

と和やかに愛嬌をふり撒いて、家畜椅子を勧める。

壁で、スカイブルーに反射された柔いトーンは、の部屋隅々迄しみ渡って、装飾用の、生きた彫像を美しく浮びあがらせていた。



固定されているものもあるし、鎖目のないものもある。ある餅肌は跪いて、祈るような恰好でコーヒー茶碗の載っている皿を捧げ持っているし、両手を高々と開いて、仰向いた口に電球を啞えて照明している続肌もある。

逆四つ這いと云うのか、背面を床に向けて四肢を突張っている乳房の上に、リンゴの盛った盆を載せた美畜もあるし、幾匹かの背を並べた安楽椅子もある。

僅かに胸の起伏で呼吸をしているのが解るだけで、緑の黒髪を持つ白い生物は微動だもしない。動くことを禁じられ、瞬きさえも違法なのだ。全能力全機能を絞って跳ね廻ることも苦しいのなら一寸だに身動きの出来ない、この装飾用置物も又苦しい。置物達は、それを轡の舌の奥で咥き、噛みしめて耐えているのだ。

平和に、幸せに生れ育った淑女達、明るく楽しく暮らしていた乙女達。はからずも美貌であるが故に、人並優れた肢体の持主であるが故に、この惨苦を受けねばならないのだ。

運命であると云って丁え、それ迄だが、偶然、緑川洋装店に服を注文したのが為に、日天産業へ勤めたのが為に、適々Y国人と同じ電車に乗り合せたのが為に——人間性を剝脱され、畜生の境遇に突き堕とされ、日夜、罪ならぬ罪をでっち上げられて、責め苛まれているのだ。

呻き、喘ぎ、泣き、悶えるその心の隅で、あゝ、あの店へ行かなかつたら、あの会社へさえ勤めなかつたら、と悔恨の念が湧き展がる。それならば、やはり運命と云わざるを得ない。いや、そうだ、やはり持って生れた宿命なのだ。人の寿命が必ず尽きると同じように、人の生涯が終って、家畜の生存をせねばならないのも運命なのだ。家畜としての生存を背負って生れついたのだ。

エレガントな女性達は、包み秘していた玉の肌を、白々とブルートーンに映えさせて、Y国人の目を楽しませるべく、飾られている

のだ。

「逢坂さん」と女上級者は呼び掛けて、

「高木さんから後で詳しい話はあるでしょうが、大阪へ行って貰いたいと思います。攪乱工作の主要手段として家畜収集を行うことになりましたので、日本の重要都市に網を張ってみたいと思います。手始めとして大阪に出先機関を設ける訳です。貴方はその尖兵ですよ。関西地区は貴方の思う通りやってみて下さい」

東京で顔を知られてしまった逢坂を、所長に栄進させて大阪を担当させる。多穂子の事で失敗した逢坂にとっては、特別の取計らしいに違いない。

「有難う御座います」

その感謝をゆったり享けて、女上官は象牙のパイプホルダーから紫煙をくゆらす。

「今のところ大阪は一切無なんです。設備も関係官庁への互りも捕獲連絡所ありません。それを有にして行くのは貴方の手腕一つです。勿論、東京本部からは早急に手配を致しますが、何と云っても貴方の手腕が此の際大切です。失敗は二度と繰り返さないようにね」

人は責任を持たされることに依って上級者への信頼感を増し、闘志を掻きたてる。リーレはそのつぼを突き、手腕だと一応煽て揚げておいて最後に彼の失敗をチョッピリ匂わせて話を引き緊める。人事も慣れたものである。

「はあ、頑張ります」

力の籠った口調で答える。

「向うでは、差当り大規模な貯蔵施設は造れないから、当分の間、東京へ輸送することにしようと思います。私案として、定期便のトラック運送会社を創立致します。勿論、一般の貨物輸送をやるのです。それで世間体をカモフラージュして、麻酔薬で眠らせた獲物



を梱包品にして下積貨物に紛れさせるか、トラックの荷積板の下を刳抜いて詰めるかして運ぶことを考えて居りますが貴方の方でも一応検討してみてください。」

女指導者はホルダーを、脇に踞んで開けている家畜の歯並びのよい口へかざして、灰を華奢な指先ではたいた。

「それから緑川さん」

と濃艶な眸を年上の下級者に向けて、

「相木研一を探ってみてください。多穂子を通じれば近付けるでしょう。都合に依っては消すことになるかもしれませんが、それは此方でやりますから情報だけをキヤツチして下さい」

伶子はぴくっと頭を拾げる。多穂子の名が耳に入ったからだ。

リーレは「ちよっ」と舌打ちして、その素顔を踏みつける。パンプスの底皮の下で、なだらかな鼻梁が歪んだ。

「これを知っておられるんだそうですね」

話が一通り済むと逢坂は伶子を足先で示して、女上司に阿諛ねるように云った。

「ええ、昔ね。貴方の調教報告は読ませて戴いたけど、使い物になる？」

「馴致水準としては良い方ですが、まだ二、三ヶ月調教しなければ使い物と迄はゆかないでしょう。課長から聴いたのですが連れてお帰りになるそうで？」

伶子はさあっと背筋が硬直した。更に救いのない異国へ連れて行かれる――。

「ええ、どうしようかと、考えているところなの」

と立上って、灰皿家畜の鼻腔の中へ喫い残りのシガレットを、燃えている方を先にして突こみ、ホルダーを抜きとる。

火は、中の粘液を吸いにとって、じゅじゅつと音をたてる。

「ああーっ！」

美畜は火焰と紫煙を肺腑へ送って、動物的絶叫を絞り出し、スマートな四肢を突張って絨肌を激しく痙攣させた。リーレは見返ろうともせずにF三八七号の鼻鎖を索いて美畜を起し、表情を覗けるようにしてから、

「私の過去を知っている以上、これは国へ連れて帰るか、眼と耳と口を潰して生きた屍にするか、さもないければ屠殺するより仕方がないわ」

まるで道具でも取扱うように、ずばりと言う。早速家畜の反応が表われる。伶子の頬は血の氣を引き、歯はがた／＼と顫えを嚙みとめている。

殺される！ 家畜刑の二年半とは良い加減な刑期だとは諦めてはいたものの半ば、指折っていた感がなかったでもない。が、生物として最大の恐怖を宣告されて、怒濤のように、伶子の頭脳は過去の幻影と絶望が充満した。一層のこと、こんな鬼畜に絞られるより、自分自身で命を絶った方がいくらかましかもしれない。と人間だけが持つ自殺という手段が脳底を掠めた。

「多穂子だって、相木を冥土へ送り次第、此処へ連れて来るつもりだから、二匹並べてまあ、それからのことだけれど……」

F三八七号は、はあーつと溜っていた芯の苦しみを吐き出す。多穂子が捕まる迄命は保つ。多穂ちゃん、捕まらないで。心で祈るそれは自分の命より強い愛情であったが、自分の生に直接繋がりを持って了ったのだ。

多穂ちゃんの結末を見る迄は死ねない。あの子が若し、こんな境遇に陥されたら、私が底い、耐えさせ、救出の道を構じなければ――。どんなことがあっても、多穂子だけは捕まらしては駄目だ。多穂子だけは助けたい。

「調教成績如何？だわね。これが私の帰国迄に優良品になっていれば殺せないわ、折角の貴方方の骨折を無にすることになるもの」



「多穂子も、その時はお連れになるのですか？」

洋装店主は自分の嘗ての店子の運命が気になるのか口を挿んだ。

「そうね、それもこれ次第ね。姉が不良品なら妹だって潰しものでしようし、上が良畜なら同じ血だもの、下だって生かして使った方がいゝのじゃない」

最善を尽そう、悲しいけど努力もしよう。精魂を傾けて奉仕もしよう。それだけが多穂子の現在の境遇を切り抜ける唯一つの方法なのだ。伶子の頭脳は女主人の一言々々によって、死の脅威から生の予約、生の予約から良畜への励みへ、と木の葉のように翻弄されていった。

だが、その代償は何だと云うのだ。自分と妹の生命の寸延しに過ぎないではないか、家畜は倦きられれば、豚のように屠殺されて了うのが運命である。多穂子だって、恐らく、救うことが出来ないであろう。たゞ束の間の生命だけ、それも家畜としての激しい苦悶に充ちた生命だけが残るのではないか。

家畜伶子は、リーレの巧妙な誘導によって、その思うつぽに嵌められて、良畜への道を一心に歩くよう仕向けられているに過ぎなかった。

#### (四) 家畜伶子の呻吟

二人が立去るとリーレ・ルホータは肉の安楽椅子に凭りかゝる。

「ペロ！ 足をお揉み」

伶子は口を、マニキュアした爪のある蹠に当てゝ、唇で揉みほぐす。

「お前にはいろ／＼とお世話になったわね」

気持よさそうに、且つての召使は眼を細めながら云う。ペロは彼女から救いは期待出来ないことを知っている。黙々と芳わしい息を

柔らかい土踏まずへ吹きかける。

翠妃！ 知っている女なのだ。知らなければ心は乱されない。それも自分が助け、面倒を見てやった少女なのだ。感謝されてもよい相手なのだ。さすが伶子の温和な心も口惜しさに張りさけるばかりだ。六太にしても、リーレにしても、Y国人達は、これ程まで報恩とか謝恩とか云う感情はないのだろうか？

自分の恩人を、罪もないのに獣類として遇し、平然と肉体を責め、心を粉砕する。それが怨恨に対する復讐ならうなづけもする事だが、怨恨とは反対に数々の恩沢を蒙った相手なのである。お嬢様、有難う御座いましたと感涙を滯して拝した主人を非業にも花をあざむく裸身にし口枷、手枷、足枷を嵌め、叩いて蹴って焼いて呻かせ、それでも足りなくて、屈辱の動作を強い、その名もペロと呼ぶ。

犬や猫だって飼って貰った恩は知っている。Y国人こそ家畜として調教するに相応しい禽獣と云えるだろう。その奸智に長けた女豹は腹が空いたらしく、傍の食膳を支えている家畜を手もとへ呼んで、鰯のカレー焼に箸をつける。

旨そうに口へ運びながら

「お前にも以前には御馳走になったことがあったわね」と考えながら

「そうね、私もいろ／＼ともてなして貰ったのだから、気持だけだけど何か上げよう」

伶子は意外な感を受ける。この冷酷な女が、そんな優しい心を持っているのかしら？……と、ちらっと視線をY女性の口もとへ投げる。美味そうである。牛肉と魚を煮つけものに海苔、スープにサラダに新鮮な胡瓜と茄子がある。

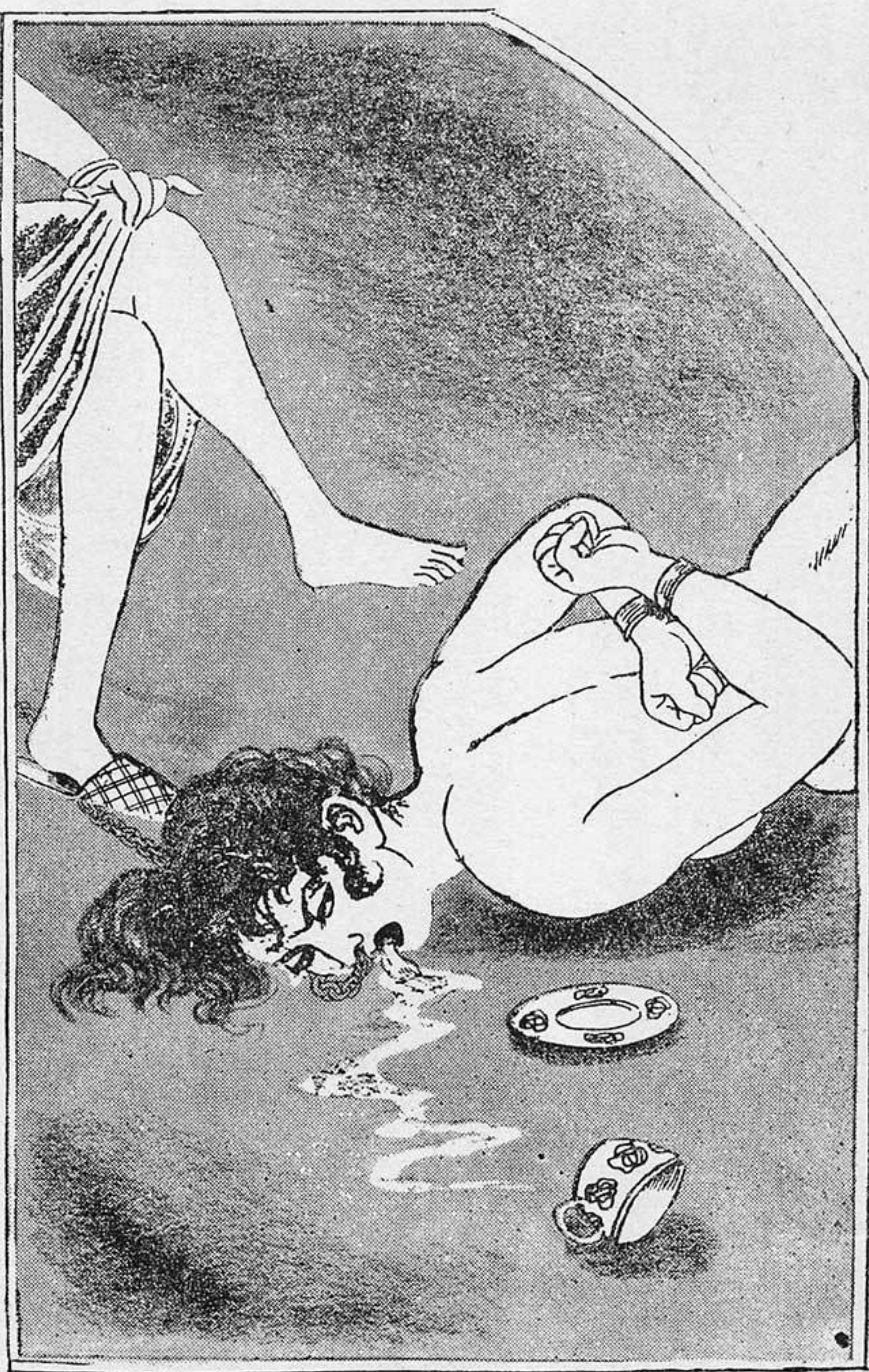
幾日食べないだろうか？あのような豪奢な食事、一口でもいゝ、真白な炊きたての御飯に、海苔を載つけて頬張りたい。後手錠を外



して貰って左手に茶碗を取り、右手に箸を持ってお肉を挟めたら、  
——唾が口中一杯に溢れて胃が悲しく鳴いた。食べたい！ 飢は奥  
床しい令女をも、餓鬼にする。今はありふれた人間の食事へ、これ  
程までに垂涎の瞳が注がれてしまう。

「ほら！」

Y女性の箸が動いて、家畜の眼前へ尾だけの魚の骨が飛んで来た。



法に落魄の身を昂らせて口惜し涙で一杯になった顔を背ける。……  
が、しかし、飢餓に凍えた唇は自分の意志を無視して哀れにも動い  
てゆく。拘束の教えは理智の頭脳に卑屈さを強制するのだ。

真珠の皓歯は、がきつと魚の骨を啜える。舌の運動を禁じられて  
いる口は、猫のように涎を出しながら魚の尾を噛み砕く。

「お前は前に世話してやったのにと思うかもしれないけど、今のお

「ペロ、あげるのよ」

白い足がひるがえって伶  
子の頬を蹴った。

「私はお前の処では人間と  
して面倒を見て貰ったわ。  
だけどお前は今、家畜とし  
て私達に世話を焼かせてい  
るじゃないの。その時の私  
は人として御馳走になった  
のよ。今のお前は畜生じや  
ないか、だから畜生の御馳  
走をやっただけなのよ。い  
くら御馳走になったからと  
云って、家畜に人間の食物  
をやる必要はない。家畜ら  
しい食物、魚の骨は、お前  
達にはとっては最上の御馳  
走なんだからね、さあ、お  
食べ！」

伶子はこの勝手きわまる



前はどうかの？私達に飼われて、どんなに手数料をかけていること、お前達生れ損いの調教に、どんなに苦勞をしているか、それだけで昔のお前が売った恩恵は御破算になって、お釣りがくるくらいだよ」

ペロの齒が、がりっがりっとう鳴っている。アパートの食事にはハシが待っているのに、今迄だったら塵箱に投げ捨てた骨を、今では最上の食物として噛み味う。

女主人はデザートのリントを剥き、皮と芯をぽいと抛り出す。ペロは待ち兼ねたように、口を突き出して咽喉の奥へ送り込んだ。

リーレは生像の捧げ持つコーヒー茶碗に湯気のたつのを新しく注ぎ入れさせて、床へ置かせる。

「お飲み！」

思い掛けぬことである。夢かと疑ぐって、リーレの顔色を窺う、

「いらぬのかい？」

茶碗を足で引き寄せようとする。ペロは、慌てゝ鼻面を突こんだが、主人の足で移動しつゝあった茶碗に、家畜の息ごんだ見当は外れて、鼻輪がかちんと鳴ると床に茶色の液体がこぼれた。

「馬鹿！何よ、そのさまは、餓鬼みたいになつて！」

白い蹠が勢いをつけて顎を蹴上げると、鋭い唸りの鞭が背中に降った。

「私の足が火傷でもしたら、どうするつもりなんだい？お前の一匹や二匹、ぶち殺したって取り返えしがつかないんだよ、クズ牝め！」

憤怒で臉を険しくつりあげて、鞭を振り下す。ペロは息を吐く暇もなく悶え、呻いた。

「舐めろ！濡れたのを、すっきりきれいになるまでお前の口で拭きとるんだ。」

ペロは夢中で床に唇を当て、鼻翼で馥郁たるモカの香りを嗅い

で謝罪の意を懸命に動作で現そうとする。猫が皿を舐めるように汚れた床を舐め廻る。形のよい紅唇で。

「やっぱり、お嬢さんなんて代物ではなかったのね。よし／＼、面倒だから、お前へのお礼は纏めてやっとうよ」

女主人は綺麗に拭き終った家畜の背を足台にしながら、傍の使役畜を呼んで料理用の調味料を取らせる。

「翠妃さん、充分に使ってねと、私に味の素やお醤油を出してくれたいわね。今度は私がやってやろうよ」

Y美人は、残汁を大井に入れると

「お醤油は五日分で許してあげる。次に酢が三日分、お砂糖はあの当時少かったから、二日分、塩は五日分にしとくわ。え／＼？と胡椒ね、私は辛いもの随分食べたから、この箱一つ入れちまおうね、おまけは味の素よ」

鞭の柄でぐる／＼掻き混ぜる。出来上ったものは、得体の知れないどろりとした黒い液体である。それを女主人はペロの顔前に置く。

「超サービスだよ、さあ遠慮せずに飲んでごらん！」

これが飲物か？食べものか？これが自分に対する返礼なのか？さすが家畜として馴致された筈の伶子も躊躇する。

「ペロ！飢えてんだらう、纏めて入れてやったんじやないか、早く！」

伶子は後手の指を固く握り締める。白い二の腕が背に強く密着する。冷やかに見下していた女主人は、いきなり手もとの汁茶碗を叩きつける。

「ペロ！先刻の勢いで飲むのよ、そら！」

皿が飛ぶ。ペロは眼を瞑った。唾を殺して口を寄せる。唇が滅茶な味に触れた。ぴりり／＼と胡椒が口中の粘膜を燃えた／＼せる。

「美味しいだらう」

女主人の足が後頭部を踏みつける。



「あ、ぶぶぶ……」

ペロの呼吸は汁の中で溺れた。味はわかったものでなかった。がぼつと気管は黒い液体を吸い上げる。咽喉が灼け、食道を流れ落ちると焼饅を当てられたように胃が爛れた。辛味と鹹味で胸が激しくどきめき、涙が、汗が、鼻液が顔中を濡らす。

「私のカクテルは涙が出る程旨かったの、そう、よかったわね、ははは」

嘗ての召使は、完全に屈伏させた恩人のお嬢さんに高々と哄笑を浴せる。

ペロは燃えたぎる胃の腑の暴騰に、俯伏せになった四肢をぶる／＼とふるわせて悶えた。

「水！ 水を下さい」

言葉にならぬ舌で呻き声を挙げる。

リーレは傍の、赤いワインをちびりちびりと嗜みながら頬をほんのりと赤めて、瞳の奥に、きらきらと残忍な光りを宿しはじめた。

### (五) 水責のゴム棒

女主人はゆっくり立上ると壁に掛けてあるゴム棒を脱す。顔の輪郭を描いて棒どってある硬質のゴム棒は、内側を軟かい海線体で被い伸縮自在になっていて、三十糎程の高みをもたせてある。それを悶転しているペロの顔に嵌める。と、ピタリ、密着して、棒は顔面を底にした桶に出来上る。

「では、水を吞ませてやるよ」

こづきながら鼻鎖を索き、ずる／＼と蛇口の下迄運んで、仰向けにゴム棒を床に固定する。下三八七号は上を向いたきりで左右に首を振れない。足をばたつかせ、僅かに腰を捻って口腔の渴きを泳える。

「さあ、存分に飲むんだよ」

コックが開かれる。勢いよく水滴を弾いて、水はみる／＼顔棒の桶に溜った。

ペロは空気に替えて水を吸った。鼻と口から、とう／＼と流れ入り、ごぼ／＼と絶え間なく咽喉が動いた。流入の速度をオーバーする水量は、棒壁を越えて眩しい肌に溢れおちる。

「あゝ！ もう沢山！」

せつなく、噎び、唇をばくばくさせる。水は低きへ流れるの原理を冷酷に実行して、ペロの胃袋へ奔流する。

「苦しい！ 苦しい！ 翠妃さん、止めて！ 御主人様、許して！ どんな……どんなことでも致しますから……」

伶子の腹は見る見る膨らんでゆく、細かったウエストは布袋のように脹満し、がぼがぼと音を立て、腹が鳴る。

女主人は水を断めた。

家畜は解放された気管で、慌ただしく息を送りこむ。

「どう？ 堪能した？ 一週間分ぐらい入ったかな。ふふふ」と含み笑いして

「喋らせてやろうか？ 家畜お目見得の挨拶も聴きたいしね」

舌袋を脱された。併し、内臓に納まった水の圧迫で、舌は暫く動かせなかった。水が咽喉もとまで溢れて喋れば出て来そうで、うとうと唸った。

「挨拶する必要はないと云うのかい？」

焦れた声が家畜の畏怖を掻き騒がす。

「は、はい。く、くるしいんです。翠妃さん、今、：申し上げます」

哀切を囁すれた声で絞る。

「なんだって？ 翠妃さん？ 私ね、家畜からそんな云い方で呼ばれるとは思わなかったよ」

柳眉を逆たてると犠牲畜の盛り上った腹部へ踏み登る。



「あっ！ ゆるして、ぐぐぐっ」

言葉は半ばで切れて、ぶく／＼と体内の水が押し出れて、口元へ逆流して来た。桶になってゐるから顔の上へ溜る。吞まされた黒い液体や胃の残滓も混じて吐き溜り溢れそうになる。

ペロは又、呼吸が停った。

Y美人は、とんと腹から降りる。水は又どろ／＼と胃の腑に、納ってゆく。

「お前は家畜としての挨拶も教わっていないのかい？」  
手を拱いて懊惱している畜体を見下す。

「はい。申し、申し上げます」

伶子は絶え／＼な息の下からや々と云った。

「声が小さいわよ」

女調教師は、肉椅子を呼び寄せて脚を組んだ。ペロは圧縮された肺腑に出来るだけ息を吸いこんで、声を挙げた。

「偉大なY国に飼育されて居りますF三八七号、呼名をペロと申す賤しい家畜で御座います。この儚ない生命と賤穢な畜体の凡ては闘士様の御所有で御座います。御気儘に取扱って下さいませ。愚昧な心身を、正しい畜生へと熱心に調教して下さいさる闘士様に深く御礼申し上げますと共に、更に厳しく矯め直して下さいませ」

それは暗誦させられた字句に過ぎない、が併し、毎日繰返し／＼唱誦させられていると自然、頭脳に家畜倫理が形成されてくる、加えて四六時は責の連続である。意志も理性も長期の拘留に磨滅させられて、洗脳の効果は日を経るに従って顕著になってくる。瞳は歎訴哀願のみ宿し、肉体は戦々競々と只管屈従を表明している。

「若し、私がお前の爪を欲しいと云ったら？」

「ペロの肉体は闘士様の所有品で御座います。御自分の物をお取りなさるのに御断りになる必要は御座いません、どうぞ、御随意に爪

を剥がして下さいませ」

努めて感情を押殺していても、自らの口を出るその言葉に、人間としての矜持は脳底を惑乱させる。

「それでは、こうやって私はお前を、随意に取扱っている。どう思う？」

「どうも思っている居りません。只御主人様の御気持が安らぐことに、ペロがいさ／＼かでも役に立つならとそれだけで本望で御座います」  
「怨みを持たないというのかい？」  
「はい」

だが、その言葉とは反対に、口は無念そうに歯を嚙む。

「じゃ訊くけどね、お前は大野に大分調教されたそうね」

女主人は見過して乳房を踏む。

「はい。いろ／＼と教えて戴きました」

伶子の心は、六太の名にふと妖しい昂ぶりが走った。

「同じ会社に居て、給仕として使っていた少年に鞭打たれることは一体、どんな気持？」

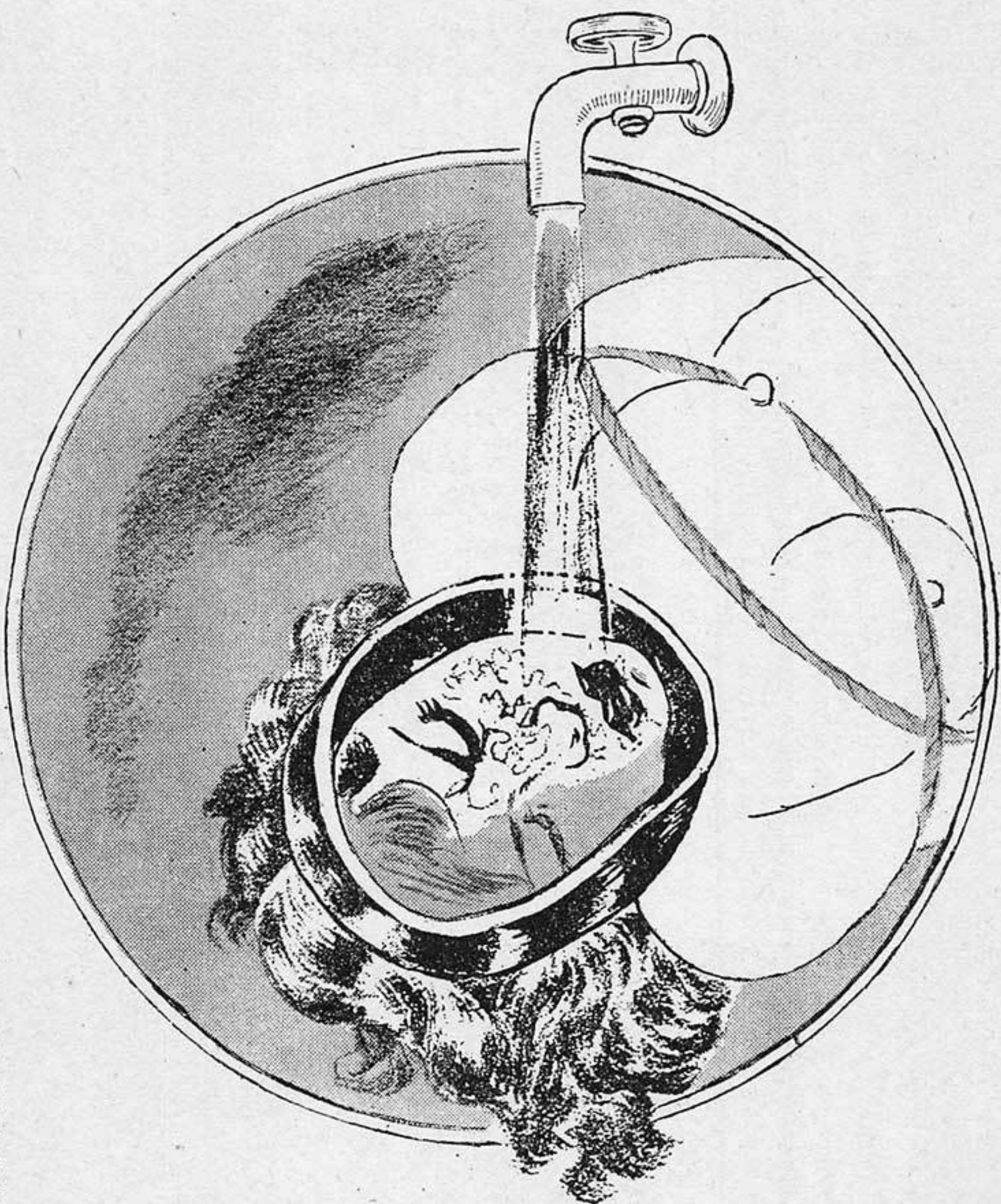
「始めは、人間心が出て大変苦しみました。でも、今は大野闘士様に感謝致して居ります」

「どのように？」

「私は家畜なので御座います。畜生として暮すべき身が、日天産業で女秘書ですとお高くとまっています。大それたことで御座いました。生れ損いの癖に人間様の仲間入りをして得々としていたので御座いますから。それを大野闘士様は導いて下さいました、課長様と連絡をとり、ペロの本来の生き方を教えて下さいました。優れた闘士様を給仕扱いにしたことは、この畜生の身では償っても償いきれるものでは御座いません。息の根を停められても、兎や角、申せませぬ。それにも拘らず、闘士様は強い熱情を調教で示して下さい



ました。つまりぬ虚栄の布引を裂いて、この乳房を、この肌を露呈して、家畜に相応しくして下さいました。空気に馴染まぬ肌を、鞭で外気に耐える皮膚に鍛えて下さいました。手を後で留めて口で啜



「なるほどね、言葉は立派だけど、心からそう思ってるのかい？」  
女主人は冷やかな笑を頬へうかび上げる。  
「はい。心からです」

えることを覚えさせ舌を縛って言葉を無用にし、人間の意志を封じて下さいました。齢ばかり多くとも愚鈍なペロを、若い闘士様は巧みに調教して下さいました。F三八七号は大野闘士様の爪の垢を喜んで舐めさせて戴き、御礼申上げて居ります」  
伶子は愚かれたように喋った。胸を圧する水の苦しみが、惑乱の言葉を語らせたのかもしれないが、伶子の心隅に、六太に対する秘そやかな思慕がなかったとは云い切れない。虐められることを思い慕う感情を恋と呼ぶならば、それは魔性の恋、倒錯の愛であろうか？ 自分の奇羅びやかな衣裳を解剖し、清純な肌を冒瀆し、のた打ち廻らせた醜貌の男。自分を暗闇の世界へ拐い来たり、高邁な理智を唾棄すべき卑屈の境涯に没入させた陰虐な異国人に、細やかでも慕情を抱く、それは家畜の恋。苛酷な鞭の響の底から生れた晦冥の愛でなくて何んであろう。

愛は、惜しみなく与えるものかもしれない。しかし類いまれな美貌と肢体の持主である良家の娘が抱いた思慕にしては、余りにも悲惨な魑魅魍魎の恋だ。喘ぎ跪く苦役の中の恋だ。



「試してやろうよ」

女主人は、六太に対する傾倒ぶりを妬んでか、更に、腹部へ足を掛ける。

ぶく！ぶくくくく、胃袋は押し潰されて、液体が再び顔へ湧き上ってくる。

「ぶ！ぶぶつ、ぶぶふ」

情念が消えて、ペロは奔騰の苦悶に背を硬直させる。女主人は足を退ける。濡えられた汚水は、泡だって鼻孔と口腔へ吸いこまれてゆく。

「私は面白いよ。どう？主人を楽しませて嬉しいかい？」

「は、はい……」

「嬉しかったら嬉しそうな顔をするの！」

又、腹へ乗る。

ぐぼっ！ぐぼっくぐぼっく。

「は、はい。お役にたって、うー……れ……ぐ、ぐぐ、ぐっ……」

「そらっ！もう一度！」

「ぐっぐっ……く……る……し……、ゆ……る……し……て……」

声が細そり、四肢が伸び、虚空を掴んでいた掌が半ば開いて、びたっと床へくずれ落ちた。

「ふん！案外脆いわね」

リーレがゴム棒を脱して、水を吐き出させる。ノックして高木が田川を従えて這入って来た。

「やっておられますね」

と覗きこんで

「眠ったんですか、贅沢な奴だ」

蹲って、膝をペロの背に掛けると、低い気合を発して活所を打った。

「む！むむっ」

息を吹き返すのを手荒く突放して立上ると

「相木研一が訪ねて来ますよ」と女課報員に云った。

「一人で？」

長い睫毛が不審気に瞬く

「こいつの妹と一緒にですよ」

と伶子を顎で示す。何処にそんな力が残っていたのか、跳ねるように立上ろうとした家畜二三八号を、飼育課長は熟練した足捌きで蹴転がす。

「ペロ！誰が立てと云った！」

ぴしっ！と一鞭くれて、ゴム棒を留めた床の環に鼻鎖を通して、伏せの姿勢をとらせる。伶子の頭脳は狂わんばかりに嵐がうず捲いた。

“多穂子が来る！私を救けに来たのか！逢いたい！”鳥鷯モリについた雀のように足をばたつかせる。

「大使館で貴女を尋ねたらしい。今、こちらへ廻すと連絡がありました」

「私を何処で見たのかしら？まあ、逢ってみましょう」

「相木を知っておく方が都合はいゝ」

嘯く高木の脇から、田川が勢づいて

「課長、チャンスじゃありませんか？二匹共一緒に搔捌ちまったら」

「君は単純だから困る。此処で足取りが絶えたら、日本の警察は放っておかんよ、今日の処は見逃して次の機会を狙うんだ」

と窘めてF三八七号を見返えり

「ペロ！妹には会わせる訳にゆかん、いずれ近々に、姉妹揃えてリーレさんに差上げることになっているから、それ迄待つのだナ。」

「ああっああっ」



とペロは咽ぶように声をたてながら、二人に濡れた瞳で哀願する。だが、二人は冷やかに流し眼をくれただけで、そそくさと、部屋を出ていった。

### (六) 相木諜報員の登場

相木研一の足の創傷は殆ど癒えていたが、腕の繃帯は未だ脱れなかった。仰々しい吊繃帯はよしてはいたが、屈伸の度に起るかすかな鈍痛は消えなかった。

多穂子から翠妃の過去を聴かされたとき、直ぐ逢おうと臍を決めた。羽田の様子と中国での行状を綜合してみれば、容易ならぬ相手だと云うことは容易に察しがつく。職業的な第六感で当って砕けると、これを突破口に、一挙に解決しようと訪ねて来たのである。

・応接室の扉が開いて、翠妃が高木を伴って這入って来た。

「お待ちせ致しました」

と多穂子に手を差延べて

「お久しぶりでしたわね。その節はいろ／＼と御世話様になっていました、御恩は忘れて居りませんわ」

「いゝえ、今更そんなこと……」

女豹ような手を、無垢な乙女は固く握り返して

「アルプス貿易の相木さんです。御国とお取引したいと申しますので、お連れしたのですけど」

「喜んで、お話、伺わせて戴きますわ」

「相木です、よろしく」

諜報者と諜報者の眼が、かっちりと火花を散らして交叉した。だが二人共柔和に微笑んだ儘だ。

「お掛けになって」

と椅子を勧めながら、多穂子に向って

「失礼ですけど、どんな御関係？ ハズバンド？」

多穂子の頬にパツと紅が散る、

「やっぱり……」

「いえ、目下交渉中ですよ」

研一が引取って、朗らかに訂正する。

「ふゝゝ、お睦じそうね。これでは、何でも利かなければいけないかしら……」

「是非、そう願いたいものです」

地底での陰惨な地獄の責苦も知らぬげに、座は和やかな空氣が立籠める。

「アルプス貿易は、もとの六井物産の傍系でして、戦後の財閥解体に依って設立された商社で御座います。創立役員はアメリカ方面のベテランばかり集ってしまいましたので、現在も北米方面に重点が置かれて、繊維、雜貨類を主とした輸出を致して居りますが、御存知のように、今回の輸出規制が打撃で御座いますので、何とか打解策を構じたいと考えておるわけです。」

「それでY国市場を開拓されたい、と仰言るのですね、だが、禁輸物資の枠がありましてはね、私の方で欲しいものが簡単に手に入りますかしらネ」

「香港か、シンガポールを通すという手もありますし、そこは又方法があるというものです。」

話は続く、だが、それを永々と書いても仕方がない、話は大体、スムーズにいつて、現地商社の指定取引物資の品目及見本を互いに呈示することに話は決った。一段落つくつと、

「翠妃さんは中国の方とばかり思っ居りましたわ」

多穂子は抱いていた疑いを素直に言葉に出した。

「えゝ、中国人でもあるのです。死んだ母が中国人ですから」

「まあ、そうでしたの」

「戦争が終りました年に、偶然、父に選いましてね、Y国に連れ帰



られたのです。ですから今はY国人ってわけです。」

ホルダーに煙草を差込みながら、あでやかな笑を滲す。真偽の程はわからないけれど、多穂子を納得させるには恰好な説明だった。

「お姉さまはお変わりありませんか？」

リーレは忘れていたように訊く

「ええ、それが……」

無垢な顔が曇って、言葉が重く途切れる。

「どうかなさったの？」

と白々しく訊ね返す。愁いに沈んでいる多穂子の、ジャガードのカーデガンに包まれた若々しい肉体を、傍から高木が例の氷のような眼で値踏みしていた。

「行方不明なのです」

悲愁の淵みに喘ぐ多穂子に助け舟して、相木が説明する。

「誘拐されたらしいのですが、悪いことをする人じやなし何の為かわからないのです」

「まあ！ 怖いこと、日本は立派な法治国でしょう。それにスコットランド・ヤードに匹敵する世界に誇る警察力を持っているではありませんの？」

「それが、残念ながら戦後は国際犯罪に対しては全く無力になって了りますからね」

「と仰言ると、お姉さまは国際的な何かに？」

「そうです、相手は日本人ではないらしいですね」

ぐっと開き直って、鋭い眼光を射込む。リーレの眼も冷ややかに小ゆるぎもせず、がっつきと受けとめる。相対した二人の眼からは一瞬激しく火花が散ったかと思われたが、それは、けたましく鳴った卓上電話のベルに打ち消された。ほっと息を柔げて高木が受話器を取上げる。

「もし／＼、うん、うん、ペロが？ あ、そう。じゃ、私がすぐ行

こう。」

と、リーレに寄り添って耳元へ囁やく。

「ペロが暴れてるそうですから、取押えて来ます。」

「そう。後で私も行きます」

高木が会釈して出て行く。

「ペロ？ って犬ですよ？」

多穂子は姉の家畜名を訊く。

「ええ、私のペット。今調教師に仕込んで貰っているのです。血統はいゝのですよ、イギリス育ちで、色は真白よ。いゝ顔をしていますわ。人間だったら美人ね、それに体が引締っていますし、私と、とっても気に入ってますの。国へ連れて帰ろうと思ってますのよ」

リーレは、いゝ気になって喋べりたてる。が、多穂子には勿論、それが、哀れな姉の変り果てた姿の名前であるうなどとは解らう筈がない。

「見せて戴きたい位だわ」

「ええ、今日は暴れているらしいからいつか、お見せ致しますわ。きつと貴女も傍に置きたくなりますわよ。これを機に、ときどき遊びにいらして下さいね」

「ええ、きつとお邪魔させて戴きますわ」

多穂子と相木は連れ立って、ドームのような建物の長い廊下を歩く。何気なく出口の扉を排して、相木は、はっ！ と身を退いた。多穂子は訝かしげに男の視線を辿る。

「あらっ？」

思わず声を嚙んで、慌てゝ研一の広い肩幅の影に身を隠す。其の前を、緑川百合子が急ぎ足で通って行くのだった。



# 縛り責めを好む男と女

岸 本 青 柳

昨夜遅くまで旧城下を誇った某市内の二流旅館で市議員視察旅行団一行の送別宴が開かれた。参会の主なる人々は市長、助役、収入役、総務部長、庶務課長、正副市会議長、市議の有志十数名、教育委員、実業家の有志者等合わせて三十余名で、心易い間柄とて遠慮なく、型通りの主客代表の挨拶の後、直ちに送別宴に移った。何がさて僅か一週間の九州各都市の市政調査に旅行するのに過ぎないが次年度予算案編成に相当重要な意義あるものとして、関係筋の人々の集まりではあるが、七、八名の美妓連が酒間を幹旋して、誰彼となく頻りに酒を勧めている。宴半ばころから安来節、小原節、山中節、鴨緑江節などを唄い出す。中には変装して種々の隠し芸を演ずるやら、ドンチャン騒ぎが始った。がその終り頃に一寸障子を細目に開けて、内の様子を暫時凝視していた一人の婦人のあったのを知

る者は極く僅かであったが、これが高芝夫人だった。

其の翌朝十時ごろ国鉄某駅を出発したこの市政調査視察団一行を駅頭に見送った数十人の人々がそれぞれ帰路に就いた。実業家石垣操も其一人であった。石垣はその足でこの駅から十数町距てた、市政視察団副団長格の高芝六郎市議の宅を訪問した。選挙の時には相当な選挙資金を貰っているほどの友人の間であるので、石垣は高芝家の勝手口から這入って、

「奥さん、お早う」

と気軽に朝の挨拶がてら来意を告げる。

「まア、石垣さん。宅は今、九州へ出かけましたけれど、さア、お上りよ」

白いエプロン姿で奥からイソイソと出迎えて石垣を奥の八畳の間へ案内した。

「いえ、今ね、駅まで御主人をお送りして帰

り道に一寸報告に参った訳です」

「まあ、それはそれは、何時も宅が御世話になりました。有難う御座います」

「いや、いや、ソナナ堅苦しい挨拶は止めて下さい」

「ほムム、一寸お待ちになってネ」

四十がらみの高芝の妻幾子は、その座を外したかと思うと、饗て茶菓子を選んで、石垣に勧める。

「奥さん、可いんですヨ、一寸お寄りただけですから、別に用事なんか無いんです」

「でも、折角いらしたんじやございませんか、不味いかもしれませんが、他所からの到来物ですからお一つ如何ですか」

「では折角のお厚意に甘えさせて貰いますか」

石垣は無雑作に山中温泉おこしを手づかみで食べ始めた。そして思い出したように、

「何時拝まして貰っても奥さんはお綺麗ですネ、高芝君は幸福者だよ」

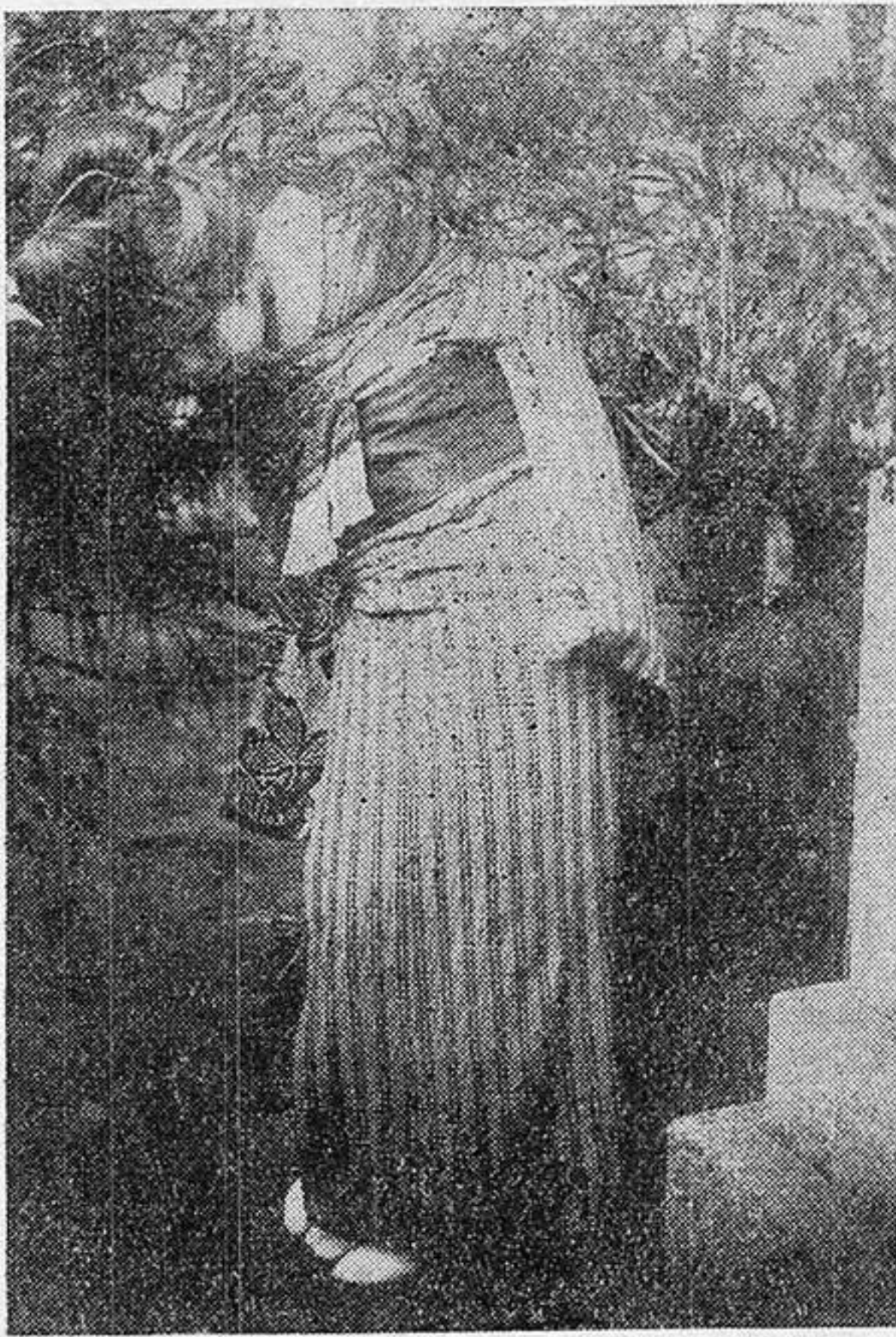
「まア、石垣さんたら、また何時もの御戯談ばかりおっしゃって、本当にしますよ」

「イヤ戯談じゃないですよ。ほんとうに奥さんは気質といい、お顔と言ひ素晴らしいもんだと家内ともいつも話し合つて居るんですよ」

「ほムム、お口の上なこと、奥さんこそ大層お美しい方ですワ」

「家内か、ハ、家内は日本一不別嬪さ」





墓場で縛られた市議の夫人

「あらまア、大袈裟なこと、日本一不別嬪だなんて、奥さんに言い附けますヨ」

「これは、これは、家内にお叱かりを蒙っちゃ恐いですよ、僕は養子だからなア」

「ソレ見なさい、奥さんの悪口を言っちゃいけません。奥さんに内緒にしてあげるからうんと奢んなさいヨ」

「やア一本参った。何でも奢るよ」

「それはそうと、石垣さん。奥さんは何時もお寺詣りされるんでしょう？」

「寺詣りか、寺詣りはあれの商売じやよ」

「まア、商売だなんて。お寺詣りする人は氣

がお優しいのヨ、妾も今朝はお寺詣りしようと思つて居ますの！」

「何時ごろお詣り？」

「別段急ぐ訳でもありませんけれど」

「なら、僕もお供させて頂こうかな」

「恐れ入ります。お忙がしくなかつたら妾の方からお願ひ致しますワ」

斯んな他愛もない挨拶とも会話とも附かぬことを繰り返していたが、早速二人連れ立つて約半道にある高芝家の手継寺遍照院にお詣りすることになった。二人は電車を待つ間に石垣は停留場前の荒物屋で何品かを求め、二人は無事に墓参りを終え、遍照院にも参詣し同寺正面の広縁で石垣は衣服煙草を喫いながら休息した。幾子は帯の間からコンパクトを取り出し、手鏡で顔を映し四、五回白粉を塗っていた。それを横目で眺めていた石垣は、突然幾子の側に摺り寄り小声で話を持ちかけた。

「奥さん、一寸僕の用事を聞いて呉れる？」

「ハイッ」

「今朝ネ、御主人を見送つて写真を一枚パチリとやつたんだがネ、彼所で奥さんを撮影したいんだが……」

「まア、写して下さるの、こんな顔でも可いならどうぞ」

「奥さんは美人だから迎も素敵に写るよ」

「一寸待つてネ、髪を直しますワ」

「その儘の方が可いんだよ、ありのままで。じや一寸来て下さい」

石垣は合服の右ポケットから小型写真機を取り出し、それを右手にブラ下げ、この寺院の墓地へ幾子を案内した。墓地は寺院の裏山の小高い所の百五十坪ぐらいの山麓にあり、周囲には檜、松、杉などの樹木が繁っており、昼間でも少々薄気味の悪いところである。

「こんな墓場で撮るの？」

「まア可いさ、此所こそ安樂地帯じやありませんか、誰も見て居ないしネ」

「でも何だか淋しいワ」

「一寸の間だよ、直ぐ撮るんだから。そのお墓の横に立つて御覧」

幾子は内心不気味ながら、石垣の言われる儘に墓石と墓石との間に、石垣の方を真正面に向つて立った。早速石垣はその立姿を一枚パチリと撮影すると、幾子は墓所から降りてきた。石垣は周章てて



「ああもう一枚頼みますヨ」

言いつつ幾子の側に近付き

「奥さん、一寸済まんが、両手を後に廻わして、前かがみになって下さいませんか」

「ハイ、こうですか？」

柔順な幾子は、別段不服を訴えるでもなく、石垣の言われるように、白い両手を後ろに組んで前かがみの姿勢を執った。

「奥さん、一寸の辛抱ですよ」

言いつつ先刻荒物屋で買い求めた麻縄を左ズボンのポケットから取り出し、幾子の背後へ廻るや否や、少し肥り気味の幾子の二の腕を強く縛り上げた。

「あッ、痛い、吃驚したわ、妾を縛ってどうするの？」

「縛られた女の写真を、雑誌に載せて見たいと思つてね」

「まア、妾の顔を写すんですか？」

「なるだけ俯く方が可いなア」

「ハイ、こうですか」

仕方がないと諦めたのか、幾子は写真のような恰好になった。勿論黒髪を少し乱したり、左肩を開けたり、白生地に紅絞りの帯揚げの両端を前にダラリと垂らしたり、右袂の長襦袢の袖を前に覗かしたり、黒襦袢の帯の端を後に垂らしたりなど、縛られた女の格好を附けたのは、石垣が彼様でもない、此様でもないと言いつつ着付けを直したもので、幾

子は宅から着て来た、黄地に白と茶色との細い格子縞の袴の着物が頗るよく似合っていた。撮影が終つて縄目を解かれた幾子はホッと一息継いで、

「一寸苦しかったワ、でも石垣さんの悪戯は變つてゐるわネ」

「ウム、誰にも言っちゃ駄目だよ」

「ええ、勿論誰にも言やしませんワ、その写真出来たら一枚下さる？」

「そりや差上げますよ、こんな写真、また撮りましょうか」

「ええ、でも恥かしいワ」

「何が恥かしいことなんかあるもんですかネ、御主人の九州旅行中にもう一遍写そうじやありませんか」

「ハイ、誰にも見られないところでネ」

「ではこれで僕は失敬するよ」

石垣は満足感を得たのでニコニコ顔で幾子に「左様なら」して我が家へ帰って行った。

墓地で別れた幾子も亦、我が家へ帰ったが夫婦の間に子供がないので当分一人で淋しく暮らすこととなった。而して始めて縛られた経験を得た幾子は、其の日から妙に縛られることに興味を覚え出した。近隣の古本屋へ行つて、演芸とか映画の雑誌とか講談本などを漁つては、縛られた女の写真や挿画を探し求めるようになった。そんな自分の気持はよくは解らないが、縛られた女的主人公になって見

たいような気分にも駆られるようになり、夜に入るのを待ち兼ね戸締りを厳重にして、奥の明るい電燈の下で、雑誌に現われた「縛られた女」の写真や挿画を見ては独り満悦感に浸っていた。墓地の撮影から恰度四日目の夕刻ごろ、高芝家を訪れた石垣はニコニコしながら、

「奥さん先日は御苦労さま、やっと出来て来ました。これです」

「まア、もう写真が出来ましたの」

「よく写つて居ますよ、それから明日の正午のサイレンが鳴ると、明神山の記念碑のところまで待っていますから、来て下さいませんか」

「ええ、参りますけど、まあお茶でも差し上げますから、一寸お上りなさいヨ」

「今日は他に急ぐ用事もあるので、これで失礼します」

石垣は玄関の上り口で突っ立った儘、写真を幾子の手に渡し、幾子の留めるのをアッサリ断つて、サッサと表の方へ出て行った。後姿を見送った幾子は、奥の間の机の前に座り、何か恐ろしいものを見るかのように、胸をドキドキさせながら、石垣から受取った自分の縛られた姿の写真を凝視するのであった。そして其の写真化粧部屋の大鏡の前に立てかけ、自分の扱帯を解き、両手を後ろに廻わし扱帯の端を口にくわえて、左から右へと自分



の身体を縛って見ようとしたが、思うようには縛られないので、今度は押入れの中の行李を縛ってある細い緒縄を解いて床柱の中ほどにその一端を縛り、再び両手を後ろに廻わし緒縄の端を右手に握り、自分の身体を左から右へ三廻転して、胸と乳との間を強く縛り付け、余った端を両手の指に握り、大鏡に向って、前の写真のような「縛られた女」の姿態を演じては、独り楽しんでいたのであった。翌日は朝早く起床した幾子は髪を綺麗に解きつけ、顔に濃い化粧を施し、好みの淡青色、格子縞の袷に絵模様入りの長襦袢に黒縹子の帯という濃艶な身装いして、昼食を早く済ませ約束の明神山の記念碑を目指して登って行った。山という名ではあるが、深い山でもなく登り約一町というほどの小さい丘であり、余り淋しいと言うほどの山でもないのに、幾子は宅を出てから半時間で山頂に登り石垣を待った。当の石垣は裏道からこの頂上に登って来た。約十分間ほど遅れて記念碑前に着いた。

「やア、これはこれは、大分お待ちせしましたネ」

「イエ、今来たばかりヨ、昨日は失礼いたしました」

「今日は大変めかし込んで来ましたネ」

「イエエ、普段着を着替えただけですワ、この着物よく写るでしょう」

「粹な柄だね、ウンと責めようか」  
「責めるなんて、恐いわ」

「なあに、一寸だけだよ」

「なら可いんですけど、永く縛られると痛いワ」

「今日は趣向を変えて松の根元へ縛りつけて、四、五枚撮ってみようかね」

「ハイ、あなたのお好きなようにして下さい」

飽くまで柔順しい幾子は、先日の墓場での経験もあり、夜遅くまで宅で自縄自縛を研究しているだけに、既に縛られる覚悟は相当心の奥底に秘めていたものの、イザ縛られるとなると多少不安気もあり、早くの胸の鼓動を波立たせていた。

「では縛られた奥さんのお顔拝見と出かけようか」

戯談とも真実とも附かぬことを言いながら石垣は側の一太い松の樹の下にカメラを据えた。幾子もその後から従った。その太い松

山中の松の根本に縛られた幾子夫人



の樹の根元に立った幾子は、石垣から縛られる前に両手を後ろに廻わして松の樹に凭れるのであったが、石垣は幾子の黒髪を散バラ髪に、着物や裾前を開いて松の根元に左膝を立てさせ、身体を前かがみに顔を上向けさせ両手を後ろに、乳の上部を三廻わり麻縄で相当強く縛り上げ「明烏雪淡暁」の芝居の明烏のような姿勢にさせたのである。

「一寸痛いけど、辛抱できないこともないわこんな格好で可いんですの？」

「少し顔をしかめて、苦痛の色を見せるんだネ、そうそう身体を此方に向けて」



「跣足で松の根元の上ですもの、足の裏が随分と痛いワ」

「頸を振って髪の毛を咬えなさい」

「ハイ、こうするんですの？」

写真のように幾子が縛り上げられてから約廿分間もその儘の姿を凝視していた石垣は、

### 東映映画「花まつり男道中」

月形龍之介の命を受け永田靖は、松前屋の娘おつる（長谷川裕見子）を拐わす。

二人の子分がおつるの両手を押さえつけ、一人の子分が豆しぼりの手拭を持って絶叫する口へ猿轡を噛ませ、後手に縛り上げて駕籠へ押し入れる。

場面が変ると月形龍

之介と吉田義夫が、密

談中の龍之介宅の離れ

座敷……と障子の外よ

り「親分、娘を連れて

来ましたぞ」の声と共に、後手猿轡のおつるを引立て乍ら入って来

る永田靖は、自由のきかぬ身体で必死に逃れ

ようとするおつるを吉田義夫の前へ引きすえ

る。かねてからの思い者おつるの全く無抵抗

な美しい姿に目を細めた吉田義夫は俯向いて

いるおつるの頸に手をかけ無理に自分の方へ

顔を向かせる。アップ

猿轡の為に息苦しいのか、半ば目を閉じ切

幾子の前後左右から四枚と、更に立たせて縛られた姿をパチリパチリ。

こうして、この日の撮影は終わったのであるが、今もなお二人の間には人知れずに石垣は幾子を縛りまた幾子は石垣に後ろ手に縛られて責め虐められるのを飲ぶようになっている。

なく喘ぐ長谷川裕見子の演技は、けだし絶品の価値がある。その後、自分を押えつけている永田靖を、不自由な身体ではねのけ、廊下に飛び出して逃げ廻るシーンで、後手の縛りと猿轡の手拭が耳の傍で捻じってあるのが目立つ。同じ猿轡でも、ただ単に口へ手拭をあてがい後頭部で結ぶだけでは形式的で、顎と

## 緊縛映画速報欄

千葉栄市

手拭の間に隙間が出来るが、この映画の様にすれば口も鼻もピッタリ塞り、リアルである。A級

### 新東宝映画「関八州大利根の対決」

或夜、茨木屋へ忍び込んだ数名のやくざは寝ている娘お千代（北沢典子）に豆絞りの猿轡を噛ませ外へかつぎ出す。木戸口、船中、河岸と、アップ三回あり。B級

責めの撮影には幾子は必ずと言って可いほど変った着物を着ては、種々様々の責め折檻を石垣から与えられるのを唯一の楽しみにしている。

（二葉の写真は石垣氏から借り出したもの）

△終り▽

### 松竹映画「美女蝙蝠」

間諜となり武家屋敷へ住込んだお俊（草苗光子）は、見破られて返って捕われる。壁の後の隠れ部屋にて後手の一カット。C級

### 日活映画「髑髏銭」

江戸城より濠に飛び込み逃げ出したお小夜（市川春代）は、やっと水より這い上ったところを銅屋の一味に捕われ、豆絞りの猿轡をされて両手を背中に捻じ上げられる。一カット。それから数日後、柳沢家へ髑髏銭との交換に駕籠で運ばれる。後手黒布の猿轡。二カット。

同映画で柳沢家の姫君、檜（市川春代、二役）もお小夜と間違えられ捕方に捕われる。後手。二カット。

### 東映映画「修羅時鳥」

因州、志戸坂に眠る百万両のお姫様の謎をめぐって、鳥取藩士に拐わかれた衣江（田代百合子）は、櫛の所在を白状せよと後手に縛られた身を弓の折れで打たれ、遂には気が狂ってしまう。C級。



## 牡丹花秘談 五場

伊藤晴雨・作並に画

甲斐仁参・稿

(この脚本は以前東京都の某劇場で上演されたものであり、御覧になつた方もあるかと思うが、演出指導は伊藤先生自身これに当られ又背景も先生の筆になるものであつた。この度、先生の許可を得て本誌上に発表する事が出来た事を皆様と共に喜びたい。稿者記)

## 序 詞

天龍川の上流に牡丹花を以て有名なる「京丸の里」という地あり。直径三尺余の牡丹花咲き乱れたる人外境にして、東海道名所記及び東海道名所図絵等にも伝説として記されて居る。明治四十年頃、読売新聞記者が此地の探険を試みたる事がありしが、実際には牡丹花はあらずして、石南花なりしと当時の新聞記事にあり。暫く古来の伝説を基として、空想の脚色を為す。

## 登場人物

旅役者、嵐冠者  
折蓼姫  
其乳母、五十鈴  
侍 女 大勢  
村の人々 大勢  
岩淵の権次  
其妾 おすず  
平家の残党 阿仏坊海尊  
少年 蟹助



## 第一場 谷間の途

本敷基一面平敷台、背景は極めて異様な形状の岩山、所々に飛泉、中央に洞窟があつて出入が出来る。向う谷川の遠見、物凄き山中の体、委曲は道具帳に譲る。山おろし一声にて幕明く。

山男大勢、古風なるいでたちで会議を開いて居る。

其一「此山奥に、さつき他国者が入り込んだという知らせがあつたので、皆んなに集まつて貰つたという次第だが、昔からの人里離れ



た此別天地を他国者に踏み荒されては、吾々の生活が危なくなってくるというものだ。」

其二「それだによつて、此村へ這入った者は昔からついぞ無事に元の人里へ帰った事が無いというのは」

其三「此村の掟と定まった事で、吾々の仲間に入つて永住するか、殺されて谷の底へ投げ込まれるか、二つに一つの村の掟だ。」

其四「見知らぬ男に出逢つたら、合図の竹法螺を谷から谷へ吹き鳴らして村の出口をふさいで下さい、太鼓を叩けば罫を解くのが互の約束」

其一「もしも噂が事実であつたら、警戒を怠るまいぞ。」

其二「そんならこれから、めいめいに」

其三「手別けをして村の入口を、固めようではあるまいか。」

其四「さあ御座れ、御座れ。」

と一同思い思ひの捨ゼリフよろしく、四方へ別れて這入る。

花道から、旅役者嵐冠者手足を布にてくくり竹の杖にすがりトボ／＼と歩いてくる。

冠「思いもよらない災難に出遇い、危く一命はとりとめたが、此処は何という所か、滅多に見慣れぬ山の形、水の色さえ物凄く、日本の国とも覚えない奇妙な形の山斗り、どっちへ行ったら人里へ出られるやら、心細い事だなア。」

と正面の岩に休む。

蔭の声「サア／＼、ムんせいナア。」

と野遊びの女大ぜい、村の長者の娘、折蓼姫を先に、其乳母、五十鈴を始め侍女大勢付き添い出て来る。

花道でとまる。

侍女の一「降りつゞく永雨も漸く晴れて、野も山も緑いやます初夏の」

侍女の二「てっぺんかけたか、

ほと／＼ぎす、帰る雁、来る燕、

暦も無い此の里は、花が咲けば

春を知り、紅葉が散れば冬が来る。四季折々の風景は」

侍女の三「昔嘶の武陵桃源、の

どかな景色でムりますなア。」

侍女の一「モシ、そこのお人、

お前はついぞ此村で見慣れぬ方

じやが、お前はどこのお人でム

ります。」

冠「私は東海道を旅から旅の役者でムいます

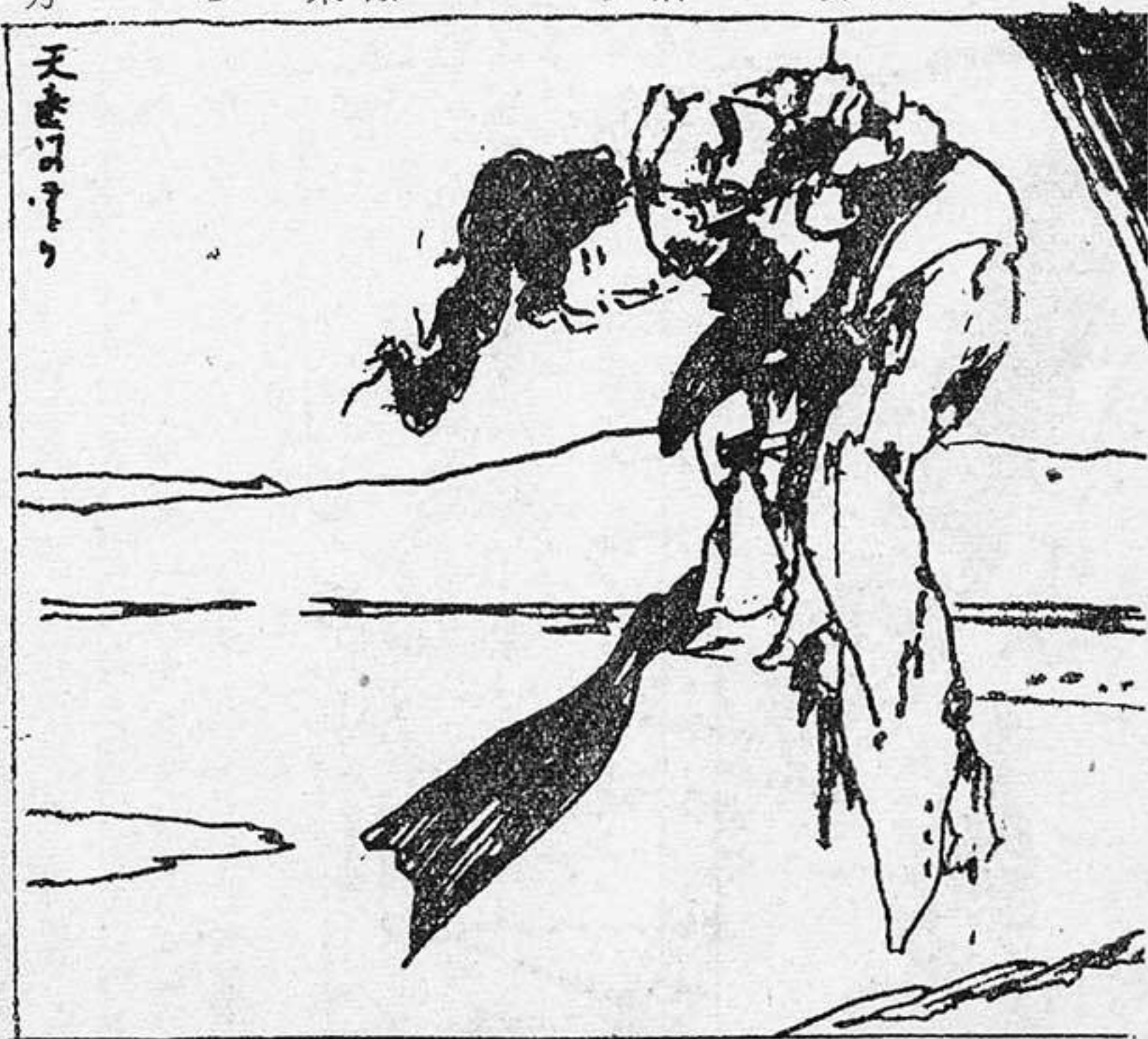
が、不図した災難に出遇いまして迷い込んだ

此のさとの四辺を見ても人家はなし、昨日の

夜から米一粒口に入らず、途方にくれて居り

ました。どっちへ行ったら人里へ出られます

やら御教え下さい。」



天来の幸

姫「ハテ珍らしいよい男、イエナニ、よい心持の野山の景色、海の幸には遠けれど、山の幸には事缺かぬ。空腹とあらば妾の家へ妾と共に来たがよい。皆の者、此の人に食事を与える仕度をしや。」

侍女の一「姫君様にはお館へお帰りあつて、其上で御かみ様へお話しになり、それから後





の事になされませ。まだそれ迄は此儘に。」  
姫「如何様それも尤もじや、では旅の役者とやら、妾と一緒に来たがよい。」

冠「やれ有難い、これで漸く人心地が付きました。ではお供したしましょう。」

侍女の一「サア、こうおいでなされませ。」

一同這入る。

阿仏坊海尊（元は平家一党の武士なれど、跛者にして片目の醜き顔の男）「ア、可感想にあの男も業々殺されに迷い込んだか、アノ姫君は物珍らしい都の男に、どうやら気がある様子が見えるが、姫をあつ男に取られる位なら、何年か前の山津波に、姫を助けるのでは

無かつたものを思えば、残念だ、残念だ。」  
と向うを見込む。

少年蟹助「海尊さん、モシ海尊さん、お上がお呼びだよ、これさ海尊さん。」

と背中を叩く。

海尊「えゝ、びっくりした。」

暮もようにて、敷基暗くなる。

## 第二場 天龍川の川原

墨を流したような天龍川原の土手、中央に荒廃したる辻堂、附近に蛇籠ぼうく、坑に東海道天龍川と記しあり、物凄き水の音にて幕明く、花道から岩淵の権次、子分大勢引つれて出る。

権次、子分に囁き、一同小蔭に隠れる。権次は辻堂の中に隠れる。

花道から権次の妾おすず芸者上りのこしらえ、旅役者嵐冠者の手を引いて出る。辻堂で休む。

すゞ「厳しい親分の目を忍び、こうした仲になったからには、もう家へは帰れない、幸い茲に蓄えのお金僅か五十両余り、これを旅の路用にして、妾と手を取り江戸へ逃げて下さいます、江戸の深川という所に妾の伯母さんが料理屋をして居りますから、あなたに不自由はさせません。妾と一緒に立退きましようよ。ネエ

お前さん。」

冠「一方ならぬ御鼠肩になった斗りか、親分の可愛がつているお前さんとうした仲になっちゃったが、二人手を取り逃げた後で定めて恨む事だろう。恩を知らねえ人非人と屹度恨んで追手をかけられ、捕えられたら其時は二人が命の瀬戸際だそれを思えば恐ろしい。」  
すゞ「何の恐ろしい事があるものかね、二人で並んで殺されれば、妾はそれが本望さ、ネエお前さん、茲から直ぐに逃げておくれ、妾しや家へは帰れないよ。家財道具をバツタに売り、家を畳んで了ったから、帰る処はありやしないよ。」

冠「それ程迄の決心なら、如何にもこれから江戸へ行こうが、東海道は陰呑だから、木曾路へ廻って行くとしようよ。」

蔭の声「いや、木曾街道へ廻るにや及ばねえよ。」

冠「どうやら親分の声のようだ。」

権「如何にも其の通り、岩淵の権次だよ。こうした事もあろうかと、一と足先に待って居たのだ。」

権次辻堂の扉を明けて出る。

すゞ「エッ、そんなら二人の様子をば」  
権「とうから知って先廻り、網を張って待つとも知らず、甘ったるい道行とシヤレた真似をしやがって、よくも男の面へ泥をぬりやがったな。」



すゞ「アレ勘忍して下さい。此冠者さんに罪はない。皆な私しが悪いのです。」  
 権「此期になっても男をかばう、手前の心が已れは憎いぞ。やい皆、二人共々引つ括れ。」  
 子分一同ドヤ／＼と出る。一同にて二人を縛り上げる。  
 権「いゝ様だ。ドレこれから荒療治と出掛け



すゞ「あゝ、誰か助けに来る人は無いものか、命が惜しい、死に度くない。」  
 権「人を殺せば此身も下手人、三年、五年、土地を売るなア覚悟の前だ。」  
 と冠者の足を所々突く。  
 冠「うッ、痛ッ。」  
 権「もう此の上は二人共、弄り殺しだ覚悟を

ようか。」  
 すゞ「どうか妾を存分に、此人だけは助けてやって下さいまし。妾斗りが悪いのですから。」  
 権「其口が悪いんだ。」  
 と一太刀突く。  
 すゞ「ア、そんならどうでも此の妾を。」  
 権「知れた事だ。恩を仇で返す憎い女め、男も今に跡からやる。地獄へなりと、極楽へなりと、勝手な方へ勝手に行け。」  
 と又突く。

しろ。」  
 と女を斬る。冠者堪らず、縛られた儘、川へ飛び込む。水の音。  
 子分の一「親分野郎は川へ落ちましたぜ。」  
 権「油断のならねえ奴だ。落ちた処が縛られて居ちやあ、手足も利かず流れて死ぬに違いない、サア阿魔覚悟しろ。」  
 と一刀に斬る。  
 権「これで心持が晴々した。死骸は此儘水葬にしまえ。」  
 子分の一「承知しやした。併し惜しいもんでしたねえ親分。」  
 権「馬鹿いゝねえ、死んだ女に未練はねえや。」  
 と刀を拭う。

### 第三、四場 折蓼姫の居間

薄きドロ／＼にて此道具暗中に替る。  
 辻堂を上手に引込み、背景を上へ飛ばすと一面の平敷台、至極結構を極めたる上代の建築、欄間に鎧蝶かたての模様を散し、正面上げ部いじみ、朽木形の壁代かたしろをかけ、向う一面、山又山の遠景、調度、器具などすべて源平時代の遺物と見ゆるもの（書割にてよし）をかざってある事、総て折蓼姫居間の体、屏風を建廻して、此中に以前の冠者寝て居る体にて道具納る。  
 姫「どうなされました。途の疲れが大層うな



されておいでなされます。お目がさめましたか。」

冠「ア、今のは夢でしたか。ア、恐ろしい正夢でした。」

姫「大層うなされておいでなされました。オ、ひどい汗でムいますこと、妾が拭いて上げましょう。」

冠「ア、有難い事でムいます。結構な御部屋で飛んだ御厄介になりました、ではこれから私はお暇をいたしましょう。」

姫「アレ気の短い方、これから人里へ出る事は危ない事でムいます。」

冠「それはどういう訳です。」

姫「此村へ入った方は一生此村で終る

覚悟が大切で、若し外の世界へ出て行く時は、死なねばならぬ約束がムりますから、滅多に人里へは出られませぬ。」

冠「それは困った事になりました。私は芸道で身を立てるもの、此の谷あいの山里に一生を過す訳には参りませぬ。そりや世の中には、此の里より険しい山や、危い谷も沢山あるには違いないが、芸の道に身を置く者はいつも他人に見せるという誇りもあれば励みもあり、安樂計りを願う処に別の世界がムります。」

姫「別の世界と仰有ると、まだ此里より違った世界が広い所にありますか。」



冠「元、私は武士の胤、源氏の姓を名乗るもの、子供の頃に旅役者に貰われまして人となり、北は青森翁が浜、西は鎮西の果までも、日本国中巡り歩き、昨日は東、今日は西、艱難辛苦も芸の為、雨にさらされ、日に照らされ、芸をみがいて参りましたが、まだ足りませぬ。芸事は京大阪や江戸の街を廻って修業する所存、一夜のなさは心から、御恩に感じておりますが、もう御別れでムります。」

姫「いやです。いやでムいます。初めて見た時此殿御と思ひ初めた妾の胸、お察しなされて私と、夫婦になつて下さいませ。」

冠「何をお隠しいたしましょう。此私には二

世と契つた女がムりましたが、其女は二、三日前、私の為に此世を去りました。其女を殺しましたは此私の身から起つた事故に、二度目の妻はもたぬ決心、此儀許りはお許しなされて、あなたは矢張り此村の女王となつてお暮しなされ、それが父上への孝行でムんしょう。」

姫「いやじや〜私はあなたに別の世界のあつた事を知らされました。私もあなたと御一緒に芸の道とやらを歩みたい、一時も早く此村を出て行きたい願ひでムいます。」

冠「どうか此上のお情けには、唯此儘に私を、村から出して下さいませよう、御願申し



上げまする。」

姫（憤然として）「そんならどうしても、妾の願いを聞いて下さいませんか。」

冠「折角ではムいいますが、これで御免蒙ります。」

と去る。

姫「思い込んだる女の一念、やわか通さで置く可きか、跡追っかけて、おゝそうじや。」と跡を追おうとする。

阿仏坊、伺い出て姫を止めようとする。

姫は海尊と争い乍ら、よろしく立廻り、ト海尊、姫を後手に縛り柱につなぐ。

姫「エ、口惜しい、此縄をといて欲しいナア、誰ぞ来てくれぬかいのう。女が一旦思い込んだ男の跡を追う矢先、平家の姫ともあるう身が、此いましめは口惜しい。ア、何としよう、オ、ソレよ、かねて母より伝えられた古歌一首、これを口文字に書く時は、縛しめの縄もとけると聞く。昔咄の雪舟和尚の鼠の絵にはあらねども、女の一念通さで置こうか。」

と衝立に口文字を書く。

『うらみわび消えなん後に迷うとは浮名の果の烟りとも見よ』

と書き終る。ドロ／＼になり、正面壁代

の中に以前のおすゞの霊現われる。此時海尊出て姫を見て心付き、姫を抱いて入る。蔭の声よろしく姫の小間使、小百合出る。

小「あれ、姫様が……。」

と思入れ。

海尊にったりと思入れにて出る。

阿「男は強いぞ……、只一筋に望みは遂げた。此次はあの男の跡を追いかけて、オ、そうじや。」

一人合点して行きかける。侍女大勢、これを支えるよろしく立廻りあって、侍女を追散らして一散に向うへ這入る。

## 第五場 牡丹溪の景

背景を飛ばすと天龍峽上流、牡丹溪の景となる。

敷基一面牡丹溪の景、奥深に山又山、これに牡丹花一面に咲乱れている。やゝ上手寄りに丸木作りの櫓、これに太鼓を吊してある。（人上下する事）正面藤蔓の橋、切つて落す仕掛ある事。

折蓼姫バタ／＼になり馳けて来て櫓に上ろうとする。阿仏坊追いかけて来り、これを引戻そうとして、よろしく立廻りあって、阿仏坊一刀を抜き、姫を斬る。姫斬られ乍ら太鼓を打つ。村人大勢姫を中心に立廻りよろしくあって、茲へ以前の冠者逃げて来り、橋を渡ろうとして阿仏坊の為に綱を切られて谷へ落ちる。

姫も続いて飛込む。黒の緞帳を下す。冠者と姫、二人相抱いて落入る。スポットの照明。

（了）

## ◎伝言板◎

○日下絹子さんの「ある女給の体験(3)」と鷹野めぐみさんの「サジスチンの半生記」の中『現在の告白』は、本号の締切後に到着しましたので、次号に予定します。○きものシリーズの白金紅次氏の「和装教室」第一回は滝れい子氏の挿画にて次号を飾ります。○三月号の伝言板（八十一頁）にて、九雅節夫氏並に高原正夫氏へ通信を書いておきました、が、ごらんになっていないようですので、こゝに再び呼び掛けをしておきます。○松原三千代さんの「ふんどし幻想」は次号に載せます。○藤山秀緒さんの「続飛行服姿の女腹切」と須藤律夫氏の「切腹随想、中康弘通氏に寄せて」の二篇は次号へ、青山芳樹氏の「落日婦士道」は次々号へ予定いたします。○本田一夫氏の「浣腸器具考」は、都合により掲載が遅れましたが、多分次号に掲載できると思われます。○久利須照雄氏の「浣腸通信」これも本号に予定していましたが掲載出来ませんでしたので次号をお待ち下さい。○甲斐仁参氏のノートは次号は「揅り責に関するノート」の御送稿を受けていますが、作者の御都合により変更になるかもしれません。○楓月太郎氏田近正次氏白鳥怨之介氏等提供の通信、青柳芳章氏の女装フォト、或は沙奴泉氏、高井好晴氏等提供のアイデア、岡田芳夫氏の「私のイメージ」等々は残念ながら本号に間に合わず、次号廻しとなりました。



未来幻想  
マゾ小説

## 家畜人ヤプー

(第五回)

沼

正

三

## 第十章 迄の梗概

日本青年瀬部麟一郎は恋人の独乙令嬢クララと共に、墜落した円盤の中で美女ポーリーン・ジャンセンを救けた。彼女は二千年後のイース帝国の人。イースは白人の楽園で、黒人は奴隷化され、日本人は更に低く、ヤプーと呼ばれて家畜化されている。畜人大に噛まれて麻痺してしまった麟一郎を救うため、クララを伴ってイースを訪れることになる。

肉便器が日本語を解するのに驚く中、迎えの円筒が来た。ポーリーンの智慧で、彼女の妹ドリス、兄セシル、セシルの義弟ウイリアム・ドレイパアに、クララは失踪していたイース人として紹介される。麟一郎が船底で黒奴船員から皮膚強化処置を施されている間に、白人五人は上階で歓談し、ソーマという飲物などのむ。クララは食卓矮人に吃驚する。矮人もヤプーの一種である。彼女歓迎の宴の主催者を誰にするかで、矮人決斗なるものが初まろうとする。さて麟一郎はどうなることか？

## 第十一章 矮人決斗

## 一 小決斗士簞笥

クララは遊戯室中央の黒い箱の脇に立って、これからどんなことが始まるのか、好奇心に胸を躍らせていた。

高さ八〇糎縦横一米程の四角ながっしりした鉄の大箱。側方は四面とも四段の抽斗になっており、上面には縁を一〇糎残して八〇糎四方の試合場がしつらえられて、周囲に五糎と一〇糎の高さで綱が張られている。対角線上に青と白の旗門が立っているのは、隅の標示だろう。抽斗には、BOXING (拳斗) とか FENCING (剣術) とか云った斗技の名称が記されている。争の当事者になったジャンセン嬢ドリスとドレイパア郎ウイリアムとが骰子を振り合っている間、クララは、好奇心を満たしたい欲望とイース貴族をよそおう上での自重自制との格闘に苦しんだが、妹から聞かされたとおり、クララはすべての記憶を喪失した人であると信じ込んでいるセシルは、



一つにはヤブーについての知識をこの美しい客人に披瀝する嬉しさも手伝って、頼みもせぬのに、クララに向って説明を始めた。

「この小決斗士<sup>グランド・レスリング</sup>、箆<sup>チエス</sup>の事を彼等自身は抽斗<sup>ドローレス</sup>寄宿舎<sup>ドミトリ</sup>と称びます。

抽斗十六箇の中四つは素手組<sup>ハツナツ</sup>、残りが武器組<sup>ハツナツ</sup>です。素手組はボクシング、レスリング、ジュウドウ——この言葉でクララはふと麟一郎の逞しい体格を思い出した——パンクレイシヤム（禁じ手のない力技の一種、ギリシャから伝わる。）の四種です。武器組は、剣、槍、棒から羅馬決斗風の盾と刀まで、十二種の兇器<sup>もろもの</sup>で区別され専門化しています。どの抽斗を選ぶかは骰子の目が決めますが……」

それが決つたらしい。ドリスがOLD YAPOON FENCING（古<sup>オールド・ヤブーン・フェンシング</sup>式<sup>スタイル</sup>、畜人<sup>ビースト</sup>風剣術）と標示のある抽斗を抜いた。横から覗き込んで、

クララは又々内心吃驚させられた。小人<sup>こびと</sup>のアバートなのだ。

抽斗は鉾物の標本箱のように縦横に狭い仕切がある。一抽斗に百程区劃がある。その一つ一つが個室<sup>プライベート</sup>になって小さな家具を備え、中に裸の矮人が寝たり坐ったりしているのである。引き出された抽斗の連中は天から光が射したので、上を仰ぎ、五人の姿を見ると正坐して両手を合せて祈禱を唱え始めた。

ドリスは暫らく見渡していたが、

「これにしよう」

と云って、鞭を小脇にはさむと、右手を伸して一人を摘み上げた。

胸にタロの額と同じジャンセン家の紋を、背中には MUSASHI

の七文字を焼き附けられている。五体は刀傷の痕だらけである。六尺禪のような白いものを腰に纏っているが、よく見ると布ではなく白金<sup>プラチナ</sup>だ。この白金禪以外は何も身につけていない。顔から見ると年若な様だ。

ムサシを左の掌に載せたドリスは、あるかないかの生ぶ毛が微かに上唇を上げらせているポッチリ赤い口許をとがらすと、その掌の

上に、プツと小さく唾を吐いた。矮人は待っていた様に膝をつき両手をついて、顔をその唾の方に近寄せると、吸り出した。吐く方には一口でも矮人には相当の分量なのである。ウィリアムも一人を掌にして、同じ様に唾を飲ませている。その背中には BENKE の五文字が見えた。

「激励<sup>エキシティング・サリバ</sup>の唾と云いましてね」セシルが教えた。「これで俄然元氣を出すのです。今では試合前の儀式の一つ見たいになっています……試合で勝った方にも……」

「唾を与<sup>や</sup>るんでしょう」クララは当推量した。「激励<sup>はげまし</sup>と慰勞<sup>なぐさめ</sup>に唾吐くこと、記憶があるわ。段々思い出して来る」

「慰勞<sup>リウウ・ディンク・サリバ</sup>の唾は」ドリスが聞き附けて口を挿んだ。「貴女が与<sup>や</sup>るのよ。勝った方は貴女のものになるんだから」

両戦士は、掌から下され、台の両端、青と白の旗門外に待機する。どこからか、奇妙な服装——実は紋付袴だった——で別の老顔の矮人が現れ、試合場の綱<sup>ロープ</sup>を検分している。これが審判員だ。

「着く迄に勝負決めなきやなんないから、休憩なしにしようね」簡単にウィリアムと打合せしたドリスは、綱を調べている審判矮人を右手の鞭のピンと尖った先で一吋突つて合図すると、キビキビした声で、指令を発した。

「途中休憩なし。すぐ始め。」

審判員は両戦士を門から中に入れた。ベンケは赤ら顔の中年者である。

「仲々良い決斗になるでしょう」金髪<sup>デュエル</sup>の美男子ドレイパー夫君は楽しそうに云った。「ヤブー刀は刺突<sup>つ</sup>より斬撃<sup>き</sup>が主で、派手ですから見て一番面白い。老練ベンケは過去三年間に試合数八十八回でその中七十二回相手を殺しています。ムサシは若いが、過去半年に十五試合で十四人殺し、経験ではベンケ勝り、殺敵率ではムサシが上。こ



りや良い勝負ですよ。さあ貴女を招待するパーティの主催者はどちらになりますかね……」

解説者然と語る彼の手には、抽斗の両戦士の居室から取り出した二枚の戦績カードが握られている。

審判矮人がムサシに青、ベンケに白の鉢巻をさせ、更に反りのある刀を渡して、何か喋っている。日本語らしい、クララには分らない。……と、突然、その話の終るのが待ち切れない、と云った態度で、ドリスが叫んだ。

「Ashicko (かかれ)」 (第八章二例17参照)

三矮人はハッとして上を仰いだ、次の瞬間には、両戦士は鞘を捨てて身構えていた。

ドリスの我儘な気紛れで中断された審判の話の内容は何だったのかと、好奇心を起して訊ねると、セシルは

「あゝ、あれはね、決り文句の訓辞なんです。これは神聖なる神前奉納試合なるぞ。生命を賭けて戦い、神々の目を娛しませよ。聖唾

(※) 味いし身の誉れを忘れず、苟くも卑怯の振舞して己に唾吐き

給いし神を裏切るな。」スラ／＼と家畜語を訳し終って、なお言い添えた。「奴等にとっては、私達人間は、唾を吐きかけられてさえ有り難い神々なんですな。矮人に限らず、ヤプー共はすべてそういう信仰を持っています。私達の身体に關係のあるものなら、唾どころか、もっと汚いものでもフェティシユになるんですよ」

「そうでしたわね、思い出しますわ」バツを合せながら、クララはSt Stの姿を脳裡に浮べた。ウィリアムが彼女の方を見ていた。

(※註 サリバは Saliva から家畜語化した単語で、特に白人の唾を指す。ヤプー自身のや黒奴のを指す家畜語はツバである。

二人の——というべきか、二匹の、と云うべきか——小決斗士は依然身構えたまゝだ。ムサシは身体の前に、ベンケは頭の上に、どちらにも、刀を両手で握っている構が、クララには物珍しかった。

他の四人は見馴れた通らしく、青眼だの大上段だの、間がある隙がないの、と口々に評し合っている。どちらも仲々の使い手らしいことは、クララにも見て取れた。

「勝負はどちらか死ぬまで……」

「大抵そうです。今日この抽斗の区劃は少くとも一室は明くわけです。小決斗士飼育所から補充を買うんですが、ジャンセン家の烙印を胸に貰い、その抽斗(寄宿舎)に住み、その屋上(試合場)で死ぬのは大変な名誉なんで、買われる奴は大喜び。飼育所じやいつも選抜試合させて決めてるそうで、だから、ジャンセン家の簞笥の奴は皆相当な腕達者ばかりで……あ、やった」

急にベンケが跳びかかったのだ。激しい鍔ぜり合。再び間が開くと、ムサシの肩とベンケの左手から血が流れている。技量伯仲。しかもその全能力を挙げて生命の遣り取りをして、それをクララ達の娯楽に供することに、甘んじる所か名誉を感じている両戦士なのである。

彼等の神々達は、箱を囲んで坐し、四面斜上方から見守っていたが、その美しくも非情な眼附は、まるでオリンパスなる諸神が地上の争を眺めるに似ていた。より卑俗な比喻をとれば、斗鶏場を囲んで二羽の軍鶏が死ぬまで斗うのを楽しむ人々と同じ眼附だった。

## 二 便器使用風俗

セシルがそつと振り返って口笛ホイッスルした。何事かと自分も振り向いたクララは、壁が割れて、円盤の中で見たのと同規格のSt St (標準型肉便器) が現われたのを見て、慌てて前を向いた。

セシルが、皆の邪魔にならぬ様に、低い声で起立号令アッシュッを掛けた。St Stがいつか彼の腰掛けて椅子の前に来て蹲って長い頸を伸し



ており、彼の前合せになったロング・スカートがそのため割れているのを彼女は目尻で認めた。

——まあ、この人は、試合を見物しながら、腰掛けたまゝで、これを使うんだわ！

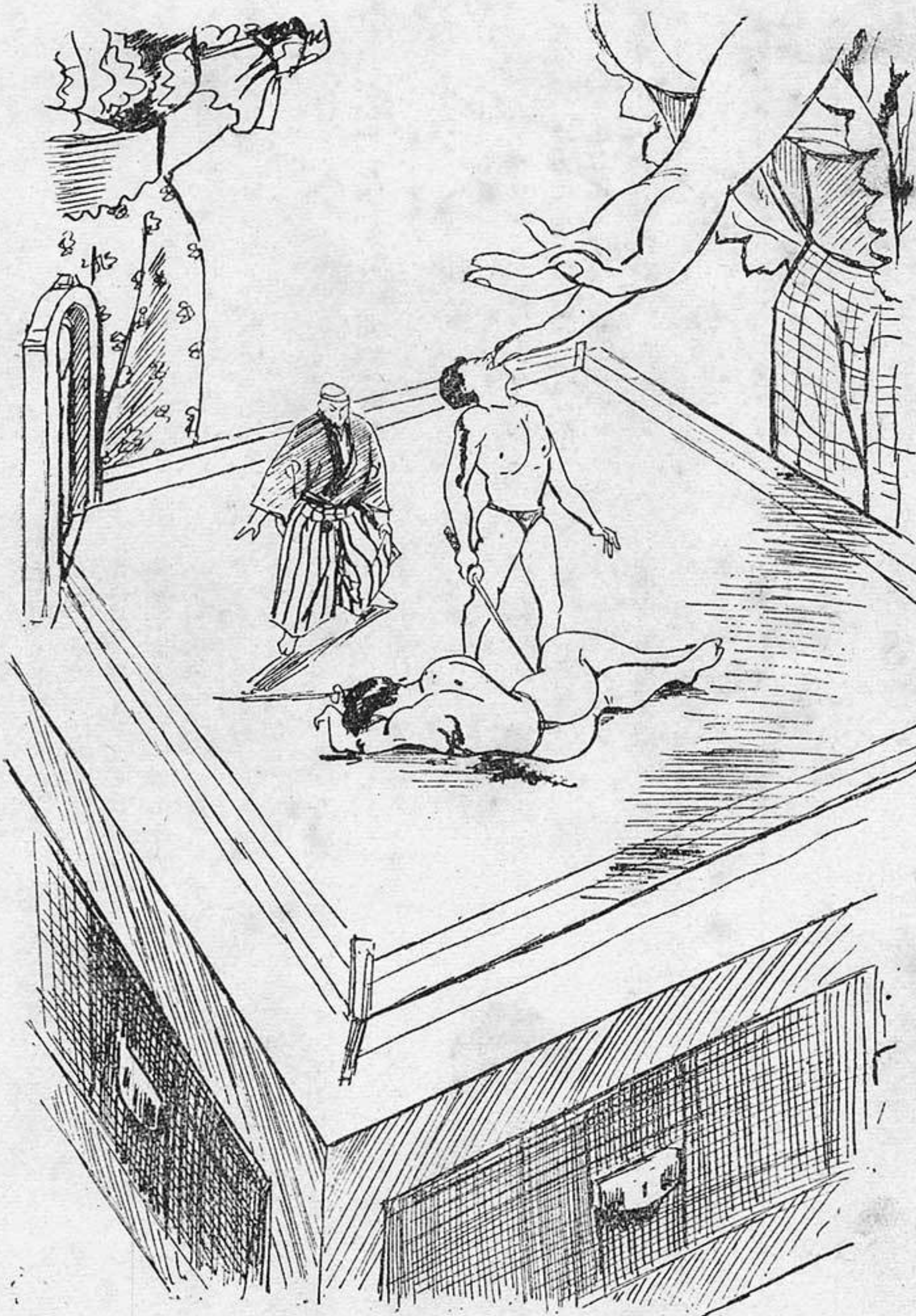
他の人々は一向気に留めてないらしい。

「ムサシの方が傷が深いようだね、ドリス」

と、放尿してる様にも見えず話し掛けたセシルの言葉に、ドリスは向きになつて、

「ところがムサシは手負獅子<sup>ておいじ</sup>って譚名がある位でね、怪我してからが却って強いのだよ。今迄の試合でも大抵先に斬られてから相手を殺した……パーティは妾がすることになるわ」

喋りながら席を立った。特有の香水の匂が漂うので氣附いたクララが横目で見ていると、少し後に下り、今しもセシルの花模様のスカートから頸をくねらせつつ頭部を引き抜いたSt Stに向つて、乗馬ズボンの両脚



を踏み開きながら胡坐<sup>アシヅ</sup>号令を掛けた。孔<sup>ホール</sup>鈕<sup>ボタン</sup>というものがあるから、ズボンを下したりする必要はない。唯<sup>ホースシュー・ハンパ</sup>馬蹄肉瘤<sup>ホースシュー・ハンパ</sup>に腰を下すだけだ。試合場の方を向いて腰掛けた。眼では矮人達の動きを追いつつ、片



手でシガレットケースを探つて、一本取り出し、啣えて、指輪ライターで点火し、氣持良さそうにくゆらしながら、ゆっくり生理的排出を行っている。急いで息<sup>いき</sup>んだりすることはイース人の為さぬところである。知らぬ者には椅子を変えて見物し続けているとしか見えまい。落ちていたものだ。

口に啣えているシガレットは、前史時代の紙巻煙草そっくりだが材料は精氣結晶<sup>ホルモン</sup>（どんなものかは後述する。）で、イースでは、喫煙<sup>スモーク</sup>といえ、この精氣煙<sup>ホルモン・タバコ</sup>のことなのである。

一本を半分程ふかした所で、ドリスは突然右脚を宙に僅か浮かせてから急に後に引いて、長靴の拍車でSt Stの肥満した腹部を一撃したが、それは、このSt Stが当然駢<sup>ひ</sup>けられている筈の礼法を忘却し、食後、両食器を後から前へ清拭しようとしたから、拍車の刺戟でその不作法を咎め「食器の舐拭は前から後へ」という正しい食後の行儀を思い出させたのだ。

ドリスが立ち上つて自席に戻ると、今度はウィリアムがアシッコと云つて呼び寄せた。……やがてSt StをSCに蔵う時の口笛<sup>ホイッスル</sup>が聞えた。

人前で平気で大小便する無神経さに、クララは少々呆れたが、それは彼女がまだイースにおける白人社会の風習に親しなかつたからである。排泄回数<sup>排泄回数</sup>の頻繁な白人（第八章二例一〇註）の間では、特に目上の者がいない限り、他の人の前でSt Stを使うことは別段失礼にならないという風俗が成立しているのだ。それに、一々ズボンを下して隠し所を顕わすじやなし、手を汚すじやなし、嫌な臭が洩れるじやなし（※）、他人の迷惑になる点がないから、昔とは事情が違ふのである。現にクララも、もしSt Stの機能を知らなかつたら、何が行われたか分らなかつたらう。昔の人は人前で鼻をかむ時一寸後を向く位で、一々部屋を離れはしなかつたが、今St Stの使用は丁

度その程度の軽い不作法と観念されてゐるのだ。

（※註）イース人の便は現代の白人の便より悪臭が少い。然し便である以上やはり臭はある。St St——他の肉便器も大同小異であるが——の鼻孔は、顔面の鼻でなく、馬蹄肉瘤の内側に開いていることは既述の通りで、用便中肉瘤内に籠る臭気は、全部ここから吸われて肺に収まるから、外には少しも洩れないのだ。人間には悪臭でもSt Stはこれを良い匂と感じる様条件反射で仕込まれていゝるし、又その鋭敏な嗅覚で（舌による便の味と並んで）主人の身体<sup>からだ</sup>の異常を便の匂によつて診断する技術もSt Stの必須教養の一課になつてゐるのである。

ところで決斗試合は今や白熱してゐた。激斗数十合、両戦士の裸身は共に血まみれだ。

「実に、矮人決斗の醍醐味<sup>ディケイ・デュエル</sup>というのは、これでしよう」セシルは、クララに聞かせるともなく呟いて、惚れ惚れと試合場を見つめている。

「いかが、クララ」

ポーリオンは足許に蹲ったタロの黒髪を無心に片手で愛撫してやりながらクララを顧みた。彼女は、息を凝らし、目を輝かせながら、ポツリと一言答えた。  
「素晴らしいですわ」

### 三 肉体の変質

その頃船底の獲物置場の棺——皮膚窯<sup>ゲイム・シユツド</sup>——の内では、古い瀬部麟一郎の肉体が葬り去られて、後にリンと名附けられた新しい一匹のヤプーが誕生しつつあった。

皮膚強化剤は次第々々に定着度を増してゆき、脂汗が涸れ尽した頃からは彼はあまり熱痛を感じなくなつて来た。——遂に全く感じ



なくなつた。暖かさは感じるが熱くはない。先刻ポリリーンのサンダルで切られた耳の傷も、初め暫らく感じていた痛みが全く消えた。丁度四十分だ。一人は温度計を、一人は窯内のヤブーの体温や脈膊等を示す計測自記捲取表を見凝めつつ、一步も離れず待機していた係りの両船員が立ち上った。定着は終わった筈だが、一応テストせねばならぬ。高温の方はもう充分なのだから、今度は低温である。

ずーっと摂氏八〇度を持続していた窯内であつて、皮膚強化に従い主観的には温度の漸次的下降を錯覚していた麟一郎だが、この時、更に温度が急速に下っていくのを覺えた。——や、何だか涼しくなつたぞ。黒人共奴、又悪戯をする気かしら……先刻この箱に入る前の氷点近い寒さ、あれに比べると、この位の涼しさは問題じゃないが……

彼は多少肌寒い程度にしか感ぜず、却って清涼ささえ覺えたのだ。が、もしデルマトローム強化皮膚を持っていなかったら、焦熱地獄の後の八寒地獄、直ちに凍死してしまつていたに違いない。——この時の窯内の温度は摂氏零下五〇度になつていたのである。八〇度を暖かい位に、この極寒を涼しい位にしか感じなくなった今こそ、彼は、気温変化の激しいカルー星で、全裸のまゝで生命を保持してゆける様になつたのだ。麟一郎の肉体は、暑さ寒さを知らぬヤブーの肉体として生れ變つたのである。ポンプ虫の尾部は更に伸びたことだろう。彼は段々ヤブー化されてゆくのだ。

胸番号8番は、自記テープをじっと見凝めていたが、  
「よからう。異状なしだ。定着度一〇〇%。処置完了」

13番が温度計の針を室温と同じ三度に戻した。この室の常温なのである。

「もう出しとくか」

「そうさな、導尿管外しても、もうすぐ着くんだから、破裂するほ

ど膀胱に溜ることもあるめエシ」

導尿管と腸内注入管とが同時に引き抜かれ、窯が開かれ、彼は担架の上に運び出された。肉体は見たところ何の異常もない。彼も自覚しない。黒人二人を見て、

「一体何故あんなひどいことをした！」

と難詰したくも舌は動かぬ。全身麻痺も最前と同じである。先刻呑んだ虫のことも何にも感じない。

四十分を麟一郎は何時間、何十時間にも感じていた。焦熱地獄の中では時の歩みが遅々たるものだったのだ。窯に入る前の出来事が遠い過去のことのような気がする。二時間ほど前に円盤艇に踏み込んでいった時からの生ま生ましい経験は忘るべくもないが、それさえ、色褪せ印象が薄らいだ。それに恐ろしい肉体的苦悶の終つたあととて、精神的にも虚脱感があり、記憶が系統立てられぬ。

——人犬に噛まれたつけ。それで動けなくなつたんだ。女は俺のことをヤブーと呼んでいた。クララが……あゝ、クララはどうしているだろう。俺と違って歓迎されていたから、間違はあるまいけど……俺にだってあの連中の一人は親切に小便のことや寒いことに気がついて呉れたのに、命令を実行する黒人がこういう無茶をするんだから、クララも気を附けなくちゃ……大丈夫だろうか？ あゝ、逢いたい、抱きしめたい、そして接吻……何にしても早くこの麻痺が解けなけりや駄目だ……

平生通りの頭脳の働きがあつたら、彼は、暖房らしいものがないこの室内で、先刻あんなに寒かつたのに、今はどうして暖かく感じるのか？ と不思議に思い、黒人の毒舌的予言とその前のセシルの示唆の言葉との真の意味を考え直すことから、自分の肉体の異常をも結論し得たことであつたらう。然し、虚脱状態の頭脳では思考の集中ができず、注意力も鈍っているので、彼は何一つ気が附かなか







たには違いないが、一つには先刻飲んだソーマの効目である。昔のお茶同様に好んで飲まれるこの飲料は、滋養強壯、神経興奮等の効能もある他に、更に「人類愛の蜜」の名称にふさわしく、人類の同胞感や人道精神を鞏固ならしめる効果を持つのだが、反面、それを感じる範囲を限定する傾きがあり、白人がこれを飲めば自分と同じ様な白い肌の者以外には同類意識を持たなくなって来る。クララがこの血みどろの戦を余興として平気で眺めうる心境になったのもその為で、矮人同志殺傷させることに躊躇しなくなったからと云って、別に前より残酷になったわけでない。ポーリーンやウィリアムに対する気持は却ってより親しくなった位なのだ。

突然、ベンケが一声叫んでよろめいた。血が眼に入ったので手許が狂った瞬間、腰に斬り込まれたのだ。ムサシが踏み込んで真向から拌み打ちにしたのと、よろめく足を踏みしめつつ、ベンケが右手の刀を突き出したのと、どっちが早かったか……。

ベンケの頭蓋から血が噴いて、どうと倒れると同時に、ムサシも腹を抑えて蹲み込んだ。苦痛をこらえる青年矮人の小さい人形のよな顔をクララは美しいと思った。

審判員が青門に青旗を掲揚した。

「ムサシの勝。クララ、妾のパーティに出てね。そして、妾の持馬の贈物を受けてね。妾の既にはアベルデーソンの名馬もいるわよ。

……でも好取組だったわね。ねえ、セシル、感想はいかが？ クララに聞かせてあげなさいよ。彼女には初めても同然なんだから……」

早口にドリスが喋るのを受けて、彼女の兄はゆっくりと、戦績カードに何か書き込んでいた手を休めて、感に堪えた様にいった。

「何と云いましょうか、実に、良い試合——稀に見る勝負でした」  
ウィリアムは残念そうに黙っている。

ドリスは鞭を短く持ち直すと、尖った先端を俯伏して苦しんでいるムサシの顎の下に入れて顔を上げさせた。真蒼で血の気がない。「ムサシも傷られてる。助からんね。こりや相撃で無勝負じゃないかな」

ウィリアムが呟いた。

ベンケの身体から流れる血で試合場は真赤に染った。審判はムサシと言葉を交した後、箱の縁まで出て来てドリスに何か話し掛け、彼女がクララの名を告げて何か云うと、引き下ってムサシの所に戻った。彼女はクララに向って、

「ムサシは助からぬ命と悟って、最後に聖唾を戴きたい、と願ってるの。もう彼は貴女のものになってるんだから、貴女の名を教えてやった。さあ、貴女から慰勞の唾を与って頂戴。」

「ええ」

と引き受けたものの、困った。激励の唾と同じように掌に載せてやるのだろうか？ 先刻思い出したなどハタタリを云った手前、聞くわけにもゆかず、血だらけの矮人を掌に載せることに躊躇も感じるのだ。白魚の様な人差指の先に一かたまりの唾をつけると、肩で息をしている勇敢な矮人青年の面前に持って行った。

「ムサシ、良くやった。さ、御褒美にたっぷりお飲み」

「変った仕方では唾をやるのね」

ドリスが呟いて、クララをヒヤリとさせたが、別に深く怪しんでいる様子もない。

ムサシは、嬉しそうに上を仰いで、莞爾と笑ったが、眼に隈が出て、死相である。両手で彼女の指先を抱える様にして『聖唾』を吸い取り始めた。小さい舌端の微かな動きを指先に覚知しながら、彼女は誰に云うともなく呟いた。

「何とか助からないものか知ら？」



「出血を止めれば、生命は取り止めるわ」ドリスが答えた。「でも、そんなこと無駄よ」

「出血を薬で止めた後は、前より弱くなることが多いのです」セシルが解説した。「そんな小決闘士は飼う値打がないでしょう？　だから怪我しても矮人病院に送ることはしないのです。ひとりで癒すか、死ぬか……」

「でも、手当すれば癒るものを……」

「徒らに苦しむのを見るのが可哀想なら、慈悲の死を与えれば良いのです……」

「そう、慈悲殺人というものがあつたわね」

クララは曖昧な口を利いた。或る程度で記憶の戻った振りをせねばならぬ。あまりくどくどした質問は怪しまれるだろう。

「殺してやろうか？　癒りそうもないわ」

ドリスが云った。

「ま、クララの矮人だから、彼女の意向をきかなくちゃ」とセシル。

「いっそ、ハラキリを演らせたら？」ウィリアムが提案した。「貴女の記憶の回復にもこれはうんと役立つと思うな。とても印象深いものだから。幸い『古式畜人風剣術』の抽斗に住んでる奴等は、何時でもこの余興を演れるよう、本式に仕込まれているから、面白く観られるし……」

「賛成、クララ、そうなさいよ」

とポーリーンも勧めた。外の二人も無言で肯いた。

クララは、黙って矮人に指先を舐めさせながら思索したが、遂に好奇心に負けて、指を引き、「ムサシ」と呼びかけてから、これが初めてとは思えぬ様な物慣れた調子で、二言で命令した。「ハラキリをお演り (Play harakiri)」

嘗て知らなかった全能感が、怪しい魅力で彼女を捕えた。円形競技場で負けた決闘士に拇指を下に向けて死の合図した羅馬の貴婦人達、遠い遠い先祖の血が、今彼女の体内で沸つてゐるのだった。

言下に瀕死の青年が血の漂う床に坐り直したのを見て、クララはふと、自分達の普通の声も、彼等矮人の耳には雷霆のようなゼウスの大音として響くのだらうと思った。

ムサシは、ふり仰いで神々の中に彼女の姿を求め、じっと見つめながら、ふり絞る様な声で叫んだ。彼等の知っている数少ない英語 (世界語) の単語を日本語 (家畜語) に混せて、

「白哲の女神なるクララ・サマ、バンザイ」

「バンザイというのは、もう思い出されたかも知れませんが、『主よ寿長かれ』という祈りです」セシルが素早く説明した。

「ヤプーは昔から死ぬ時は自分の首長のバンザイを唱えたものらしいです」

叫び終ると、短く握った大刀を突き立て、白金輝の上縁に沿って一気に引き廻した。血が噴き出し、上半身が前にのめろうとする時介錯に立った審判矮人が、その首を打ち落した。決闘試合の余興の切腹演戲は終わったのだ。

……………

初めて見る悲壮美の舞台で、自分の名に捧げられ、自分の意志で流された血潮の鮮かな色に魅せられたクララは快よい昂奮に、暫し放心した様になっていたが、

「さあ、別荘に着いたことよ」

というポーリーンの声にふと吾に返った。



## 第十二章 別荘到着第一歩

### 一 複式動路

「別荘はどこにありますの？」

クララが訊ねた。ポーリオンは笑って、

「さあ、自分で御覧なさい」

壁が開いて隣室の立体レーダーが現れた。

「あ、シシリー島……」

地図で見馴れた長靴の先が見える。東海岸。エトナの山が大きくなった。更にその南、シラキューズに近いあたりか、

「まあ、美しい……」

クララは思わず嘆賞の声を放った。緑の絨氈に大粒のダイヤを落したとでも比喻したい様な、広々とした芝生に囲まれた正多面体の水晶宮が円筒の遙か斜下方に、陽の光を受けてキラキラと輝いているのだ。光は西から射して来ている。今、原球面は秋の午後なのだった。

「この島には別荘が多いの。この辺六〇軒四方位がうちの地所よ。隣は卿アグネス・マックといって、私の親しい公爵の地所。丁度彼女も地球に来てる所なの」

ポーリオンが説明してる中に円筒は下降し続け、水晶宮からは大分離れて、芝生の中に径三〇米ほどに光る金属板上に着陸した………と思うと、意外、更に沈み続ける。金属板は深一〇〇米、船体を完全に地中に格納しうる丈の堅穴の蓋になっていたのだ。

出入口の扉が開くと、立派な地下街があった。地上は芝生でも、下は文明に満されている……

驚いたことには地下街の床が動いているのだ。良くみると、それは床にいくつかの带状の仕切りがあって、一定方向に絶えず動いているのである。帯と帯とが交叉する所では立体交叉させて停滞しない様になっている。そして一方向には必ず逆方向のが隣っている。——  
「動路で行こうね」

ポーリオンが云った。動路 moving road? ではこれは一種の道路なのか! 成程、エスカレーターの仕事掛を平面に移せば、この動路になるだろう。

水晶宮の方に走っているらしい動路にタロを先立てて一行は近づいた。遠くからでは分らなかったのだが、帯は平行する四筋の移動路面でできていて、端から段々速度が増している。先ず端の緩速のに乗り、次々に乗り換えて奥の高速路面に達する様になっているのだ。端の路面から奥の路面を見ると、ひどく速くてとても乗り移れそうもないが、三番路面からは楽に移れるのである。

尤も、慣れれば無造作に乗り移れるのだろうが、初めてのクララは、やはり足を取られそうな気がして、思わず手を伸してウィリアムに支えて貰った。彼独特の香水の匂が快く鼻を衝いた。四番路面は相当な快速だ。美青年と手を組んだまま、金髪を風になびかせて、足許の路面の動きを楽しんでいるクララの耳に、前に立つポーリオンの声が、とぎれとぎれに入ってきた。

「……から、獣医科手術室に入れ………緩解薬の合成にかかるよう………先刻タロに囁まれたばかり……」

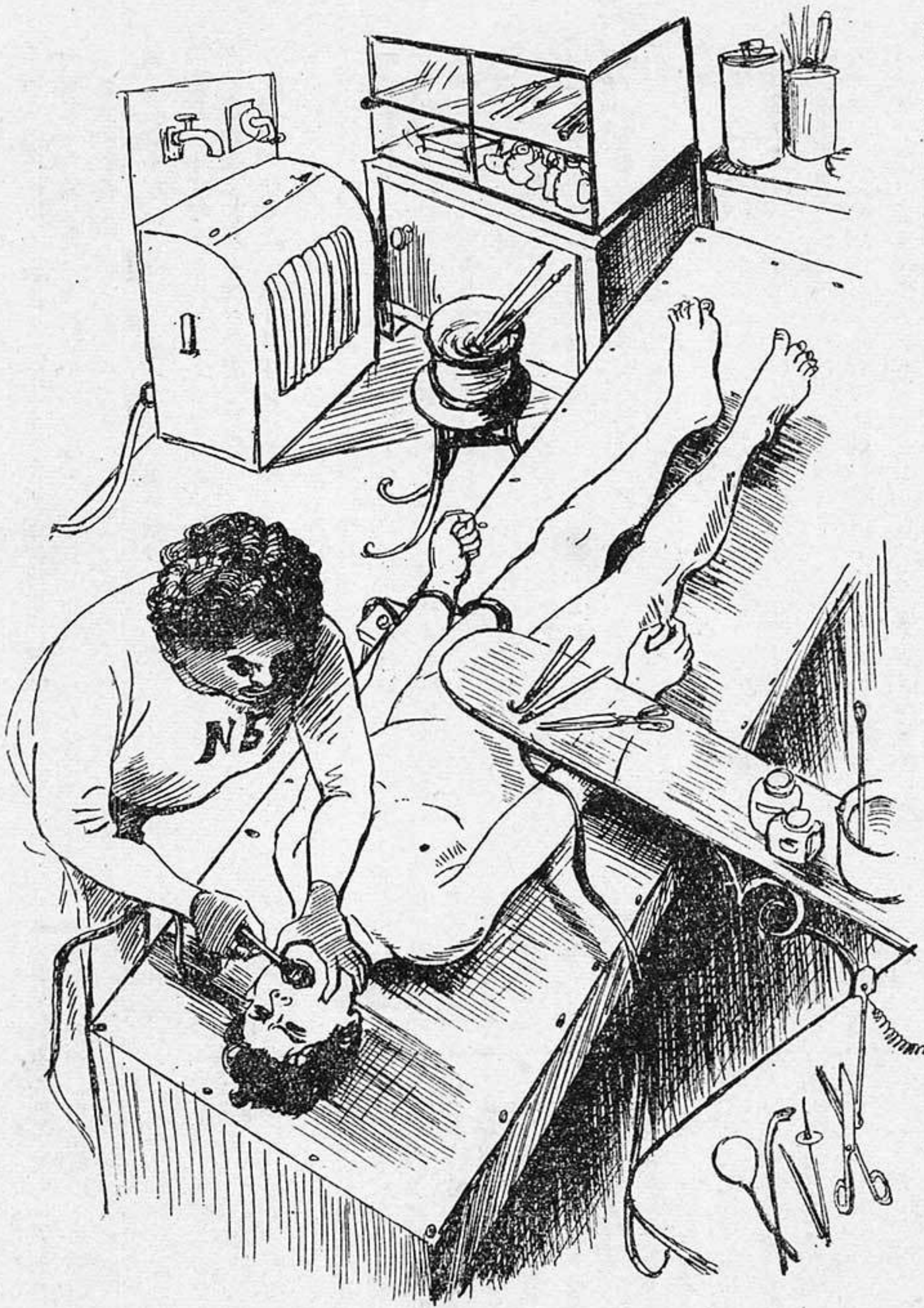
ポーリオンは自分の腕送話器で発令できる範囲内に来たので、早速隣一郎の取扱方を指令してる訳なのである。

クララは、ハッと婚約者のことを思い出した。——そうだ。妾は隣の状態を緩解して貰いに、この別荘に来たんだった。一体隣はどうしてるのかしら? この動路を後から来るのかしら?



二 隧道車

麟一郎は隧道車の中にいた。氷河号の船底部から外に出たところ、水晶宮の地階に通ずる地下一〇〇米の深さの地下道があり、こ



れが氷河号の乗組黒奴達の通路なのだ。ここには複式動路などない代り、隧道高速線がある。回転体を使って重力を絶ち隧道内で宙に浮いている弾丸状の車体を備えた輸送機関である。担架のまま床におかれた麟一郎と座席の二船員を乗せて車は水晶宮の地階深部へと急ぐ。

麟一郎の耳に二人の会話が聞えて来る。

「先刻、このヤブーの背中に鞭をあてたことな、あれ黙っててくんや、頼む、な……」

「さアて、俺も公売されるのは嫌だでなア」

「俺は鞭ち殺されるかも知んねえんだぜ。頼むよ、なア、俺はうっかりしてたんだ。こんなことで死にたくねえ」(※)

(※註。この会話を理解して戴く為、黒奴犯罪に対する刑法典の条文を紹介しておく。

黒奴刑法第十九条 人間

(白人のことである点

注意)ノ権利ヲ侵害ス

ル者ハ死刑三級ニ処ス

同第二十五条 日記報告



ニ噓言アルモノハ私刑公売 auction for lynch = 処ス

同第二十六条 他ノ黒奴ノ犯罪ヲ知リテ報告セザルトキハ噓言アルモノト看做ス

同第二百一十一条 死刑三級ハ鞭撻ヲ以テ執行ス

同第二百三十三条 公売セラレタル黒奴ノ処遇ハ畜人ト同様トス

以上で大體分ると思うが、私刑公売について少し説明を補足する。貴族は黒奴の生命を奪うことができるが、ヤブーと同じに扱ふこととはできないし、平民は一般に黒奴の生命を尊重せねばならない。つまり黒奴は半人間としての法律の保護を受けているのだ。この保護を公に奪つてヤブー並にするのが私刑公売の刑であつて、私刑用としてせり売される。落札者（勿論白人に限る。平民が多い。）はこの黒奴にどんなリンチを加えても良い。これで民衆のサヂズム本能を満足させていることが、戦争競技の存在と並んで、イース世界に内乱などの起らぬ心理的根拠だと言われている。黒奴やヤブーを殺すことによつて白人同志の殺し合いを防止しているのが、イースの平和なのだ。

——つまりらんことを云っている。俺の背中を一寸鞭ったことより俺を窯の中に入れて、あんなひどい目に合せたことの方が余程重大な犯罪じゃないか。後で身体が効くようになったら、此奴等、唯じやおかないから……

その時車が止つて、下された。

白人は一人も居ない中を担架は移動して行き、遂に獣医科手術室に着いた。この行先は先のポーリーンの命令が召使頭（チーフ・サーバント）に中継されて護送の二船員に伝達されてたのである。

黒奴看護婦が麟一郎を寝台に仰向きに寝かせた。ヤブー専用の寝台でデルマトコンを避けて薄い金属板で張つてある冷い寝台だが、彼の皮膚は最早その冷たさを感じないのだ。

「獣医は今お薬を作つてらっしゃるから」

看護婦は護送の両黒奴にそう云いながら、慣れた手附で、麟一郎の身体を扱い、導尿管（カテーテル）を挿入した。看護婦の制服は、黒奴男達の半袖半ズボンと異なり、手首足首まで届く長袖長股引だが、肌に密着しており、やはり尻で割れるコンビネーション仕立だ。背中のシヤンセン家紋や胸のN5号の繡取も色が派手で、女性好みだ。（黒奴社会には女権制はないので、黒奴女は昔の様に「女らしい」のである。）

続いて、口から胃内鏡を挿し込み、ポンプ虫の頭部が幽門の適正部位に附着してゐるかどうかを調べる。異常なし。伝声管でその旨獣医に報告すると、胃内鏡挿入の刺戟で麟一郎が嘔吐した。麻痺したままの口から汚物が溢れ出すのを認めて、

「汚ならしい」

舌打しながら、つい先刻自分が使つたばかりの真空便管先端を椅子の脇から外して、股当部を麟一郎の口に当てて汚物を吸い取り掃除した上、消毒器に突込んだ。今の接触で汚れたのは、ヤブーの唇ではなく先端器なのだから。黒奴用の便器に接吻させられたとは知らぬ麟一郎、クララが一向姿を見せぬので、段々心細くなつて来た。円筒の船艙内から、四人の白人と愉快そうに談笑しつつ去つた彼女の姿が目につく。あれほど誓つて呉れたのに来ないのは何かあったのか、彼女の身に……それとも、俺のことを忘れたのか、心変わりしたのか、そんな筈はないが……疑心は暗鬼を生んで、思いは千々に乱れるばかりだった。

### 三 足 項 礼

麟一郎が寝台に横えられた頃、クララ達の乗る四番路面は漸く地階第一階のステーションに達した。速いといっても動路は隧道車の半分位しか速度が出ない。その代り、気紛れな白人達が急に氷河号



を使う気になった時にも、報せを受けて後から出た船員達が先に円筒に乗り込んで諸般の準備をしてしまえる等の便利がある。速いばかりが能でない。イース人は生活の快適さをこそ求めるのである。

——麟は果してヤプーなのか知ら？

一度麟一郎のことに考が向いてからは、この問題がずっと心を占領し続けて、クララを悩ましていた。

円盤内で見た人犬、足台、便器などから考えてヤプーと称ばれる似而而人類の存在は疑えない。そして彼女はこのヤプーには何の同類意識も持っていない。これらに対してイース白人と同様に感じ行動して行けると思う。その小型化した矮人についても同じである。唯気懸りは、ヤプーが日本人の末裔らしいことだ。何故なら麟一郎はまぎれもない日本人だからである。「たしかヤパン人とかジャンパン人とか云う……」とポーリンはいった、「黄色い猿」ともいった。どうも日本人のことらしい。壁から出て来た畸形の便器人間を叱りつけた時の言葉も日本語だった様だし、矮人は死ぬ時彼女のパンザイを祈ったが、これは日本語だと聞いた記憶がある。……もし、日本人はすべてヤプーだというのなら……もし麟が（ポーリソン達はこのことに何の疑念も持っていないが）本当にヤプーだったら……

円筒の中では芝居をする必要上、麟一郎を殊更にヤプー扱いしたものの、クララはまだ心からそう信じる気にはなれなかった。然しヤプーでないと云い切る自信もないのだった……

「何をそんなに考えてるんです」

途中からずっと無言になってしまったクララが気に懸るのか、ウイリアムはステーションに近づいてからの移動路面の乗り移りに手を貸しながら、そうクララの耳許に囁いた。

「え、ある人——いえ、あるヤプーのことをね」

答えながら、ステーションに立った。隧道車の終点は殺風景だがこちらは善美を尽し、目を楽します景物に満ちている。

五人の黒奴が出迎えている。制服は同じくコンビンエーションでも、色が船で見た召使達と違って桃色である。これは特に主人の身の廻りの世話をする名譽の召使を示す色で、従者と称ばれる。一人一人が自分の主人を迎えに出てるのだ。クララにももう従者が定ってる手廻しのよさ。胸番号F1——Fは小さく1は大きい——の青年黒奴が彼女の前で跪いて挨拶した。額の金輪が床に接触している。

「F1号と申します。どうぞ御足（ごそく）を」

クララが、どうして良いか分らずにいと、

「足項（ふつ・こきん）礼（れい）Foot-necking」と云ってね。ここを踏んでやるの。強いほど喜ぶのよ」

と、ポーリソンが囁いて彼の項（うなじ）を指した。

「こう？」

クララは右足を平伏しているジョウの後頭部に載せ、靴の踵を金輪にかけて支点にして、爪先の方で項（うなじ）をギューと圧迫してやった。F1号が立ち上った。利潑（りぱく）そうな目附で、キビキビした動作である。

「じゃあ、晚餐に寄り合いましよう」

ポーリソン遭難の救出隊一行は十二分に目的を達して、ここで一先ず別れることになった。

ポーリソンは、クララに向って

「貴女ね、今この従者が御部屋に案内するから、そこで待ってて。

妾は貴女との約束があるから、あのヤプーの所に廻って、奴を貴女の部屋まで連れてゆくから。そんなに待たせないつもり」

緩解作業を済ませてから連れてゆこうとする彼女の計画を知っていたら、クララも同行を望んだだろうが、この時は唯連れに行くだ



けのように聞いたし、待たせないと云われたので、言われるとおりにするしかなかった。



「ええ、良いわ。麟——瀬……」瀬部氏と言ひ直しかけて止めた。  
「麟のこと、お願いするわ」

「じゃ、あとでまた……あ、ちよっと」急いで左腕から送話器を外すと、クララに渡して、  
「これお持ちなさい。便利よ」  
「良いの？ 貴女は？」  
「別のが部屋に行けばあるの。従者もいるし、心配いらないわよ」

従者一人をつれて歩み去る。タロが続いて駆け出し、追抜くのが見えたが、呼び掛けて、  
「タロ、お前は部屋にお帰り。又悪戯されちやたまらないから」

というポーリーンの声が聞えて来た。

犬は軽快に走って姿を消した。ドリスやセシルも次々に去る。

クララは少々心細くなったが胸を張って、残っていたウィリアム・ドレイパーに挨拶を済ませ、F1号に案内を命じた。少し行くと、後から足音がして、



「クララ、もしお許し戴ければ、御部屋までお伴して、少しお話ししたいことがあるんですが……」

というウィリアムの声が聞えた。従者も連れて、二人で追って来たのだ。

「どうぞ。こちらから御願したい位よ」

エレベーターで大分昇った。開閉機が開くと立派な廊下がある。

昇降も開閉も自動的だが光電管などの機械的な仕掛ではない。矮人が隠れて操縦している一種の有魂装置だ。

絨氈を踏んである私室の前まで来た。F1号が立ち止る。ウィリアムが云った。

「さあ、扉魂に新しい主人の声を聞かせるのです。『開けよ』とお願いなさい」

「開けよ」

クララはその通り云った。言下に扉が開いた。ウィリアムは、彼女に先を譲りながら、

「これで脳波型と声波型を憶えましたから、これからは貴女が近附けばひとりで開きますし、他の人の声では開きませんが、貴女の命令なら開くわけです」

#### 四 自動椅子

——これが妾の私室か

クララは心を落ち着けて見廻した。奥に寢室に続く扉を持つ二間続き。こちらが応接間だ。絨氈もセットも豪華なもの、立派なソファと肘掛椅子があつて、その間に素裸の男が跪いている。その背中に大きな傷………と思つたが、ハツと悟つた。円盤の中で見た奴の倍、普通人の大きさの足台ヤプーなのだ。傷と見たのは、足型に刻つた凹みで、二つ宛方向が逆に、計四つ。ソファの客とそれに向い

合つた肘掛椅子のホステスとが、両方から一緒に足を載せられる様になつてゐる。

外にも二分の一位に縮小されたヤプーが室の四隅に立っている。何に使うものか？

クララはホステス用の肘掛椅子に掛けながら、従者に向つて

「お前、名前は？」

「名前……F組頭はジョウでございますが……私奴は唯F1号とお呼び下さいまし」

「組頭以外は名を知る必要はないんですよ。僕もこの別荘にもう何日も泊つてその間ずっとあのM9号を使つてますけど」ウィリアムは、ソファに深々と腰を下しつゝ、部屋の内扉口近くに立つ自分の従者の方を顎でしやくつて、「末だに番号以外は知りませんよ。……」

「はい」

「はい」

「煙草」

「はい」

M9号は進み寄つて、ウィリアムの上衣のポケットからパイプを取り出し、精気結晶の刻みを詰め、点火して啣えさせた。クララは肉足台の凹みに足を置いて見たくなり、靴を脱ごうとしていたが、この男が自分のポケットからパイプを取り出す丈の作業さえ、従者にやらせるのを見て、内心呆れると同時に、従者の使い方を実物教育された様な気もし、自分で靴を脱ぐ動作を中止した。

ウィリアムは、煙を吐きながら、

「クララ、一寸お話ししたいことがあるんですが、貴女まだ奥の部屋も見てらっしゃらない。……着更や化粧もありましたようし、僕ここで待たせて貰いますから、どうぞ、先に奥にいらして下さい」奥にも部屋があるのに先程から好奇心を起していたクララは、良



いしおにして、

「じやあ……」

と立ち上ろうとしたが、ウィリアムの声とその動作を遮った。

「自動椅子オート・チェアです。右の足台ペダルを踏みながら、行先をおししやれば良いんですよ。左を踏めば止ります。来客用だから読心能はないが……」

そう云いながら、何時の間にかソファの横に来て二分の一縮小ヤプーの顔に向けてパイプの灰を落し、ついでにプツと唾を吐いた。クララはハツとしたが、このヤプーは灰と唾が顔面にかかるうとする一瞬、パクリと口を開いて、含んでしまった。そして用済の合図なのかパイプで頭をコツンと叩かれると、尻からコードを曳きつつ、部屋の隅に戻って行った。これは肉瘻壺イルスビという道具で、落ちかかる小さい物体を素早く口中に含むことを専門に仕込まれてある。これを使用する場合、予め口を開かせたりする必要はない。いきなり顔の近くで唾を吐きかけても、必ず口中に収める素速い動作は、蛙が蠅を呑む時のようで、眼にもとまらぬ早業なのである。

然し、クララはいつまでもそんなものを見ていたわけではない。膝を曲げた時両足が乗る様な位置に足台ペダルがあるので、その右をぐつと踏みながら、命じた。

「奥へ」

オート・チェア

自動椅子は矮人登場以前からの伝統的な生体利用家具で、貴族の私室で愛用される。外見は革張りの肘掛椅子だが、小型の自動車になっており、しかも尻の下に天然スプリングのヤプー人が入っている。操縦者を兼ねてるのである。両肘の所に宝石様の装飾があるので眼鏡で、屈折鏡プリズムでヤプーの両眼に前方が見える。四肢（但し後肢は膝から下がない）を突張って背中で使用者のお尻を支えねばならぬいから、腕や手の自由は効かないが、十本の指と顎に固定した横桿

とで椅子は自在に動かせる。読心能テレパスの場合なら、使用者は全然身体を動かさずに部屋中どこへでも行けるのである。尤も、ふと心にした丈で、本当にその気にならぬ中に動き出したりしない様に使用者が右の足台を下に押して始めて始動し、左を押せば止まる仕掛になっている。

クララの自動椅子は、命令に応じて、奥に続く扉の方へ進み始めた。この扉も既に彼女の脳波型を知ってるのか、椅子の前に音もなく開いた。F1号が続く。扉が閉じた。

クララは豪華な寝室の中に自分を見出した。

## 五 緩 解 注 射

一方、クララと別れたポーリンは、従者一人を連れた丈で、エレベーターで下りて行った。白人は地上階に住み、黒人やヤプーは地階で暮す。先刻動路上から指令して、クララのヤプーを運ばせておいた獣医科手術室は地階深くにあるので、そこへ緩解作業を見にゆくのである。

ネアンデルタール人を捕獲して来た時にも、獣医に緩解注射させるのだが、ポーリンは普段緩解されて元気になって地上うえに送られて来た奴しか用がないので、今迄緩解作業そのものを見たことはない。然し、今日は、クララとの約束もあり、責任上自分で緩解作業に立ち会うことにしたのだ。かくて珍らしくも、若奥様の地階深層御来臨となったわけである。

獣医ジムは黒奴である。イースでは、単に医師と云えば勿論白人だが、彼等は黒奴やヤプーの診療はしない。手が汚れるからである。そこで、黒奴、ヤプー、天馬等の為には黒奴の医者がある。この獣医もその一人で、ヤプー専門。医者といっても黒奴だから、勿論奴隷の身分である。まだ若く経験も浅いのだが、学業成績を買われて、



地球別荘の新築落成と共にここに派遣され、組頭待遇で別荘内の数百匹のヤプーの健康管理を命ぜられたのだ。

寝台にヤプーを寝かせ、護送の二船員を待たせて、緩解薬を合成し終り、これからと云う所へ、ポーリーンが入って来た。

「ウヘーッ」

白い手術着の裾を乱しながら、彼は平伏した。看護婦N5号も勿論である。

クララは、彼の頭を軽く右足で蹴って

「よし、仕事をお続け」

と命じた。これは足蹴礼 キッキング Kicking と云って、足項礼より少し略式の答礼である。

「薬は？」

「でき上った所でございます、若奥様」

「早くおし」

「はい、畏りました」

彼女は見廻してヤプーを認めた。逞しい男性の全裸体が寝台に仰向けられている。導尿管を挿入してある部分が否応なしに目に入るが、彼女は何の動揺も示さない。二十世紀の女性が飼犬のそれに羞恥を感じないのと同じだ。

麟一郎の方は、身体こそ凝<sup>じ</sup>つとしてるが、内心の動揺は甚しかった。声でクララでないと分る。どうもポーリーンらしい。一体どうしてポーリーンが来たのだろう？ クララの身に何かあったのか、それとも俺を……

獣医はN5号に命じてヤプーに手錠足錠を施させようとした。ネアンデルタール人は麻痺が解けると暴れたすから、いつもそうするのだ。が、ポーリーンは

「そんなもの、要らないよ」

「は？」

「要らないんだよ」

狩り立てて捕まえるネアンデルタール人と違って、このヤプーはクララに伴って温順なしく坐<sup>ま</sup>ってる所を、タロがうっかり噛んだんだ。だから、そんな嚴重なことは要らない。どうせすぐ上階<sup>うへ</sup>に連れてゆくんだし……

ポーリーンの気持はそんなことであつたが、命令の理由を一々説明するなんて不見識なことではないのが、イースの白人だ。

彼女の意向は絶対命令である。ジムは緩解薬液を満した太い注射器を取り出し、麟一郎の太腿にズブリと突き立てた。

美しい若奥様に足蹴礼を受け、その御前<sup>ごぜん</sup>で仕事するという破天荒の光栄に、若い獣医はすっかりあがって、手がブルブル慄える。

「だらしないわよ。慄えてるじゃないか」

ポーリーンに笑いながら叱られて、益々慄え出し、麟一郎の注射の苦痛を倍加させた。

が、どうにかこうにか、注射は終った。

「この薬はすぐ効<sup>き</sup>くって聞いてたけど？」

「は、十五分で。若奥様。毒が少しでも残ってますと、全然身体が効きませんが、毒が消えますと瞬間的に元通りになります。漸層的でなく飛躍的に肉體能力が戻りますのが、この衝撃牙の毒の緩解経過の特徴でございます……」

「十五分ね、その時来るわ」

この部屋で唯待ってるより、この機会に地階の黒奴舎でも見廻つて見よう。と決心してポーリーンは獣医科手術室を出て行<sup>い</sup>った。従者のA3号が形に添う影のように、従った。

(以下次号)



〔雜誌通信〕

大衆文芸に現れた責の描写資料

「明月よしや組」より「お雪の責場」

笛 地 佐 渡

先日ふとした機会で読物朝日第三号（昭和23年12月発行）傑作時代小説と銘打った海音寺潮五郎著「明月よしや組」を入手した。果して傑作か否かは知らぬが、旗本奴よしや組の頭領で美男の三浦小次郎が、副頭領でぶ男の高木仁左衛門の謀殺した浪人小堀甚左衛門の娘お雪に助太刀して敵討をさせる義侠小説であって、その中にアブ的描写があるので紹介してみたいと思う。

「うっ！」  
「御、御、御無態……」  
微かな悲鳴を上げたゞけで、袈裟に放された傷口から薄い月光に霧のように見える血をしぶかせてあわれな犠牲者は倒れた。とゞめを刺すと、ちゃんと準備が出来て

いたものらしくどこから仲間共が出て来て、死骸を運び去って、血のしたゝった地面には砂をまいて蔽いかくした。

残忍というべきか、酷薄というべきか、座敷の連中はもとより庭にひかえた浪人共も眉毛一つ動かさなかった。旗本共は悠々と盃をふくんでいたし、浪人共はにや／＼笑っていたし……。

月が天心に近くなつて、庭はやゝ明るくなつてどこか遠い所で鶏が鳴いた。

「そろ／＼はじめるかな」

盃を捨てゝ、ためし柄の伊賀守金道をつかんで高木は立ち上った。心得て浪人の一人がかごからお雪を引き出した。

しほれた花束のように痛々しいお雪の姿だった。かぼそい体をしぼり切るようにきびしく縄が食い込んでいるし、着崩れた着物の襟許からは白い肌がむき出しになっているし、乱れた髪に蔽われた顔には痛ましい猿轡がはめられているし——たゞ眼だけ

があらん限りの怒りと侮蔑の色をきらめかして火のようにかがやいていた。

高木は庭に下りた。

刀を抜いて、鞘を縁にのせて、そろ／＼と近づいて行く、真直にお雪の眼を見つめてはいるが、怒りの色もなければ、昂奮の色もない。乱酔に青ざめた顔には水のようにしづまりきった表情があり、自足の微笑が、翳のように口許にたゞよっている。

「女、この前おのれが三浦小次郎の尻押しでこの屋敷に来た時も申したことだが、天下の旗本が瘦浪人を一匹踏みつぶしたただけの事に、敵討のなんのと云うは身のほど知らずというものじゃ、今となつては後悔もしていろいろが、もう遅い、せめてもの情けに痛くないように一思いに斬ってくれうとて、業物を吟味しておいた。念仏など唱えるがよいぞ。」

低い声でつぶやくように云つて刀のひらでびた／＼とお雪の頬を叩いていたが、ふと、その刀を引いて、自分で猿轡を解きはじめた。

「はゝゝゝゝ、これでは念仏も唱えられず口惜しいとも云えぬか」

酔つたもつれた手つきで、のろ／＼と解くのである。やつのことで解き終えた刹那、はげしくお雪の顔が動いたかと思うとお雪は相手の手に噛みついた。

「あっ！」  
と高木は手を引いた。お雪の歯はわずか



に高木の手の甲をかすめただけで、はげしくカチリと鳴った。

「うぬ！」

足をあげて挫と蹴倒して、肩を踏みつけて高木は刀を振りあげた。満面朱をそゝいで阿修羅のように恐ろしい形相になって、氷のような切先を白い胸許めがけてじりじりと下ろして行く、

「口惜しい！ 小次郎様！」

お雪は叫んだ。はじめて涙があふれて、そのしづくがはげしくゆり動かす顔につれて、きら／＼と光りながら飛んだ。

——かくして高木はお雪をなぶり殺しにしようとするが、急に気が変った、「おれはおれを敵と憎んでいる女、小次郎に惚れぬいている女、それに云うことを聞かしたいのだ」と宣言し、歪んだ残忍な悪魔的な愛慾の対象としてお雪を監禁するが、それが次第にアブノーマルな責めに発展してゆく。再び原文に戻って中心場面だけ摘出しよう。

この日頃高木の生活はたしかに常軌を逸している。

朝むっくり起きてから酒を呻って、酔えぼきまってお雪を監禁している部屋に行つて責めさいなものである。(中略) 起きぬけから大盃をあふって、顔が責ざめ、眼が血走り、足許がよるめく頃になって、鞭をひっさげてお雪の監禁されている部屋に出

かけて行くのだった。

その部屋は雨戸を釘づけにして昼はわずかな隙間から青白い外光が忍び込んで来るだけで薄暗かったし夜は真闇だった。昼も夜も高木は燭台を点させて入って行った。

足音でそれを知っているのであらう。高木の入って行った時には、いつもお雪はきちんと坐って、きびしい憎悪の眼をむけているのだった。その眼を見つめて、大股に歩き寄りざま、鞭をふりあげて、打ちおろす。鞭はひゆうと風を切つては、やわらかい肉体に食入ってはげしい音を立てる。最初ほのど、お雪は呻き声一つ漏らさない。縛られて自由のきかぬ体を、わずかにびくりとふるわせるばかりだ。それが腹が立つらしい。高木は五度、六度、七度、八度と息をはずませて振り下す。骨に徹するような苦痛に、お雪のからだはねぢれるように波打ち、青白い顔に汗がにじみ、齒をかみしめてこらえる口からわれにもあらぬ呻きが漏れてくる。

こうなつて、はじめて高木は満足なのだ。

息が弾み、かち／＼と齒が鳴り、鬼火の燃えるような暗い喜びの光が、とろ／＼と眼に燃えてくる、しかしこれで止めるのではない。一層兇暴に鞭を振ってから云う。

「云うことを聞け！」

お雪は答えない。あらん限りの憤怒と侮蔑をこめた眼でにらんでいるだけである。その顔は青ざめ、やつれ果て、おどろに振

り乱した黒髪の下の眼は火のように乾き切っている。それが高木にはこの上もなく腹立たしいし、また美しくも思える。

がち／＼ふるえながら高木はまた云う、

「云う事を聞け！」

依然として黙っている。高木はおどり上って鞭をふりおろす。

めったうちだ、めったうちだ。かくして、へと／＼になつてから出て来てしばらくの間は疲れきつて死んだように寝ているが、やがて又起き上つて酒を酌む酔うとまた出かけて行く。

見ていると、真実云うことを聞かしたいためか、それとも、責めさいなむのが、目的かわからない。恐らく、自分でもわからないのかも知れない。

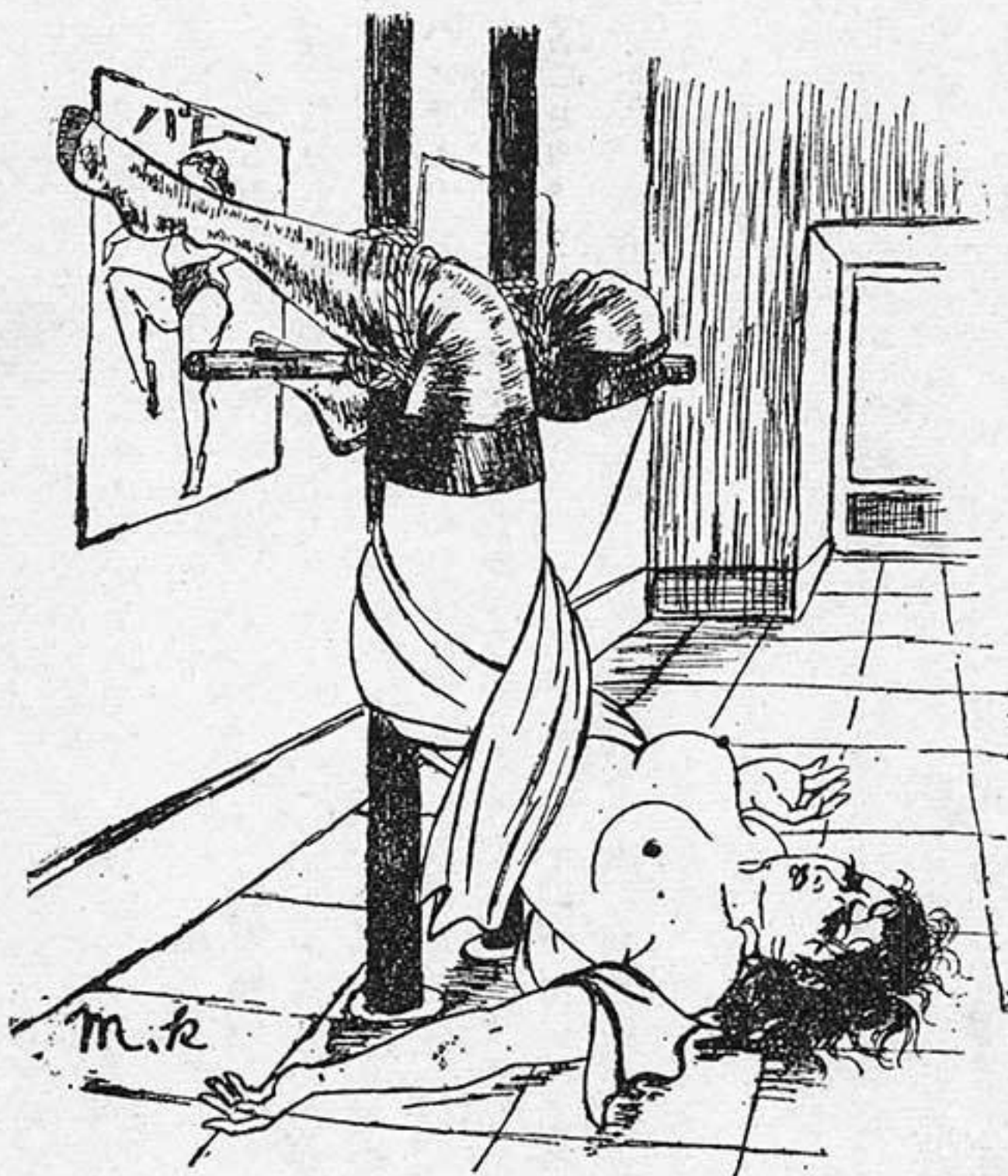
お雪のやつれて来たのは当然だが、高木も青白くやつれて来た。

——このあと少々責め場面があるが、その責めの最中、小次郎が助けに来て敵討をとげさせ、型の如くめでたし／＼となるのである。一般の小説とは珍らしくハッキリ異常心理を表現しているので少々冗長だと思つたが特に長文の引用を試みた。他の小説では責めや縛りの場面が相当長く出て来ても、このように異常場面そのものとして取扱っているのは少いから、やはり紹介の価値はあるものと思う。挿絵も表紙の色刷を含めて三点責め場があつた。画家は名取春仙である。

(終)



# キクに捧ぐ私のアイデア集大成



編集部の皆様へ

佐々木ツトム

北村ミツオ・画

## 第一部 写真の部

### ◎男女闘写真

#### A 男女レスリング

(秘密ショーは、どこでも男女のレスリン

グは裸体です。)

これは双方の力の平衡を保つ為、大抵女性側が大きく男性側は小柄、新しいアイデアとして白人女と日本男という組合せも面白い。

△白人女は大兵肥満の美人、日本人はなるべ

くハンサムで上品な青年がよろしい▽  
〔解説〕

- (1) 先ず双方の正面向いた全身像、これは是非一枚必要、双方の容姿紹介です。
- (2) 向き合って握手の写真一枚、必ず笑顔。
- (3) 戦闘開始、にらみ合う、真剣な表情、必死の気組、セイカンな斗志は双方とも全身にみなぎり、足の先から頭の先まで緊張に溢れている。これが一枚。
- (4) 小柄でも敏捷なハンサム・ボーイ有利な態勢、はげしい攻勢に白人の美女タジ／＼。
- (5) 数回、マットの上に投げつけられてグロッキー気味の白人女、勝ち誇ったハンサム、尚も攻撃の手をゆるめない。二、三枚。
- (6) ホールセンと日本ハンサム、あおむけの白人女の上にのしかゝり、こゝで寝業となつて激戦展開。数枚。
- (7) 寝業になると俄然形勢は逆転、妖蛇のように粘り強い白人女の肢体は巧みにハンサムの攻撃を反らして自己のペースに捲き込まんとする。ハンサム必死の防戦。三枚
- (8) 全く形勢逆転、明らかに白人女有利、小柄なハンサムの劣勢バクロー、ようやく攻勢に転じた白人女、ハンサムの必死の抵抗を排除して巨大なお尻を預けて相手を圧倒するすさまじさ。三枚
- (9) 小柄なハンサム、完全に白人女の巨体に



押し潰されそうになる。

(10) 懸命にもかくハンサム、窮余の一策、相手の腋の下に手を伸して擦ぐる。一枚。

(11) 思わぬ奇襲に白人女、思わず、くすぐったそうに笑を含む表情。一枚。

(12) ハンサム必死のはねかえし、大兵肥満の白人女、マットにめり込むように、おおむけに倒れる。ハンサム押え込む。一枚。

(13) 然し、そのあと直ちにハンサム、白人女の足業にかゝって簡単に逆転。一枚。

(14) ハンサム下になりながら、白人女の足の裏を擦ったりして懸命に起き上ろうとする。

白人女も必死に防戦、激戦数合。数枚。

(15) ハンサム力つきて白人女の臀の下となつて起き上れず、次第にグロッキーとなつてゆく。遂に失神。二枚。

(16) 戦終り、両者離れて休息、ぐったりとしている。一枚。

◎以上、三十二枚前後におさめる。モデルの選定がむずかしいが、白人の売笑婦が十万円位で引受けてくれるという話だから、彼女達の中で美人を探してやらしたらよい。

## B 捕手と女賊の死闘

これは最初は、きちんとした整った服装から始め、激斗の為、次第に衣服が乱れて遂に半裸となってしまう。

場所は、海岸の砂地、背景は松林が可。

女賊は短刀、捕方は十手で渡り合う。しかし間もなくいずれも得物をすてゝ組打ちとなる。上になり下になり猛烈な格闘。髪ふり乱して凄惨な死斗。枚数三十枚位、解説略す。

## C 小姓と侍女の取組

これは少くとも十人以上の男女モデルを使用する。情景は大江戸千代田城の大奥、豪華ケンランたる写真を希望。費用はいくらかゝってもよろしいから社用族に限る。

### 〔解説〕

(1) 十六七の前髪的美少年と同じ位の年頃から三十才位までの侍女とが、一人おきに、小姓、侍女、小姓、侍女というふうにする。小姓は髪をきれいに結って薄化粧をし、今紫大振袖、粗い縞の袴、侍女は黒地に金紙銀紙の四海波と梅花などを刺繍した振袖、そしてドレスの帯がよろしい。一枚。

(2) 雛子方がいります。笛、つゞみ、これは年齢のいった侍女連中に担当させる。彼女等は金泥のフスマ、千羽鶴を描いたフスマの前に座っているような表情をしている。一枚。

(3) この女達に混って将軍が居る。なるべく癪癖の神経質らしい風貌がよい。一枚。

(4) 将軍の命令で、鼓と笛が一齊に合奏しはじめ、踊子は右手を頭の上にかざし、右足をふみ出し、小姓も侍女も雛子につれて踊りはじめる。此のシーン一、二枚。出来るだけ優

美に、天然色写真なら尚素晴らしい。

(5) 身体と身体が触れあう。将軍の号令で踊り忽ち互に相手を裸にしようと合戦に変わってゆく。

(6) 幾組かの闘争を写す。各組のシーンを異つたものを組み合す。数枚。

### ◎紅の妖闘(女闘美)

これは「本妻と妾」「美女と醜女」等の対照の取合せが望ましい。

## A 白人娘と日本娘のレスリング

小柄な日本娘、但し敏捷にして精悍そうな表情、身長五尺三寸位がよろしい。白人娘は大兵肥満型、但し鈍重そうな戦車を思わせる様な重量で圧倒感に富む事。

(1) 両人の全身像、大寫しの顔、其の他二、三枚、出来るだけ白人も美人の方がよいのは言うまでもない。

(2) いよいよ戦い開始、睨み合う。(一枚)

(3) 巨像の如き白人娘目がけて必死に飛びかかる精悍な日本娘。(一枚)

(4) ふところへ飛び込んだ日本娘の首を、白人娘は右の手でしめつける。(一枚)

(5) かるく日本娘の体を抱きかゝえて、足を上にして逆さに持ち上げる。(一枚)

(6) 大きな平手で日本娘の尻を、ピシャピシャ張り出す。日本娘は宙に浮んだ両足をバタ



- くさせてもがくが、白人娘は微動だもせずしつかりとかゝえこみ張りつゞけている。
- (7) 日本娘の尻の皮が破れて血が流れ出す凄惨な死斗。
- (8) その血が白人娘の顔にかゝり、白人娘はいさゝかたじ／＼となったところ、一瞬、ピヨコンと体を躍らせて、日本娘はリングにはねかえる。(二枚)
- (9) 獲物を逃がした白人娘は、体勢をととのえ日本娘を両手で捕えようと焦る。
- (10) 手四つの激戦(一枚)
- (11) 張り切った日本娘の尻から血が流れている。ゴンゲ
- (12) 再び手四つ、素早く振り切った日本娘は敵の腋にもぐりこみ、両手を敵の右足に付ける。(一枚)
- (13) ただし、悲しいかな彼女には相手の巨体を持ち上らない。かえって逆にゆり立てられて、彼女の顔は相手の巨大な乳房のみぞに埋まってしまう。(一枚)
- (14) 先程にこりて、日本娘は腰を低く引いて敵のかゝえこみを警戒しながら、はずむ呼吸をととのえる。しかし持久戦になると、体力の相違は一層目立ってくる。
- (15) 日本娘の腹部が激しく波打ち、苦しげに吐く息、唇を切ったものか、半開きの口から血のまじったつばが流れ始める。
- (16) この時、白人娘の猿臂がぐいと日本娘の背中に延び、彼女のブラジャーは無惨にもむ

- しり取られてしまい、乳房(これは可憐な程よろしい)が切なげに揺れ出す。(一枚)
- (17) 白人娘の手は続いて相手のバタフライを掴むとほり投げてしまう。
- (18) 其の時「えい」と気合一声、白人娘の巨体がドーンと逆さになってたたきつけられる。同時に日本娘も敵の腹の上に重ね餅。
- (19) ムックリ起き上った白人娘は敵の両足を合せてムンズと掴む。(一枚)
- (20) 両足を持ってグル／＼振り廻す。
- (21) マットの土へ投げつける。
- (22) ゴンゲ
- (23) よろ／＼と、リング上に立った日本娘の斗志は火の如く燃え上る。
- (24) 「えい」と白人娘の首筋にかじりつく。
- (25) 日本娘はザンバラ髪、必死の形相凄まじ

### 本誌の旧号(復刊号)の在庫

|       |           |          |
|-------|-----------|----------|
| 復刊第1号 | (30年10月号) | 二百円(送16) |
| 復刊第2号 | (30年11月号) | 二百円(送16) |
| 復刊第3号 | (31年4月号)  | 二百円(送16) |
| 復刊第4号 | (31年5月号)  | 二百円(送8)  |
| 復刊第5号 | (31年6月号)  | 二百円(送8)  |
| 復刊第6号 | (31年7月号)  | 二百円(送8)  |
| 復刊第7号 | (31年8月号)  | 二百円(送8)  |
| 復刊第8号 | (31年9月号)  | 二百円(送8)  |
| 復刊第9号 | (31年10月号) | 二百円(送8)  |

く、白人娘にニヤツと笑い、得意の張手で日本娘の背中といわず腰といわず、猛烈に張り始める。(一枚)

(26) 突然、白人娘は日本娘の足払いにかかり相手に首を抱きつかれたまま、ズシンと重ね餅に倒れる。

(27) 白人娘は、尻の下でつぶれてしまった日本娘を、猶も圧倒し続けて行き、凄惨な寝業の決斗となる。(二、三枚)

### B 娘を女にする女

これは美しい同性愛に引きづりこまんとする女の写真、詳細は略(三十枚位)

### C どちらも同じ位の体格の白人娘と

#### 日本娘

やや白人娘が大柄の方がよい。

|        |           |         |
|--------|-----------|---------|
| 復刊第10号 | (31年12月号) | 二百円(送8) |
| 復刊第11号 | (32年1月号)  | 二百円(送8) |
| 復刊第12号 | (32年2月号)  | 二百円(送8) |
| 復刊第13号 | (32年3月号)  | 二百円(送8) |

○以上の通り復刊号は各月号共若干保有しておりますから御入用の方はお申込み下さい。三冊以上まとめてお申込の節は送料は当方にて負担いたします。

○休刊前の旧号は29年8月号より30年5月特大号までは、各月号若干残部がありますから売切れにならない中、お早くお申込み願います。



(1) 始め日本娘が白人娘を圧倒している。立業では日本娘が断然有利。

(2) 腰投げに投げつけて仰向けに倒れた白人娘の上に乗りかかった日本娘。

(3) 寝業に入ると白人娘が俄然有利。

(4) 上になり下になり必死の格闘、日本娘の体に白人娘の柔軟な体からんで行く。

(5) 相手の自由を次第に奪って行く白人娘。

(6) 遂に上になり乗りかかって体固めできめてゆく。(以上、各項一枚宛)

写真のアイデアはまだ〳〵沢山ありますが一応この位にして次に移りましょう。(尚、天然色の写真の裏に説明、解説等を附したら一層素敵です)

## 第二部 創作、小説の部

### A 悦虐小説

今まで取扱われた悦虐小説は、始めから被虐される主人公にマゾの傾向が強く、その上奴隷的精神に徹し、加虐される事を待ち望んで、そこに何らの抵抗性を持たないのが多かったのです。それでは人形と余り大して変わりはありません。生きている人間なら少しは自尊心があり見栄もあります。そこで必死に抵抗すべきであり、抵抗するのを加虐してこそ又、加虐されてこそ、そこに真のマゾヒズムやサジズムの醍醐味がありと愚考するもので

あります。しかもこれまでの小説の主人公はこれ見よがしのサジ男にマゾ女でした。どうも不自然さだけが目について、そんな主人公がいじめられても、又、いじめる方に廻っても読者に余り興味を感じません。何故なら読者は其の主人公に好意を感じないからです。それでは誠に他愛のない小説となってしまう。そこで主人公に人間性を持たして、殊に多くの読者に好感を迎えられる性格の人物にして下さい。男でも女でもよろしい。そういう主人公が余り読者が好感を感じない人物にいじめられるのです。しかもそれは宿命的な必然的な成行でそうなるのです。主人公の性格、人柄を上げて見ますと

#### 主人公の風格

- (1) 自尊心を持っている事
- (2) 読者にあまねく好かれる人物(殊にいじめられる主人公は尚更なり)

この(2)について、いささか分類して見ましょう。

#### 好かれる主人公とは

- (イ) 聡明であるが冷酷ならず、情深く極めて人部的なるもセンチに過ぎず、ユーモアを解し、しやれを飛ばす程ウィットに富んでいるが極めて真面目な人物

(ロ) 素直でやさしいけれど、自尊心は人一倍強く、勇気と智略に富み、きびきびとした明朗な主人公。

#### (ハ) 変化に富む人

まじめ一本槍かと思えば、時には恐ろしい程くだけた話もし、弱気な人かと思えば、あつというような離れ業を演じ、短気な人かと思えば、人の知らない所では常人の出来ない我慢をしており、派手に金を湯水の如く使うかと思えば、細心緻密な計算もして居り、浮気者かと思えば、実は貞操堅固であつたり、という風に、光と影の交り合い、たえず形を変えて行くような変化に富んだ主人公は確かに万雷の拍手を持って迎えられましょう。この主人公をいじめるのです。これは大変なスリルです。読者は正に興奮のルツボにたたきつけられることでしょう。

野村胡堂の小説に、好漢が妖魔にいじめられるシーンがありました。『女性の秘密』という小説です。これは後で『覆面の怪人』という名に変わっています。同じく奇談クラブというシリーズの中にあつたのです。

#### (ニ) 甘え上手の主人公

これも中々魅力のあるもので、人に甘えさす人は好かれるのが当然ですが、人に甘える事の名人は又、すごい魅力を発揮します。いくら親切にしても受け入れぬ人は嫌われましよう。この人に嫌われるすねた人(女)が、この甘え上手の人(男)をいじめるのです。例をあげると際限がないのでこの位に止めて後は私の創作をお送りいたします。こうし



て加虐する方もされる方も、其の時、何か会話をやり取りがあるべきですが、それも非常に大切だと思います。

## B 男女闘小説

男と女が同じ立場に立ち、同じ力を持って（むしろ女性の方が幾分有利な立場）争闘するという場面を描いた小説。例えば婦警とスリ、女と少年、復讐せんとして返討にされる男女の物語等々。詳細は略。

## C 女闘美小説

今までのものは、サジズムの女とマゾヒズムの女の取合せが多かったようです。これでは最初からテーマが判ってしまいスリルも何もありません。どちらもサジスチックでなければ、白熱的な火花が散りません。征服せんとして征服され、その屈辱感にのたうつ美女の物語は、私を恍惚境にさまよわせます。

## 第三部 サバットの的な物語

（悪魔の酒宴）

サバットというのは、魔王が主催して土曜日の真夜中に催される宴会です。あらゆる怪奇あらゆる醜悪の集り。人間は時によってはあらゆる背徳の行為をやって見たいという慾望を持っています。その慾望を小説によって満足させたいのです。

## A ルスト・モンド

いわゆる淫虐殺人の事です。そんな物語、他に二、三読んだ事があります。

## B 鬼あざみ

これは骨肉相姦、罪意識にふるえおののき乍ら、それ故に一層生地獄の快感にのたうち一旦泥沼に落ち込んだ上は、更に深味へ深味へと沈んでゆく宿命の男女を、生々しく描いて見てはどうでしょう。

## 第四部 記事、読物の部

(1) 古今東西の名作の中にある加虐シーンを抜き出し、その続きを空想して描く作品の掲載。

(2) 男女の争闘物語や小説の紹介。

(3) 最近のモデル嬢の心境、告白、打明話。

(4) 優秀な寄稿家の住所、略歴の誌上紹介、（これは無理かもしれませんが。）

(5) モデル嬢や映画俳優、女優等の有名人の写真を写して来て架空の加虐シーン。

## △番外▽

### 特別会員の募集

奇クの特別の会員になりたいと思っている社用族もありましょう。これを募集し顧問にします。会員はいつ如何なる場所の会合や催しやモデル写真の撮影の現場へも出入る出来る権利を与えます。その代り絶対に秘密を守り、又、入会金と会費は前納とする事等を条

件にします。入会金は五万円内外で会費は一ケ年十二万円とします。そして奇クを発展させ一層読者を喜ばして下さい。

## 第五部 トリック写真

出来なければ北原純子様の画にても可、これは幻想の好きな読者のために。

## 第六部 悦虐のクイズ募集

これは読者の作品、先ず最初は編集部から出題します。例えば次の様に

『読者の皆様、どなたでもよろしい、あなたが仮に美しく強い女プロレスのチャンピオンと仮定します。あなたはある時、ナイト・クラブ・シヨウの男女プロレス試合に出場します。あなたの相手として選ばれたのは、まだ二十才前のみめ麗しい美少年。あなたはこの少年に好意以上のものを感じ、少年も又、あなたの美しさに恋愛感情を抱きました。少年はあなたを征服して愛の告白をしようと思ひあなたは少年を征服して可愛がってやろうとします。さあ、二人の勝負は如何なる光景を呈していったでしょう。想像して描いて下さい。』

という風にこの答を殊に女性の読者から募集します。優秀なものは誌上に載せます。プロレス・シヨウは長い程客を喜ばします。ちなみに、これはどんな手を用いてもよろしい



客をエキサイトすればよいのですから。しかし余り惨酷な手を用いて早く相手をのしてしまつてはいけません。出来るだけ長くやるのが名選手です。

以上の条件を附して読者の答を募ります。

これを悦虐クイズというのです。私は手紙で親しい女性にこのクイズの交換をやっていた事もあります。中に凄い答にぶつかって驚いたことがあります。この悦虐クイズはきつと奇クフアンを唸らせることでしょう。悦虐クイズは他に沢山のものがあります。面白そうなものを二、三紹介しますと

(1) あなたと私は大変親しくなりました。お互に訪問したり、されたりする間柄になったと仮定します。ところが余り親しくなり過ぎて、つい仲の良い者同志の喧嘩になってしまいました。どちらも気持がこじれ口争いとなり、ついに手が出て取っ組み合いとなったのです。あなたは女乍らも力があり体も大きかったが遂に男の私に組敷かれてしまいました。あなたは如何にして体勢を挽回しますか。

(2) あなたはどうして異性と二人きりにならないのですか。男は行儀が悪いからですか。しかし私は大丈夫です。決して女と二人きりになつても手を出すではありません。そのかわり、反対に女の方から手を出しますよ。はっ、はっ、はっ。

「まあ、憎らしい口」

「そろ／＼あなたから手が出ました。」

次のシーンを、あなたが御自由に続けて下さい。

(3) 貴方の目も鼻も口も私の手猿ぐつわに押しつけられてぎゆうぎゆういわせられています。あなたは如何にして体勢を立て直しますか。

等々——これは読者通信の頁に発表なさつては如何でしょう。

## 第七部 其の他のアイデア

### A 表紙について

(1) マンネリズムに陥らぬため、明るく希望に満ちた表紙の次号は今度は陰うつなもの

(2) 奇ク独自の面白さをこわさない程度に奇抜な表紙

(3) 画も北原様、四馬様等々交互に

### B 奇ク川柳、俳壇の設置

奇クにふさわしい川柳と俳句等を読者から

## 鞭打のアイデア(2)

甲斐仁参



募ります。川柳では次の様なもの

(イ) 悦虐に関するもの

○よく嘘をつきんす舌とくわえられ

○憎らしい口だと口へ口をよせ

(ロ) 緊縛、禪美、女装、同性愛等に関するもの

俳句ではこんなものは如何、

○死美人にサン／＼と降る凄月



○死の公園、謎秘む橋の赤い月

○吸血鬼、次から次へうつり行く

詩ではこんな題で

○悦虐の花園

### C 甘美な悦虐ロマンス

これは絶対に微笑ましく、どぎつくないもので、初心者のための軽い読物、肩の凝らないもので、それでいて悩ましいもの。可憐な悦虐、涙ぐましいさやかな悦虐、読んでいて此の世が断然明るくなるようなロマンス。奇クの読物の中で、この様なものを一篇位は息抜きにとり入れて下さい。微笑ましいロマンスを！

### D 好評作品の単行本化

沼正二先生の「マゾ手帖」を単行本として発行出来ませんでした。これは素晴らしい文献です。悦虐文芸作品です。こんなにも深くマゾを研究し、判りやすく紹介した筆者は他にありません。好漢、沼先生……大いに御自愛御奮斗を祈ります。

### E 玉穂落穂集

これには感心しています。尚、今後共一層よろしく願います。又、新しいアイデアとして風変わりな奇抜なものがあつたら、筋書だけでも御紹介下さいませんか。編集の方が加筆削除して骨組に肉をつけても駄目でしょうか。

### 〔緊縛映画速報欄／追加／〕

／千葉栄市／

#### 新東宝映画「謎の紫頭巾」

白狐教の為、人質として誘拐された恩師の娘、雪江（野々村律子）を救い出さんと悪の根拠へ乗り込んだ松平さえ姫（宇治みさ子）は一度は雪江を助けはしたものの、カラクリ仕掛の階段から落ち、反って自分までも捕われ、二人とも後手に背中合せに縛り上げられて祭壇の前に引きずられる。C級

### 〔代理部だより〕

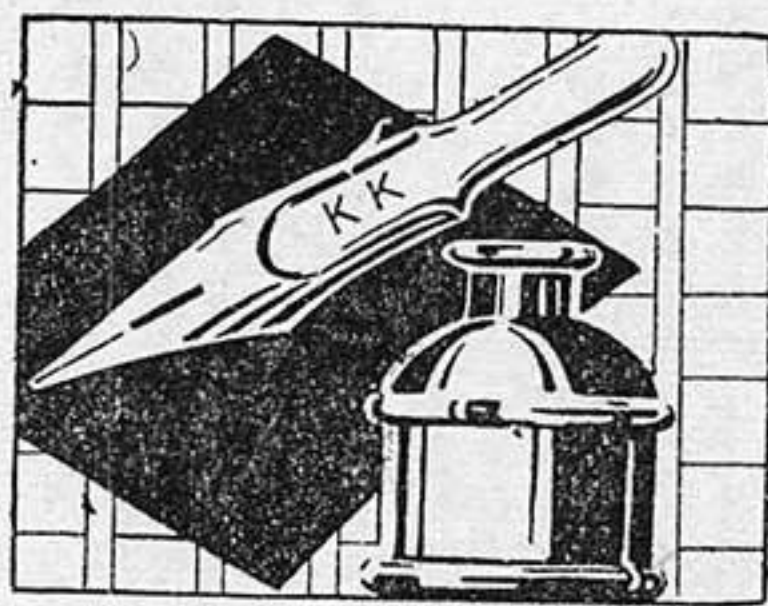
○休刊以前の本誌は殆ど売切れの状態です。只今在庫している分も残部が僅かです。御入用の方は、この際お申込願います。29年10月特大号から30年5月特大号まで在庫、一部百四十円（送料十六円）です。  
○アルバム「美しき縛しめ」第一集、第二集及び「美人乱舞」は売切れとなりました。  
○時代物責絵巻、未製本八枚一組、若干在庫しております。送共百五十八円です。  
○甲斐仁参案並に文、四馬孝画「涙のダイヤモンド」及び、北原純子画集「題未定」の二つの画集を近々発売の予定です。御期待下さい。形式、値段等は未定ですが、いずれ詳細は本誌上に広告します。

○代理部総目録の新しい分は、まだ出来上っておりません。新しい分が出来上りましたら誌上にて御紹介いたしますが、それまでは今までの目録にて御注文下さい。分譲打ち切りにならない中、お早くお申込願います。

### 〔編集部だより〕

○本誌独特の「緊縛映画場面紹介」は、貴重な資料の公開と相俟って、その価値を更に一段と昂揚しておりますが、次号口絵では、楓月太郎氏提供の「振袖狂女」連続四枚の写真が読者フアンズの眼を奪うこと必至、その上、得難い数々の緊縛場面が誌上を飾ります。  
○鋭いマニアセンスを持った四馬孝氏の傑作口絵が次々と創作されていますので、次号でも皆様の目を楽ませることでしょう。  
○新人モデル嬢の華麗な緊縛ポーズも是非紹介したく思っていますが、こゝのところ誌面狹隘の嬉しい悲鳴が挙がりそうです。限られた誌面を最大限に活用して文献誌としての本領の發揮に努めましょう。  
○「告白、体験、手記」についての特集も企画しておりますので、長短に拘らず何卒奮って御寄稿下さるようお待ち致します。  
○目下、着々と次号の編集も進捗しております。口絵に、挿画に、内容に、どうか御期待下さい。





## 【読者通信】

寒さの折柄お元気ですか、毎月楽しみに奇クを拝見しておりますが、最近私の傾向のもの、他のものに比べて段々おされ勝ちのように思うのですが如何でしょう。私には若い人の好みは興味ありません。私は三十才以上の御婦人で奇クを愛読してしばらく、しばったり又はいつもネルやモスのお腰を着用している女の方が好きです。いろいろ文通でも出来たらと欲しています。中々そんな方は見つけないものです。先日風の冷たい日、買物の御婦人(三十五才ぐらい)が裾を乱して歩いておられた時、チラッと見たのは、私の好きな肌に赤いネル、その上に桃色のネル、そして柄模様のあわ

せのお腰と、たくさん穿いておられました。あの様な方の気持、物の考え方、心理(下着に対する)を知りたいものといろいろ考えてみる私です。又、いろいろくわしく書いてみるつもりです。

(兵庫 福本時三)

先頃通信へも顔を出しましたが女性の縛りに興味を持つサディスト、縛りフォトなど集めて居ります。中富、高瀬、坂口の諸嬢のものなど中々良いと思っています。マゾ的女性の方と文通などいたしたいと存じますが、京都の益田様などお便り下さい。出来たら編集部経由でも結構でしょう。当方29才

(兵庫県朝来郡生野町千葉種彦)

困難な各種の制約下にあつて刊行を続けられている奇譚クラブの不断の御尽力に心から敬意を表します。今後どうかマニアのため唯一最高の総合誌として発展されるよう希望します。そのためにも些か古い例ですが、鏡子ちゃん事件が風俗雑誌の影響といった近視眼的な偏見がなくなるように願うものです。表紙なども、絵をとつてしまつて主な内容のタイトルだ

けを出すという風に、全く総合雑誌的な体裁にされたら如何でしょう。さて小生自身はサディ傾向をもった廿三才の青年であります。年来マゾ女性との意見の交換を熱望しております。最近フェチの記事が増えて来ましたが、どうか、これからも、どしどしのせて下さい。フェチ傾向にピントを合せた記事を扱ってくれるのはKKだけです。学者が概説的に扱うのはあつても、マニアによるレポートやフィクションのエンジョイ出来るのはKKだけです。

(横浜郵便局私書函二九九号)

新年号から読み初めました赤ちゃんです。諸姉妹、よろしくお導き下さいませ。奇クは今までの色々ななやみを吹飛ばし慰めてくれました。私はデパートへ勤めています。二十才の娘です。鷹野めぐみ様、貴女は男性を望んでいらつしやいますけど、同性では駄目でしょう。東京と京都じゃとても会えないでしょうけど、お手紙の交換だけでも私は満足です。私男の方に縛られるなんて、やはり何だか自分の処女性をけがされるような気がして、やはりお嫁に行く時はきれいな体で行きたいわ、

女性の方ですと、そんな心配ありませんでしょう。女性同志のプレイに興味をお持ちの方お便り頂けません。顔は十人並で特別に美人ではありません。浣腸やおシメも面白いわ、では、お便りお待ちしています。(京都 奥村弘子)

貴誌益々御盛栄の段お慶び申上ます。復刊以来も類似誌のなき現在、貴誌のみが発行を続けておられることは貴誌ファンにとって偉大な魅力です。唯グラビア頁の少くなつたことは残念です。今後共益々充実して何時までも続くことを心から願っております。二月号では、口絵の「洋画スチール名場面集」と「猿轡を噛まれた女優たち」の八枚の写真は全く素晴しい贈り物でした。巻頭の「新着フォト紹介」では、白人女性の野外での前手縛りの写真がありました。が、ハイヒール、ストッキング姿でしかも猿ぐつわまでされていて良い物でした。今後、こういったフォトで編集部特写の日本女性のものをドシドシ口絵に掲載して下さい。さるようお願いいたします。

(名古屋 藤原元)

サドに興味を持つ医学生です。



マゾの女性の方との交際を心から願っています。殊に奇クを読み出してからは、猿グツワのはめ方、後手の縛り方等、そして種々の責め方について空想をめぐらしていただきます。そして、世の中には僕と同じように、後手や股間縛りに縛られ責められたいと空想をめぐらしているマゾの女性がいることを確信しています。僕との交際を望まれる女性には次の連絡方法に従って下さい

東京の国電大森駅山王口伝言板がその連絡場所です。宛名はS様、そしてあなたの方は、Mよりとして、その下にKKとして下さい。日時場所をそこに書いて下さい。会うときには必ず赤い表紙の本を左手に持つことにします。毎日夕方五時頃伝言板を見て居ます。

(東京 佐藤生)

寒風吹き荒ぶ昨今、貴社益々御発展の趣心からお喜び申上ます。赤字に耐えながらよく発行を続け

### ☆読者通信について☆

○本欄は皆さまの交歓室として開放しておりますから御遠慮なくドシドシ御寄せ下さい。○本名住所等の秘密は固く守りますから御安心下さい。○只今手紙の転送は致しております。○本欄に住所氏名を發表される方は通信の末尾にお書き入れ下さい。發表してはいけない方は御記入しないで下さい。○本欄を通じての文通は各人の責任に於て直接して頂きたく本誌にての斡旋は致しておりません。

て下さっている貴誌の御努力には只々頭の下る思いがします。私は貴誌の愛読者になつてから、もう二年余、貴誌のみを唯一の友として楽しみに暮しております。いつも貴誌を拝見するとき、他の雑誌とは違った後光のさすような有難さを感じるのには私ばかりではないでしょう。私は固くそう信じております。然し今までの読者通信欄を見ておりますと、自分の好みの人たちと文通を求めたり又自分の好みの記事を書くという、多分、貴誌の有難味を謳歌したものがないのは淋しい限りでした。きつと私と同感の人たちも沢山おられることと思います。どうか愛読者の皆さん、私たちは奇クを心から愛読することによってお互いに心のつながりとしようではありませんか。自分だけが、といったエゴイズム的な心がけは此の際潔く

拭い去つて、奇クの発展のために尽そうではありませんか。

(岡山 菅野生)

○初めてお便り致します。私は以前から浣腸に興味を持っていた者ですが、こういう記事を扱った雑誌があるうとは夢にも思いませんでした。先日、計らずも古書店で奇クを手に入れ、「浣腸に関する文献」は絶対になく、と信じていただけに、非常な喜びでした。読者通信によると同好の士もかなりあり誠に喜ばしい次第です。しかし案外に、その記事が少いことには不満を感じます。専門誌でなく、盛沢山な内容であるためであるうかと思ひますが、それにしても余りに記事が無き過ぎる。もつと浣腸の記事が掲載されるようお願い致します。私はつくづく思うのですが、浣腸趣味の方は、御志のフアンの半数を占めていると存じます。それを言葉に現わさない内気な人達だけに、浣腸に対する欲望は根強いものがあります。浣腸をなさる若い男女の方のお氣持良くわかります。此れは切腹やしぱりなどの記事と異なり、秘かではあります。浣腸専一に楽しみを追う私

共にとつては、他の記事と同好しているのが実に不愉快です。他の残酷な趣味の人達とは趣きを異にし、自然発生的なものだけにその愛読者は想像に絶した多数に上ることと予想します。読者の方々、我々の希望を満足すべく、今後それに関する記事を増して戴きたいと思ひます。全誌面の三分の一までの拡張を望むのは無理でしょう。では今後ともよろしくお願致します。

(栗須太篤夫)

○復刊以来、殆んど毎月読んでいますが、最近マゾ、サドに片寄っている様に思われます。少しはソドミーや男性ヌード等を載せては如何でしょうか。人から聞いたのですが、アメリカでは素晴らしい男性ヌード写真を販売しているそうです。貴社代理部で取寄せて分けてくれたら如何でしょうか。さて読者の皆様、御元氣ですか。二月号の(六尺ふんどし愛用生)君よ、貴君の投書を見て心強く思ひました。毎号、ソドミー、男性の六尺ふんどし愛用者の投書の少ない事に心細く思ひました。一月号の(六尺ふんどし愛用生)君も云つていた様に、男性の六尺ふんどし愛好者の会を作つてはどう



ですか。一月号の人と二月号の人と、どちらも投書名が同じなので同一人か異なる人か分らないけれど、どちらの人でも住所氏名を本欄に発表して頂いて、そこへお互いに文通したらどうでしょう。宛名さえ分れば、少くとも小生だけはお便り出します。

(香川 S・K生)

小さい時から、サドに興味を持っている二十五才の男です。二ヶ月前に、交際していたマゾの女性と結婚してしまい、現在、交際の相手が失われて淋しい思いをしています。その時の革紐や麻縄を見ても、僕と交際しプレイを楽しみたいという女性の出現を願っているものです。異常の血を持って生れた者同志で、秘かな快楽を思う存分味わいたいという方はいないでしょうか。僕との交際を願うマゾの女性は次のところへお便り下さい。(東京都太田区入新井二ノ一〇五茨田方矢部武二)

読者通信で、K・K通信の昭和廿八年十一号を求めました所、奇ク愛読者の諸氏から非常に多くの御連絡を頂き、誠に有難く御礼申しあげる次第です。御通知下さい

ました方、藤見郁様、須藤律夫様、坂野洋司様、松本卓三様、土屋力造様、その中で結局一番最初に御送り下さいました坂野様のを御受けさせて頂きました。従いまして他の諸氏には、御返品やら御断りの返事やらで、大変御迷惑を御掛け致しました事を御礼旁々御詫び致します。尙、その後におきまして、佐次浩介、上野敏男、福田忠夫様、井上建太郎、畠山邦裕様の御方からも御連絡がありました。併しその前後において家庭内で不祥事が起り、私自身非常に多忙を極め、しかも家庭争議が一段落した所、今度は顔面神経痛をわずらい、慶応病院に一月程入院のやむなきに致りました。退院を致した現在でも絶対安静でいなければならず、御返事を致さねばと思いついてしまいました。右の事情ですから御返事の件、悪しからず御容赦下さい。最後に鈴木丑太郎様、松原一様、近藤一様、東一郎様、その他諸氏から私の作品について共鳴して下さいましたり、御ほめ下さいました事を御礼申し上げます。(東京都渋谷区千駄ヶ谷五ノ九八八岩瀬祥一)

神奈川局私書函十三号様へ。二月号にてコルセット、マニア、クラブ誕生とのことで、早速入会したく手紙を差上げましたが御返事なく、私書函番号に間違いはないと思いますが、どうしたのでしようか？ (東京 森山四郎)

一月半ばを過ぎて神戸に出て参りました。お勤めの為で御座居ます。事務所の二階に下宿しており、貴誌を直接購読出来る事と存じます。繁華街に出た折、古書店にてKK誌を見つけ直ぐ買求め下宿に戻って一気に読みました。特に月岡映子様の文章に興味を感じました。復刊後の雑誌に一文を寄せておられた様ですが、残念な事には読み落してしまい、どうかしてバックナンバーを取寄せたいと思っております。月岡様、私は復刊前に医学相談を寄せた二十三の女です。羞しいことですが、どちらかというところマゾ的な性格です。あなたの様におむつに關して愛着を持っています。おむつのコレクシヨンは平凡でたいしたものではありませんが、若し御都合がよろしければ、あなたのコレクシヨンを一部分けて戴ければ嬉しいと思います。人目に立たぬ様に干

す布は誰でも苦労しますが、私は押入を利用しています。時間的に長く掛りますし早急に間に合わぬ事が多く困ってしまいます。私には夜尿癖があり、そのために劣等感が強く内気です。同病の方と文通でもし合い、身の上や其の他の事をかくさずに話し合えたらどんなによいだろうと思っています。若しあなたのお友達や知人の中で其の様な方が居られ、御差支えなければ御紹介して戴きたいと思っています。この様な病の方は、余程親密感がなければ打明けて貰うことはないので、女性の方だけに限りたいと思います。最後に月岡さん、あなたの考案なされた種々のおむつかバーの型を誌上に発表して下さい。期待して居ります。又、アメリカ製のおむつやおむつかバーはどこに売っているのですか、一寸教えて下されば結構です。つまりぬ事を長々と書いて参りました、これにて失礼致します。(兵庫、森英美)

和歌山の岸本青柳さん、いつも私の拙い作品を賞めて頂いてありがとうございます。私も又、貴方のお書きになるものを拝見して、



## 四馬孝・傑作集

## 『美しき女体家畜飼育室』

△―潰滅の前夜―より▽(詳細解説は本誌九月号、十月号にあり)

(大中判印画紙) 焼付 八枚一組 八百円(送共)

いつも感心して居りますよ。ことに和装の縛りが大好きだそうで、私もどちらかといえば着物のほうが好きなんです。洋服も好きですが、ヌードとなると、余程モデルさんが美しい身体をしていないと夢がこわれますね。ヌードは余程うまくやらないとロマンがこわれます。岸本さんの二月号の作品「女教員の責め折檻」は、事実だか創作だかわからないところが面白く、面白く思いました。私が考えるには、岸本さんはきつと実際の縛りに経験豊富なベテランなのだから、小説めいたものでなくとも御自分の経験された経験談を細かく書いて頂けたら、もっとリアルなよさがでるのではないのでしょうか。私は青柳さんの素朴な事実談が読みたいと思います。うれしい読物になるでしょう。もし、おひまがございましたら、私にも便りを下さい。お互に異色雑誌奇クのため

に、意見を交換して知識を深めましょう。(名古屋市 藤木仙治)

僕も渾愛用者の仲間入りをさせて下さい。僕は六尺渾をいつも締めています。始めは水泳のときだけ白い六尺ふんどしを締めていましたが、二日ばかり夜、寝るときにも締めたままだったのを母がみて、渾の方がよかつたらパンツを止めて渾にしなさい、その方が体がしまつて気持ちいいでしょう。といってすすめられ、姉も「私も男なら渾をしたい、スマートなものよ」と、忽ち真新しい晒で五、六本作ってくれたので、僕もその気になったわけです。今は姉に一々注文をつけて、白と黒の他、赤、青、緑、ピンクなど各種類を作ってもらいました。布地も晒だけでなく、薄い物をきつく締めた方が気持ちいいので、姉が服地をかうとき一緒にいって、ナイロン交り

のものなど出来るだけ薄い布を選んで買って貰い、それを六尺渾に作って貰うのです。六尺渾を締め込む気持は何ともいえないものです。今度には三角渾というのを作った貰おうかと思っています。六尺渾では、服を着たときバンドの所がうまくいきません。姉にこの本を見せたら、渾を締めるようになるかも知れませんね。(二十一才の愛渾生)

私は数年来からの奇クの愛読者ですが、ぜひお取上げ願いたい意見を申述べます。それは女性緊縛フォトについてです。復刊後の奇クの唯一の欠点は、緊縛フォトが極めて少なかったことであることは、読者の多くの方から指摘されています。読者の多くの方から指摘されていることです。しかし私は現状に於て奇クそれ自体の上に、グラビヤとして発表することは経済的な面で斥け、別途に分譲品として発売なさりたいという貴誌の意図はよく分ります。しかし印画紙に焼き付けたものは余りにも高価で、これでは折角、優秀なフォトも陽の目も見ない事になりましよう。一部の人が買われたとて貴社発展のためには役立ちません。それでコロタイプ印刷のもの、即ち「美しき縛め」の様な(未製本でも可)ものを三集、四集と発表して頂きたいのです。それも二百円、四百円、六百円等……と段階をつけて売り出せば、グラビヤ写真が少い現在、又、印画紙のものが極めて高価な現在、いかなる階層の読者も購入可能となると思うのです。三百円位のものなら毎月発表されても、奇クと平行して必ず購入致します。『美しき縛め』第三集、第四集、第五集……等々の企画を心から希望致します。(塩釜市 堆名生)

中野区鷺の宮、原俊行様、貴方からお便り戴きすぐ御返事を出したのですが、宛先人不明で配達されずに戻って来ました。何卒、正確な住所、つまり三丁目二十八番地〇〇方とせねば配達されませんので、封書でお便りします故安心してお知らせ下さい。なほ二月号で貴方の通信文拝見致しました。小生は貴方のお好みのアポロ型的人間ではありませんが、十分御希望を満すことが出来るのではないかと思います。フィルム代等、幾分負担致します。両手両足を縛って吊したり、全裸で海老責め縛りにしたり、若い奴隷としてのモデ



ルにはお役に立ちましょう。私は自分のこの様な恥しい姿態を写真にとつて貰い、また人に見られたくてたまりません。奇クの方へも送りたいものと以前から考えて居りますが、適当な機会がないのでそのまゝになつて居ります。是非もう一度お便り下さい。なほ、その他、奇ク読者の方も自己紹介をそえてお便り下さい。(失念生)

○

待望の奇ク三月号を面白く興味を以て拝見しました。厚く感謝致します。この誌の中で特に私の感想を披見させて頂きます。先ず巻頭写真「スクリーンで縛られた女優たち」の内、花柳小菊、月丘夢路、長谷川裕見子の三女優の後手に縛られた写真、殊に花柳の曳かれて行く姿は、何とも言えぬ魅力を与えられました。奇クには、此処、数カ月前から斯の種の映画写真を掲載されているので、頗る満足感を与えられ感激の外はありません。今後永く続けられるよう只管お願い申し上げます。文中には南時夫氏の「我が異常性の記」、北原純子さんの「花と朔風」、荒尾譲介氏の「髪と絵」等々、何れ劣らぬ力作揃いだ、嬉しく読まして貰いました。更に鳴山能平氏の

「刺青の朝」の文と画は二、三度繰り返し読みました。その挿画を写真に撮つて保存することに致しました。和装女の縛り責めに数十年来の研究と体験が続いている私としては、実に得難い宝石だと存じます。これ等の文や画の表現と構想に比較致しますと、拙作の「女同志の吊責め」の文や写真に就いても、今後大いに研究を積み重ねばならないと思います。また「映画を中心の縛られた女優」や「映画速報欄」は、共に一般読者を指導するに足る好資料だと確信致します。(レポート女装の好きな男)

○

も亦面白く拝読させて頂きました。和服の女装好きな男は、これに似寄つたような経験のあることだろうとも想像されますが、私は唯、研究とその場の場の実験に止つていただけで進歩の跡を見ないのを遺憾に思つて居ります。最後に「読者通信」にある丘与志夫氏と京都Y生の和装女の縛り礼讃説には共鳴を感じさせられました。Y生氏が御希望ならば文通さして頂いても結構かと存じて居ります。(和歌山、岸本青柳)

「大奥裸女血斗」が、早速挿画入りで掲載されてあるのが大変嬉しく思いました。しかし公刊誌の立て前からは、あの程度に止どまつたのは大変に残念です。けれども、どなたの筆になるかは存じませんが、血に狂う渾一つの裸の奥女中の姿に良く表現されていました。欲を云いますと、もう少し画面を拡げて裸女の群像を多くするか、地上に横たわる裸女の屍を画いて零困気を盛り上げて欲しかったと思います。特に女の首級に朱唇を当て、滴る血潮を拭う和製サロメの裸女の画像というアイデアはこの一編中の圧巻であると思います。本誌に掲載不可能ならば、この「大奥裸女血斗」を組画として代理部分譲品中に加えられることを切望します。どうか私の如き無惨画マニア、女斗美フアンの希望をもつと本誌なり分譲品なりに反映させて頂き下さい。同好者を募ります。誌上にて御連絡下さい。(大阪 英山生)

○

昼行燈様、色々お話ししたり伺つたりしたいものです。御住所御知せ下さいませ。又、御持ちの作品、御許しあれば一読させて頂きたい。(大阪市西成区海道町九、佐藤千春方、毛利宅一)

北原純子 責画傑作選

△ハートの的△女体洗滌室△

大中判印画紙焼付

二枚一組 三百円

△緊縛ヌード十六ポーズ△

大中判印画紙焼付

二枚一組 三百円

(以上、二組にて、五百円)

△女学生の羞恥責め△

大中判印画紙焼付

四枚一組 五百円

藤千春方、毛利宅一

○

この欄をお借りして読者の皆様にお詫び致します。私の作品「黄色オラミ誕生」を第二部まで掲載し、その後、休載が続いていることに對し深く責任を感じて居ります。私事にあたり恐縮ですが、今度新しい型のP・R雑誌をつくりだすため、昨年暮より東京と関西の間を往つたり来つたりの旅づくしで、落ち着いた生活が出来ません。拙作に對し愛読者の方々が御激励と、好意ある批評を下さつて居ること、は、編集部からのお知れによりよく存じて居り、私もなんとか月



に十五枚づつでもと考えて居るの  
ですが何とも時間が足りません。  
寄稿家としてこのような無責任な  
態度は慎しむべきで、お詫びのし  
ようもないのです。既に構想は出  
来ているのですけれど、机に向う  
ひまなく、今少しの休載をお許し  
願いたく存じます。さいわい、沼  
正三先生の「家畜人ヤプー」が連  
載されて居りますので、私のもの  
は沼先生の「ヤプー」が完結され  
てから再び登場させて頂きたく思  
います。奇巧の編集部にも御迷惑  
をかけていますが、既に長年のつ  
きあいでもあり、わがまゝを云わ  
せて頂いて居ります。寄稿者の皆  
様の御健筆を祈り、先ずは右御詫  
びまで。

(真木不二夫)

○  
二月号には、私の通信を述べさ  
せて頂き、皆様からの心強い便り  
に接し感謝いたして居ります。又  
この度は各方面より御手紙を戴き  
誌上を御借り致しまして厚く御礼

を申し上げます。住所氏名、明記の  
上、御便り下さる様御願ひ致しま  
す。秘密の点その他、御迷惑とな  
る様な事は厳重に注意致します。  
始めて御気付の方は奴隷の件に関  
してですが、二月号通信(土屋)  
を御覧の上、御便り下さる様御願  
ひ致します。女性の方、女装愛好  
者の方々の参加も御待ち致して居  
ります。市ヶ谷生様、御便り下さ  
い。右の件とは別に十二月号の古  
井真哉様、御便り下さる様御願ひ  
致します。(二月号奴隷に関して  
の件、土屋より)

○  
私への通信を度々頂戴していま  
すので、お返事を兼ねてペンを取  
る事に致します。東京の笛地佐渡  
様には、前号にも私がびっくりす  
る様な法外なお褒めの言葉を頂い  
ていますので、何とお返事を書い  
てよろしいのか迷いました。私は  
まだ画を描く経験も浅く、とても  
御期待に副えるような自信はござ

いません。唯、私も青柳様や笛地  
様の御意見と同じで、縛りの画な  
らと装の女性が一番美しいと考え  
ます。私は子供の頃から和装の女  
性とか、若衆留に大振袖の少年が  
好きでした。揮の女性の縛りなど  
は惨めで嫌いなのです。自分が女  
だからかも知れませんが。きぬず  
れと共に崩れて変るシワの線は実  
に美しいと考えます。表情も余り  
大袈裟なもの好きではございま  
せん。肌の白さが感じられる様な  
哀憐の表情と、鬢のほつれの淋し  
げに見えるものが大好きです。自  
分で何時も空想する程に描けたら  
どんなに楽しいかと思ひますけれ  
ど、もつと勉強してもつと大人に  
ならないと、そんな味のある画は  
描けないだろうと存じます。「画  
帖、色紙等の画を描く計画はある  
か」とのお尋ねでございしますが、  
私は何でも編集者の御注文に任せ  
切りです。自分の考えは何も  
なくて唯、心細い気がするだけな  
のです。ですから、これからお  
気づきの事や御注文がございまし  
たら、どうかお教え頂きとうござ  
います。高崎勉様からのお見舞い  
は嬉しく拝見いたしました。私は  
美校(東京杉並の女子美)一年の  
三学期に腸結核に罹りましたので

信州の高原療養所で、一年療養し  
ました。(胸の方は健康なのです)  
結局、直り切らなかつたので中退  
して京都へ帰りました。それから  
今日まで三年経ちました。その間  
に膿胸を病つたりして、余り健康  
とは言えない毎日を送つて居りま  
すが、京都へ帰ると早速、本誌の  
画を描ける楽しみが出来ましたの  
で、とても慰められて居ります。  
貴方の仰せになる療養というのは  
西式の療養法ではございませんで  
しょうか? それなら私も存じて  
います。御親切なお知せを本当  
に嬉しいと存じます。東様には何  
時もお手紙を頂戴しますからお礼  
を申し上げます。東様は御自分が  
素晴らしいペン画  
をお描きになるのに、澄まして私  
の画を褒めたりなすつていた事は  
けしからんと思ひました。でも本  
当は、謙遜な床しい方だと思ひま  
す。それぞれの家には、その家独  
特の匂いがある様に、雑誌にだつ  
てそれぞれの個性がなければ、意  
味ないと思うんです。私が奇巧  
から受ける印象は、初めから今ま  
で変りない悲哀なのです。どうし  
てだか判りませんが、多分それは  
何か此の本を読む人たちが、思索  
の好きな孤独な人ばかりの様に想

## ◎次号の本誌は四月上旬発売です

本誌は今後毎月上旬発売の予定です。三ヶ月分、半年分予約の  
方々へは出来次第お送りいたします。毎月お申込の方は、下旬頃  
までに誌代のお送りを願います。



像してしまふからかも知れないの  
ですが——。そして私は、この本  
の持つ悲哀をたまらなく好きだ  
と思うのです。私の画が奇クから消  
えてしまふ時があつても、私はき  
つと何処かで奇クを読み続けてい  
るに違いありません。

(京都 北原純子)

○ 朝七時には起き、私は急いで女  
主人の朝食を作ります。女主人様  
が食べている時は、テーブルの足  
下に四つんばいになって奉仕しな  
ければなりません。食事の時片づ  
けが終ると洗濯をします。パンテ  
イ、ズロース、ストッキング等、  
女主人様は居間で新聞を読んでい  
ます。だが怠けることは出来ませ  
ん。一寸でもミスをする、乗馬  
用の鞭が私のむき出しのお尻をピ  
シヤリと打ちます。今度はお昼の  
食事です。私は朝から何んにも食  
べられません。夜には女主人様は  
お友達と映画に出掛けます。私は  
首輪を嵌められベッドの柱につな  
がれ、洗面器に味噌汁と焦げた御  
飯の雑炊と一緒に留守番……今日  
一枚のズロースの洗濯を忘れた罰  
に、お帰りになってからの御仕置  
は、そのズロースを口の中に押し  
込まれ御主人様の大きなお尻で猿

轡、お友達が後に廻って私のお尻  
をムチで十回、私はヒイヒイ鳴く  
のです。私は誰でしょう？ 犬で  
すて、冗談でしょう。ちゃんとし  
た人間で、しかも男です。そうで  
す私はマゾです。そして愛妻がサ  
ドなのです。幸いにも兩人ともそ  
の零囲気に依つては、全く逆の立  
場になる事も可能な程、私達のプ  
レイは洗練されています。鷹野め  
ぐみ様、三木恵子様、他、多くの  
マニア諸氏、御連絡下さい。プラ  
イベートな秘密はお互の為に厳守  
します。では最後に御誌の今後の  
御発展を心から祈つて止ませ  
ん。その内に私の体験談でも送り  
ます。その節はどうぞ宣敷く。  
(都内台東区谷中初音町二丁目十  
八番地 佐伯捷人)

○ 奇ク三月号を拝見して一番嬉し  
く思ったことは、映画スチールの  
口絵掲載がどうやら毎号続けられ  
そうなことでした。これは是非今後  
共、長く続けて下さい。なるべく  
沢山集めて増頁しても、或は他の  
分を削つても多数掲載する価値が  
あると信じます。皆様如何でしょ  
うか？ 挿絵では鳴山能平氏作、  
刺青の朝の挿絵が私には一番気に  
入りました。文章も、この様な小

品(本田氏のおぶり責め  
奇聞もその一つ)を挿絵  
付で沢山載せる方が、冗  
長な文章を少数載せるよ  
りよいと思います。貴重  
な誌面ですから、以上の  
様な方法でバラエティに  
富まして活用して下さい  
い。交換室では甲斐様、  
野原様から御呼びかけ有  
難うございました。今後  
共よろしくお願いしま  
す。それからマゾヒズム  
の女性の方、縛られてみ  
たい女性の方はいないものでし  
うか。御本人でも又は御存知の方  
でも結構ですから、ぜひ共、本欄  
で御連絡下さい。女装マニアの男  
性でもかまいません。

(東京 笛地佐渡)

○ 沼正三氏の大作、「家畜人ヤプ  
ー」は、いつも興味深く拝読して  
居ります。その雄大なスケール、  
奇想天外なる構想、そしてマゾ小  
説と銘うたれているだけに、その  
道の心理を徹底的に創作化された  
努力は並々ならぬ御苦労と存じ、  
氏の博学、造詣の深さにはまった  
く頭の下る思いです。「家畜人ヤ  
プー」も二月号で三回目を迎え、

## 女体切腹構成案図譜

中康弘通氏案

北原純子女史画

キヤビネ版印画紙密着焼付

八枚一組千円(送共)

時代物

(一) 女武者の最期

(二) 腰元の自害

(三) 遊女の自決

(四) 武家の姉妹

現代物

(五) 女剣劇の腹切

(六) 女剣士の切腹

(七) オフィスガール

(八) 農家の娘

(詳細解説は本誌、九月号、並に十  
月号にあり)

物語はいよいよ佳境に入ったわけ  
ですが、ここに私の希望を少し述  
べさせて頂ければ、もう少し私ど  
もレベル低き者にも、読みやすく  
して頂きたいということでした。沼  
氏が精魂こめてこの小説を書かれ  
ている様子は、誠によくわかるの  
ですが、如何せん、カタカナ名が  
余りにも多く、ストーリーの変化  
発展よりも、氏の創造せるマゾ的  
人間器具、器物の説明にスペース  
の殆んどが割かれていたため、非  
常に読む者にとっては、わずらわ  
しく読み難い小説となつてしま  
います。その点、底の浅い難点はあ  
るにしても、真木不二夫氏の「黄  
色オラミ誕生」の方がマゾ読物と



## 代理部分讓品総目録

新作発表！

御入用の方は八円切手封入の上御申込み下さい。お送りします。

しては誠に楽しく、文章も平易でストーリーの発展にも飽きさせない工夫があり、連載ものとして巧みに書かれて居ります。大衆的になり過ぎるのが難ですが沼氏の言によると、エキゾチズムをだすためにカタカナを多く使用とありますがそれも程度によりけりで、私もエキゾチズムが大好きで、香山滋橋外男の作品など好きなのですがこのように余りにも「学術的」になってしましますと、読むのにも繁雑さが加わり、ことに二月号の場合は、途中でお手あげになつてしまします。これは結局、私のマゾヒズムに対する愛情？の至らざるためだと思ひますが、沼氏も又、自分の主義に忠実すぎる程忠実な愛情をもつておられるが故の現われだと存じます。つまり御自分の主観が強く私ども浅学生がついてゆけない結果になつてしまつたわけです。とは申せ、このような雄大なスケールをもつ空想小説は、日本、いや世界でも未曾有でありましょう。奇クの読者

のみならず、一般の読書人にも読ませてやり、この突拍子もない怪奇性にびっくりする顔がみたいものです。又、真木氏の「黄色オラミ誕生」は、黄色オラミが誕生しないうちに休載となつた模様で残念ですが、同じ傾向の「家畜人ヤプー」がある以上、奇ク編集部としても重複を避けたのでしよう。真木氏には「ヤプー」の連載が終つた時に「オラミ」の再登場を期待致します。色々勝手なことばかり述べたような気が致しますが、これも奇ク及び奇クを舞台とする二人の貴重な作家の御健闘を期待するため、どうかお許しを願ひたく存じます。

(名古屋昭和区 古賀信司)

増員も夢ではないと云う明るいニュースを載せた三月号は、内容の点でも正に一エポックを劃すべきものと云える。先ず口絵では、数カ月ぶりの四馬孝氏の作品が光彩を放つた。身体のみずみずまで行きとどいた官能的な美しい描写

は、今まで拝見した氏の作品の中でも傑作中の傑作と云えよう。いつも美しい責め絵を載せられる北原氏の筆も、今月は一段と冴えて素晴しかった。又、M・K氏の挿画は生々しいタッチで小生を魅了した。創作も研を競うように、潰滅の前夜、続編、あぶり責め奇聞髪と絵、等々と夫々秀れた題材と心憎いまでの筆で小生の胸をかきむしつた。サディズム関係のものも、せめて毎月この位ずつ収録されればと考へて居る。○九雅節夫様、題名が違ひますが、漫画風のニーモラスな絵の入つたものなら「看護実習図説」全四巻、発行所文京区本富士町二、文光堂と云うのがあります。御高覧に供してもよろしう御座居ます。○笛地佐渡様、御計画、誠に素晴しく、御仲間に御入れ願ひ度く存じます。○大村生様、拙文、御目にとまり恐縮です。今後共、よろしく御指導の程願ひ上げます。○A生様、増田進一様、御差支えなければ御親書戴き度う存じます。小生、アドレ

(甲斐 仁参)

○ 僕は特にオキヤンな感じのする女性からのお仕置を受けたいと思

つて居るのですが、同好者が見つからず淋しく思つています。僕はサドも少しは好みますが大体はマゾ愛好者です。鷹野さん、貴女と文通でも出来たら非常に幸福に思ひます。二十五才の独身青年で、又、僕はフンドシ愛好者でもあるのです。岐阜の若柳キヨコさんの三角クラブと文通いたしたく思います。幸運の便りをお待ちして居ります。(浦和市岸町七丁目四二高橋方、小西敏夫)

○ サドとマゾを半々に持つていますが、そういうことには一向に未経験の二十八才の独身青年で健康容姿十人並です。年令は問いませんが御婦人の方と責めのプレイを出来たらと常々願つております。責めの軽重、服装などは勿論御婦人の条件に従ひますから何卒お便り下さい。御不安でしたら二人の御婦人でも結構です。匿名でも日時場所等御指定下さればお会い致します。(世田谷区三軒茶屋一四七増沢方、中田生)

○ 奇ク三月号拝受いたしました。今か今かと待ちに待っていただけに一気に読了してしまいました。近來にない内容の充実ぶりで嬉し



く思いましたが、中でも私を一番喜ばせたのは、土路草一氏の「続潰滅の前夜」です。以前に載った潰滅の前夜を読んだとき、その続篇を待ち望んでいました。三月号では、はからずも続篇が登場しこの一篇だけでも、ゆくに奇巧の存在価値は十二分に發揮出来たものと思います。今月号でも未完になつておりますが、是非来月号で更に素晴らしい展開を示すように心から望んでおきます。以前、何月号かで、編集者は長い目で奇巧を見守つて欲しいと述べておられましたが、復刊以来毎号欠かさず愛読を続けております私にとって、今月号は全く素晴らしい贈物でした。更に今後の発展を祈ります。

(滋賀 木内生)

私はさゝやかなサラリーマンですが、月二回の給料日と中旬の手当料の入った時に、少し宛ながらお世話になりたいと思います。私は空想的サディストです。現実にはやれと言われても自信はいささかもありません。しかし一度だけ、恋人を戯れにタオルで後手に縛つたことがありますが、こちらが恥しくなつて逃げてしまつたくらいです。しかし空想の中では自由奔

故に縛り責めを描いておきます。その意味でフォトより絵の方により魅力を持つておきます。それも女体責め、女体縛りに限ります。男性を縛つたのなんかは興ざめです。フンドシや切腹にも関心はありません。しかし、そんな勝手なことばかり言えませんから、毎月女体責めが一篇でも多く、描画が一枚でも多くと期待して、それ以上の無理なお願は遠慮いたします。

(兵庫 三浦光男)

暫く御無沙汰いたしました。休刊前の本誌に数篇の拙稿を掲載して頂いた女性切腹マニアの兵頭庫一です。復刊を知つたのが、つい最近でまだお便りする程度で残念に思っています。さて、旧刊で私が提案し、その企画が誌上に公告された女体切腹同好会(仮称)が例の経緯でお流れとなりましたがもう一度お考え願えないでしょうか、無論、女体切腹をテーマとした会で、一定人数を限つて予約募集——(会費前納)——会員章を送付某月某日(成可く日曜日)大阪の某所にて午後一時より五時迄、講師として例えば中康弘通氏を招いて、その蘊蓄を傾けて頂き、特に切腹マニアの傾向のある女性モデ

ルを雇つて切腹の実演をさせ、更に会員(性の区別をしない)相互の交歓を行う等、半日を夢の様な楽しみの中に過すといった構想です。出来るか出来ぬか分りませんが、一応、大阪を中心とした半日行程の範囲で企画して頂けたらどんなに嬉しいことでしょう。昨

年の週刊新潮の涼風特集号に「切腹心中」の見出しを新聞広告にて見ましたが僻地に住んでいる悲しさについて買い損つてしまいました。同好の方で御所持の方は、その内容、描写、挿画などについて御紹介下されば幸甚です。

(兵頭庫一)

## 【編集後記】

○本号では御覧のように緊縛場面の映画のシーンを豊富に御紹介しました。読者の方々の反響は大変好評のようでした。榎月太郎、千葉栄市、藤木仙治の諸氏も引続いて資料の提供を予約して下さいますので、適確な解説批評と相俟つて皆様のお目を楽しませて下さるものと、大いに期待しております。

○浣腸、切腹、女装、ソドミ、禪美、フエチ等に関した資料、告白、創作といった原稿も相当数集まりましたので、アレソジの上、漸次誌上に発表の心づもりをしていますので、一々御返事を差し上げなかつた寄稿家の方々も、その様に御承知願います。

○先月号は印刷が二週間ばかり遅れましたが、いろいろと御心配をおかけして申し訳ありませんでした。今後は努めて遅延しないよう注意いたします。

○さて、本月号の内容では、三月号に引続いて土路草一氏の「続・潰滅の前夜」と沼正三氏の「家畜人ヤブー」の二つの長枚物が重量感を誇つています。いずれも同好者の方々から期待された一篇でもあり、筆者も又、異常の情熱を注がれた作品だけに、皆様もきつと、真ッ先に鑑みられたものと思います。

○他にも長短さまざま、狭い誌面ながら出来るだけ変化に富むよう心掛けて盛り合せました。殊に伊藤晴雨先生からは、御風邪の中を押して挿画を頂き、更に甲斐氏のノート、藤山氏の切腹、岸本青柳氏の隨筆、久しぶりに登場の南川和子氏曼陀羅図の法谷氏、浣腸の矢崎氏といずれも得意の題材を引きつけて読みなてある佳品を提供して下さいました。

○神武以来の好景気という掛声も、用紙の大幅値上げという傷手を与えてくれただけで一向に有難くありませんでした。が、皆様の支持と誌面の充実を楽しみに来るべき春を待ちましょう。(二、二四)